大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告

XI

1991年度大阪市長吉瓜破地区

土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1997. 11

財団法人　大阪市文化財協会

長原・瓜破遺跡発掘調査報告　XI

1997.11

瓜破遺跡

東南地区の中央部を調査した。飛鳥～奈良時代の溝や土壙が見つかった。

長原遺跡

西南・南地区では旧石器時代の石器群を伴う焼土壙や、5世紀初頭に築造された一ケ塚古墳、5～6世紀にかけて築造された方墳8基、さらに飛鳥～奈良時代の水田などが見つかった。また、大和川付替以前に当地を南北に貫いていた東除川も調査した。

東南地区では旧石器時代の石器集中部を2個所、縄文時代の石鏃を製作した石器集中部を調査した。いずれも接合資料を含む。

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告

XI

1991年度大阪市長吉瓜破地区

土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1997. 11

財団法人　大阪市文化財協会

一ケ塚古墳出土の鞆形埴輪

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告 XI

1991年度大阪市長吉瓜破地区
土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1997.11

財団法人　大阪市文化財協会

序　　文

本報告書は、1991年度の大阪市長吉瓜破地区土地区画整理事業に伴う発掘調査報告である。1981年から続いている長原・瓜破遺跡の発掘調査は今年で16年が経過し、その成果を『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』として逐次刊行してきた。年度ごとのひとつひとつの調査は小さく、僅かな事象しか語らない。しかし、長年にわたって積重ねられた事実は、遺跡に総合的な理解をもたらし、必ずや歴史研究に磐石たる視座を与えるものと確信している。

末筆ながら関係各位に深甚なる感謝の念を捧げて、報告書刊行の挨拶とする。

財団法人 大阪市文化財協会
理事長　佐治　敬三

例　言

一、本書は大阪市建設局長吉瓜破地区区画整理事務所が施行した、大阪市平野区内における1991年度土地区画整理事業に伴う発掘調査の報告書である。

一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会調査課長永島暉臣慎の指揮のもと、調査課藤田幸夫・田中清美・高井健司・佐藤隆・松本百合子・小田木富慈美(旧姓田島)・平田洋司が行った。各調査の担当者・面積・期間などは、第Ⅰ章第1節の表1に記した。

一、木製品・金属器の整理および保存については調査課伊藤幸司・鳥居信子が行った。

一、発掘調査と報告書作製の費用は、大阪市建設局および同市水道局・同市下水道局・日本電信電話株式会社・関西電力株式会社・大阪ガス株式会社が負担した。

一、本書の編集は調査課松本が行った。執筆は上記調査員と討議の上、松本が担当した。そのうち石器遺物については調査課趙哲済・絹川一徳・櫻井久之・清水和明・小田木・松本が検討の上、分担した。なお有茎尖頭器については[田島富慈美1993]からの再録である。動物遺体については調査課久保和士が執筆した。巻末の英文要旨は調査課岡村勝行とオーストラリア・クィーンズランド大学生Robert Condonが執筆した。

一、火葬人骨については大阪市立大学安部みき子氏に同定をお願いし、一ケ塚古墳周濠内から出土した板材の樹種および年代については奈良国立文化財研究所光谷拓実氏に分析していただいた。記して感謝する次第である。

一、遺構写真は担当調査員が撮影し、遺物写真の撮影は徳永圀治氏に委託した。

一、地層名は[大阪市文化財協会1995]のⅡ章に記した長原遺跡の標準層序に添い、長原○層と表記する。

一、遺構名の表記は、石器集中部(LC)・ピット(SP)・土壙(SK)・溝(SD)・畦畔(SR)・自然流路(NR)の記号の後に、本書独自に各調査地区ごとの通し番号を付した。長原7層段階の遺構にはSK7○○、長原4層段階の遺構にはSD4○○のように表記した。

一、調査時の測量は大阪市都市整備局設置の基準点・水準点を用い、国土平面直角座標(第Ⅵ系)の値に換算した。水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文中ではTP±○○mと表記するが、挿図中ではTP±とmを省略し、数値のみとする。

一、発掘調査で得られた出土遺物、図面・写真などの資料は当協会が保管している。

一、発掘調査および資料整理・図表作製などの作業には補助員諸氏の援助を得た。深く感謝の意を表したい。

本 文 目 次

序文

例言

第Ⅰ章　長原・瓜破遺跡の発掘調査 …… 1
第1節　1991年度の発掘調査と報告書の作製 …… 1
1）発掘調査 …… 1
2）報告書の作製 …… 2
第2節　調査の経過と概要 …… 3
1）瓜破遺跡東南地区 …… 3
2）長原遺跡西南・南地区 …… 3
3）長原遺跡東南地区 …… 5

第Ⅱ章　調査の結果 …… 7
第1節　瓜破遺跡東南地区の調査 …… 7
1）調査地の層序 …… 7
i）はじめに　ii）層序
2）各層出土の遺物 …… 8
3）飛鳥～奈良時代の遺構と遺物 …… 9
i）溝　ii）土壙
4）小結 …… 11
第2節　長原遺跡西南・南地区の調査 …… 12
1）調査地の層序 …… 12
i）はじめに　ii）層序
2）各層出土の遺物 …… 15
3）旧石器時代の遺構と遺物 …… 23
i）土壙と石器遺物
4）古墳時代の遺構と遺物 …… 26
i）古墳　ii）溝
5）飛鳥～奈良時代の遺構と遺物 …… 64
i）溝　ii）水田　iii）土壙
6）平安～鎌倉時代の遺構と遺物 …… 69
i）溝

7）江戸時代の遺構と遺物 …… 72
i）東除川　ii）溝　iii）井戸
8）小結 …… 79
i）古墳　ii）東除川
第3節　長原遺跡東南地区の調査 …… 82
1）調査地の層序 …… 82
i）はじめに　ii）層序
2）各層出土の遺物 …… 88
3）旧石器時代の遺構と遺物 …… 97
i）石器集中部
4）縄文時代晩期～弥生時代中期の遺構と遺物 …… 112
i）自然流路・溝　ii）石器集中部　iii）小穴群
5）古墳～飛鳥時代の遺構と遺物 …… 123
i）溝　ii）土壙
6）平安～鎌倉時代の遺構 …… 125
7）小結 …… 126

第Ⅲ章　遺物の検討 …… 129
鞆形埴輪の検討 …… 129

別表 …… 135

引用・参考文献 …… 146

あとがき・索引

英文要旨

報告書抄録

図 版 目 次

1 瓜破遺跡東南地区 地層断面と遺構
上 ：Ⅱ区 西壁地層断面
下左：Ⅰ区 地山上面の遺構(西から)
下右：Ⅱ区 地山上面の遺構(北から)
2 長原遺跡西南・南地区 地層断面
上 ：Ⅰ区 東壁地層断面
下 ：Ⅱ区 北壁地層断面
3 長原遺跡西南・南地区 地層断面
上 ：Ⅲ－B区 北壁地層断面
中 ：Ⅳ区 東西地層断面(東半)
下 ：Ⅳ区 東西地層断面(西半)
4 長原遺跡西南・南地区 地層断面
上 ：Ⅴ区 西壁地層断面(北半)
下 ：Ⅵ区 西壁地層断面
5 長原遺跡西南・南地区 旧石器時代の遺構
上 ：Ⅰ区 SK1301と遺物出土状況
下 ：Ⅰ区 一ケ塚古墳盛土以下の地層断面
6 長原遺跡西南・南地区 古墳時代の遺構
上 ：Ⅰ区 一ケ塚古墳調査地全景(北から)
下 ：Ⅰ区 一ケ塚古墳調査地全景(北西から)
7 長原遺跡西南・南地区 古墳時代の遺構
上 ：Ⅰ区 一ケ塚古墳周濠内の
板材・円筒埴輪出土状態
下 ：Ⅰ区 一ケ塚古墳周濠内の埋土堆積状態
(北壁)
8 長原遺跡西南・南地区 古墳時代の遺構
上左：Ⅰ区 周濠内の遺物出土状態(西から)
上右：Ⅱ区 長原196号墳と一ケ塚古墳周濠
(西から)
下 ：Ⅱ区 長原196号墳(東から)
9 長原遺跡西南・南地区 古墳時代の遺構
上 ：Ⅲ－A区 長原80・81号墳(東から)
下 ：Ⅲ－A区 長原80号墳(北から)
10 長原遺跡西南・南地区 古墳時代の遺構
上 ：Ⅲ－B区 長原82号墳と長原83号墳周溝
下 ：Ⅲ－A区 長原81号墳の墳丘南北断面
(東から)
11 長原遺跡西南・南地区 古墳時代の遺構
上 ：Ⅲ－A区 長原80号墳の北周溝南北断面
(西から)
下 ：Ⅲ－A区 長原82号墳の北周溝南北断面
(西から)
12 長原遺跡西南・南地区 古墳時代の遺構
上 ：Ⅳ区 長原194号墳(北から)
下 ：Ⅳ区 長原194号墳の墳丘南北断面
(西から)
13 長原遺跡西南・南地区 古墳時代の遺構
上 ：Ⅳ区 長原193号墳(東から)
下 ：Ⅳ区 長原193号墳の東周溝東西断面
(南から)
14 長原遺跡西南・南地区 古墳時代の遺構
上左：Ⅴ区 長原195号墳(南から)
上右：Ⅴ区 長原195号墳の墳丘南北断面
(東から)
下 ：Ⅴ区 長原195号墳(北東から)
15 長原遺跡西南・南地区 飛鳥～奈良時代の遺構
上左：Ⅲ－C区 SD602(西から)
上右：Ⅲ－C区 SD602断面
下左：Ⅰ区 SR601(西から)
下右：Ⅰ区 SR501(西から)
16 長原遺跡西南・南地区 飛鳥～奈良時代の遺構
上 ：Ⅳ区 SR604(東から)
下 ：Ⅴ区 SK601(北から)
17 長原遺跡西南・南地区 平安～鎌倉時代の遺構
上 ：Ⅳ区 SD402(西から)
下 ：Ⅳ区 SD402の東西断面(東から)
18 長原遺跡西南・南地区 平安～江戸時代の遺構
上 ：Ⅳ区 SD401の東西断面(北から)
下 ：Ⅳ区 東除川中心部(北西から)
19 長原遺跡東南地区 地層断面

上　：Ⅰ－A区　南壁地層断面
下　：Ⅱ区　南壁地層断面
20　長原遺跡東南地区　地層断面
上　：Ⅲ－A区　西壁地層断面
下　：Ⅳ－A区　北壁地層断面
21　長原遺跡東南地区　旧石器時代の遺構
上　：Ⅰ－A区　LC1301(西から)
下　：LC1301付近の地層断面
22　長原遺跡東南地区　旧石器時代の遺構
上　：Ⅳ－A区　LC1302(東から)
下左：LC1302　旧石器出土状態
下右：LC1302　旧石器出土状態
23　長原遺跡東南地区　縄文時代の遺構
上　：Ⅱ区　有茎尖頭器出土状態
下　：Ⅰ－B区　LC902(東から)
24　長原遺跡東南地区　弥生時代の遺構
上左：Ⅱ区　NR901(東から)
上右：Ⅳ－B区　長原9A層上面の小穴群
下　：Ⅱ区　NR901の南北断面
25　長原遺跡東南地区　弥生時代の遺構
上　：Ⅳ－A区　SD901(南から)
下　：Ⅰ－B区　SD902の東西断面(北から)
26　長原遺跡東南地区　古墳時代の遺構
上　：Ⅳ－B区　SK701(東から)
下　：Ⅰ－A区　SD701(西から)
27　長原遺跡東南地区　古墳・平安時代の遺構
上　：Ⅲ－A区　SD702(東から)
下　：Ⅱ区　長原4Biii層上面の遺構(西から)
28　瓜破遺跡東南地区　各層と遺構出土の遺物
長原0層　長原4層　長原6層　SK601
29　瓜破遺跡東南地区　遺構出土の遺物
SD601　SK602
30　長原遺跡西南・南地区　各層出土の遺物
長原2層　長原4層　長原5層　長原6A層
長原6B層
31　長原遺跡西南・南地区　各層出土の遺物
長原3層　長原6B層　長原12層　長原13層
長原80号墳盛土
32　長原遺跡西南・南地区　SK1301周辺の遺物
剥片　使用痕がある剥片　剥片・接合資料
33　長原遺跡西南・南地区
一ケ塚古墳周濠内出土の遺物
円筒埴輪
34　長原遺跡西南・南地区
一ケ塚古墳周濠内出土の遺物
円筒埴輪　朝顔形埴輪　衣蓋形埴輪
35　長原遺跡西南・南地区
一ケ塚古墳周濠内出土の遺物
衣蓋形埴輪　盾形埴輪
36　長原遺跡西南・南地区
一ケ塚古墳周濠内出土の遺物
不明形象埴輪　草摺形埴輪　短甲形埴輪
37　長原遺跡西南・南地区
一ケ塚古墳周濠内出土の遺物
加工痕がある板　鞆形埴輪　鶏形埴輪
偶蹄類の形象埴輪
38　長原遺跡西南・南地区
長原196・82・83号墳周溝内出土の遺物
196号墳　82号墳　83号墳
39　長原遺跡西南・南地区　長原80・81・193号墳
周溝内と194号墳周辺出土の遺物
80号墳　81号墳　193号墳　194号墳
40　長原遺跡西南・南地区
長原193号墳周溝内出土の遺物
193号墳
41　長原遺跡西南・南地区
長原193号墳周溝内出土の遺物
193号墳
42　長原遺跡西南・南地区
長原195号墳周辺と遺構出土の遺物
195号墳　SD701
43　長原遺跡西南・南地区　遺構と東除川出土の遺物
SK601　SD401　SD402　東除川
44　長原遺跡西南・南地区　東除川出土の遺物
東除川
45　長原遺跡西南・南地区　東除川と遺構出土の遺物

東除川　SD201
46　長原遺跡東南地区　各層出土の遺物
長原３層　長原4B層　長原６層
47　長原遺跡東南地区　各層出土の遺物
長原8C層　長原９層　長原9A層
長原９～12層　長原12層　長原13層
48　長原遺跡東南地区　各層と遺構出土の遺物
長原12層　長原14層　LC1301
49　長原遺跡東南地区　遺構出土の遺物
LC1301
50　長原遺跡東南地区　遺構出土の遺物
LC1302
51　長原遺跡東南地区　遺構出土の遺物
LC1302
52　長原遺跡東南地区　遺構出土の遺物
LC1302
53　長原遺跡東南地区　遺構出土の遺物
LC1302
54　長原遺跡東南地区　遺構出土の遺物
LC1302　LC901
55　長原遺跡東南地区　遺構出土の遺物
LC902　SD701　SD703

挿　図　目　次

図１　土地区画整理事業施行範囲と調査地 …… 2
図２　瓜破遺跡東南地区の調査地 …… 3
図３　長原遺跡西南・南地区の調査地 …… 4
図４　長原遺跡東南地区の調査地 …… 6
図５　各層出土の遺物(土器・石器) …… 8
図６　瓜破遺跡東南地区
飛鳥～奈良時代の遺構の配置 …… 9
図７　SD601・SK601・602出土の遺物 …… 10
図８　Ⅰ・Ⅱ区地層断面 …… 13
図９　Ⅲ区地層断面 …… 14
図10　Ⅳ区地層断面図の位置 …… 16
図11　Ⅳ区地層断面(西半) …… 16
図12　Ⅳ区地層断面(東半) …… 17
図13　各層出土の遺物(土器・埴輪) …… 18
図14　各層出土の遺物(石器) …… 20
図15　各層出土の遺物(石器) …… 21
図16　長原遺跡西南・南地区
旧石器時代の遺構の配置 …… 23
図17　Ⅰ区SK1301と石器遺物の出土位置 …… 24
図18　SK1301 …… 24
図19　SK1301周辺出土の石器遺物 …… 25
図20　長原遺跡西南・南・中央地区の古墳の分布
…… 27
図21　長原遺跡西南・南地区
古墳時代の遺構の配置 …… 28
図22　Ⅰ区一ケ塚古墳(長原85号墳) …… 29
図23　一ケ塚古墳断面 …… 30
図24　一ケ塚古墳の復元 …… 31
図25　Ⅰ区一ケ塚古墳周濠内の遺物出土状態 …… 32
図26　加工痕がある板材出土状態 …… 33
図27　加工痕がある板材 …… 34
図28　一ケ塚古墳周濠内出土の円筒埴輪 …… 35
図29　一ケ塚古墳周濠内出土の円筒・朝顔形埴輪
…… 36
図30　一ケ塚古墳周濠内出土の形象埴輪
(衣蓋形蓋部) …… 38
図31　一ケ塚古墳周濠内出土の形象埴輪
(衣蓋形立飾り部) …… 39
図32　一ケ塚古墳周濠内出土の形象埴輪
(盾形・不明) …… 40
図33　一ケ塚古墳周濠内出土の形象埴輪(靫形) … 41
図34　一ケ塚古墳周濠内出土の形象埴輪
(草摺形・短甲形) …… 42
図35　一ケ塚古墳周濠内出土の形象埴輪(家形) … 43

図36　一ケ塚古墳周濠内出土の形象埴輪
（動物形）……44
図37　Ⅱ区長原196号墳……46
図38　長原196号墳周溝内の遺物出土状態……47
図39　長原196号墳周溝内出土の埴輪……48
図40　Ⅲ－A区長原80・81号墳……50
図41　長原80・81号墳周溝内出土の遺物……51
図42　Ⅲ－B区長原82・83号墳……52
図43　長原82・83号墳周溝内出土の遺物……52
図44　Ⅳ区長原194号墳と出土遺物……54
図45　Ⅳ区長原193号墳……55
図46　長原193号墳周溝内出土の土器……56
図47　長原193号墳周溝内出土の円筒埴輪……57
図48　長原193号墳周溝内出土の円筒・朝顔形埴輪
……58
図49　Ⅴ区長原195号墳と周辺出土の土器……60
図50　長原195号墳周辺出土の巫女形埴輪……61
図51　長原195号墳周辺出土の円筒埴輪……62
図52　Ⅳ区SD701と出土遺物……62
図53　長原遺跡西南・南地区
飛鳥～奈良時代の遺構の配置……63
図54　Ⅲ－A区SD601……64
図55　Ⅲ－C区SD602……64
図56　Ⅰ～Ⅲ区周辺の長原6A層上面の水田……65
図57　Ⅰ区SR601……66
図58　Ⅰ区SR501……66
図59　Ⅳ区SR604……67
図60　Ⅴ区SK601と出土遺物……68
図61　Ⅳ区SD401・SD402出土の遺物……69
図62　Ⅳ区SD401・SD402……71
図63　Ⅳ区東除川……73
図64　東除川出土の遺物（土器）……75
図65　東除川出土の遺物（土器）……76
図66　東除川出土の遺物（埴輪・石器）……77
図67　Ⅳ区SD201出土の遺物……78
図68　江戸時代の東除川の河道……80
図69　東除川と長原193・194号墳……81
図70　Ⅰ区地層断面……83
図71　Ⅱ区地層断面……84
図72　Ⅲ区地層断面……85
図73　Ⅳ区地層断面……86
図74　各層出土の遺物（土器）……89
図75　各層出土の遺物（石器）……91
図76　各層出土の遺物（石器）……94
図77　長原遺跡東南地区旧石器時代～
縄文時代早期の遺構の配置……96
図78　Ⅰ－A区LC1301の位置……97
図79　LC1301の石器遺物出土状態……98
図80　LC1301のナイフ形石器・石核……99
図81　LC1301の剥片……99
図82　LC1301の剥片……101
図83　Ⅳ－A区LC1302の位置と
石器遺物の出土数……103
図84　LC1302の石器遺物出土状態……104
図85　LC1302のナイフ形石器……105
図86　LC1302の接合資料1……106
図87　LC1302の接合資料2……107
図88　LC1302の接合資料3……107
図89　LC1302の接合資料4……108
図90　LC1302の石核……109
図91　LC1302の剥片・その他……110
図92　LC1302の剥片……111
図93　長原遺跡東南地区縄文時代晩期～
弥生時代中期の遺構の配置……113
図94　Ⅱ区NR901……114
図95　Ⅳ－A区SD901……115
図96　Ⅰ－B区SD902……116
図97　Ⅰ－A区LC901と
長原12層の遺物出土位置……117
図98　Ⅱ区石器遺物の出土位置……117
図99　LC901の石錐……118
図100　LC901の剥片・その他……118
図101　Ⅰ－B区LC902と出土遺物……120
図102　Ⅳ－B区長原9A層上面の小穴群……121
図103　長原遺跡東南地区
古墳～飛鳥時代の遺構の配置……122

図104 Ⅰ－A区SD701と出土遺物 …… 123
図105 Ⅲ－A区SD702 …… 124
図106 Ⅳ－A区SD703と出土遺物 …… 125
図107 Ⅱ区SD401・SR401～403 …… 126
図108 Ⅰ－A区の石器遺物出土位置 …… 127
図109 正倉院宝物の鞆 …… 129
図110 各地出土の鞆形埴輪 …… 131
図111 鳴谷東1号墳出土の鞆形埴輪 …… 132

表 目 次

表1 1991年度土地区画整理事業に伴う
発掘調査一覧 …… 1
表2 各層出土の遺物 …… 8
表3 各層出土の遺物 …… 19
表4 火葬骨片同定結果一覧 …… 70
表5 各層出土の遺物 …… 90

写 真 目 次

写真1 91－61次調査(Ⅵ区) …… 5
写真2 91－49次調査(Ⅴ区) …… 5
写真3 Ⅲ区SK602遺物出土状態 …… 11
写真4 133内面の線刻 …… 47
写真5 136内面の線刻 …… 47
写真6 火葬人骨 …… 70
写真7 Ⅲ－A区足跡化石状の凹み …… 87

別 表

別表1 遺物一覧（陶磁器・土器・埴輪など） …… 135
別表2 遺物一覧（石器遺物） …… 141
別表3 古墳一覧 …… 145

第Ⅰ章　長原・瓜破遺跡の発掘調査

第１節　1991年度の発掘調査と報告書の作製

１）発掘調査（図１）

1991年度の土地区画整理事業に伴う発掘調査件数は14件、発掘総面積は3,427㎡であった。そのうち瓜破遺跡東南地区が２件360㎡、長原遺跡西南地区が１件200㎡、長原遺跡南地区が５件1,701㎡、長原遺跡東南地区が６件1,166㎡である。

現場での作業は1991年４月22日に開始し、1992年３月31日に終了した。各調査とも検出した遺構・遺物は写真や実測図によって記録し、保存処理が必要なものはそのつど処置した。各調査の担当者・調査面積などは表１のとおりである。

表１　1991年度土地区画整理事業に伴う発掘調査一覧

報告書地区名	発掘次数	面積	調査地番	担当者	調査期間
瓜破遺跡東南地区					
Ⅲ	NG91－7次	60㎡	平野区瓜破東８丁目	藤田幸夫	1991年４月22日～1991年５月17日
Ⅰ・Ⅱ	NG91－9次	300㎡	同　瓜破東８丁目	藤田幸夫	1991年４月22日～1991年７月９日
長原遺跡西南地区					
Ⅰ	NG91－54次	200㎡	同　長吉長原西３丁目	松本百合子	1992年１月13日～1992年３月27日
長原遺跡南地区					
Ⅲ	NG91－8次	541㎡	同　長吉川辺１丁目	佐藤隆・小田木富慈美	1991年４月22日～1991年７月９日
Ⅳ	NG91－30次	970㎡	同　長吉川辺１丁目	高井健司・松本百合子 小田木富慈美	1991年９月20日～1992年１月31日
Ⅴ	NG91－55次	130㎡	同　長吉川辺３丁目	藤田幸夫	1991年12月２日～1992年３月７日
Ⅵ	NG91－61次	25㎡	同　長吉川辺２丁目	藤田幸夫	1992年１月７日～1992年２月10日
Ⅱ	NG91－81次	35㎡	同　長吉川辺１丁目	松本百合子	1992年３月７日～1992年３月31日
長原遺跡東南地区					
Ⅳ	NG91－12次	200㎡	同　長吉川辺３丁目	松本百合子	1991年５月21日～1991年７月31日
Ⅰ	NG91－20次	438㎡	同　長吉川辺３丁目	田中清美	1991年７月１日～1992年３月31日
Ⅱ	NG91－21次	252㎡	同　長吉川辺３丁目	小田木富慈美	1991年７月１日～1991年10月31日
Ⅵ	NG91－29次	7㎡	同　長吉川辺３丁目	藤田幸夫	1991年10月14日～1991年10月15日
Ⅴ	NG91－49次	15㎡	同　長吉川辺３丁目	藤田幸夫	1991年11月11日～1991年11月30日
Ⅲ	NG91－67次	254㎡	同　長吉川辺３丁目	平田洋司	1992年１月27日～1992年３月31日

なお、発掘調査次数は遺跡略号「NG」のあとに年度と開始順の番号を付けているが、本報告書では土地区画整理事業に伴う調査はすべて「NG」を冠するため、これを省略している。ただし、長原・瓜破遺跡では土地区画整理事業以外の調査もあり、これらを記述するばあいには遺跡略号を付けて呼称する。なお、NG91－7・9次調査は、遺跡地図の上では瓜破遺跡に含まれるが、一連の土地区画整理事業に伴うため、「NG」を冠している。

2）報告書の作製

報告書の作製に伴う図面・遺物の整理作業は1996年度に行った。資料の基本的な整理は発掘調査終了後に直ちに調査担当者が行ったが、報告書作製のための遺物復元や製図作業については担当者が整理期間中に現場作業に当っていたため、主として松本が整理した。

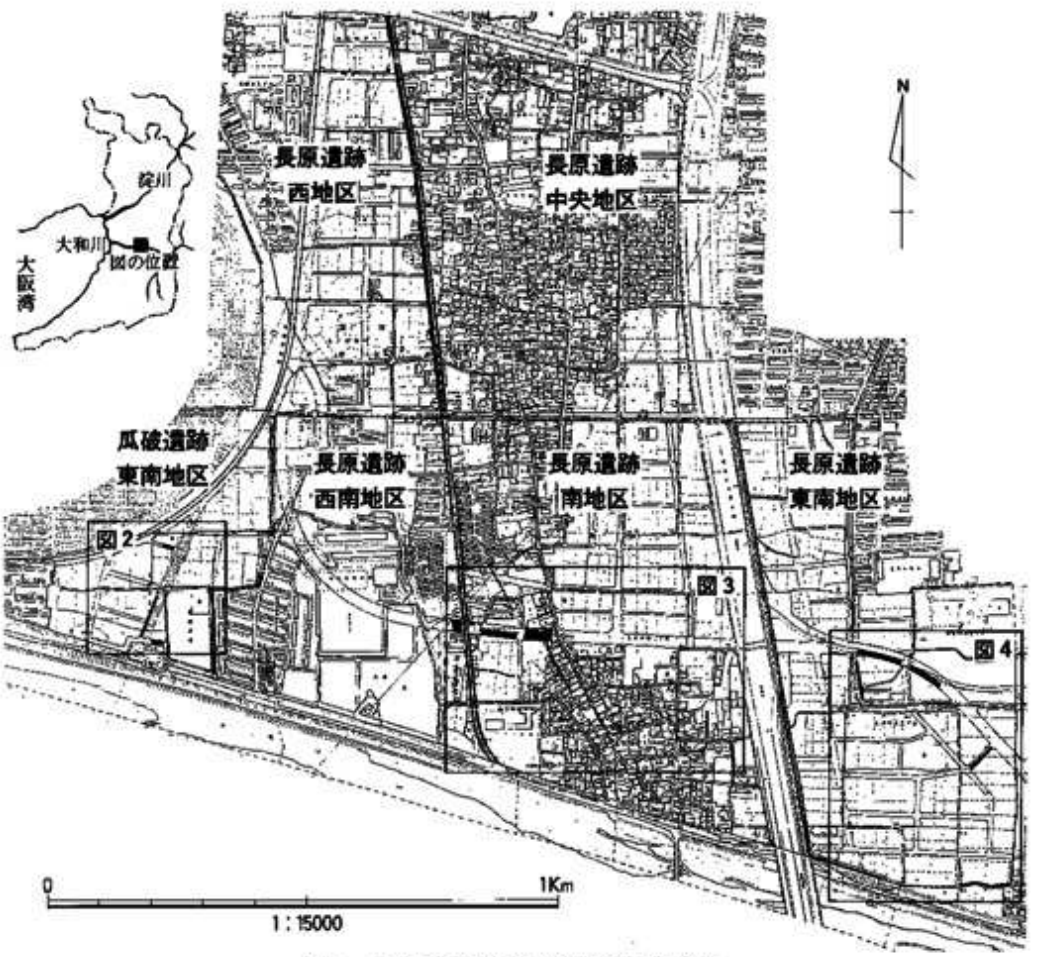


図1　土地区画整理事業施行範囲と調査地

第２節　調査の経過と概要

長原・瓜破遺跡の地区区分は、[大阪市文化財協会1990]において６区分されている。本報告書でもこれに従い、第Ⅱ章以下は調査地を地区ごとに分けた上で、調査次数を地区の通し番号Ⅰ～Ⅵに置換えて記述する。

１)瓜破遺跡東南地区(91－７・９)(図２)

大阪市営瓜破霊園の南東で大和川との間に位置する。これまでの調査で７世紀代の掘立柱建物[南秀雄1987]や柵・井戸[大阪市文化財協会1992b]が見つかっており、官衙的な建物群の全貌が明らかになってきている。

ⅰ)91－７次調査(Ⅲ区)

調査地は90－65次調査(90－Ⅵ)の東隣に位置する。全長25mで、通行路を確保するために東西区に分けて西区から調査した。

ⅱ)91－９次調査(Ⅰ・Ⅱ区)

南北方向に延びる全長95mの路線(Ⅱ区)と、東西方向に延びる全長30mの路線(Ⅰ区)である。調査はⅠ区から始め、Ⅱ区は北・中央・南トレンチに分割し、南区から調査した。

図２　瓜破遺跡東南地区の調査地

２)長原遺跡西南・南地区(91－８・30・54・55・61・81)(図３)

これまで西南地区と南地区は別に報告していたが、本年度は両地区にまたがる一ケ塚(いちがつか)古墳を調査したために２地区を合わせて報告する。そのため各調査地番号も通し番号とした。

ⅰ)91－８次調査(Ⅲ区)

調査地の長原５層以上は1982年と1986年に調査し、すでに報告済みである[大阪市文化財協会1990]。本年度はそれ以深の部分について調査した。トレンチは南側の田畑への通行路を確保するためＡ・Ｂ・Ｃ区に分割し、西端のＡ区から調査を開始した。

ii)91－30次調査(Ⅳ区)

調査地は大和川付替以前に流れていた東除川(ひがしよけ)の河道を横断する場所に当る。川の範囲確認のため8月29日に試掘調査を行ったところ、厚い水成砂層を確認した。そのため、調査地全周に鋼矢板による土留め工事を行い、東除川の砂層の上部を重機で除去したのちに調査を始めた。西端部で古墳の一部を確認したので、新たに西側に拡張区を設けて12月16日から追加調査を行った。

iii)91－54次調査(Ⅰ区)

調査地は82－27次調査の西隣に当る。82－27次調査では一ケ塚古墳の造出しと東側の周濠を検出した[大阪市文化財協会1990]ことから、本調査地は墳丘本体と北側の周濠に当る場所であると予想された。そのため北半部に鋼矢板を設置し、土留め工事を行ったのちに調査を開始した。さらに、当地は旧石器時代の遺物を包含する長吉野山遺跡としても知られており[石神怡1988]、一ケ塚古墳の調査のあと、旧石器時代に相当する可能性のある地層についても調査した。

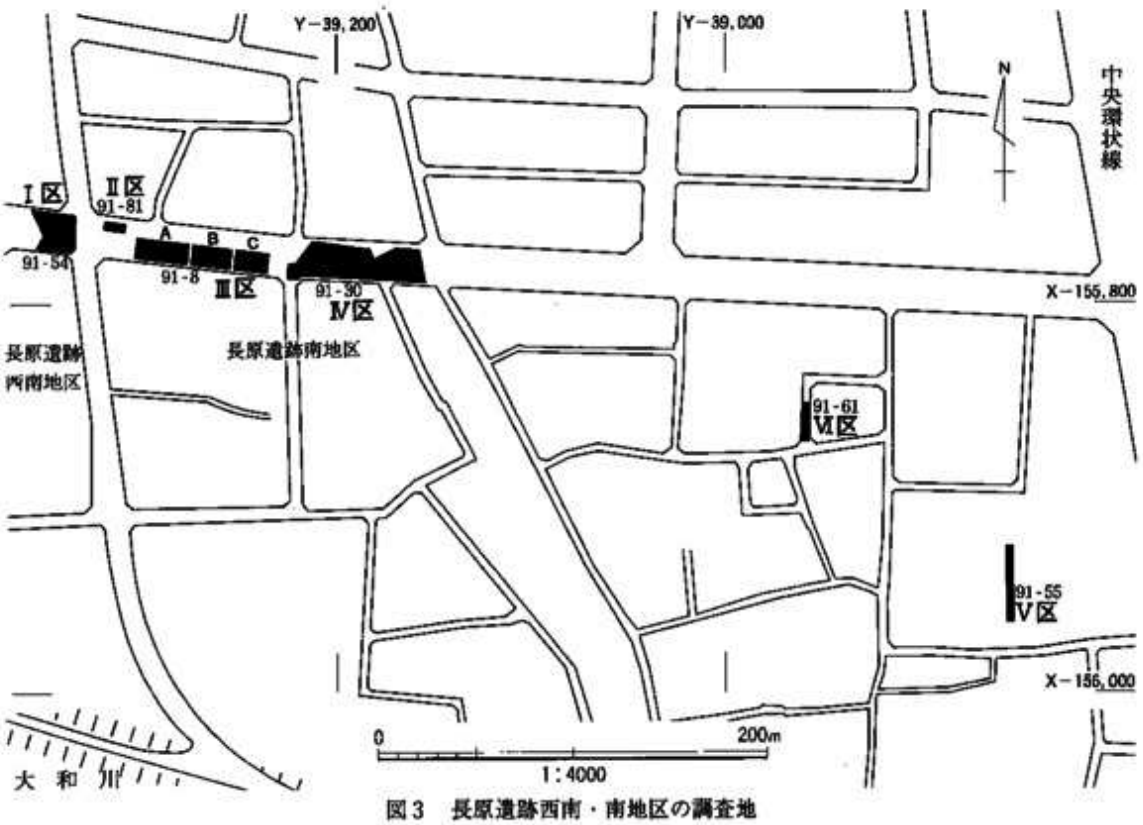


図3　長原遺跡西南・南地区の調査地

iv)91－55次調査(Ⅴ区)

調査地は南北方向の全長40mの路線である。通行路確保のためトレンチを南・北区に分割し、北区から調査を開始した。南区の南半部で古墳が見つかったので、さらに南・東側にトレンチを拡張し、墳丘の東半を確認して調査を終了した。

v)91－61次調査(Ⅵ区)(写真1)

調査地は南北方向の全長20mの路線である。調査の結果、長原4～7層を確認した。長原13層では旧石器時代の遺物の検出に努めたが、遺構・遺物ともになかったので、報告を省略する。

写真1　91－61次調査（Ⅵ区）

vi)91－81次調査(Ⅱ区)

調査地は91－8次調査(Ⅲ区)の北に並行する。全長10mの小さなトレンチである。一ケ塚古墳周濠の外縁と、別の古墳を検出した。

3)長原遺跡東南地区(91－12・20・21・29・49・67)(図4)

i)91－12次調査(Ⅳ区)

調査地は全長55mの路線である。北半部は88－66次調査で終了しており、本年度は残りの南半部を調査した。路線の中央には水田の排水管が横断していることから、トレンチをA・B区に分割して同時に掘削を始めた。B区は長雨により壁面の崩壊が著しく、長原9A層を調査したあと埋戻した。A区は長原14層まで調査し、長原13層では旧石器時代の遺物を確認したため、掘削土を採集して水篩選別による遺物捕集に努めた。

写真2　91－49次調査（Ⅴ区）

ii)91－20次調査(Ⅰ区)

調査地は市道出戸川辺線の南側車道に当るため、トレンチの周囲に鋼矢板を設置して調査を行った。路線の全長が80mと長いため、A・B区に分割してB区から着手した。調査深度は既設の下水道管のために地表面より－3.5mまでとした。また縄文時代および旧石器

時代の石器遺物が見つかったので、掘削土を採集し、水篩選別による遺物捕集に努めた。

iii)91－21次調査(Ⅱ区)

調査地は91－20次調査(Ⅰ区)の東側に直列する場所に当るため、ここでもトレンチの周囲に鋼矢板を設置して調査を行った。調査の結果、長原１～15層までの地層が良好に遺存していることがわかった。

iv)91－29次調査(Ⅵ区)

調査地は大阪市域の南東隅、八尾市との境に当る全長90mの路線である。試掘によって、長原１～６層を確認した。遺構・遺物ともになかったので、報告を省略する。

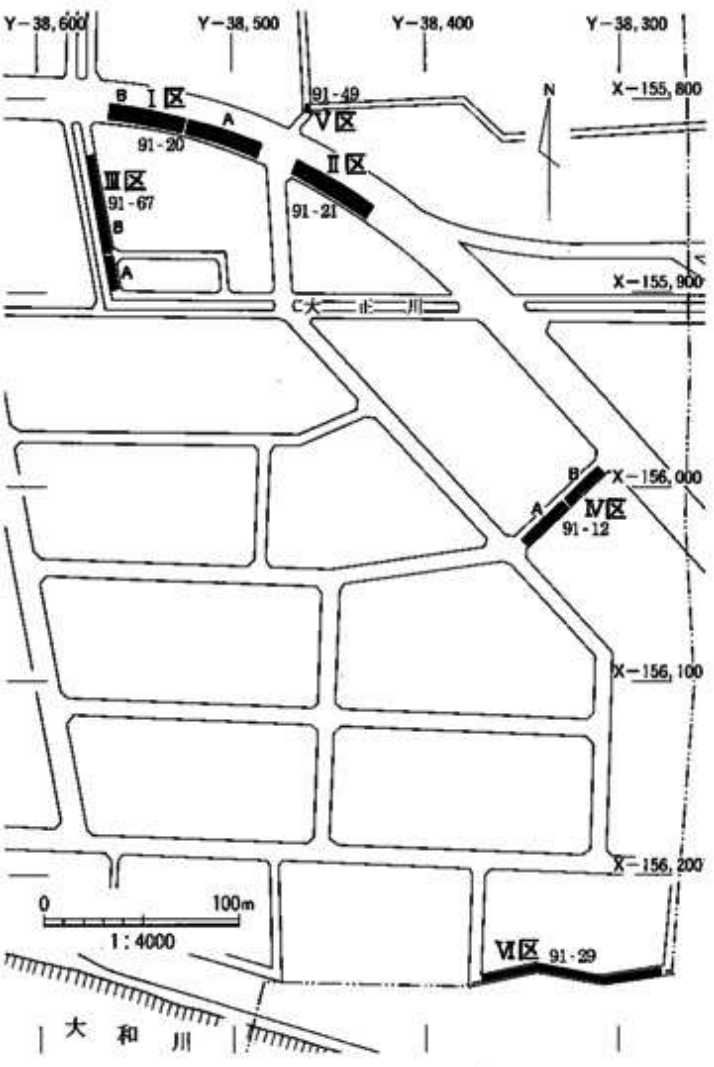


図４　長原遺跡東南地区の調査地

v)91－49次調査(Ⅴ区)(写真２)

調査地は91－21次調査(Ⅱ区)の北方に当る。３m×５mの範囲に鋼矢板を設置して調査したところ、長原４～11層を確認した。遺構・遺物ともになかったので、報告を省略する。

vi)91－67次調査(Ⅲ区)

調査地は大正川沿いに南北に延びる全長70mの路線である。中央に排水管が横断しているため、A・B区に分割してA区から調査を開始した。１月17日の試掘結果からB区は調査深度が深くなることがわかったため、東側に鋼矢板を設置し、西側は大正川の護壁を利用して調査を進めた。

第Ⅱ章　調査の結果

第１節　瓜破遺跡東南地区の調査

１）調査地の層序

ｉ）はじめに

瓜破遺跡東南地区は、南から北に緩やかに下降する瓜破台地の北端に位置する。現地表面の高さはTP＋13.0m前後で、水田を主とする耕作地が拡がっている。調査対象となる地山以上の地層の遺存状況は、南部ほど薄く撹乱も著しい。そのために現代盛土の直下が地山面になり、近世以前の地層は島状にわずかに残るのみである。

記述は長原遺跡の標準層序[大阪市文化財協会1995]に添って進める。当地区では調査対象となる地層の堆積が薄く細分も困難で、長原遺跡と比べて大掴みな層序の把握にとどまっている。ここではⅡ区を中心に記述する。

ⅱ）層序（図版１）

沖積層上部層

長原０層：現代の客土層である。層厚は50～100cmである。

長原２層：にぶい黄色(2.5Y6／3)砂質シルトの作土層で、層厚は10～30cmである。近世の染付磁器や陶器を含む。

長原４層：にぶい黄橙色(10YR7／2)砂質シルトの作土層で、層厚は５～20cmである。平安から鎌倉時代にかけての瓦器・土師器を含む。下面で多くの浅い溝を検出した。

長原６層：褐色(10YR4／4)粘土質シルトの作土層で、層厚は５cm以下である。少量の須恵器・土師器を含む。下面でSD601・SK601・602を検出した。

沖積層下部層（地山層）

地山層：明黄褐色(10YR6／6)粘土～砂礫である。長原13～15層に相当する。遺物は出土しなかった。

2)各層出土の遺物

瓜破遺跡東南地区では、長原0・2・4・6層から陶磁器・土器・石器などが出土している。ただし、いずれも細片であるため図示できるものは少ない。ここではおもなものを報告し、それぞれの遺物が出土した地区と層位は表2に示す。

長原0層出土遺物(図5、図版28)

5はサヌカイト製の石核(註1)である。片面は原面で覆われている。剥片剥離は基本的に長軸に沿った両端から、直接原面を加撃して行われている。また、剥離が行われた両端の縁辺が、部分的に頻繁な打撃によって潰れていることから、挟み打ちなどの手法で剥片を取得した可能性がある。弥生時代のものであろう。

表2　各層出土の遺物

地区	地層	遺物番号
Ⅰ区	長原0	5
	長原4	4
	長原6	1・2・3

長原4層出土遺物(図5、図版28)

4は凹基無茎式石鏃(註2)である。平面形が二等辺三角形を呈し、逆刺の先端が尖る。このことからB－1類に分類され

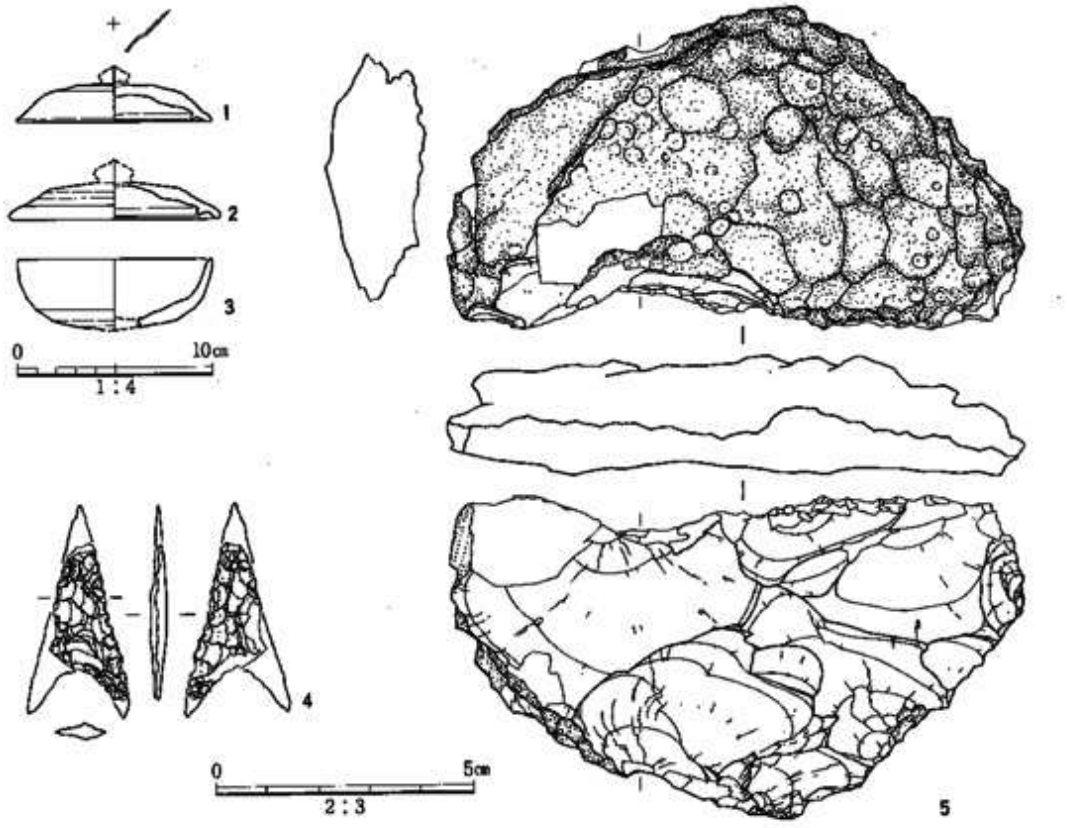


図5　各層出土の遺物（土器・石器）

る。当類は長原12／13～9C層からの出土例がある。切っ先の先端と一方の逆刺を欠損する。

長原6層出土遺物(図5、図版28)

1・2は飛鳥Ⅲの須恵器杯蓋である。1には上部外面にヘラ記号がある。3は飛鳥Ⅲの杯身である。底部はヘラ切りである。

3)飛鳥～奈良時代の遺構と遺物

i)溝

SD601(図6・7、図版1・29)

Ⅰ区の東端に位置し、長原6層下面で検出した。溝の半分は調査区外にあるため、幅・深さなどは不明である。流れの方向は南北方向である。飛鳥Ⅱの須恵器杯身8・蓋6、飛

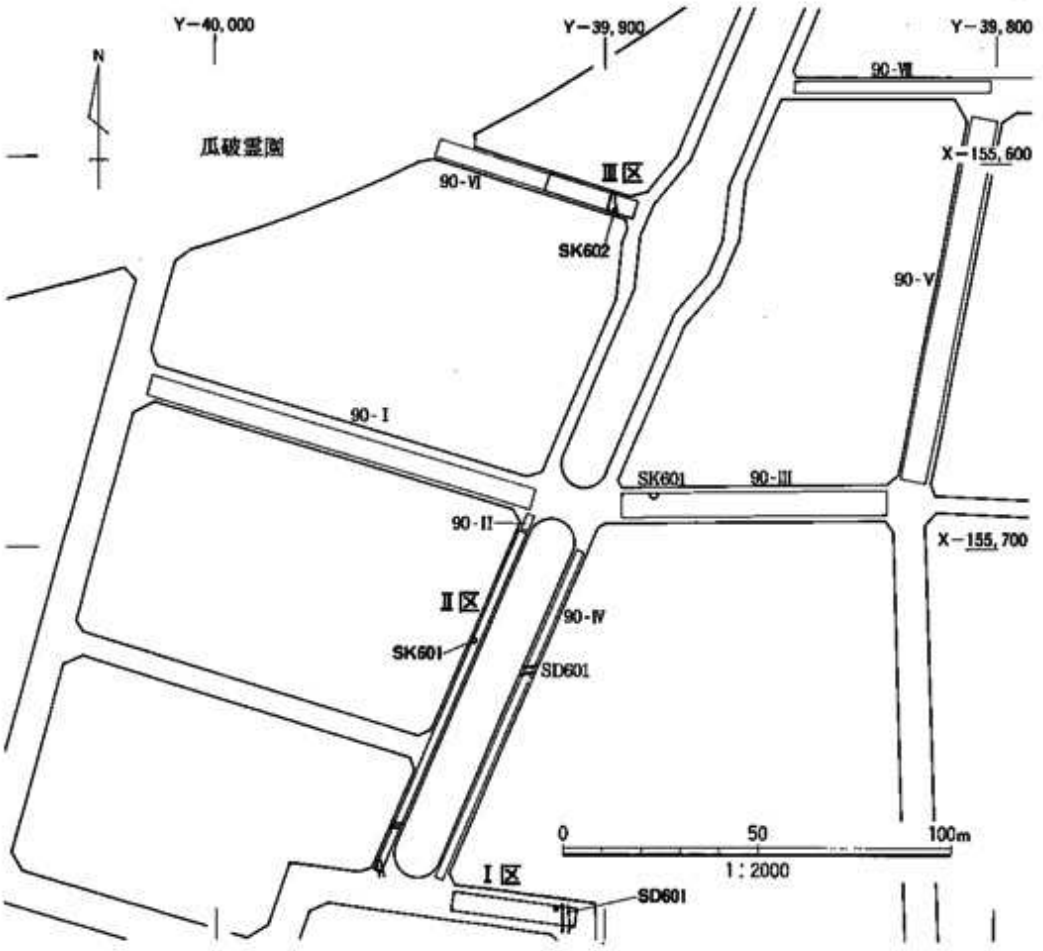


図6　瓜破遺跡東南地区飛鳥～奈良時代の遺構の配置

鳥Ⅲの須恵器杯身7が出土している。

ii）土壙

SK601（図6・7、図版28）

Ⅱ区の中央部に位置し、長原6層下面で検出した。直径約0.4mの浅い土壙である。土師器の細片とともに飛鳥Ⅲ～Ⅳの須恵器平瓶9、甕10が出土している。

SK602（図6・7、図版29、写真3）

Ⅲ区の東部に位置し、長原6層下面で検出した。直径0.8m、深さ0.1mの浅い土壙であ

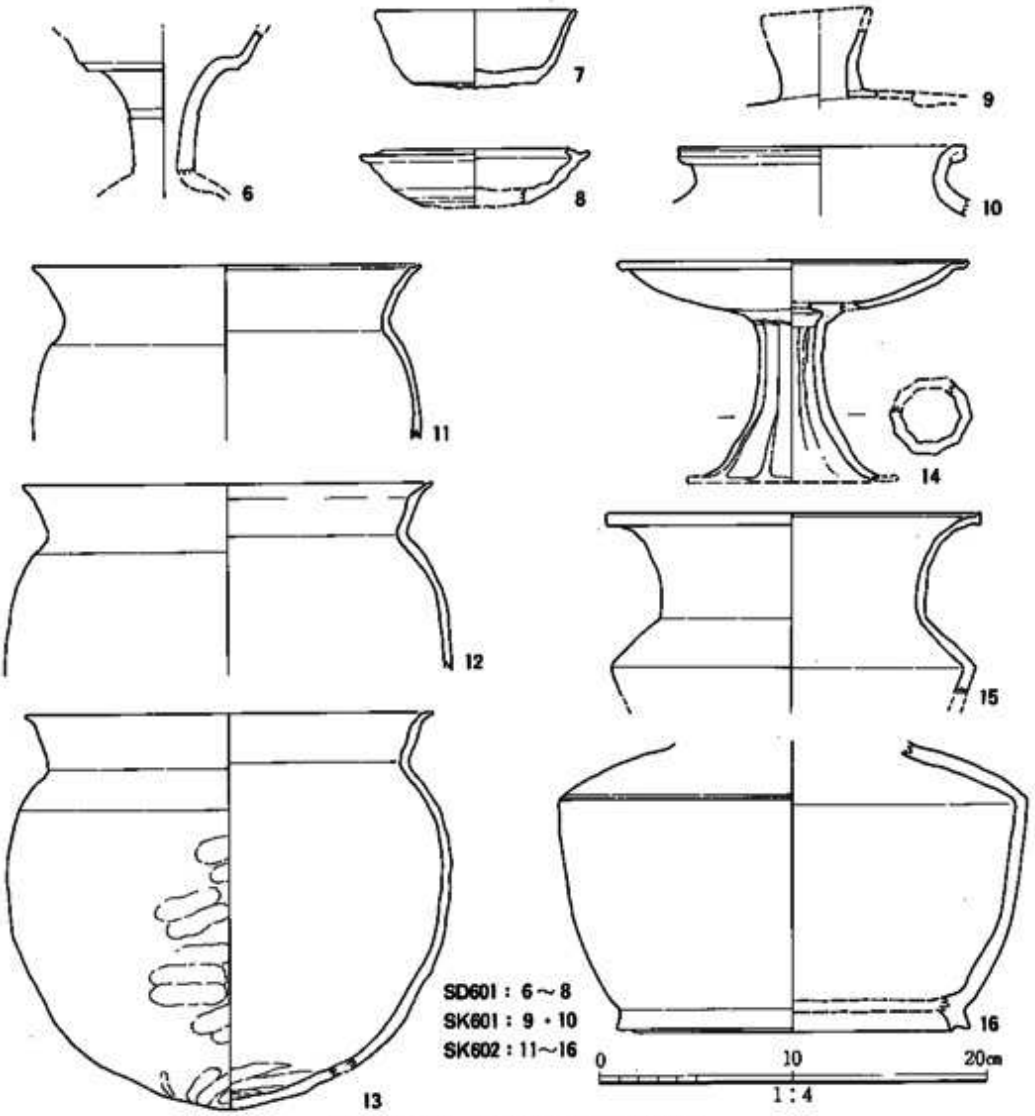


図7　SD601・SK601・602出土の遺物

る。11～13は土師器甕である。口縁端部は面をなし、口頸部は外反ぎみに立上がる。体部は球形で、最大径は口径より大きい。外面はユビオサエが顕著である。14は土師器高杯である。器表面が磨耗しているため、杯部内面の暗文は見えない。脚には7方向以上の面取りがある。15は須恵器広口壺である。16は須恵器壺である。肩部に浅い凹線が一条ある。これらは平城宮Vに相当する。

写真3　Ⅲ区SK602遺物出土状態

4）小結

瓜破遺跡東南地区では、西端のUR86－11次調査によって7世紀の官衙的建物群の存在が明らかになっている[南秀雄1987]。今回の調査地はそれらの東側に隣接する地域であったにもかかわらず、1990年度の調査[大阪市文化財協会1997b]と同様に当該時期の遺構がほとんどなかった。時期がわかる遺構はわずかにSD601・SK601・602のみである。SK602については8世紀中ごろの土器が見つかっていることから、周辺に奈良時代の遺構が存在することをうかがわせている。

註

（1）本報告書における石器遺物に関する用語は基本的に[山中一郎1995]による。

（2）本報告書における石鏃の型式分類および年代の基準は、基本的に[菅榮太郎1995]による。ただし、次の点について補足・修正して用いた。まず、「A類：作用部側縁が直線的に調整され、切っ先角がおおむね50°以上になる幅広の凹基無茎式石鏃。平面形態は正三角形もしくは横に拡がる二等辺三角形またはそれに近い形となる。」については、「A類：作用部側縁が直線的に調整される凹基無茎式石鏃で、平面形態は正三角形もしくは横に拡がる二等辺三角形またはそれに近い形となる。」とする。これは今回の資料中に、平面形態が正三角形に近いものの、切っ先角が50°を下回るものが多かったことによる。これに伴って、B類の基準も次のように改め、「B類：作用部側縁が直線的に調整される凹基無茎式石鏃で、平面形態は縦長の二等辺三角形またはそれに近い形となる。」とする。

第２節　長原遺跡西南・南地区の調査

１）調査地の層序

ｉ）はじめに

長原遺跡西南地区と南地区は南北方向のバス通りを挟む別の地区である（図１）が、今回は一ケ塚古墳が両地区をまたぐため一括して報告する。そのため調査地の通し番号は両地区を合わせてⅠ～Ⅵと呼称する。

調査地区は南北に延びる丘陵部の東の縁辺部に当り、南西から北東に向って緩やかに下っている。地層の遺存状態は奈良時代に厚く堆積した砂層に覆われたことによって良好であり、古墳・水田など各時代の遺構も良好に保存されている。

ｉｉ）層序（図８～12、図版２～４）

沖積層上部層Ⅰ

長原０層：現代の客土層である。

長原１層：黒褐色(2.5Y3／2)砂質シルトの現代作土層で、層厚は10～20cmである。

長原２層：浅黄色(2.5Y7／3)礫混り砂質シルトの作土層で、層厚は10～30cmである。磁器・陶器などを含む。Ⅳ区には作土層の下に東除川の堆積層として、層厚1.3～2.0mの厚い水成の砂礫層が分布している。

長原３層：黄褐色(2.5Y5／4)砂礫混り粘土質シルトの作土層で、層厚は10～20cmである。室町時代の瓦質土器・瓦器を含む。

長原４層：黄褐色(2.5Y5／3)礫混り粘土質シルトの作土層で、層厚は10～20cmである。主として鎌倉時代の瓦器・土師器を含むことから、長原4B層に当ると考えられる。

長原５層：にぶい黄橙色(10YR6／4)礫～極細粒砂の水成層で、層厚は25～40cmである。調査地区全域に分布する。Ⅰ区の一ケ塚古墳周濠内では、5A・5B層に分かれる。5A層はにぶい黄色(2.5Y6／3)粗粒砂、5B層はにぶい黄色(2.5Y6／4)シルト～細粒砂である。5B層上面では畦畔SR501や多数の足跡を検出した。

長原6Ai層：灰黄色(2.5Y6／2)礫混り粘土の水田の作土層で、層厚は20～30cmである。調査地区全域に分布する。上面で畦畔SR601～604を検出した。

長原6Bi層：黒褐色(2.5Y3／2)粘土質シルトの作土層で、層厚は５～15cmである。Ⅰ区では一ケ塚古墳周濠内に長原7A層とともに6Ai層から踏込まれた状態で存在する。Ⅲ区で

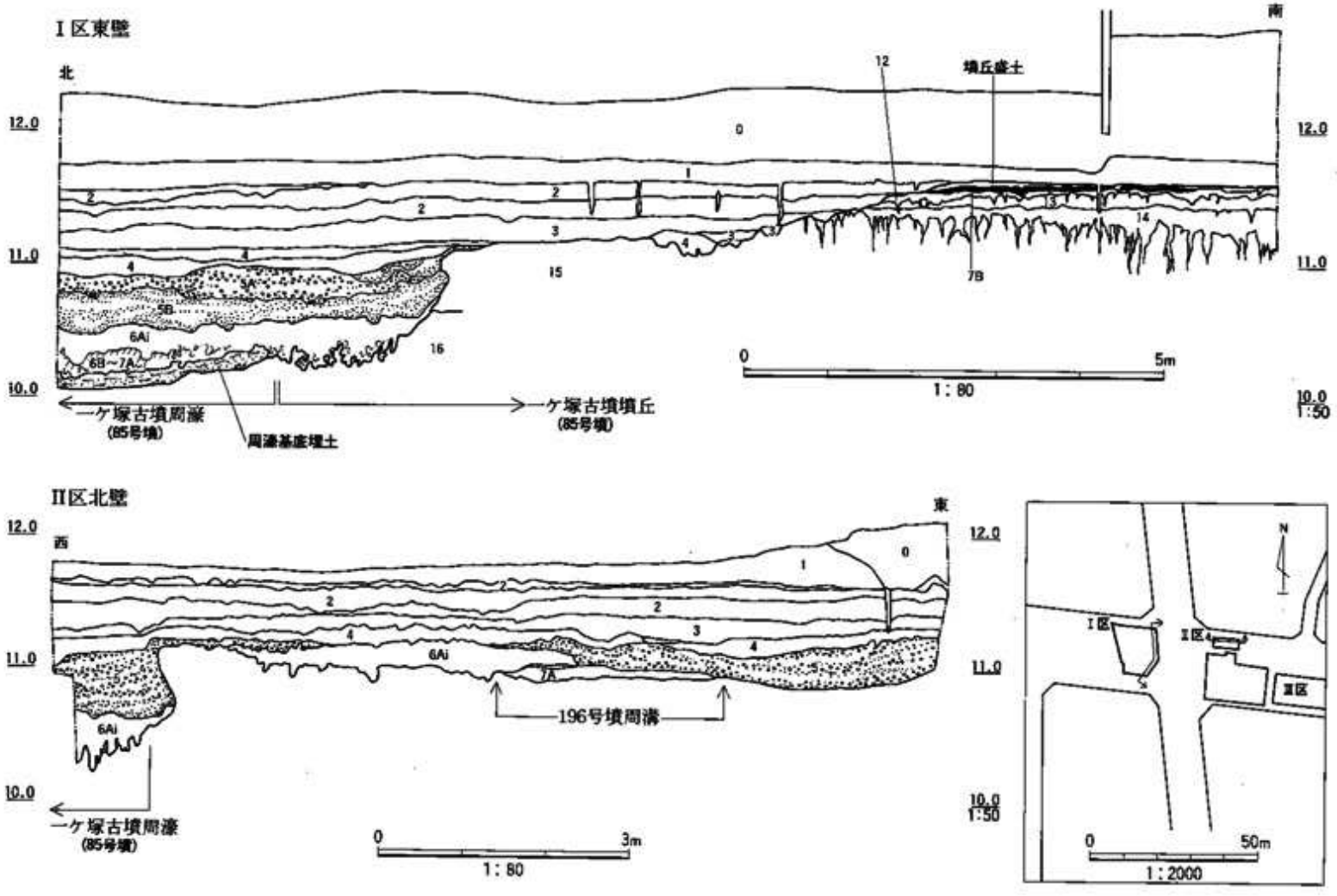

I区東壁
北
南
12.0
11.0
10.0
墳丘盛土
一ケ塚古墳周濠
(85号墳)
一ケ塚古墳墳丘
(85号墳)
周濠基底埋土
0
5m
1:80
1:50
II区北壁
西
東
196号墳周溝
3m
N
I区
II区
III区
50m
1:2000

図8 I・II区基準断面

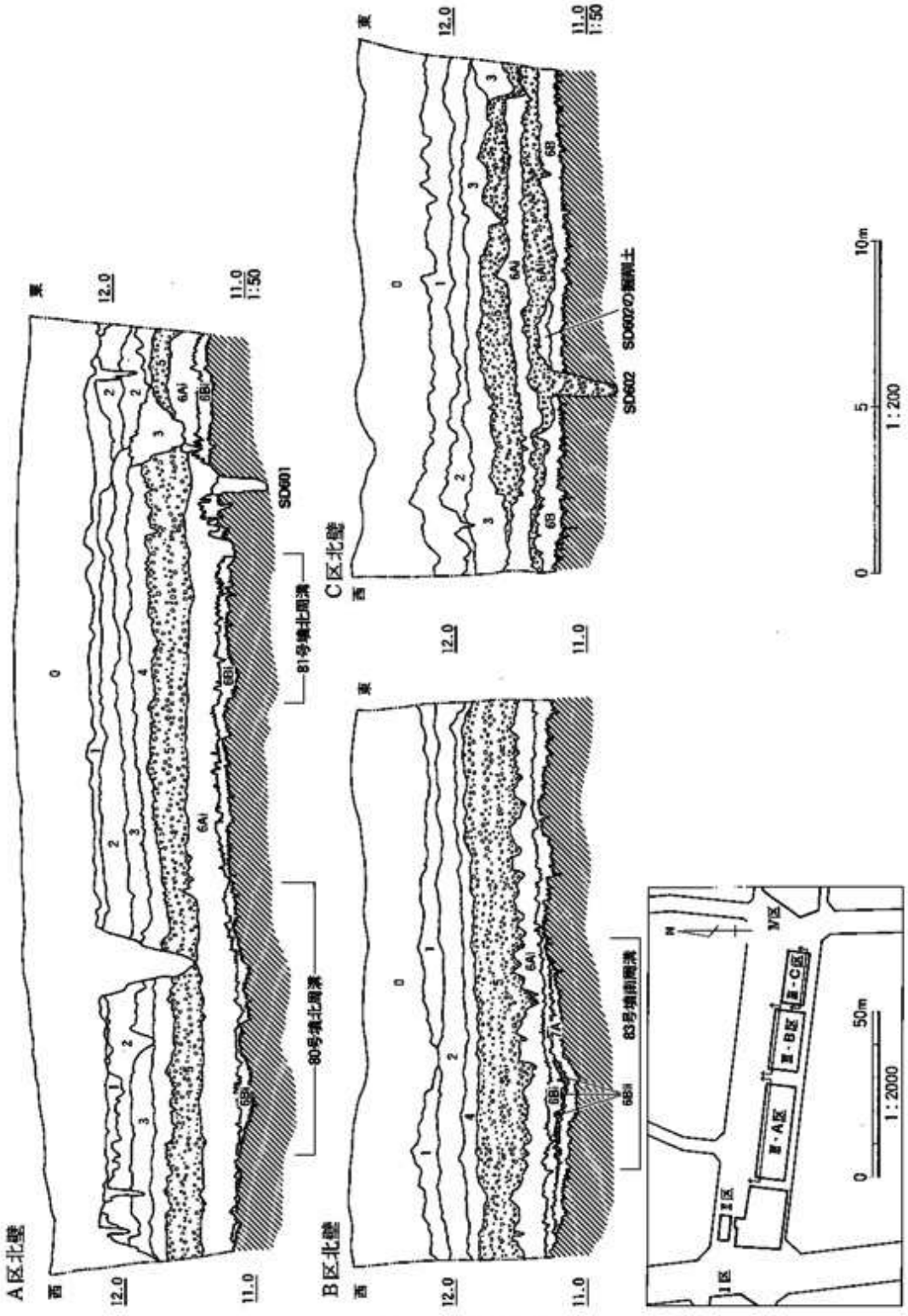

A区北壁
B区北壁
C区北壁
西
東
12.0
11.0
1:50
80号墳北周溝
81号墳北周溝
83号墳南周溝
SD601
SD602
SD602の掘削土
0
5
10m
1:200
50m
1:2000
Ⅰ区
Ⅱ区
Ⅲ・A区
Ⅲ・B区
Ⅲ・C区
Ⅳ区

図9　Ⅲ区地層断面

は上面でSD601・602を検出した。

長原6Bii層：灰オリーブ色(7.5Y6／2)極細粒砂～粘土の水成層で、層厚は2㎝以下である。一ケ塚古墳周濠内では長原6A層中に踏込まれた状態で遺存し、長原193・194号墳の周溝内では薄く堆積する。

長原7A層：黒褐色(2.5Y3／2)～暗褐色(10YR3／3)シルト質粘土で、層厚は10㎝以下である。一ケ塚古墳周濠内および長原80～82・193・194・196号墳周溝内とⅣ区東半部に存在する。

沖積層上部層Ⅱ

長原7B層：黒褐色(2.5Y3／2)～灰オリーブ色(5Y4／2)シルトで、層厚は10～2㎝である。古墳の墳丘盛土下にのみ残る古墳時代の地表面である。Ⅰ区では一ケ塚古墳のベースとなり、上面には細かな炭化物が薄く認められる。

沖積層中部層以下

長原12層：にぶい黄色(2.5Y6／3)砂混りシルトで、層厚は2～10㎝である。Ⅰ区に分布する。横大路火山灰の火山ガラスを少量含む。

長原13層：にぶい黄色(2.5Y6／4)粘土質シルト～粘土で、層厚は10㎝前後である。上面に乾痕がある。

長原13B～14層：にぶい黄色(2.5Y6／4)砂礫～シルトで、層厚は約80㎝である。Ⅳ区東半では火山灰質の部分が観察できた。

長原15層：明黄灰色(10YR6／8)砂礫～シルトで、上部はやや粘土質である。部分的にラミナが見える。

2)各層出土の遺物

長原2層出土遺物(図13・15、図版30)

17は唐津焼小皿である。釉調はやや光沢があり、灰黄色である。露胎の部分は灰褐色である。17世紀以降のものである。

48は平坦な剥離面打面の剥片である。背面側にも平坦な剥離面の一部が底面として取込まれているため、板状剥片素材の石核から剥離されたことが考えられる。しかし、背面上部の2面の剥離面は主剥離面と同一打面・同一方向の剥離面であるが、下部の剥離面は左図左方向からの剥離面で、連続した有底剥片剥離を行っていた状況ではない。一ケ塚古墳の墳丘を削込んだ場所から出土したため、本来は長原13層に含まれていた可能性がある。

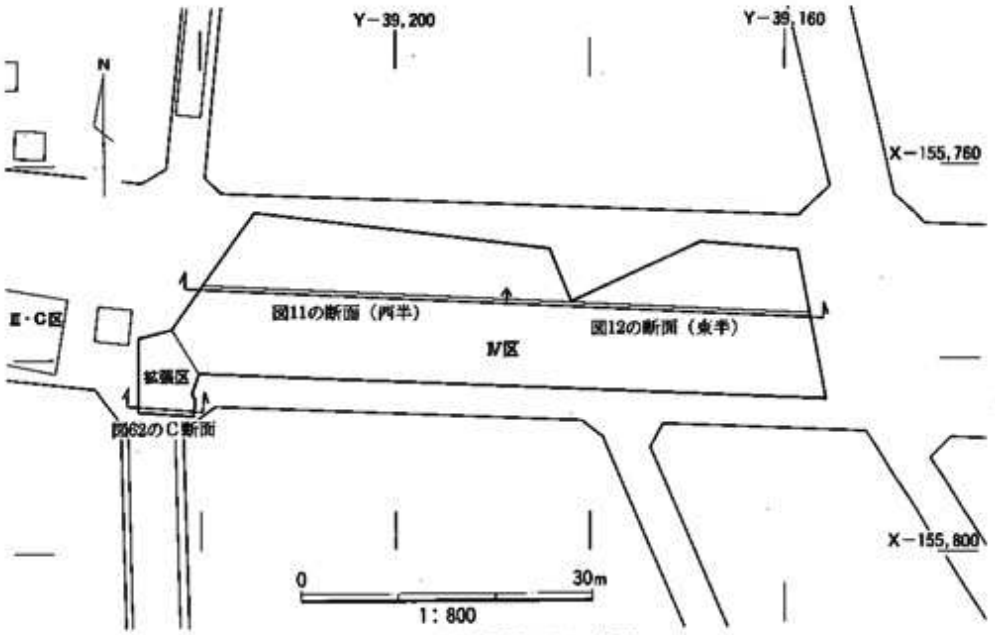


図10　Ⅳ区地層断面図の位置

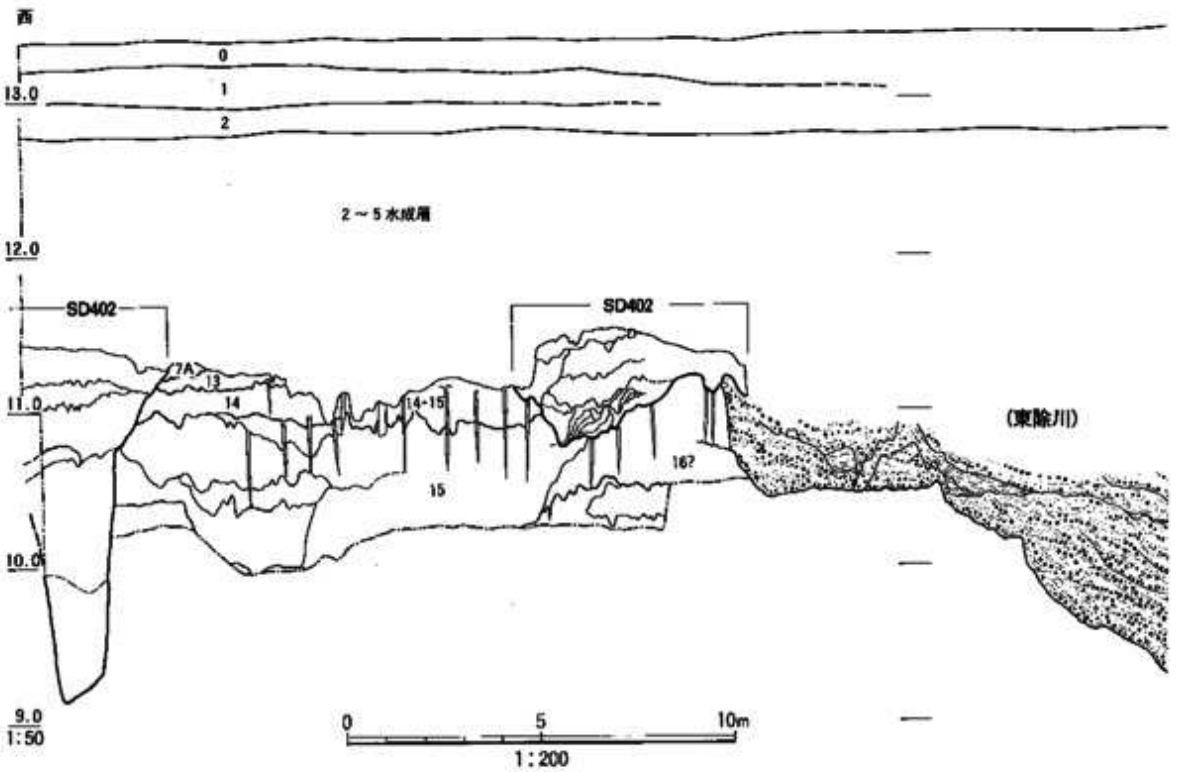


図11　Ⅳ区地層断面（西半）

長原3層出土遺物(図13・15、図版31)

18・19は瓦器小皿である。18は口縁部と底部の間に明確な稜がある。19は内面のユビオサエが顕著である。14世紀のものである。

47は原面が残存し、礫の縁辺が残る石核である。原面には当り傷がほとんど見られない。右図左側縁の大きな剥離面を打面として左図右側縁の数枚の剥離面が形成されているが、うち1面は大きな面で目的的剥片の剥離を意図したものの可能性がある。その後、左図左下と右図右上の剥離面が形成されるが、どちらも石核を折り取るような剥離面で、目的的剥片の採取ではなく、石核の分割に係わるようなものであろうか。一ケ塚古墳の墳丘を削込んだ場所から出土したため、本来は長原13層に含まれていた可能性がある。

長原4層出土遺物(図13・15、図版30)

20は土師器皿である。黄橙色で口縁に一段のヨコナデを施す。9～10世紀のものである。27は土師器鉢である。口縁部は外反し、底部外面を横方向に削っている。10世紀ごろのものである。32・34は古墳時代の須恵器器台である。32は筒部の下部で、突帯が剥離した痕

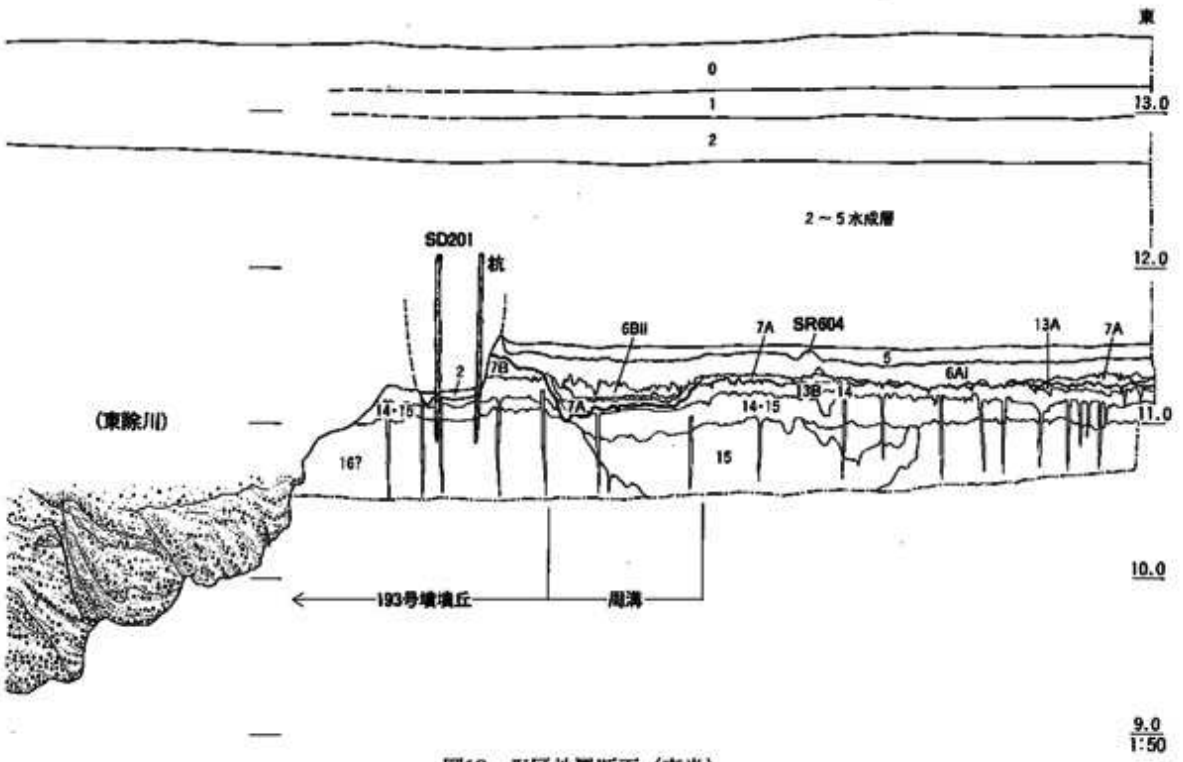


図12　Ⅳ区地層断面（東半）

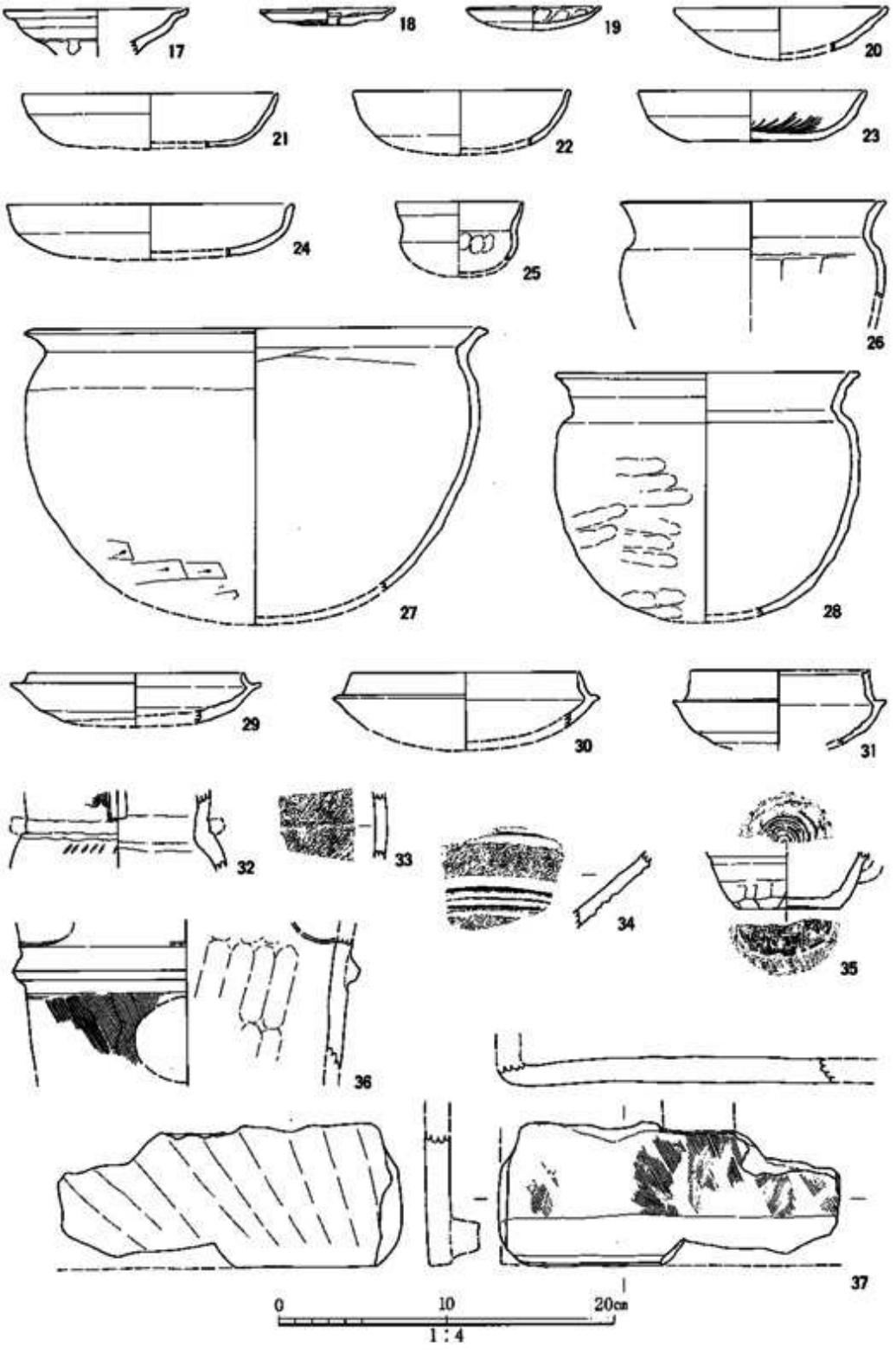


図13　各層出土の遺物（土器・埴輪）

跡がある。34は杯部の細片である。

49は剥離面打面の剥片である。右図の打面左側から左側縁にかけて原面が取込まれている。背面上部は主剥離面と同一打面・同一方向の剥離面であるが、下部は先行して下方から形成された2面の剥離面がある。右図の主剥離面の右側縁上部と下部には細部調整が認められるが、その間が折れて欠失しているため細部調整の全体の状況は不明である。51は剥離面打面の剥片である。背面には同一打面・同一方向の剥離面が見られるが、その下部には先行する下方からの剥離面や平坦な剥離面の一部などが取込まれている。49・51はともに一ケ塚古墳の墳丘を削込んだ場所から出土したため、本来は長原13層に含まれていた可能性がある。

長原5層出土遺物(図13、図版30)

21～24は土師器杯である。23は内底面にのみ粗い放射状暗文があることから、平城宮Ⅰに相当する。21・22・24は内外面とも暗文はなく、ていねいなヨコナデで仕上げる。奈良時代のものである。25は土師器小壺である。奈良時代のものである。26・28は土師器甕である。口縁部は外反し、上端に平坦面を作る。26は体部内面を横方向に削っている。28は体部外面のユビオサエが顕著である。平城宮Ⅵに相当する。

長原6A層出土遺物(図13、図版30)

30はTK43型式の須恵器杯身である。33は須恵器壺の体部細片である。縄蓆文を施したのち横方向のナデがある。35は須恵器把手付椀である。底部内面に同心円文の当て具痕がある。底部外面は細かいヘラケズリで調整している。37は家形埴輪の壁面下部である。上部に窓の下辺が残る。下部の凸帯は欠損している。

36は円筒埴輪である。タガを挟んで上下に2方向の円形スカシ孔がある。スカシの穿孔方向は変則的である。6世紀前半のものと考えられる。

長原6B層出土遺物(図13・14・15、図版30・31)

29・31は須恵器杯身である。29はTK209型式、31はTK47型式に相当する。31は有蓋高杯の可能性がある。

38～40はサヌカイトの石鏃である。38は凸基無茎式石鏃で、平面形が幅広の木葉形を呈する。このことからG－1類に分類される。当類は長原9

表3　各層出土の遺物

地区	地層	遺物番号
Ⅰ区	長原2	48
	長原3	47
	長原4	49・51
Ⅱ区	長原3	18・19
	長原4	20
	長原6A	30
Ⅲ区	長原2	17
	長原4	27・32・34
	長原5	21～26・28
	長原6A	33・35～37
	長原6B	29・31・38～40・43～46
	長原12	41
	80号墳盛土	42
Ⅳ区	長原13	50・52

A～8B層からの出土例があるが、その中では小型である。切っ先角は42°である。39は凹基無茎式石鏃である。平面形は正三角形に近く、逆刺の先端が尖る。このことからA－1類に分類される。当類は長原12／13～12B・C層からの出土例がある。切っ先の先端に古い折れ面がある。切っ先角は45°である。40は凹基無茎式石鏃である。平面形は正三角形に近く、逆刺の先端が尖る。このことからA－1類に分類される。当類は長原12／13～12B・C層からの出土例がある。小型の石鏃で、基部の抉りはやや深い。切っ先角は46°である。43は平面形が三角形となる石匙である。素材剥片の剥離面は残っていないが、柄部の先端に原面が残っている。左図の左側縁は調査時に欠損しているが、同右側縁で見ると直線的に仕上げられている。細部調整の剥離面は大きく、基部の抉りも大きな剥離面で作られている。刃部は側縁のあとに調整され、中央が図の下に向って緩やかに張出すように作られている。左図ではおおよそ左から右へ調整が進行し、右図ではその逆方向である。44は背面に原面

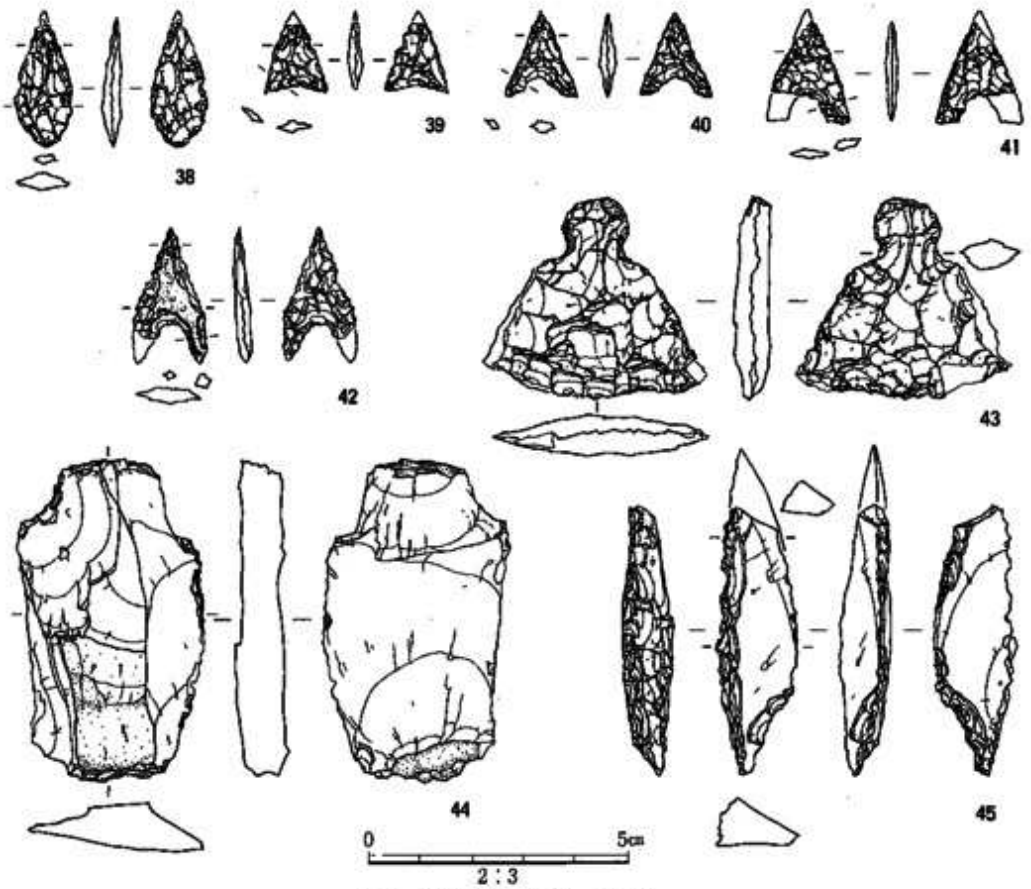


図14　各層出土の遺物（石器）

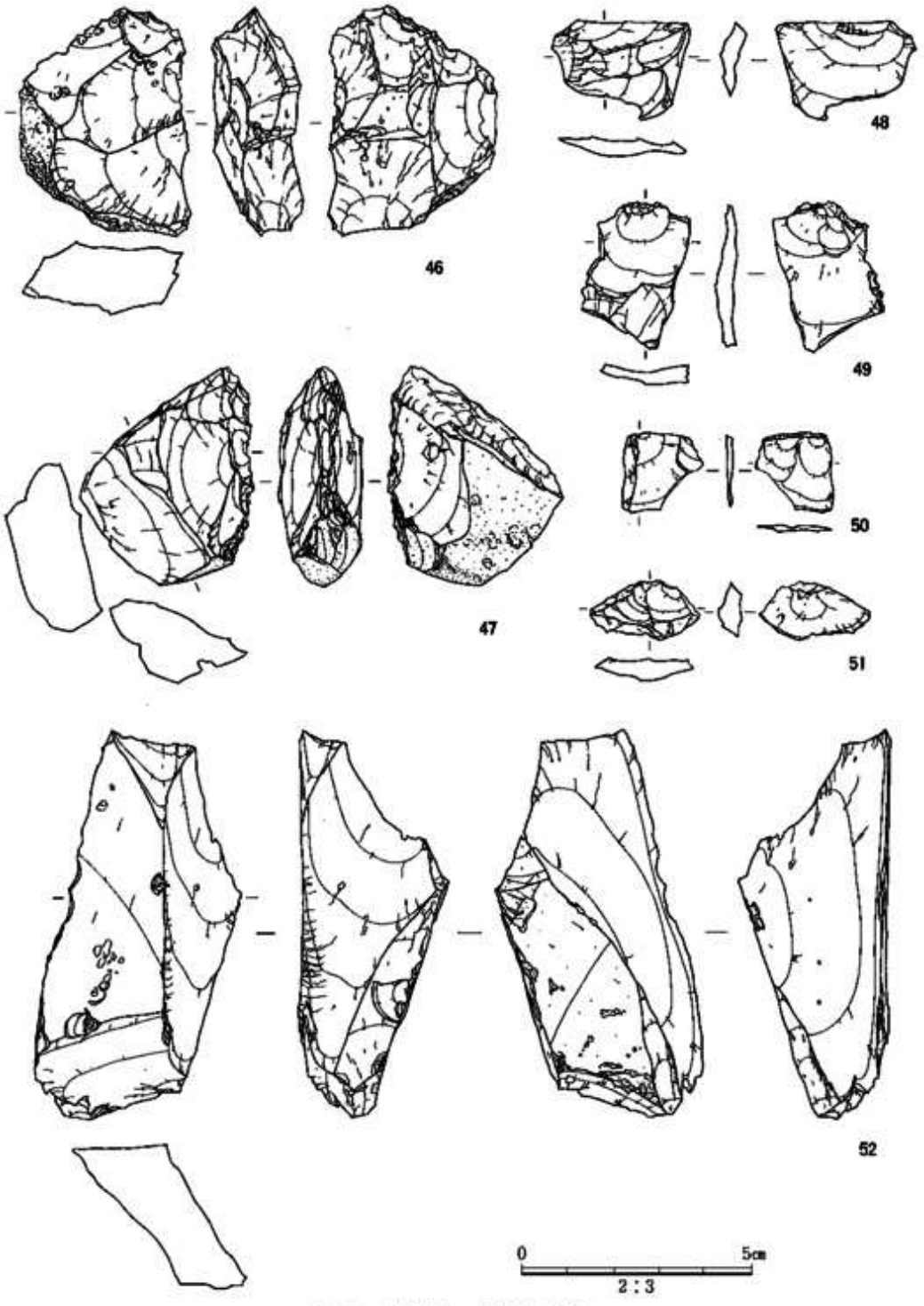


図15　各層出土の遺物（石器）

が残る剥片である。原面に当り傷がほとんど見られないため、母岩は石材原産地から採取された可能性がある。主剥離面は図の上下両方向から同時に加撃されて形成されている。どちらの打面も原面であるが、打痕は不明瞭でリング、フィッシャーも収束しない。なお、剥片の縁辺に微細な剥離面が見られ、特に左図の右側縁下3／4と左側縁上1／4ほどの範囲に顕著である。これらの剥離面はおもに主剥離面側から背面側に向って形成されたもので、使用痕と考えられる。45は横形の有底剥片を素材とした二側縁調整を施こすナイフ形石器である。先端は折れている。背部の調整は主剥離面側から底面側へ向けて行われたものが主であるが、中央から基部にいたる範囲では逆方向の調整が行われており、対向調整である。基部の刃部側では底面側と主剥離面側への両方に調整が行われており、前者が先行する。さらに、刃部の中央から先端側にかけて底面から主剥離面に向けた細部調整が行われている。素材剥片の先端がややヒンジ・フラクチャーを起しているため、刃を付けるために行われたものであろう。46は原面が残存し、礫の縁辺が残る石核である。左図では右方向からの加撃によるやや大きな剥離面が3面並び、右図ではそれらに後続する剥片剥離が石核の周縁から行われている。石核がもともと剥片を素材としたものかは明らかではない。43・44は縄文時代、45・46は旧石器時代のものと考えられる。

長原12層出土遺物(図14、図版31)

41は凹基無茎式石鏃である。平面形が正三角形に近く、逆刺が平らになる。このことからA－2類に分類される。当類は長原12／13～12B・C層からの出土例がある。作用部側縁が鋸歯縁となり、基部の抉りが深い。切っ先角は46°である。

長原13層出土遺物(図15、図版31)

50・52は長原193号墳の周辺に残る長原13層から出土した旧石器時代の剥片である。50は原面上打面で、背面の剥離面もすべて同一打面・同一方向である。主剥離面はツイン・バルブである。52も原面上打面である。原面に当り傷がなく、母岩は原産地で採取されたものと思われる。背面には主剥離面と同様に原面を打面とする大きな剥離面があり(左から2番目の図)、石核の整形を挟みながら母岩を大型の剥片に分割する意図がうかがえる。

長原80号墳盛土層出土遺物(図14、図版31)

42は凹基無茎式石鏃である。作用部側縁が直線的に調整され、平面形は縦長の二等辺三角形に近い形となる。逆刺が一部欠損するため明確でないが、体部の最大幅は逆刺の先端部分ではなく、体部中位のやや下方にあると推測される。すると、[大阪市文化財協会1995]に報告するAE373に類似する形態をとると思われ、B－1類に分類される。AE373は長原

12／13層から出土したものである。古墳の盛土層は長原７～13層構成物の客土からなるため、42は形態から見て本来は長原12／13層に含まれていたものであろう。作用部側縁が鋸歯縁となり、基部の抉りが深い。作用部側縁の一方が欠損するため切っ先角は不明である。

3）旧石器時代の遺構と遺物

i）土壙と石器遺物

SK1301（図16・17・18、図版５・32）

Ｉ区の中央部で長原13層を掘削中に検出した土壙である。平面形は東西1.0m、南北0.6mの楕円形である。深さは0.3mで、底はやや平坦である。埋土は最下部に砂質シルトが堆積し、その上に３㎜大の炭を多く含んだ厚さ約３㎝の焼土層がある。焼土は土壙壁面の中ほどまで貼付いており、壁面はそれに沿って焼けて赤褐色に変色している。焼土の上の埋土は２層に分かれ、それぞれ少量の炭を含んでいた。焼土層の直上からサヌカイト製の剥片59・63（図19）が見つかった。

土壙の周辺からは14個の石器遺物が出土した。これらは標高TP+11.5m前後の長原13層中に含まれることから、SK1301と同時期に形成された石器群と考えられる。これらは一ケ塚古墳の盛土によって保存されていた地層部分のみから出土しており、また出土位置の状況から考えても、もとの分布範囲はさらに北側に拡がっていたようである。つまり、一ケ

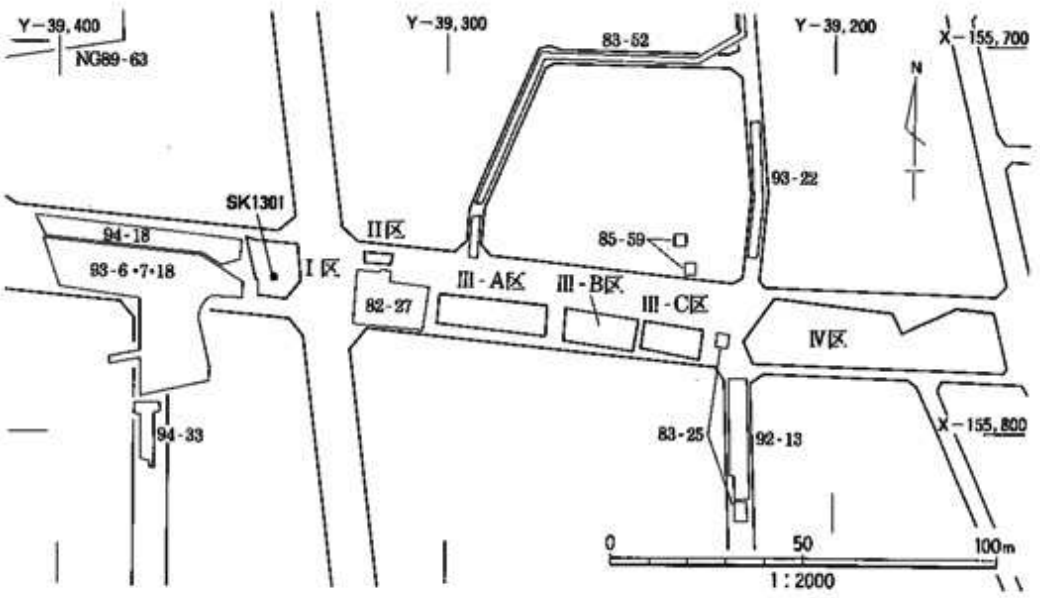


図16　長原遺跡西南・南地区旧石器時代の遺構の配置

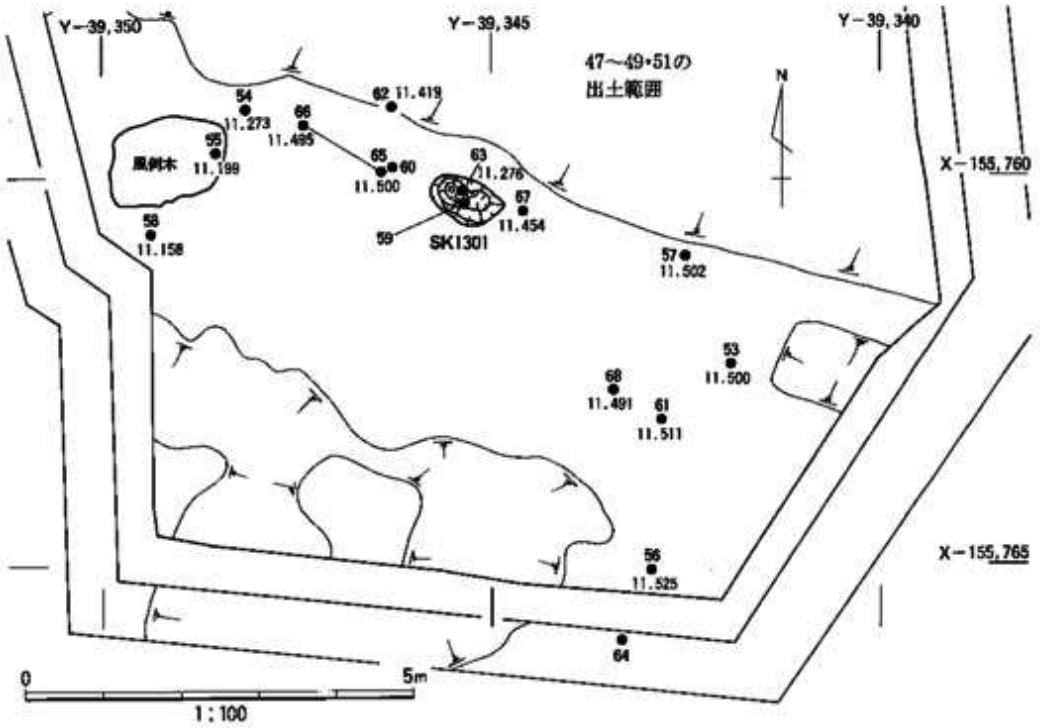


図17　Ⅰ区SK1301と石器遺物の出土位置（数字は遺物番号とTP値）

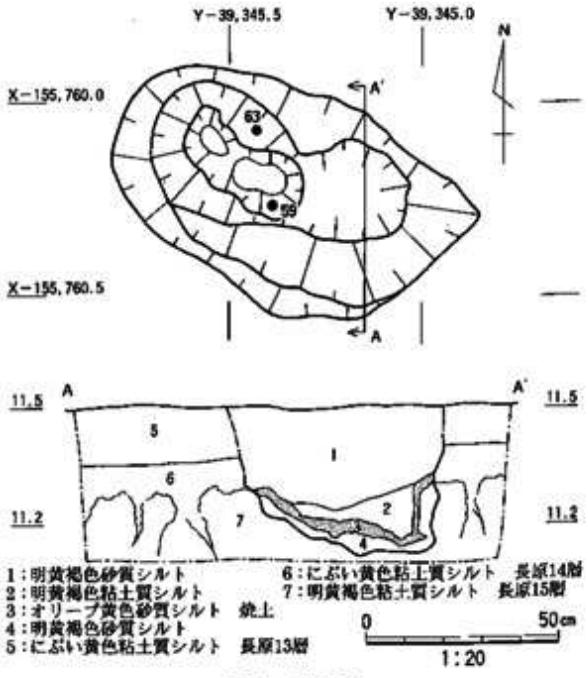


図18　SK1301

塚古墳を削込んで耕作した長原２～４層中から見つかった47～49・51(図15)も本来はこの一群に含まれるものと考えられる。

なお、SK1301は長原12層掘削中には見えず、長原13層掘削途中に輪郭が現れたために確実な掘込み面をおさえることができなかった。ここでは長原13層層準の遺構としたが、長原12層下面の縄文時代中期の遺構である可能性がある。

遺物は赤色のチャート製の67を除いてすべてサヌカイト製である。以下は種類ごとに述べる。

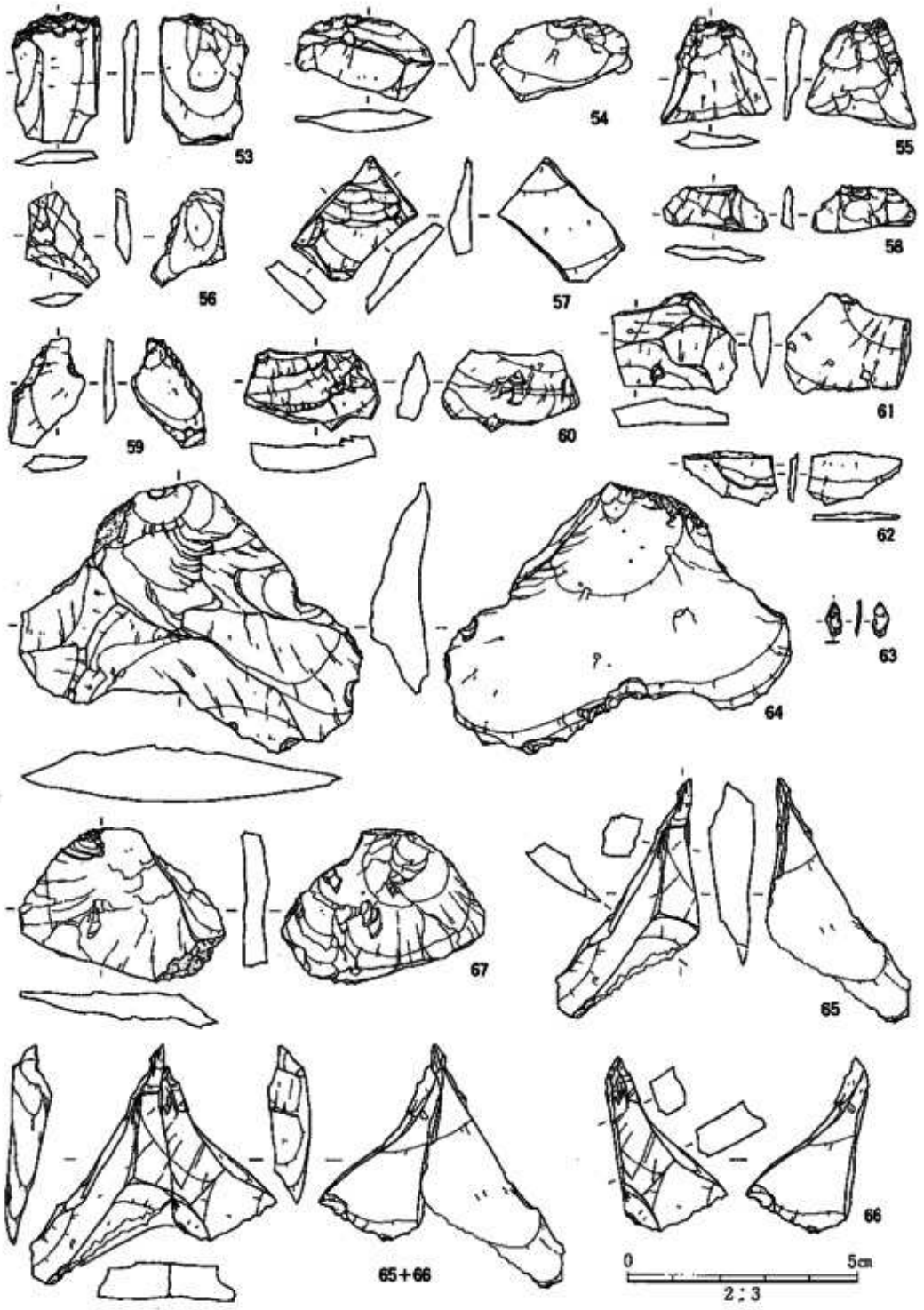


図19　SK1301周辺出土の石器遺物

剥片(図19、図版32)

53は薄い剥片である。先端を欠損する。打面は点状打面である。54は剥離面打面の横形剥片である。55は原面上打面の剥片である。剥離時の同時折れで先端部を欠損する。56は打面形態は新しい欠損のため不明である。57・60・61は周囲が折れによって欠損しているため、原形は不明である。主剥離面はリングのようすから比較的大きく拡がっていたことがわかる。58・59は点状打面の剥片である。先端は折れている。62は薄い剥片の先端付近である。打点部、先端とも折れている。63は点状打面の微細な剥片である。64は原面上打面の横形剥片である。先端には主剥離面に背面を打面とする小さな剥離がある。2次加工の可能性がある。67は赤色チャートの横形剥片である。平らな自然面を打面としている。先端は剥離時の同時折れによって欠損する。68(図版のみ)はサヌカイトの剥片であるが、流理構造に沿って風化が著しいため、詳細は不明である。

接合資料(図19、図版32)

65・66は剥片を剥離した際に、打点から複数の縦割れが生じて4つ以上に分かれたもののうちの2つである。剥片は割れずに取れていたならば、主剥離面のリングのようすから比較的大きなものだったことがわかる。65・66ともに先端に小さな剥離が並んでいるが、新しい欠損が多いため使用痕かどうかはわからない。

これらのサヌカイトのうち、同一母岩(註1)の可能性があるのは①53・62、②54・56・57・61・64～66、③55・58～60の3種類である。

4)古墳時代の遺構と遺物

i)古墳

一ケ塚(いちがつか)古墳(長原85号墳)

遺構(図8・20～24、図版6～8)

一ケ塚古墳とは明治時代の地籍図に記された「一ケ塚」の地名から命名された古墳である。長原古墳群の西端に位置し、古墳番号では長原85号墳と呼称する(図20)。この古墳の調査は1982年(82－27次調査)に始まり、方形の造出しとその東側に巡る周濠、多数の埴輪が見つかった[大阪市文化財協会1990]。今年度の調査区Ⅰ・Ⅱ区はその西方と北方に当り、一ケ塚古墳の墳丘と北側の周濠を検出した。

墳丘は長原1～6層段階の各時代の耕作によって段状に削られているため、盛土をほとんど失っている。古墳築造時の地表面である長原7B層と盛土がわずかに残るのは、調査区

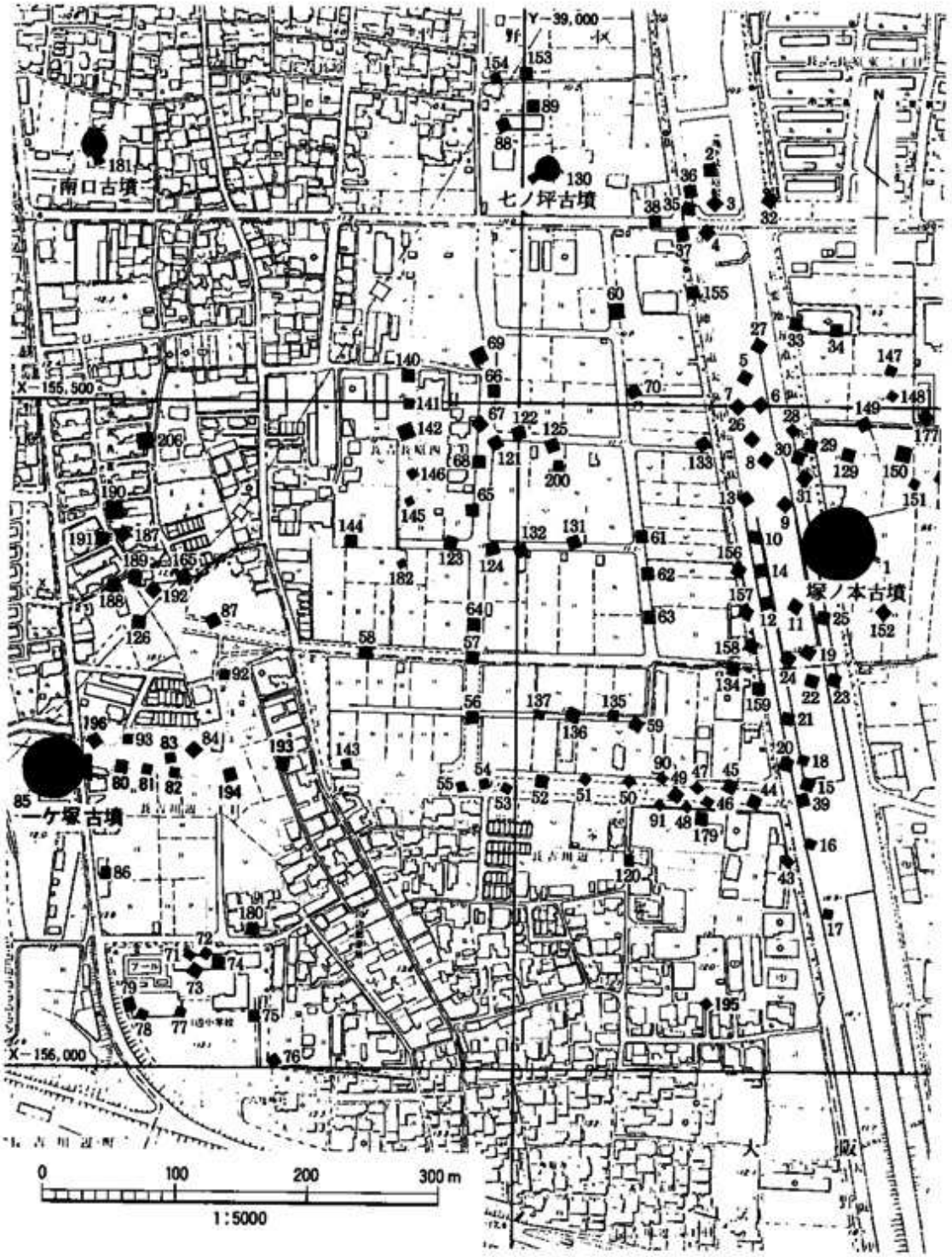


図20　長原遺跡西南・南・中央地区の古墳の分布

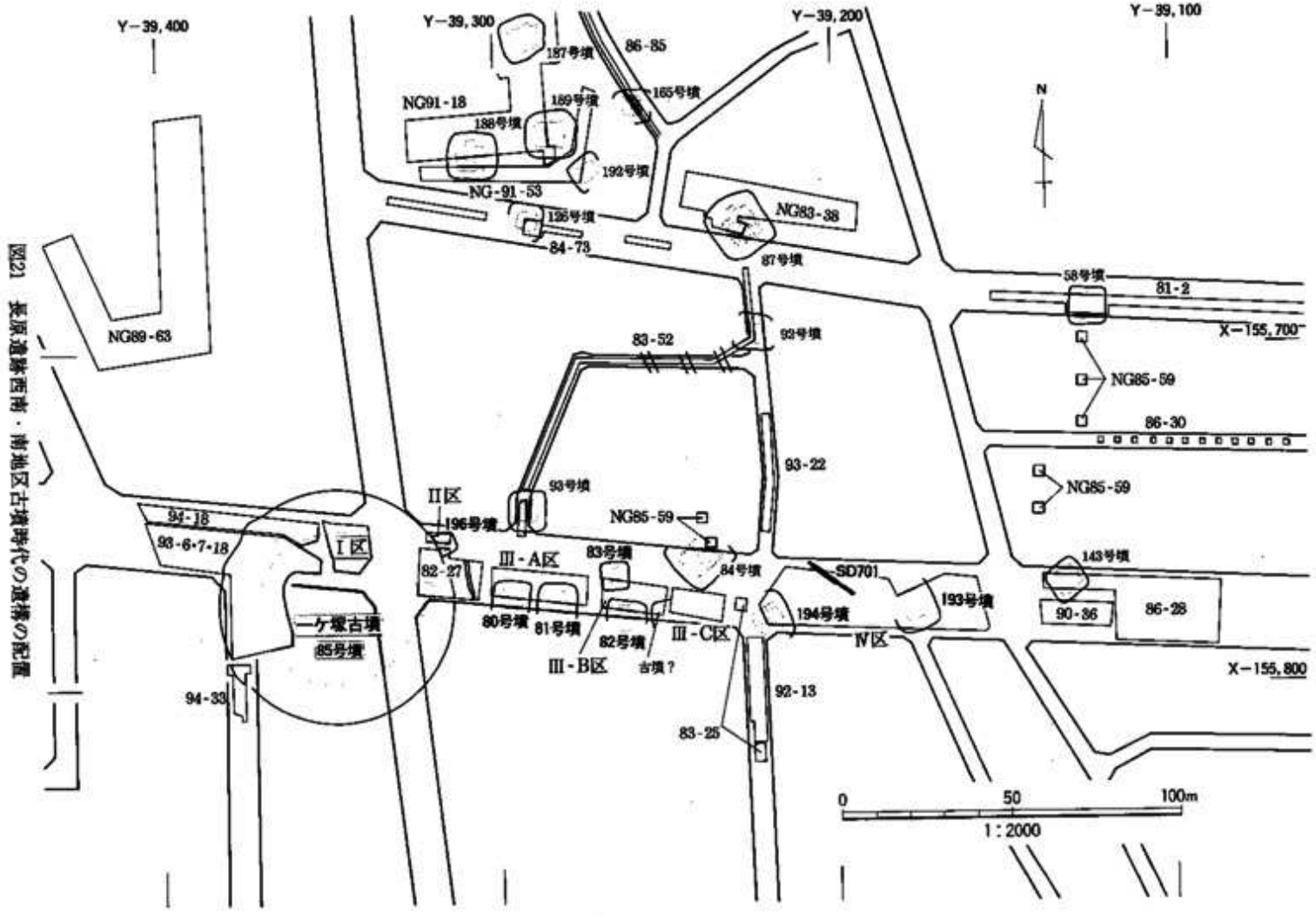


図21 東原遺跡西南・南地区古墳時代の遺構の配置

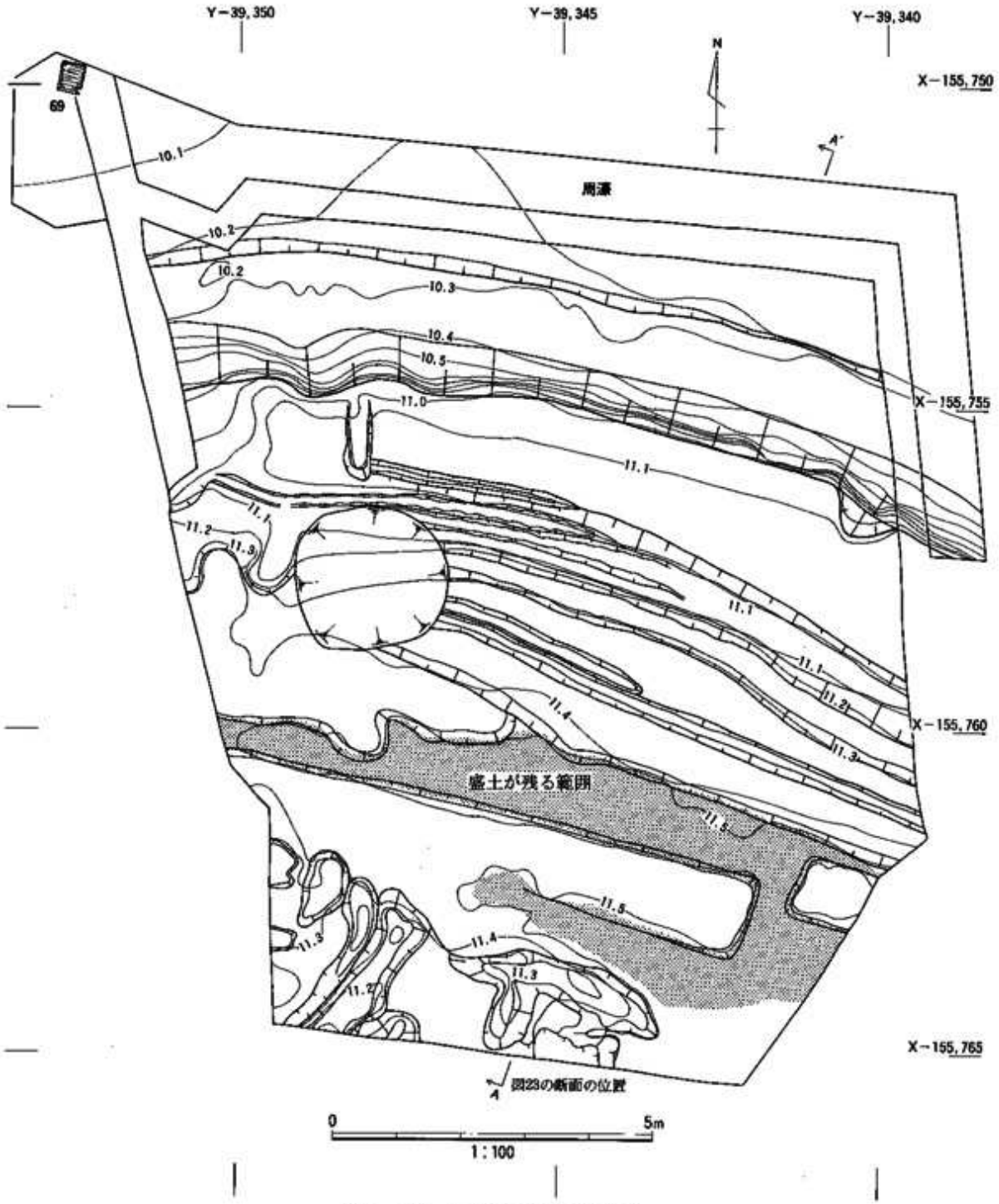


図22　Ⅰ区一ケ塚古墳（長原85号墳）

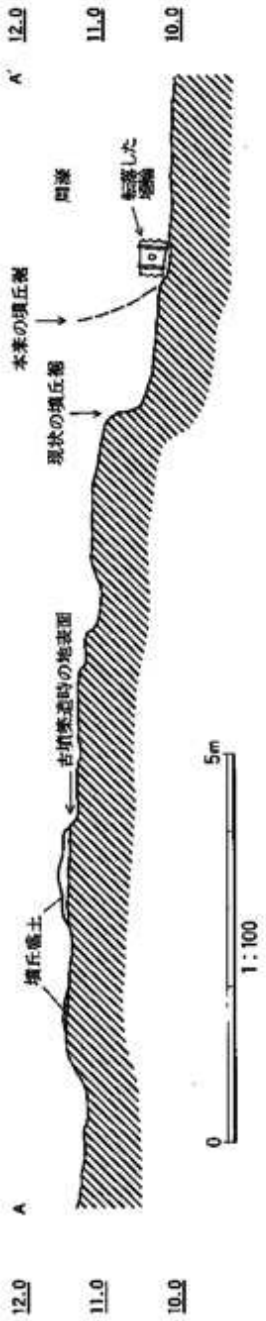


図23　一ケ塚古墳断面

の南半部分のみである。長原7B層はTP+11.5mの高さに拡がっており、上面には小さな炭化物が散在していた。墳丘の盛土は5cmほどの厚さしか残っていなかった。盛土を構成するのは硬くしまった長原7B～13層構成物のブロックで、平面でウロコ状の盛土の単位が見られた。

墳丘に対して大きな改変の手が加えられたのは長原6A層段階である。墳丘裾および周濠縁辺を幅約1.5mずつ削って水田が拡げられた。これは、今回検出した現状の墳丘裾から幅約1.5mの間に長原7A層の黒色粘土がなく、直接長原15・16層に達する長原6A層段階の踏込みがあるためである。このような現象は82－27次調査でも見られ、さらに[大阪市文化財協会1990]では造出しに樹立された円筒埴輪の位置から、本来の墳丘裾が約2m削られていると指摘している。墳丘はそれ以降も耕作によって墳丘裾の円弧に沿って削られていき、最後には墳頂部の盛土も削平されて全面に現代の水田の作土が覆うことになる。

周濠はⅠ区で幅約5m、Ⅱ区で幅約3mを検出した。長原7B層上面からの深さは1.5mである。周濠内に飛鳥～奈良時代の水田の作土である長原6層が堆積していることは82－27次調査で知られていたが、今回の調査ではその下で周濠基底の埋土を検出した。周濠基底の埋土は古墳が造られた直後に周濠内に流入した水成層である。したがって、この層の下底面が本来の周濠の底である。周濠は7A～6A層段階で水田の耕作が行われ、奈良時代の洪水による土砂である長原5層で完全に埋っている。

一ケ塚古墳の調査は1991年度以降も西側を中心に続いている。1993・1994年度の調査成果[京嶋覚・久保和士1993]も含めて以下に古墳の規模を復元しておく。

・墳丘直径　46.5m
・造出し　幅10.0m、長さ7.0m
・周濠　幅13.0m、長原7B層上面からの深さ1.5m
・周濠を含む全長　約70m

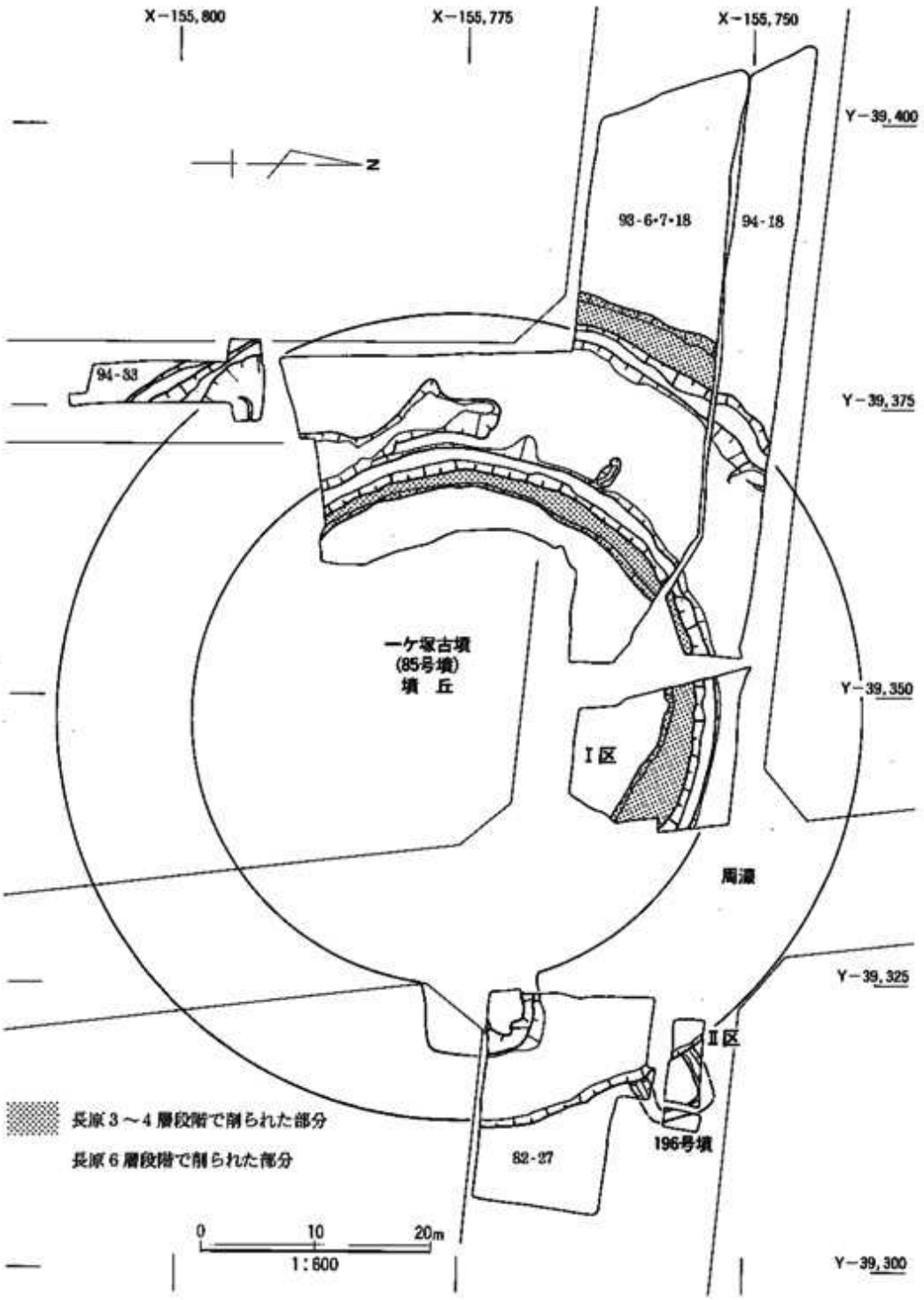


図24　一ケ塚古墳の復元

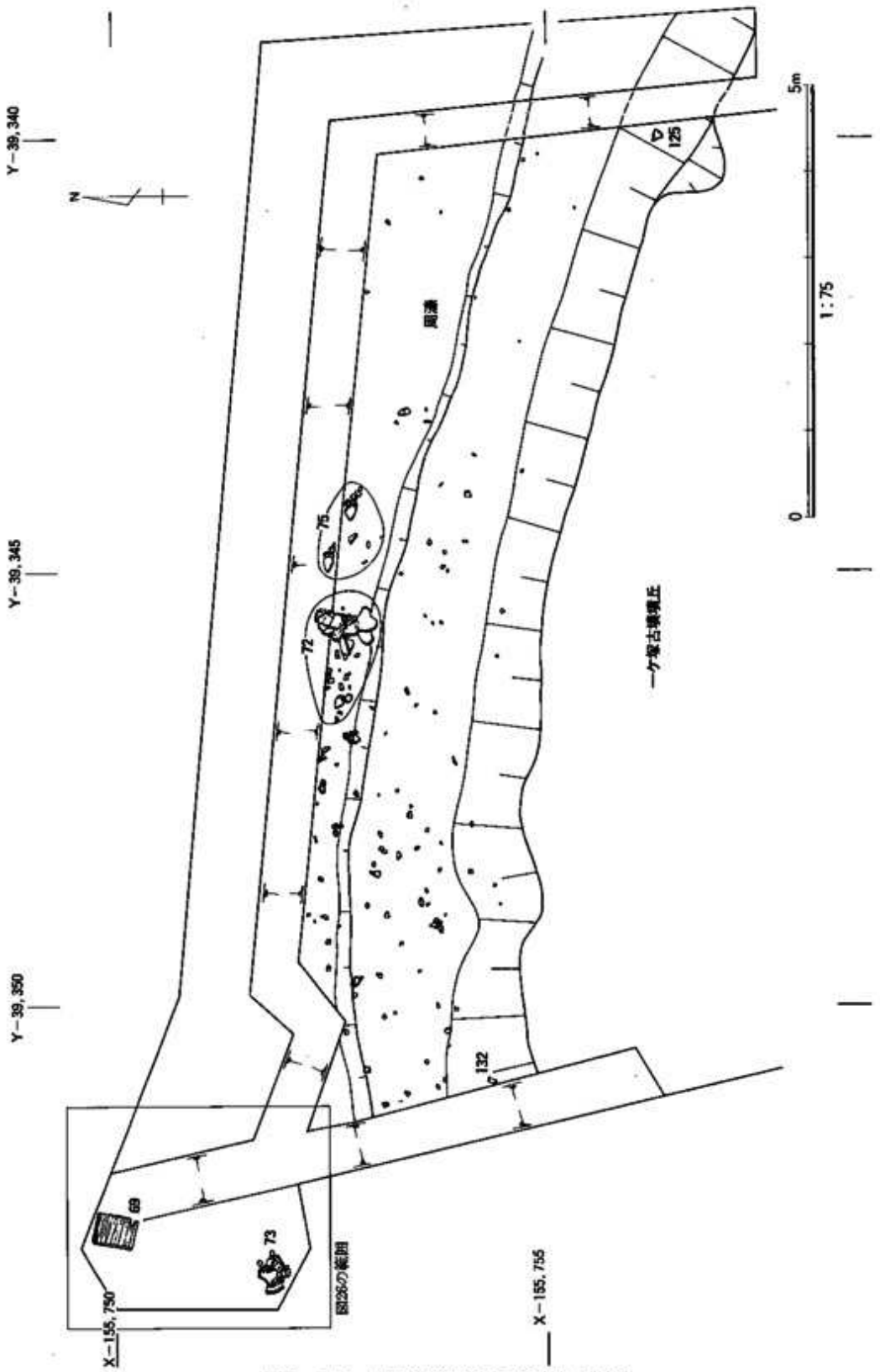


図25　Ⅰ区一ケ塚古墳周濠内の遺物出土状態

遺物出土状態(図25・26、図版7・8)

遺物はすべて周濠内から出土しており原位置を保つものはない。長原6A層の水田の作土から多量の埴輪の細片が出土した。大きな破片は周濠基底の埋土の直上から出土している。72・73・75などの円筒埴輪は本来の墳丘裾に沿って倒れていたことから、早い段階で墳丘から落下したものと思われる。このほか長原5層からは草摺形埴輪や動物形の埴輪が出土した。また、調査区北西隅の周濠内から加工痕がある板材69が出土した。

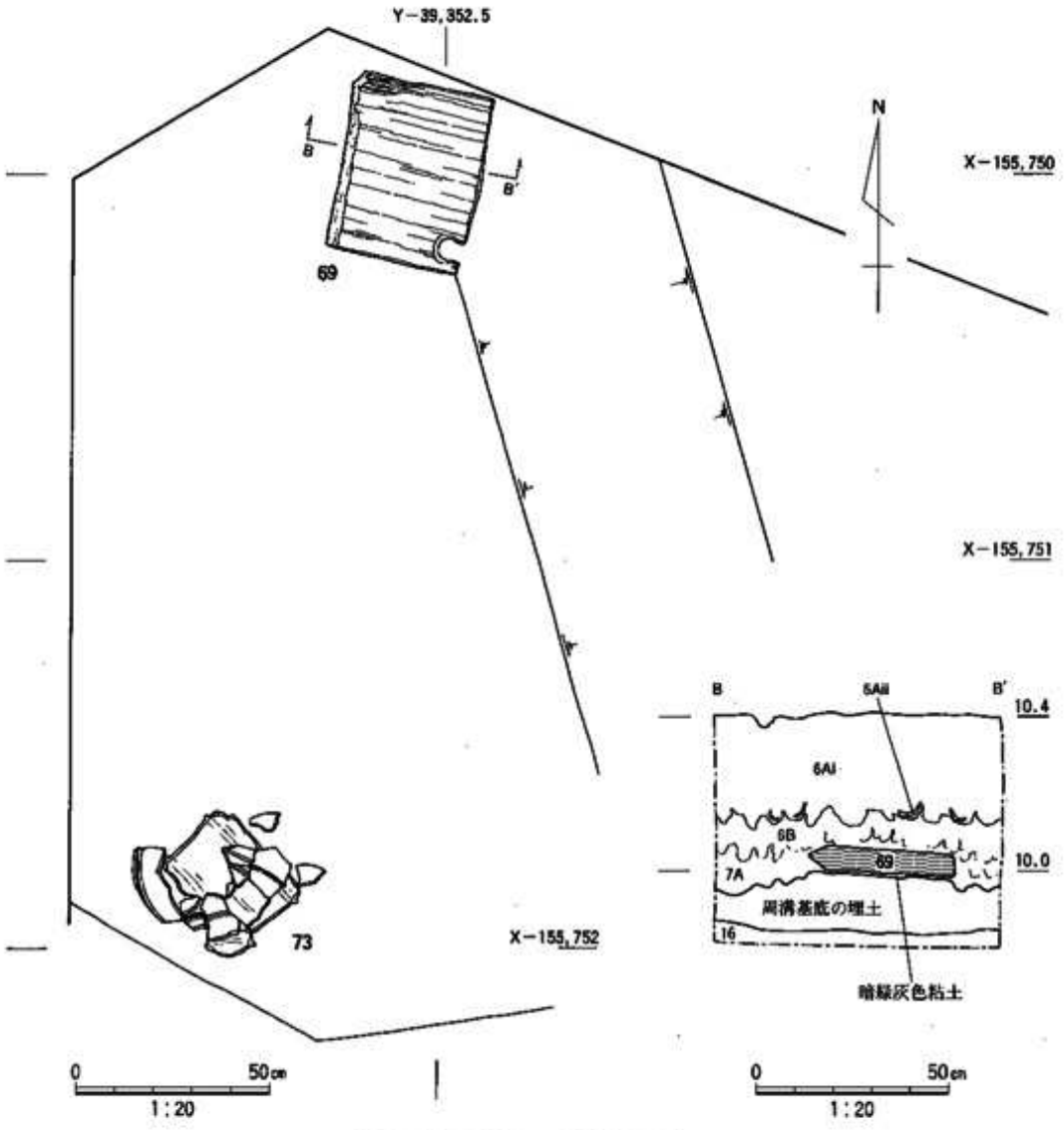


図26　加工痕がある板材出土状態

加工痕がある板材(図26・27、図版37)　69は縦37cm、横49cm、厚さ6cmのヒノキの板目材である。隅に一辺約5cmの方形の穴がある。長辺の片側と短辺は垂直に切断するが、長辺の反対側は矢板状に削られている。表裏面の加工は腐食のためわからない。

板材は周濠基底の埋土の直上に水平に乗っていた。板材の下面には周りの長原7A層の下面にあるような踏込みがないことから、長原7A層の耕作以前に周濠内にあったものとわかる。板の年代は「年輪年代測定法」の分析の結果(註2)、測定可能なもっとも外側の年輪は西暦343年である。板には表皮が残っていなかったが、それに近い部分での343年という測定値は、木が伐採された年よりも少し古いものといえる。板材が一ケ塚古墳と関係があるならば、埴輪が示す年代とも矛盾しない。

円筒埴輪(図28・29、図版33・34)　70は口縁がく字状に大きく屈曲して端部をつまみ上げ、外側にヨコナデによる面を作る。タガは高く突出して上縁と端部に強いヨコナデを行うが、下縁はヨコナデが充分でなく本体との継目が残っている。外面調整はタテハケのあと長く弱いヨコハケを施す。口縁付近には斜め方向のハケを施す。内面調整はユビナデ・ユビオサエで、上部には横あるいは斜め方向のハケを施す。スカシ孔の形はわからない。

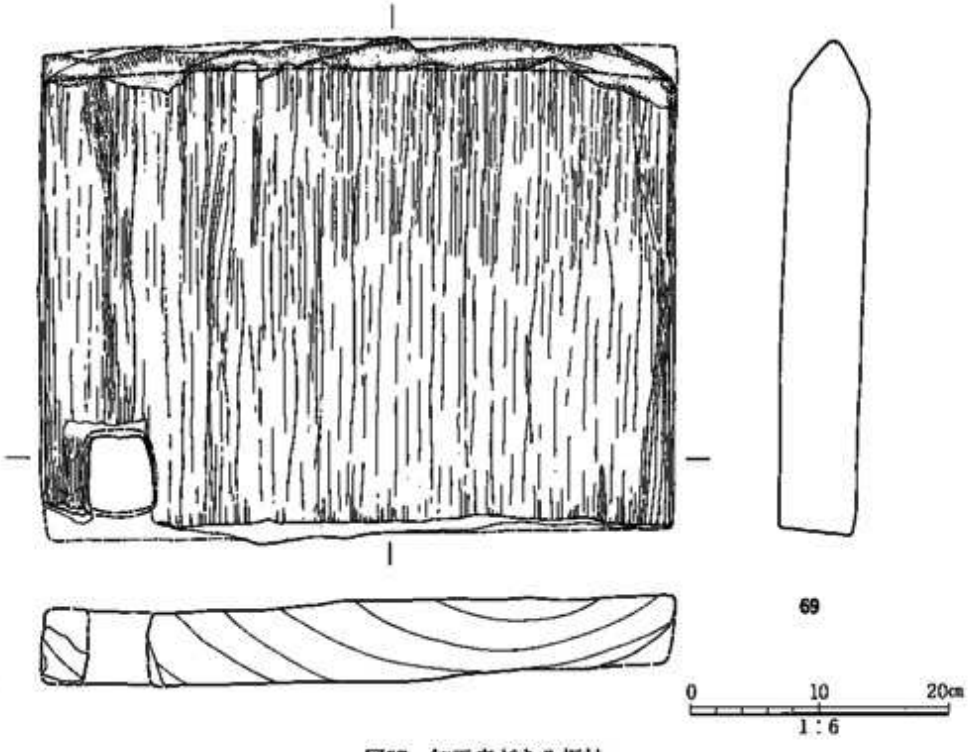


図27　加工痕がある板材

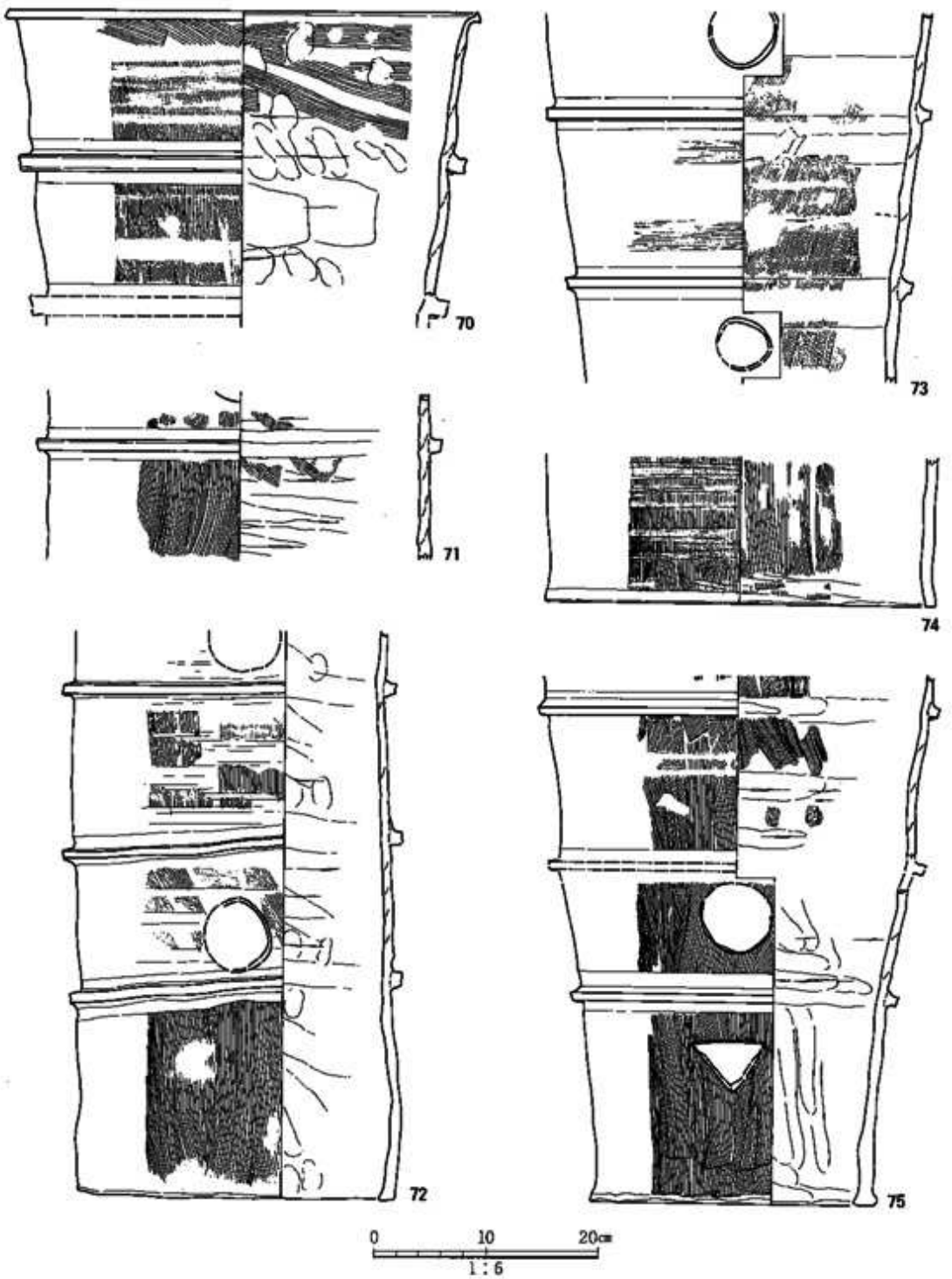


図28　一ケ塚古墳周濠内出土の円筒埴輪

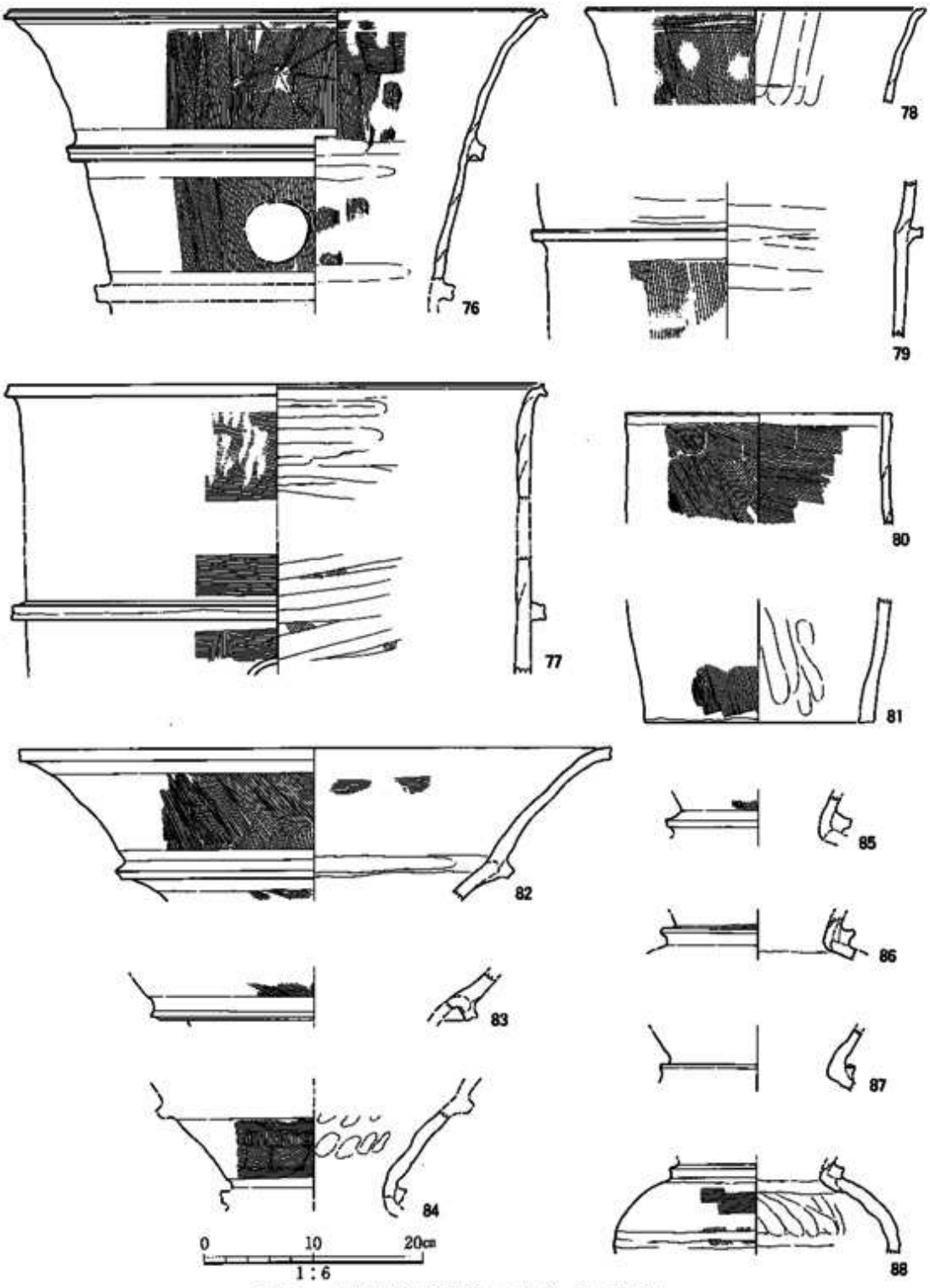


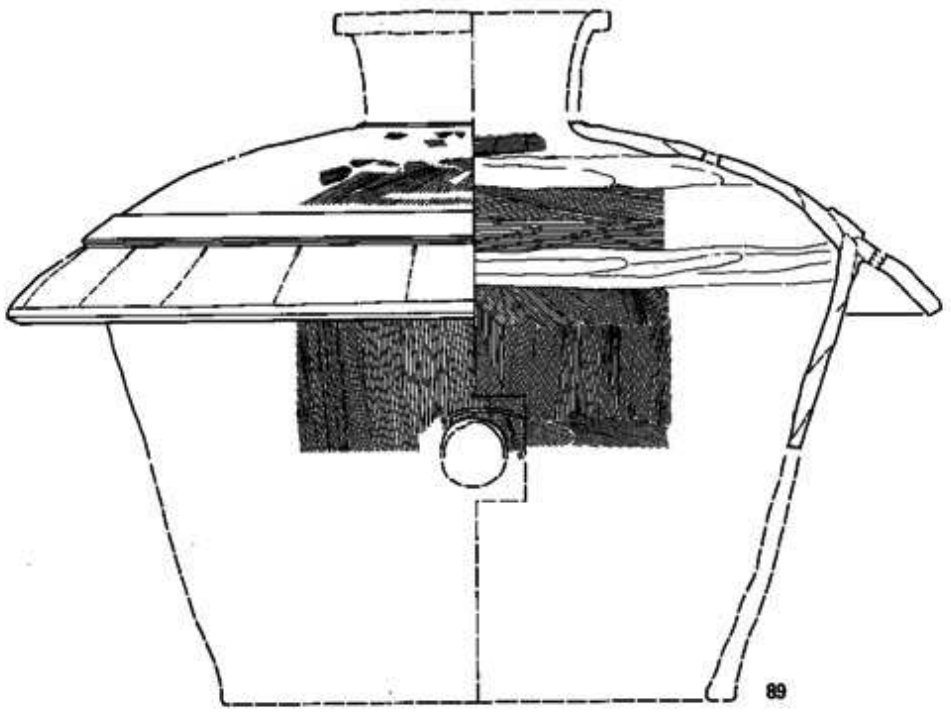
図29　一ケ塚古墳周濠内出土の円筒・朝顔形埴輪

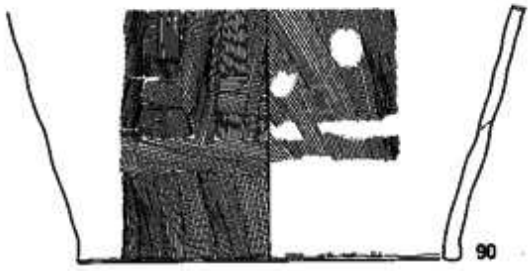
71は70と同様の調整を行い、円形スカシ孔がある。72は器体が底部から垂直に立上がり、円形スカシ孔がある。タガは高く突出し、断面は長方形に近い。外面調整はタテハケのあと長いヨコハケであるが、最下段はタテハケのみである。内面調整はユビナデ・ユビオサエである。黒斑がある。73は黒斑があり、器体は上方に向って開く。2段の円形スカシ孔がある。タガは高く突出し、断面は台形である。外面調整はナデによって消されているため、ごく弱いヨコハケが所々に残る。内面調整はタテハケのあとユビナデを行う。74は最下段の部分である。外面調整はタテハケのあと長いヨコハケを行う。内面調整はタテハケのあと底部にユビナデを行う。75は器体が上方に向って拡がる。最下段と下から2段目にそれぞれ逆三角形あるいは円形のスカシ孔がある。タガは高く突出し、断面は台形である。外面調整はタテハケのあと長く弱いヨコハケを施すが、最下段と2段目はタテハケのみを行う。内面調整は主としてユビナデで、3段目以上にタテハケを行う。76は器体が大きく上方に開き、口縁部がラッパ状に開く。端部はヨコナデで上下に拡張している。タガは高く突出する。最上段には小穴を中心とした放射状の線刻があり、その下にはタガを挟んで円形スカシ孔がある。外面調整はタテハケのみで、内面調整はタテハケのあとユビナデし、口縁部付近にヨコハケを施す。77は黒斑があり、ほかと比べて大型で器壁も厚く、異なった様相を呈する円筒埴輪である。口縁部はく字状に大きく屈曲し、端部を上下に拡張して外側に面を作る。タガは高く突出して端部の外側に面を作るが、上下縁ともヨコナデが不充分で本体との継目が顕著である。78・80・81は小型の円筒埴輪である。78は器体が上方に開き、端部は面を作らない。外面調整はタテハケのあと口縁部付近にヨコハケを行う。内面調整はユビナデのみである。80は器体が垂直で、口縁部も直口である。外面調整はタテハケのあと口縁部付近に短い斜め方向のハケを行う。内面調整はヨコハケを行う。81は外面にタテハケを、内面にユビナデを行う。79は高く突出した細いタガをもつ。

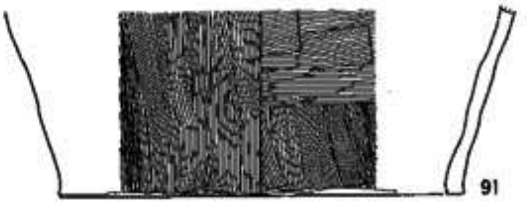
朝顔形埴輪(図29、図版34)　一ケ塚古墳では過去の調査で朝顔形埴輪と壺形埴輪が見つかっているが、今回は鍔の部分が見当らないため、すべて朝顔形埴輪として報告する。

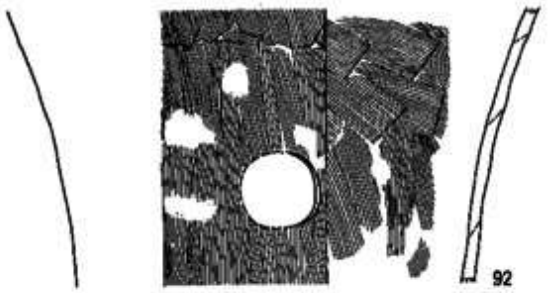
82～84は口頸部である。外面調整はタテハケで、84には頸部に長いタテハケと断続的なヨコハケを行う。85～88は頸部および肩部である。87のタガは細く、断面は三角形に近い。82・83・88に赤色顔料が残る。

衣蓋形埴輪(図30・31、図版34・35)　89～92は蓋部である。89は笠部の直径が70cmを越える大型品である。笠部の外面はタテハケのあとユビナデし、内面はヨコハケのあとユビナデを行う。円筒部は底部に向って急にすぼまり、中ほどに直径5cmの円形スカシ孔があ









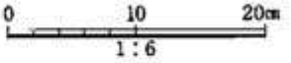


図30　一ケ塚古墳周濠内出土の形象埴輪（衣蓋形蓋部）

る。スカシ孔の回りには2方向の線刻がある。調整は外面がタテハケ、内面がタテハケのあと短いヨコハケを行う。笠部と円筒部の継目の外面には粘土を充填してナデている。笠部に赤色顔料が残り、黒斑がある。90は外面はタテハケのあとヨコハケを行い、さらに部分的にタテハケを加えている。91は黒斑がある。92は内面下部にタテハケを施したのち、上部に斜め方向のハケを行う。93～102は立飾り部で、両面に線刻がある。93は中心の十字部分である。94・95・98・102にはハケがあり、93・94・98に赤色顔料が残る。

盾形埴輪(図32、図版35)　103～107・114・115は矢羽根状の線刻があることから盾部と考えられる。108・114・115は盾部と円筒の接合部分である。110・111には通常の線刻のほ

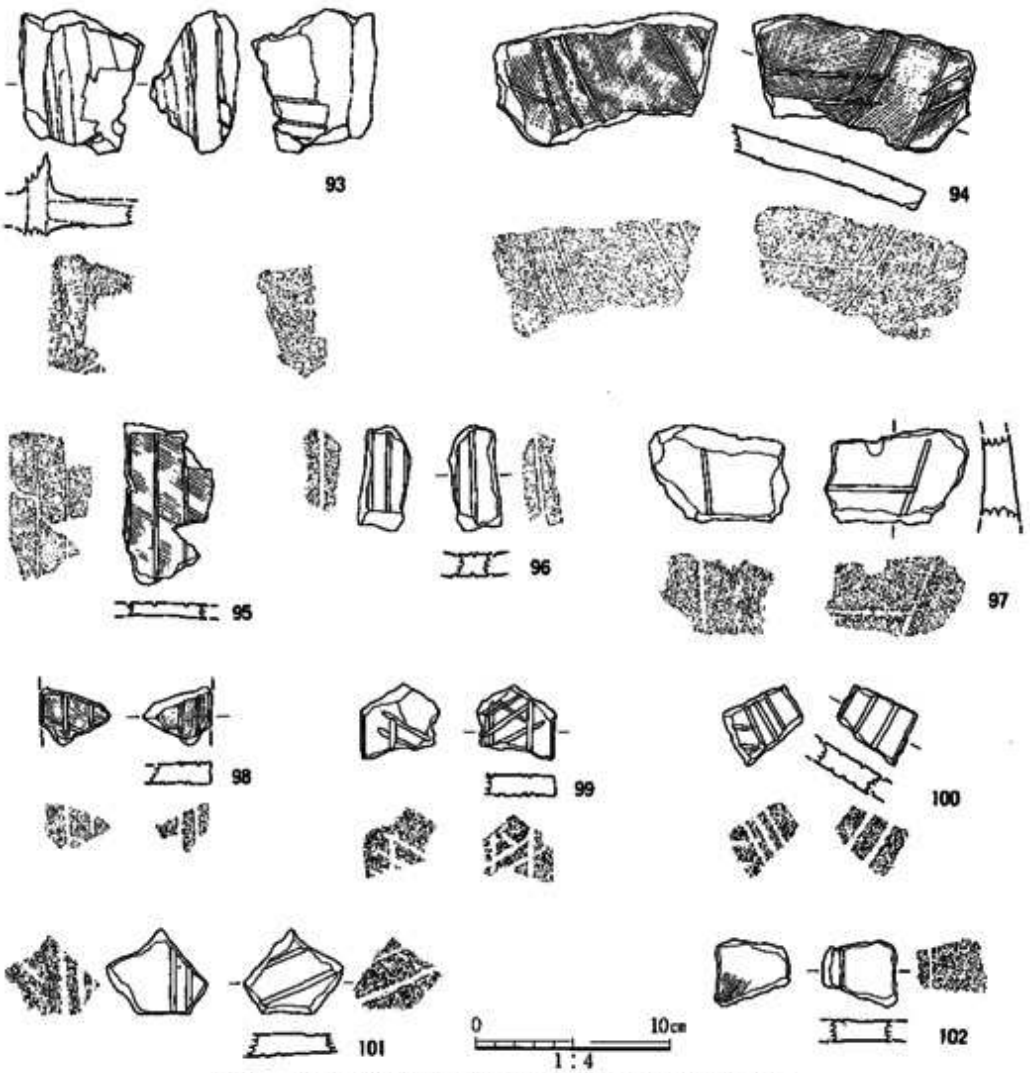


図31　一ケ塚古墳周濠内出土の形象埴輪（衣蓋形立飾り部）

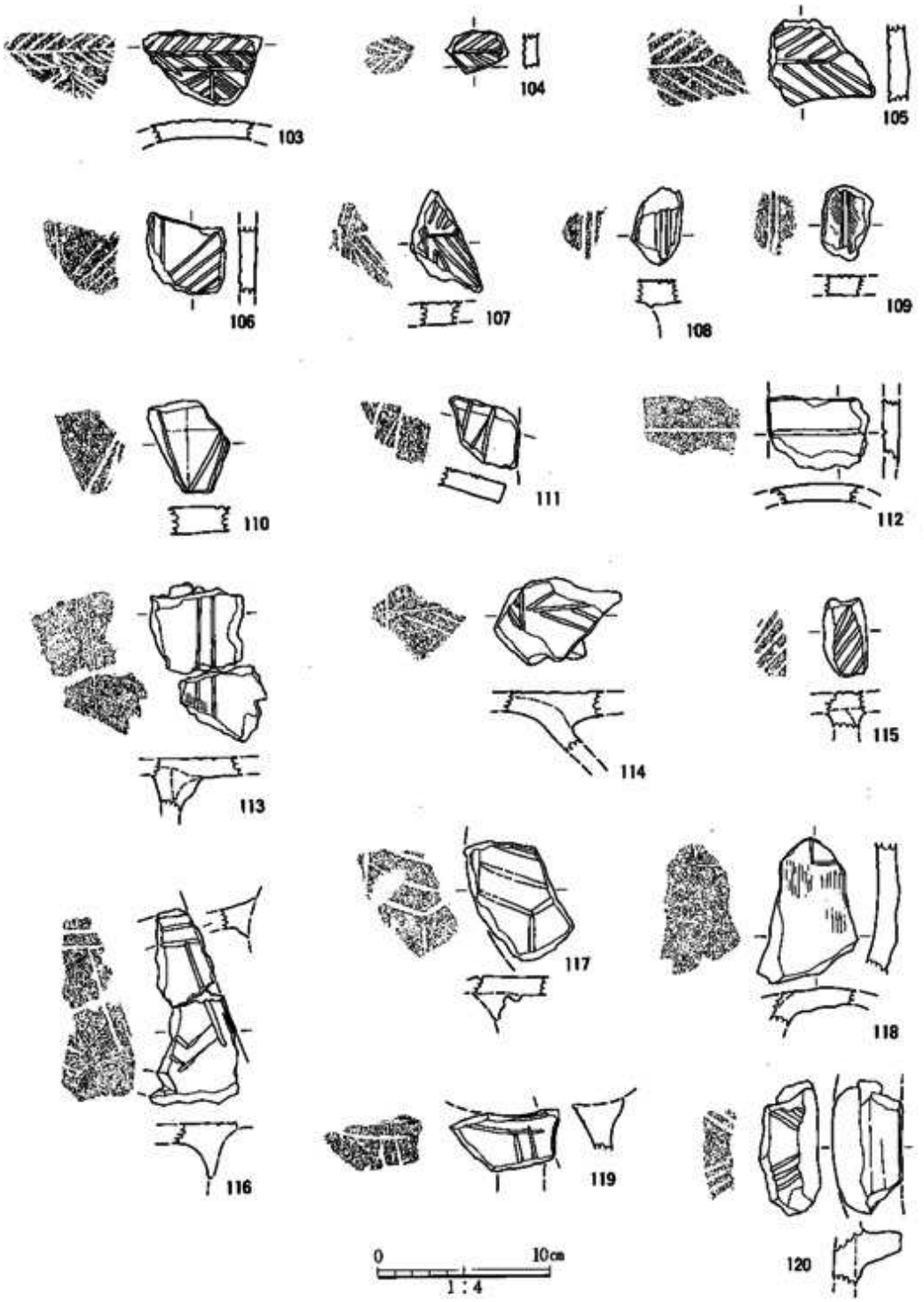


図32　一ケ塚古墳周濠内出土の形象埴輪（盾形・不明）

かに割付け線とみられる細い線刻がある。109・112には平行する2条の線刻がある。109・114に赤色顔料が残る。

不明形象埴輪(図32、図版36)　113・116～120は表面に線刻があり、筒状のものに接合している部分である。何を模しているのかはわからない。

鞆形埴輪(図33、図版37)　121は舌を大きく表現した鞆形埴輪である。鞆形の胴の下半分

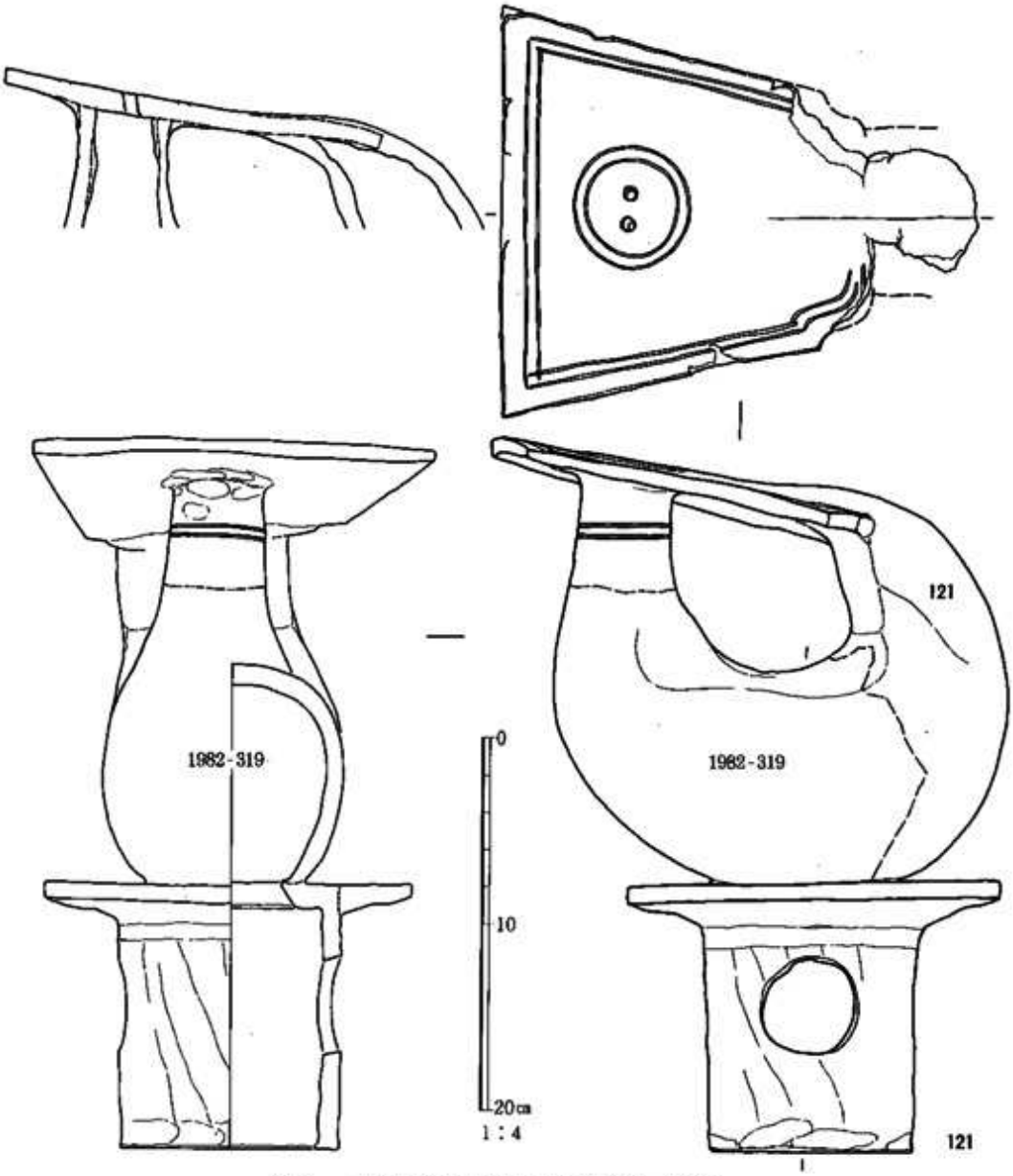


図33　一ケ塚古墳周濠内出土の形象埴輪（鞆形）

と円筒部分は、82－27次調査[大阪市文化財協会1990]で東側の周濠内から見つかった319(以下1982－319のように称する)である。本年度の調査ではⅡ区の長原196号墳北周溝内からこれに接合する上半分が見つかった。下半部が一ケ塚古墳の周濠から出土していることから一ケ塚古墳の遺物と判断した。

本体は中空で、外面をていねいにナデている。装飾や縫目を表現する線刻はないが、舌と胴との接合部の下には2重の凹線がある。舌は薄い羽子板状に表現されており、周囲に凹線による2重ないし3重の縁取りがある。胴とつながる場所の上面には2重円の凹線があり、その中央に小穴が2つある。

草摺形埴輪(図34、図版36)　125は円筒部の上に草摺部分を付けた接合部である。接合部の外面裏には厚さ2.0cm、幅2.5cmの粘土板による支えを付ける。草摺外面には革帯と刺繍

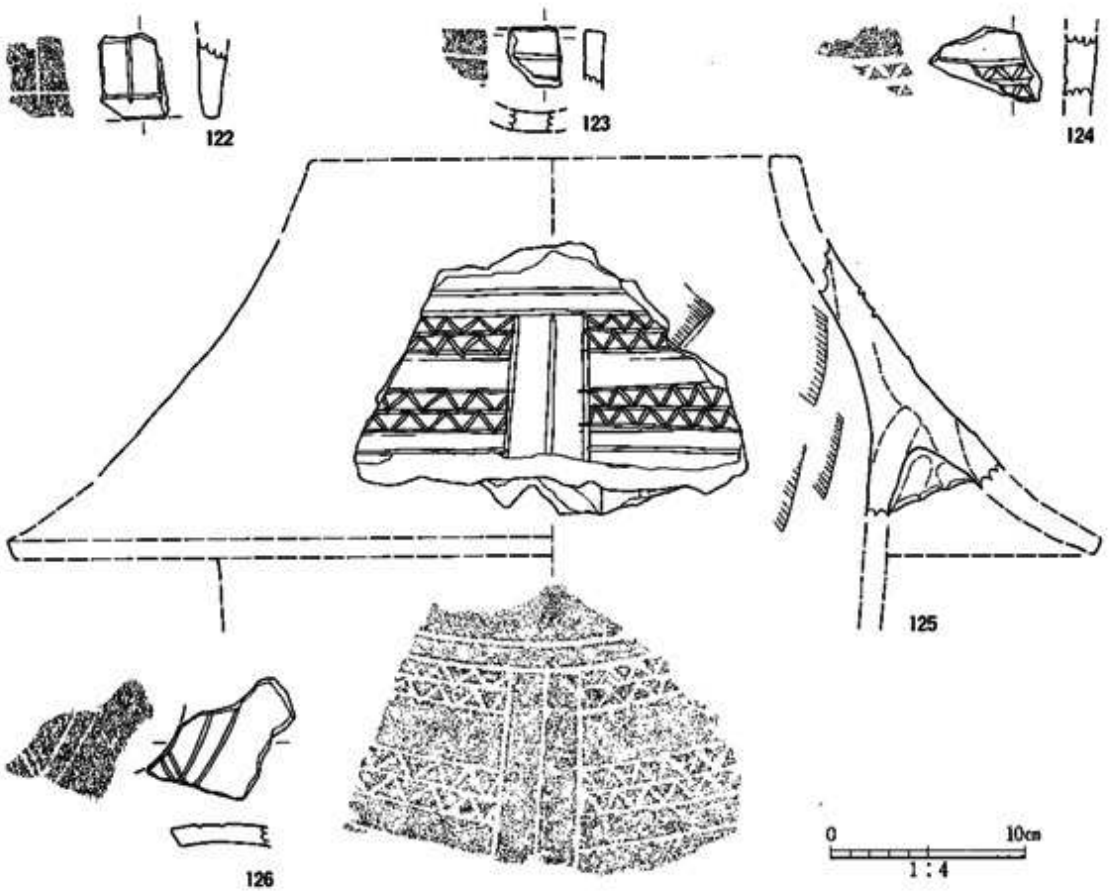


図34　一ケ塚古墳周濠内出土の形象埴輪（草摺形・短甲形）

を表す線刻の文様がある。線刻の順番は(1)無文帯を区画する横線→(2)縦3条の分割帯→(3)鋸歯文帯の横線→(4)鋸歯文である。鋸歯文はハの字を書くように左から右に施文している。鋸歯文帯は2条で1組である。それぞれの下辺に割付けのための浅い線刻がある。122は裾部、123は上端部、124はその途中の文様部分である。

短甲形埴輪(図34、図版36)　126は前面の右脇である。2条の線刻が2方向にある。

家形埴輪(図35)　82−27次調査の造出し部分から出土した量と比べて破片が少ない。127は切妻建物の屋根である。破風板は剥離しているが、妻に沿って線刻による2重の縁取りがあることから1982−294と同一個体と考えられる。128は広い平らな面に1条の線刻がある。壁面の破片である。129は平地式建物の隅の壁あるいは柱である。片側に方形の切取りがある。1982−292と同一個体である。130は平地式建物の基部である。幅1.5cm、高さ2.0cmの突帯と、それに接して入口の切取りがある。1982−292と同一個体である。

鶏形埴輪(図36、図版37)　131は鋸歯状の鶏冠と線刻が特徴的な頭部である。眼は薄い円形の粘土板を貼付け、軟らかいうちに中央を竹管状工具で凹ませている。鼻孔は目のすぐ前にあり、同じ竹管状工具で凹ませて表現している。外面調整はハケのあとユビナデを行い、内面調整はユビナデを施す。顎の下と頸の間は開いている。頭部前後長は復元すると20cmになることから、それに見合う体部もかなり大きいものであったと推定できる。1982

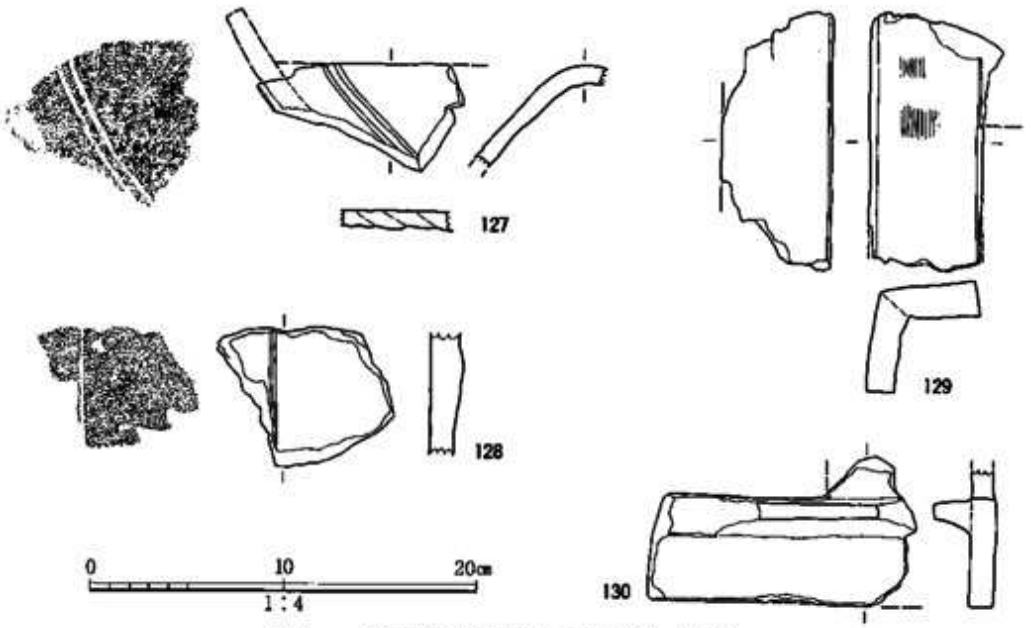


図35　一ケ塚古墳周濠内出土の形象埴輪（家形）

−321はこれと同一個体の鶏冠の一部である。

偶蹄類の形象埴輪(図36、図版37)　132は足首だけであるが、2本の爪や蹴爪をリアルに表現する。シカ・イノシシ・ウシなどの偶蹄類を表現した埴輪であろう。外面はユビナデし、内面にはしぼり目が見える。爪先の裏は開いている。

これらの埴輪は墳丘に立っていたものではないが、出土位置から一ケ塚古墳のものと考えられる。円筒埴輪は川西編年Ⅱ期に相当するため、古墳の造られた年代は5世紀初頭といえる。

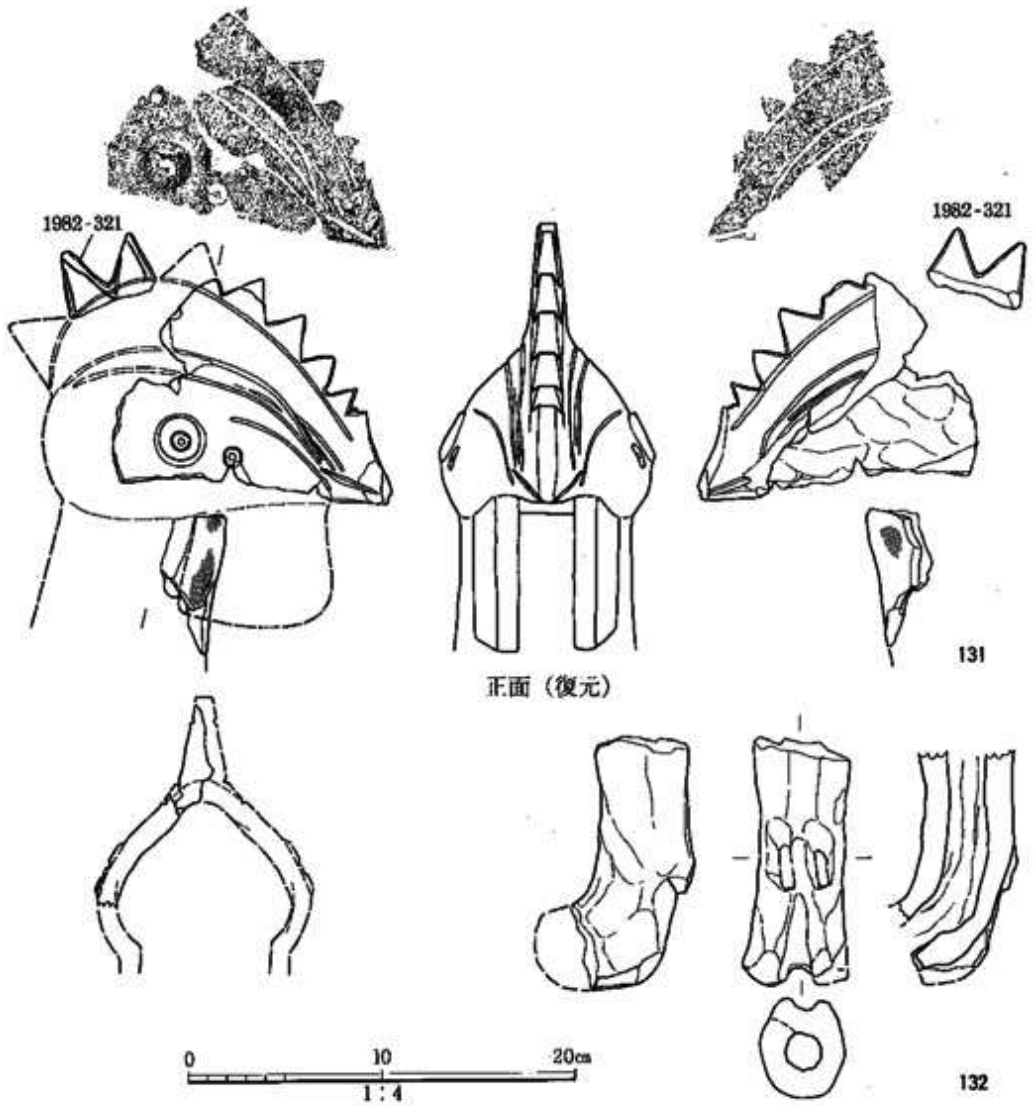


図36　一ケ塚古墳周濠内出土の形象埴輪（動物形）

長原196号墳

遺構(図37、図版8)

Ⅱ区の一ケ塚古墳周濠の東側でく字状の浅い溝を検出した。幅1.0m、深さ0.1~0.2mで、埋土には埴輪の破片が多量に含まれていた。この溝は82−27次調査のSD03と埋土のようすが似ており、位置的にもコ字状につながる可能性が高いことから、古墳の周溝と判断した。したがって墳丘は3.1m×4.1mの方形となる。西側に周溝がないのは、一ケ塚古墳の周濠が長原6層段階の水田の耕作によって拡張された際に周濠外縁とともに削りとられたためであろう。墳丘の主軸はN20°Wで、一ケ塚古墳周濠外縁に沿っている。

遺物出土状態(図38、図版8)

北側の周溝で多くの埴輪が出土した。ほとんどが風化の著しい細片であるが、壺形埴輪139はほぼ完形のまま、口縁部を溝の底に向けて倒れ込んだかたちで見つかった。鞆形埴輪121の上部は周溝の北隅から出土した。

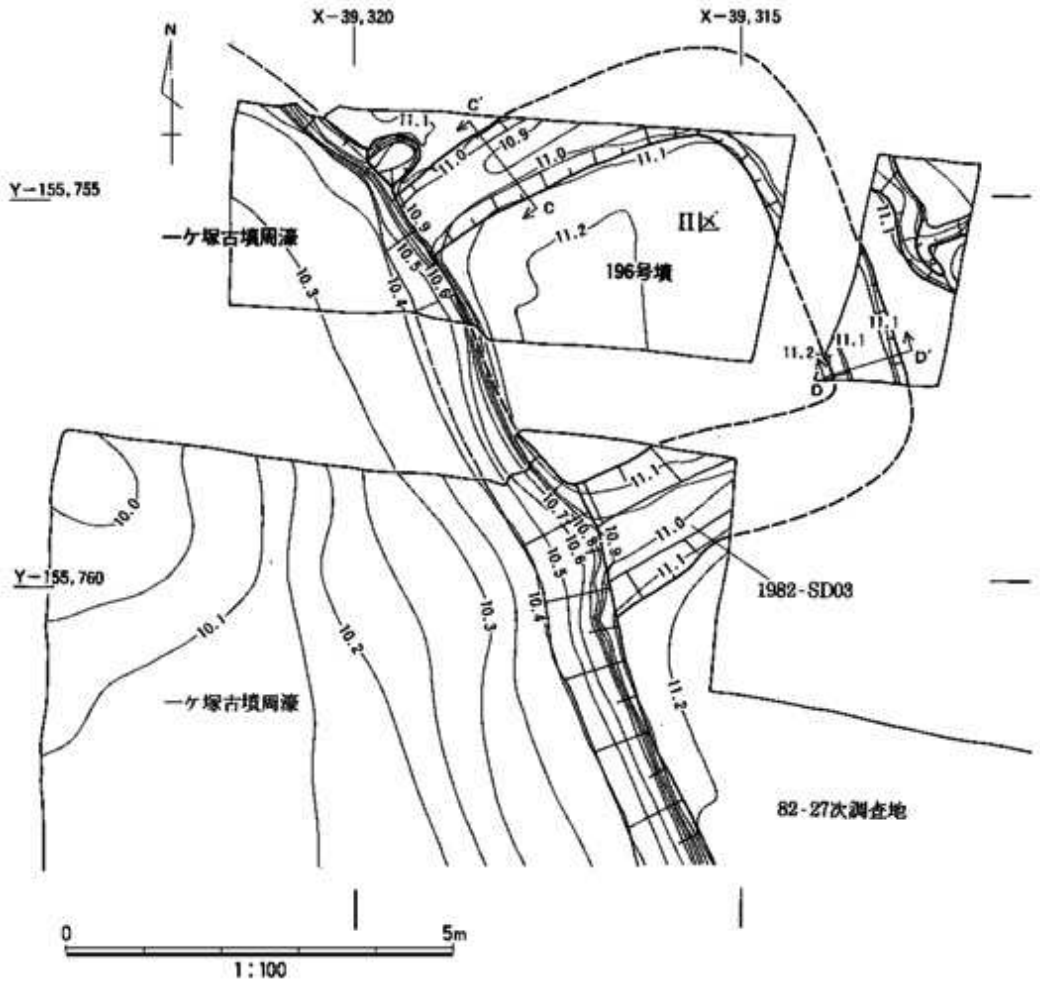
出土遺物(図39、図版38)

円筒埴輪　133は口縁部が小さく外反し、端部に面を作る。内面には波状の線刻がある(写真4)。タガの断面は台形で、上から2段目に円形スカシ孔がある。外面調整はおもにタテハケであるが、最上段には一部にタテハケのあとヨコハケを施す。内面は斜め方向のハケを行う。黒斑がある。136も内面の調整は同様で、上部に波状の線刻があるが(写真5)、スカシ孔は方形である。外面調整は磨滅のためわからない。134は器体が直線的に上方に向って開くものである。タガは低く、断面は台形である。外面はタテハケで、内面は上部のみヨコハケを行う。135は口縁部が小さく外反し、端部に面を作る。上から2段目に円形スカシ孔がある。タガの断面は低い台形である。外面はタテハケのあとヨコハケを行い、内面は中ほど以上にヨコハケを施す。黒斑がある。

朝顔形埴輪　137・138は頸部から肩部にかけての破片である。タガは低く、頸部の断面は三角形、肩部は台形である。逆三角形スカシ孔がある。内外面ともタテハケのあとヨコナデを施す。

壺形埴輪　139は口頸部が上方に大きく開いたほぼ完形の壺形埴輪である。鍔の幅は5.5cmである。円筒部に円形スカシ孔がある。外面調整はタテハケのあと肩部に部分的にヨコハケを施す。内面は鍔の接合部付近と口頸部にヨコハケを行う。口縁部と頸部にタガはない。黒斑がある。

これらの埴輪は川西編年Ⅱ期に相当することから、長原196号墳は5世紀初頭に造られた



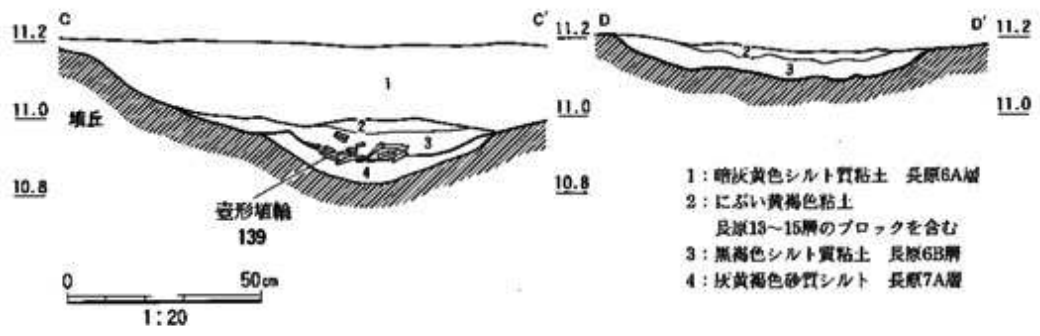


図37　II区長原196号墳

とわかる。しかし、133～139に非常によく似た埴輪が82－27次調査の**一ケ塚古墳**周濠内から出土しており、加えて鞆形埴輪121が接合したことによって、**一ケ塚古墳**の埴輪が東側の溝にまとめて捨てられたとも考えられる。今のところ確実に**一ケ塚古墳**のものとわかる埴輪は造出しに立っていた1982－270・271・266[大阪市文化財協会1990]だけであり、これらはタガの形状からすると今回**196号墳**周溝内で見つかった埴輪よりやや古い様相が見てとれる。そのため、逆に**196号墳**の埴輪が**一ケ塚古墳**周濠内に捨てられたとも考えられる。しかし、**196号墳**は**一ケ塚古墳**築造のすぐあとに造られた陪冢的な付属施設だった可能性もある。

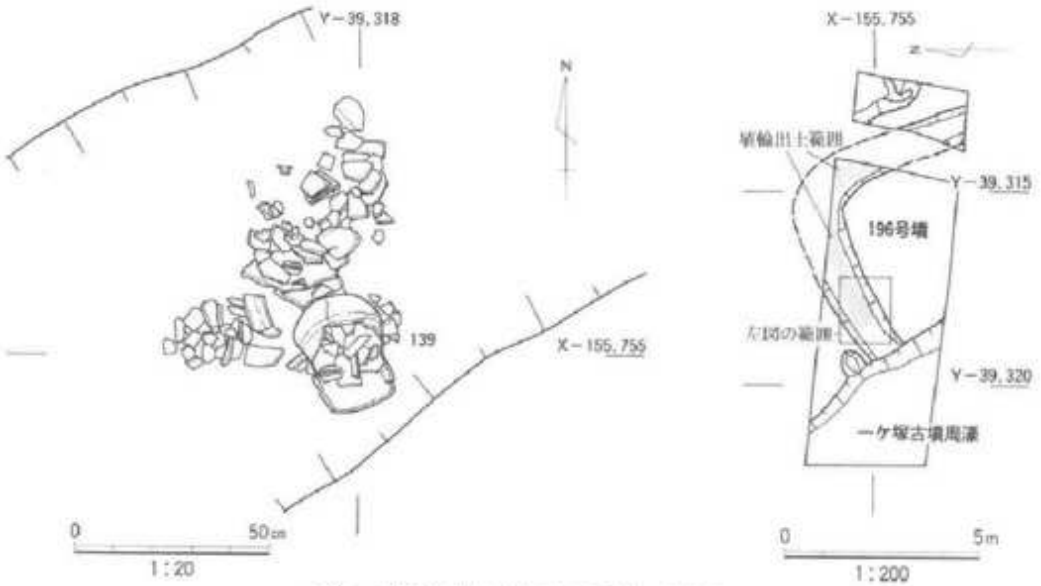


図38　長原196号墳周溝内の遺物出土状態

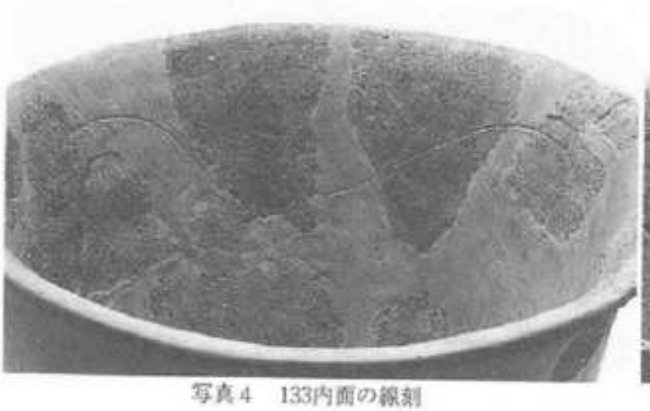


写真4　133内面の線刻

写真5　136内面の線刻

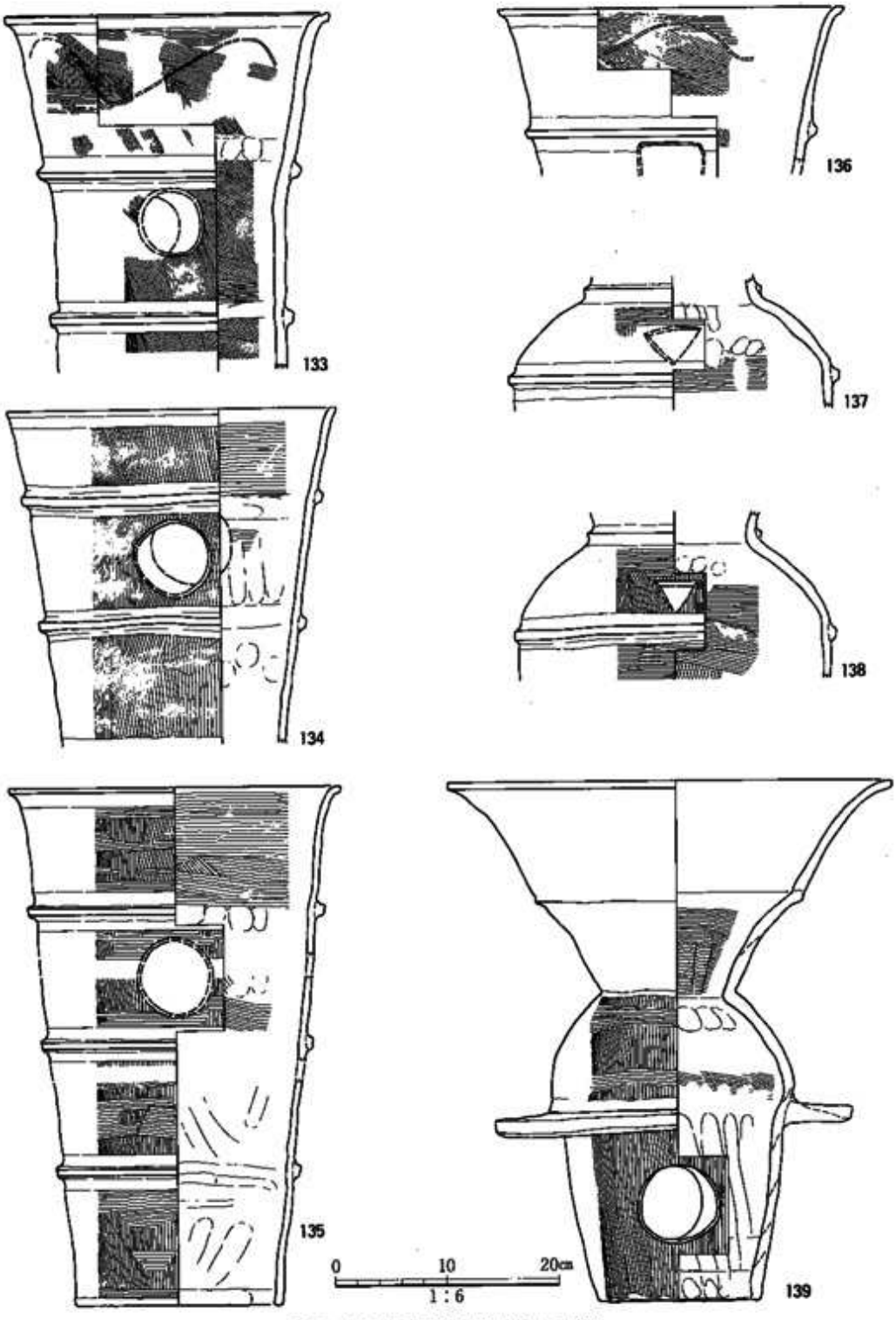


図39　長原196号墳周溝内出土の埴輪

長原80号墳

遺構(図40、図版9・11)

Ⅲ－A区の西部に位置する方墳である。北半部分を確認した。現状では2段築成に見えるが、これは長原6層段階の水田の耕作で墳丘が削られたためである。墳丘は東西8.5mであるが南北長はわからない。盛土は長原7B～14層のブロックで構成され、0.4mの厚さが残っていた。断面によって盛り上げた土の単位がよく観察できた。周溝は幅約3.0mで、長原7B層からの深さは0.3mである。墳丘の東西・南北方向に地山まで達するトレンチを掘って断面観察に努めたが、埋葬施設は見つからなかった。ただし、墳丘西端部については一度地山まで掘削し、その後再び墳丘と同じ盛土で埋められていることがわかった。なんらかの理由で墳丘規模を拡大する必要が生じ、最初に掘った周溝を埋戻して外側に周溝を掘直した可能性がある。墳丘の方位はN2°Wである。遺物は周溝埋土から144が、周溝上の長原6B層から140～142・146・147が出土した。原位置を保つものではない。また、古墳以前の遺物として墳丘盛土中から凹基無茎式石鏃42(図14)が見つかっている。

遺物(図41、図版39)

140・141は須恵器杯蓋・身である。口径が異なり、組合うものではない。142は須恵器壺の口縁である。頸部に波状文を施す。これらはTK23～TK47型式に相当する。146は須恵器甕である。端部を上方につまみ上げ、下方に突帯がめぐる。TK216～TK208型式に相当する。144は土師器高杯である。杯の端部は直立し、内底面に放射状暗文を施す。147は円筒埴輪細片である。別の場所からの混入品である。

これらのうち、TK23～TK47型式に相当する遺物が比較的多いことから、80号墳は5世紀後半から末ごろに造られたと考えられる。

長原81号墳

遺構(図40、図版9・10)

Ⅲ－A区の東部に位置する方墳である。北半部分を確認した。現状では2段築成に見えるが、これは長原6層段階の水田の耕作で墳丘が削られたためである。墳丘は東西7.0mであるが南北長はわからない。墳丘盛土は長原7B～14層のブロックで構成され、盛り上げた土の単位がよく観察できる。0.4mの厚さが残っている。周溝は幅約3.0mで、長原7B層からの深さは0.3mである。なお、80号墳と同じくトレンチ調査を行ったが埋葬施設は確認できなかった。墳丘の方位はN4°Eである。遺物は周溝埋土から145が、および周溝上の長原

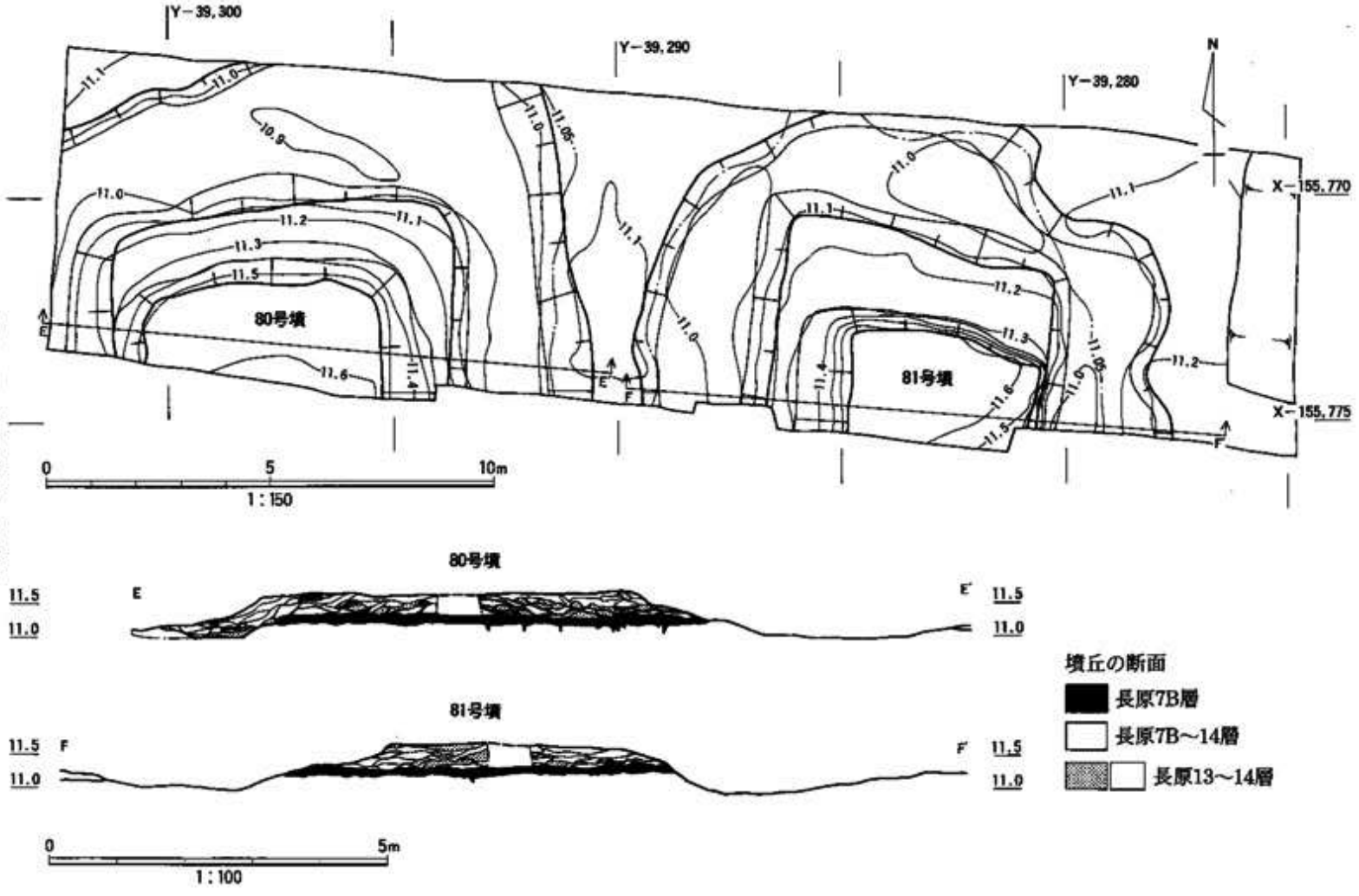


図40　Ⅲ−A区長原80・81号墳

6B層から143が出土した。原位置を保つものではない。

遺物(図41、図版39)

143は須恵器杯身である。TK209型式に相当する。145は144と似た土師器高杯である。このほか細片であるが、TK208型式の須恵器甕が出土している。

145を81号墳に伴う遺物とすると、81号墳は5世紀後半から末ごろに造られたことになる。

長原82号墳

遺構(図42、図版10・11)

Ⅲ－B区に位置する方墳である。北辺部を確認したのみで、大部分は調査範囲外にある。墳丘は東西9.5mである。周溝は幅約3.0m、長原7B層からの深さは0.2mである。遺物は周溝上の長原6B層から148が出土している。

遺物(図43、図版38)

148は須恵器杯身である。受け部はなだらかにかえりとつながっている。TK208型式に相当する。これを古墳に伴うものとすると、82号墳は5世紀後半に造られたと考えられる。

長原83号墳

遺構(図42、図版10)

Ⅲ－B区で82号墳の北方において周溝を確認した。詳細は[大阪市文化財協会1990]で報

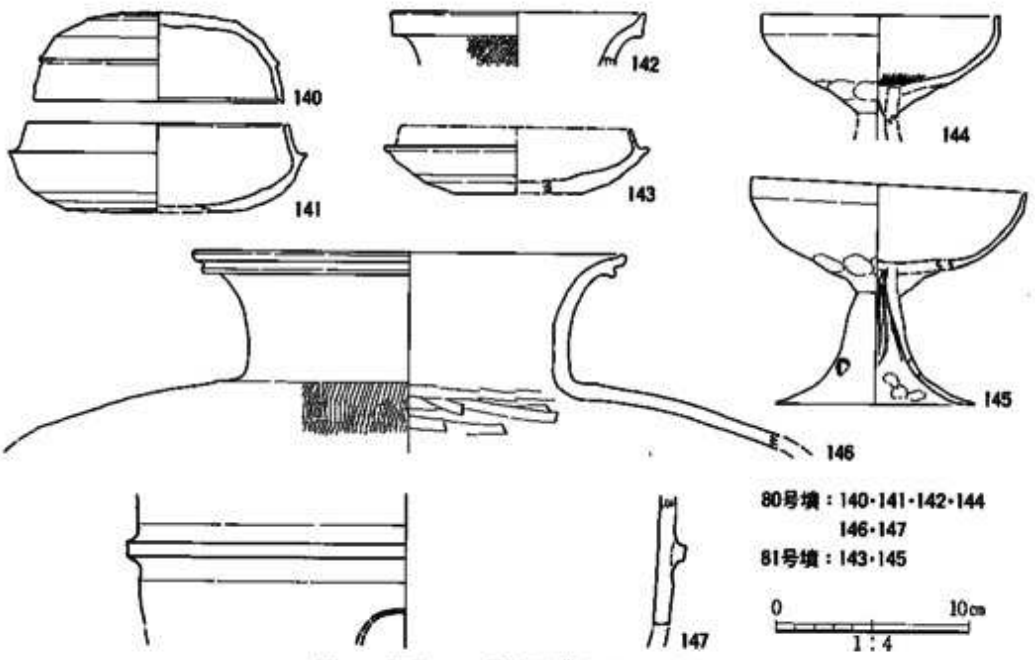


図41　長原80・81号墳周溝内出土の遺物

告済みである。それによると一辺約６ｍの方墳で、周溝は幅1.5~2.0m、深さ約0.2mである。埋葬施設は１つで、木棺直葬の墓壙内に鉄刀を１本副葬していた。今回の調査では周溝埋土から149が出土している。

遺物(図43、図版38)

149は須恵器盤の底部である。脚部には幅2.5cmの方形のスカシ孔が多数開けられている。TK216型式に相当する。

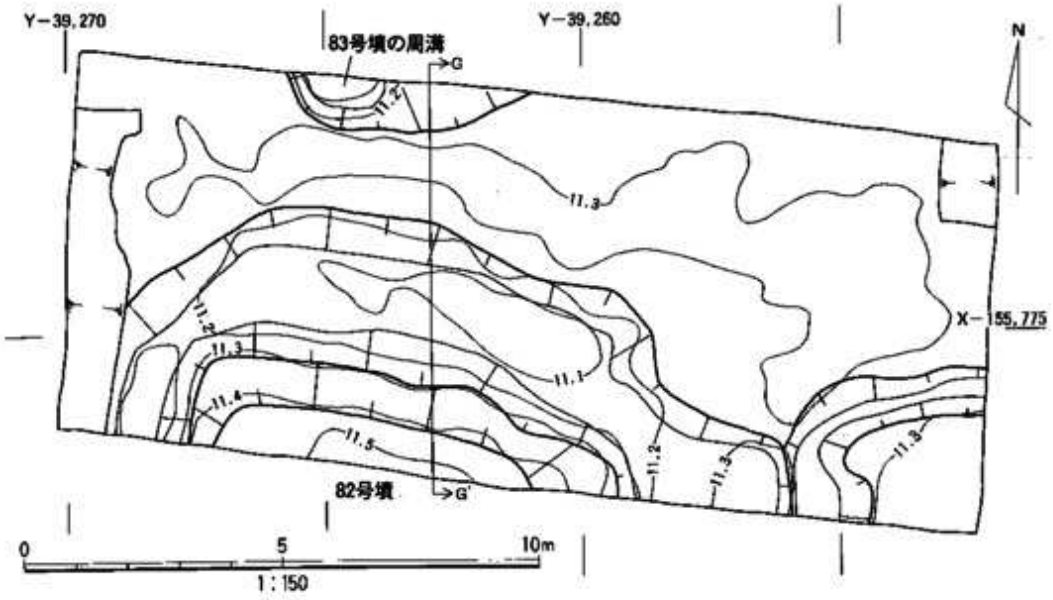


図42　Ⅲ－Ｂ区長原82・83号墳

図43　長原82・83号墳周溝内出土の遺物

149とかつて報告した遺物から、83号墳は5世紀中ごろに造られたと考えられる。

長原194号墳

遺構(図44、図版12)

Ⅳ区の西端で検出した方墳である。古墳の東側と西側は平安～鎌倉時代の流路SD401・402によって削られているため全体の規模は不明であるが、現状での墳丘の最大長は約8.5mである。周溝も北側と東側の一部のみが残る。墳丘は東除川の砂礫と長原6A層段階の耕作によって削られていたが、盛土は0.5mの厚さが残っていた。盛土をすべて掘削して精査したが埋葬施設は確認できなかった。周溝は長原7B層上面からの深さが0.3mで、周溝基底の埋土・長原7A～6B層に相当する水成層が堆積している。古墳の主軸はN30°Wである。遺物は墳丘上の長原6A層下面から150・151が、墳丘北西の長原6A層下面から152が出土した。いずれも原位置は保っていない。

遺物(図44、図版39)

150は須恵器有蓋高杯である。杯部外底面と脚部外面にカキメを施す。立上がりは内傾し、端部に面を作る。TK23型式である。151は土師器鉢である。口縁は強く外反し、ヨコナデで仕上げている。これも5世紀後半のものである。152は円筒埴輪である。タガは低く、断面も台形から三角形と一定していない。外面はタテハケ、内面はユビナデを行う。川西編年でⅤ期のものである。これらの遺物が194号墳のものとすると、194号墳の築造年代は5世紀中～後半と考えられる。

長原193号墳

遺構(図45、図版13)

Ⅳ区の東部で検出した方墳である。古墳の西側は東除川によって削られており、北側も調査区外にあるために調査できなかった。墳丘の規模は現存する東辺で8.5m、南辺で5.5mである。周溝は幅3.5mで、長原7B層上面からの深さは0.4mである。盛土は長原7B層の旧地表の上に厚さ0.2mほど残っていたが、埋葬施設は確認できなかった。盛土の上部は長原6A層段階の水田の耕作や東除川の洪水によって削平されているようである。周溝内には長原7A～6B層に相当する水成層が堆積している。古墳の主軸はN30°Wである。

遺物はすべて周溝内で見つかった。須恵器153～157・159は底部が周溝底に接していたことから、元来この位置に置かれていた可能性が高い。埴輪は周溝の墳丘寄りで破片となって数個所にまとまっていた。墳丘裾の斜面に接していたことから、本来墳丘の周縁に立っていたものが倒れ込んだものと考えられる。158は周溝内の長原6B層から出土した。

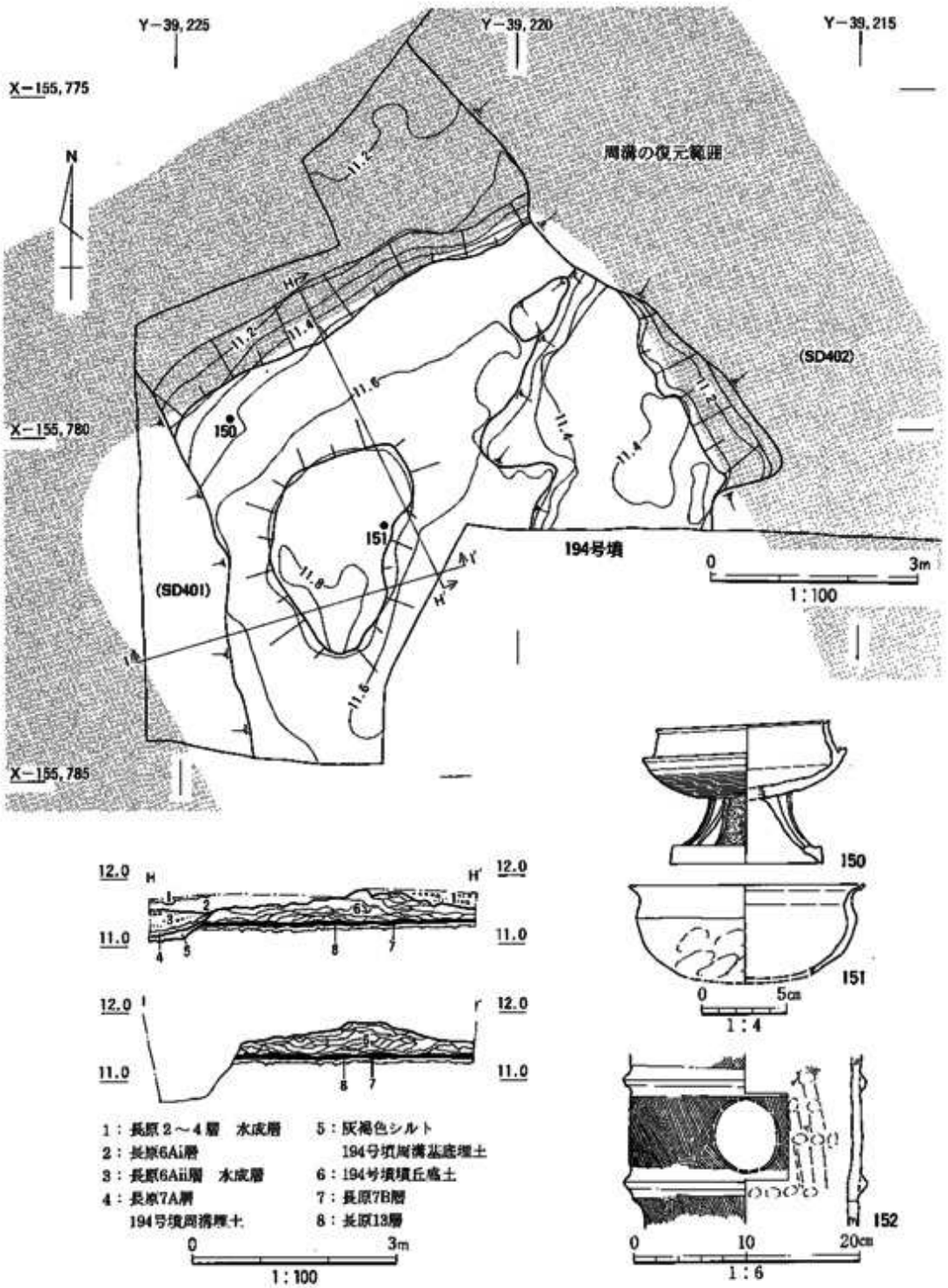


図44　Ⅳ区長原194号墳と出土遺物

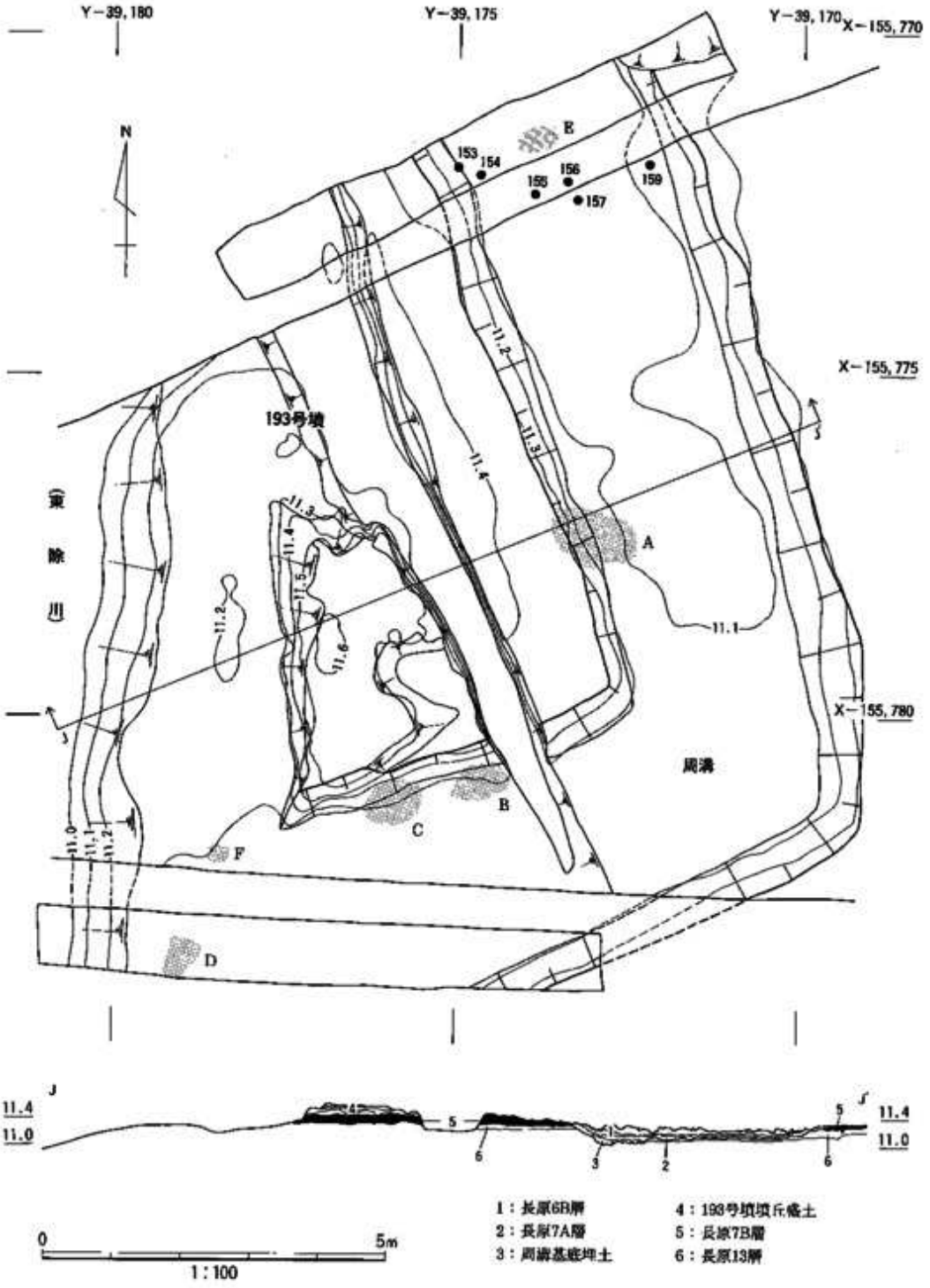


図45　Ⅳ区長原193号墳

遺物(図46～48、図版39～41)

須恵器　153は小型短頸壺である。口縁部を薄く作る。外面の下部は静止ヘラケズリを行う。154は鼈である。体部は算盤玉状で、肩部に2条の凹線を入れ、間に細かい波状文を施す。155は杯蓋である。天井部はわずかに凹んでいる。口縁端部はやや凹んだ面を作る。156・157は杯身である。156は体部が深い。立上がりは内傾して長い。端部は面を作る。157は焼成時に底部が凹んでいるが、もとは156と同様に深い器形であったと思われる。受け部に直径12.8cmの重ね焼痕がある。159は甕の底部である。底は球形に近いが、少し尖っている。外面は平行タタキを行い、内面は整形時の同心円文の当て具痕がかすかに見えるが、ほとんどナデによって消されている。これらはTK23～TK47型式に相当する。

土師器　158は甕である。口頸部は緩く外反し、端部を丸く作る。肩部外面にタテハケを施す。6世紀前半のものである。古墳に伴う遺物ではない。

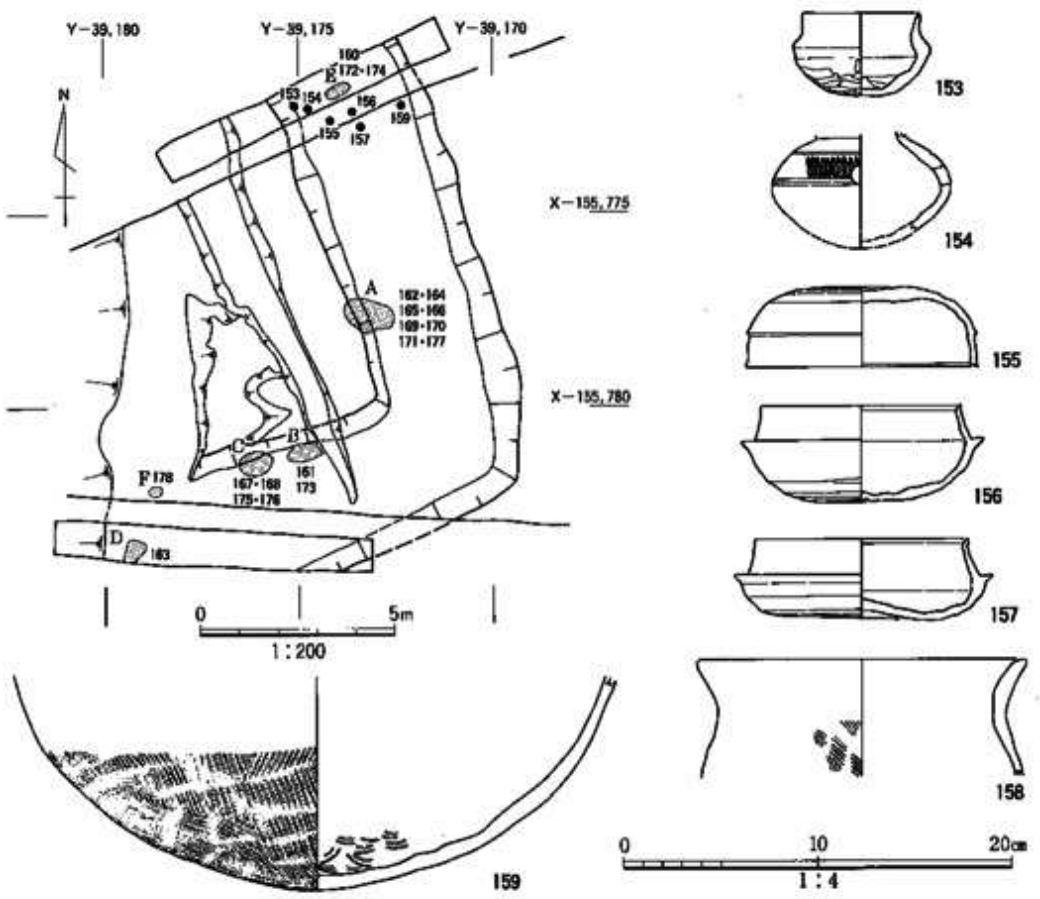


図46　長原193号墳周溝内出土の土器

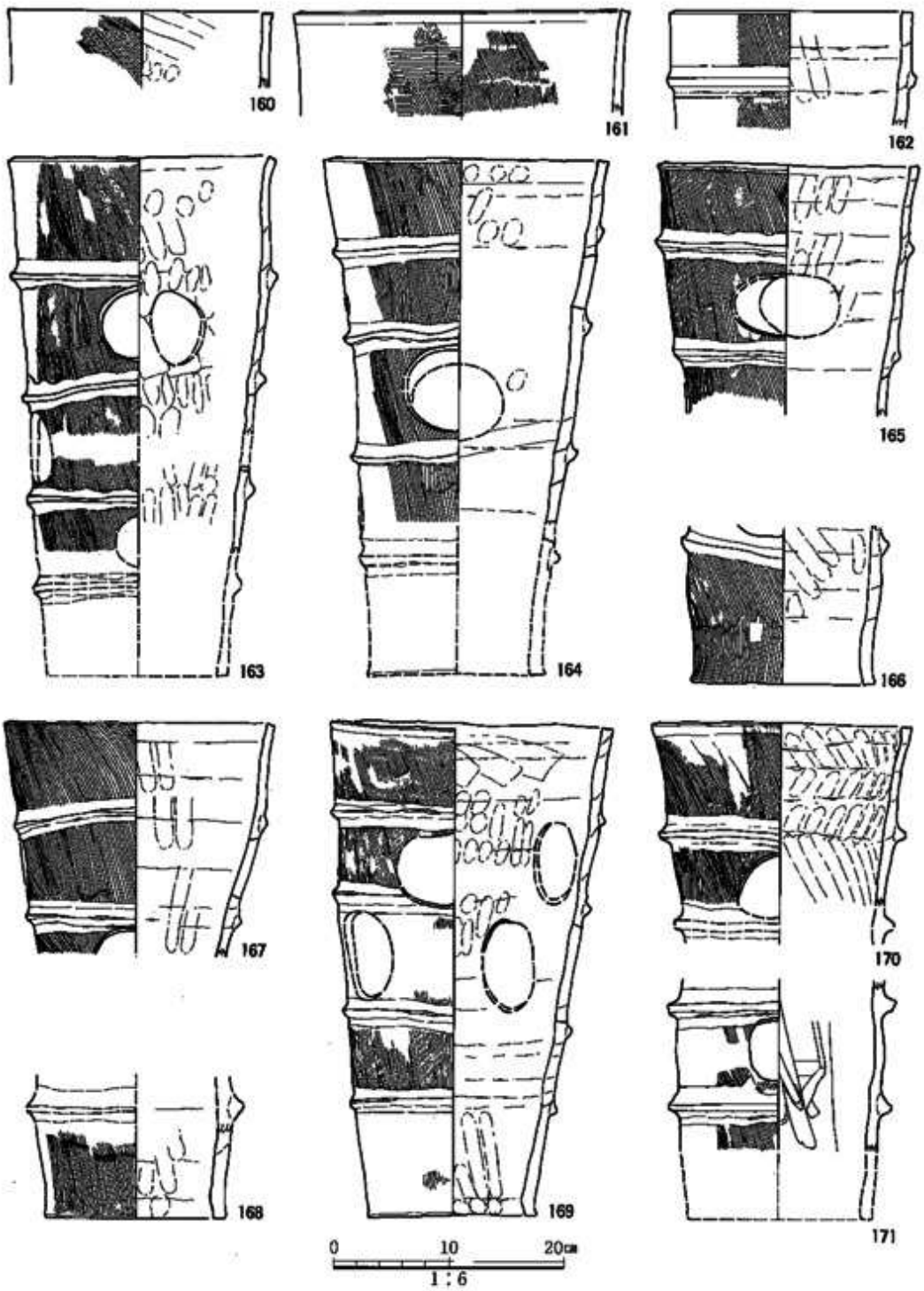


図47　長原193号墳周溝内出土の円筒埴輪

埴輪は本来墳丘の周縁に立っていたと思われるものが多数出土している。東周溝内のA地点からは162・164～166・169～171・177が、Eからは160・172・174が見つかった。南周溝のB地点からは161・173が、C地点からは167・168・175・176が、D地点からは163が、F地点からは178が出土している(図46)。165と166、167と168、170と171は直接つながる部位はないが、出土位置や全体の特徴から同一個体と判断した。

円筒埴輪　160・162～173はほぼ同様の大きさと特徴を備えたものである。口縁部は直立し、端部はヨコナデによって面を作る。タガは4本あり、器体は5段に分かれる。タガは低く、断面は三角形から台形である。外面はタテハケのみで調整し、内面はユビナデで調整する。スカシ孔はすべて円形である。ただし、163～168・170・171が3段2方向であるのに対して169は2段3方向である点が異なる。唯一口縁部から底部まで復元できたものは169である。それによると口径約24cm、底径約14cm、器高約43cmである。161は最上段の一部にヨコハケを行う。174・175は外面調整に幅の短いB種ヨコハケを行う。タガは低く、断面は台形である。176は須恵質である。ハケや焼成のようすが178と似ていることから朝

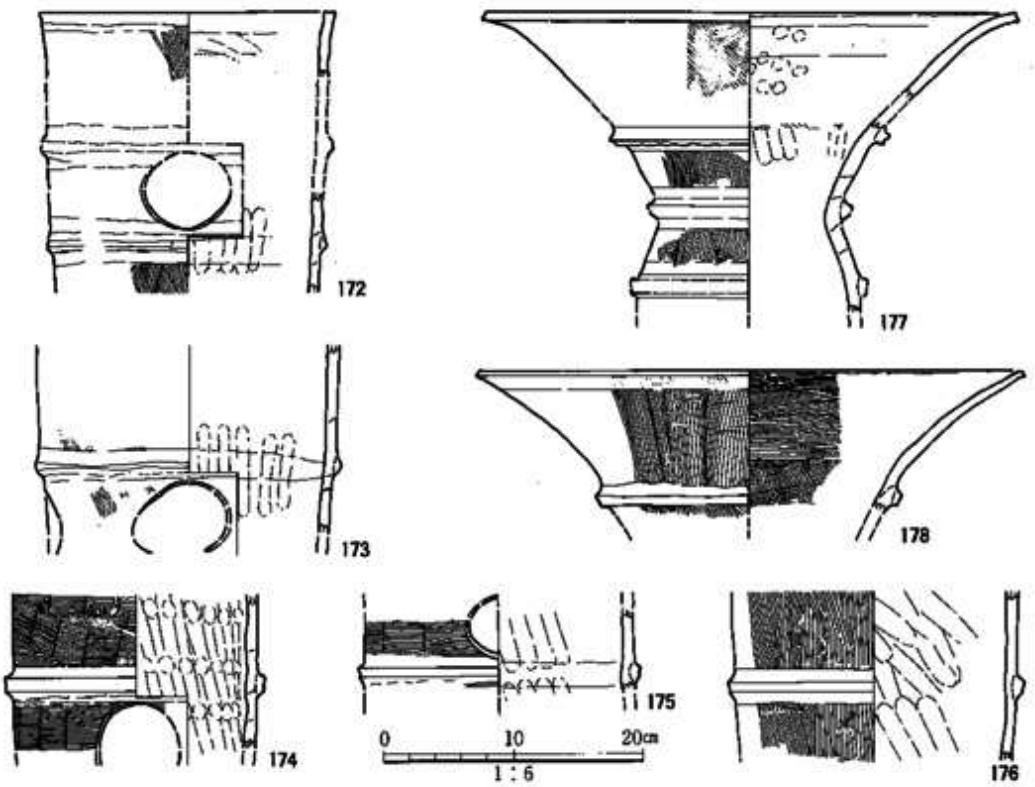


図48　長原193号墳周溝内出土の円筒・朝顔形埴輪

顔形埴輪の円筒部の可能性がある。

朝顔形埴輪　177は口縁部から肩部にかけての破片である。肩部に張りがなく、頸部が短い。頸部・肩部のタガは剥落している。外面はタテハケ、内面はユビナデによる調整である。口頸部外面に赤色顔料が残る。178は口縁部である。須恵質の焼成である。外面にはタテハケを、内面には下部に短いタテハケを行い、上部にヨコハケを密に施している。

これらの埴輪は川西編年のV期に相当する。須恵器の型式とも合わせて考えると、長原193号墳は5世紀末に造られたと考えられる。

長原195号墳

遺構(図49、図版14)

V区の中央で検出した方墳である。南端を中世の土壙で削られていたが、全体の東半分を確認することができた。東側の一辺は8.5mである。周溝は長原7A～6A層の水田の耕作によってすべて削られており確認できなかった。盛土は良好に遺存しており、もっとも厚いところでは0.5mあったが、埋葬施設は確認できなかった。墳丘の主軸はN20°Eである。

遺物は墳丘北方の長原6A層から巫女形埴輪182～186がまとまって見つかった。またその周辺からは須恵器179～181、円筒埴輪187・188が出土している。

遺物(図49～51、図版42)

須恵器　179は杯蓋である。口縁端部は内傾し、内側に面を作る。180は無蓋高杯の杯部、181は有蓋高杯である。181は脚部に幅1.1cmの長方形スカシ孔が3方向にある。口縁端部は丸く、内側に段を作る。これらはTK47型式に相当する。

円筒埴輪　187は接合する個所はないが同一個体と考えられる。口縁部は直立し、端部にナデによる面を作る。タガは3本で低く突出し、断面はほとんど三角形である。上から2段目に円形スカシ孔がある。外面は斜め方向のハケのあとユビナデし、内面はユビナデのあと所々に斜め方向のハケを施す。復元すると器高は約50cmである。188は底部である。タガはさらに低く、僅かに突出する。下から2段目と3段目に円形スカシ孔がある。外面調整は上部にタテハケを行うが、下部はユビナデのままである。内面は縦方向のユビナデを行う。川西編年のV期に相当する。

巫女形埴輪　人体の一部とみられる不定形な破片とともに、腕、胴、頭などが出土した。182は頭部である。目と口は細い杏仁形の孔を開け、鼻は三角形の部品を貼付けて表現している。183は胴部である。外面にはハケ調整を行い、胸部にはたすき掛け状の線刻と腹部に横方向の線刻を施す。図の左下には袋状の部分を貼付けた痕跡がある。184・185は腕であ

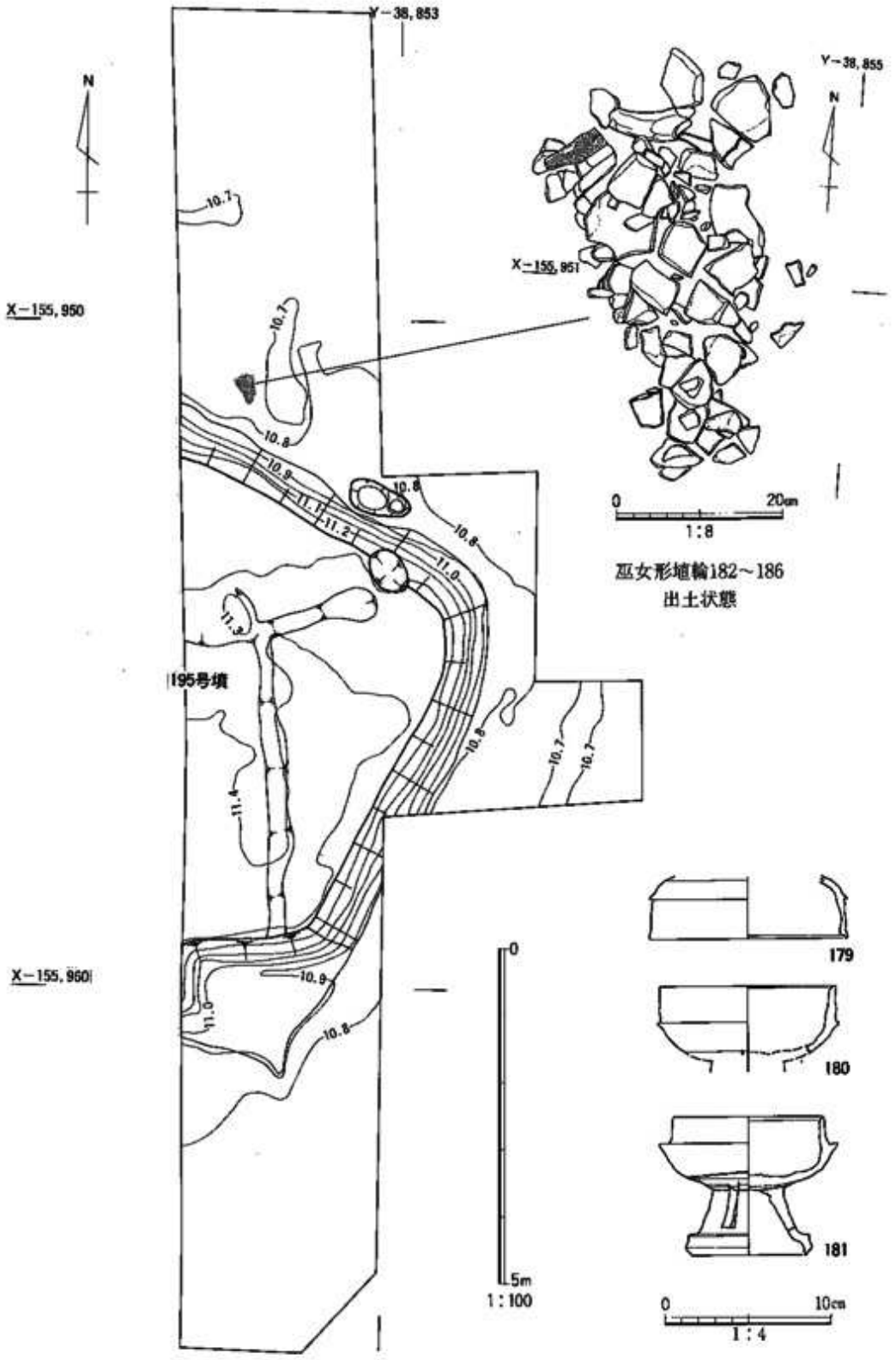


図49　V区長原195号墳と周辺出土の土器

る。指先は欠損している。肩に取付く部分には、芯となる筒状の粘土棒が見える。186は先端に掌状の表現があるが、184・185のように芯となる粘土棒はない。これらのほかにも腕状の破片が1点見られることから、巫女形埴輪は2体以上あったと推定できる。

円筒埴輪や須恵器の型式から長原195号墳は5世紀末に造られたと考えられる。

ii)溝

SD701(図21・52、図版42)

Ⅳ区の中央で検出した北西－南東方向の溝である。幅0.7m、深さ0.3mで、断面は浅いU字形である。上面および東側を東除川によって削られているため掘込み面は不明であるが、埋土の最下部から埴輪189が出土したことから古墳時代の溝とした。

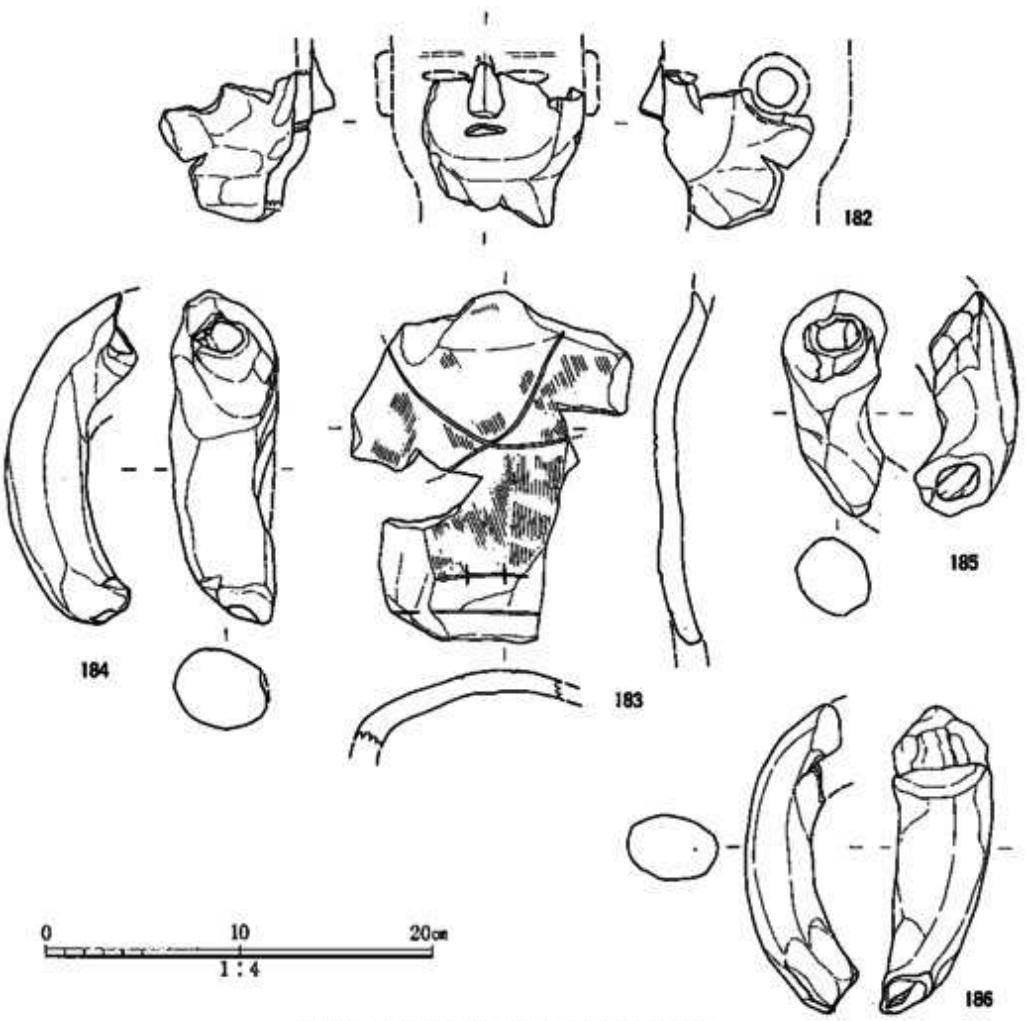


図50　長原195号墳周辺出土の巫女形埴輪

189は朝顔形埴輪の肩部である。肩がもっとも張った場所に、間隔の狭い2本のタガが巡る。タガは低く突出し、断面は台形である。外面はヨコハケ、内面はユビナデのあと所々にタテハケを行う。5世紀後半のものと考えられる。

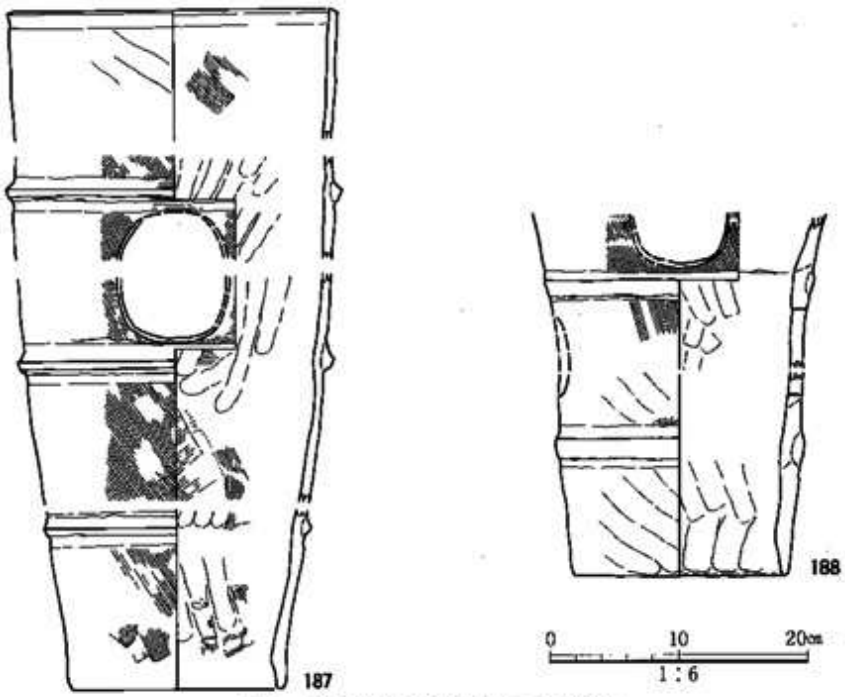


図51　長原195号墳周辺出土の円筒埴輪

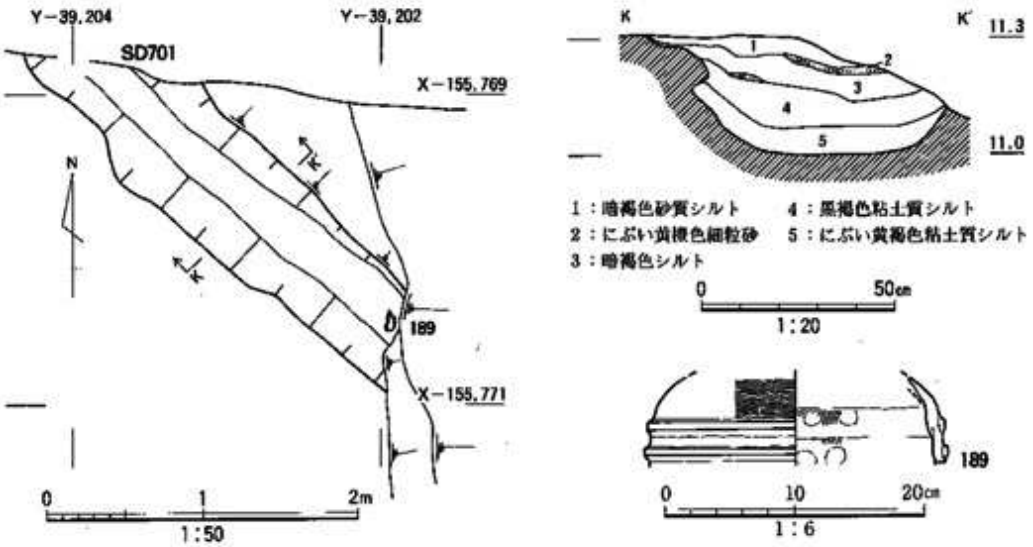


図52　Ⅳ区SD701と出土遺物

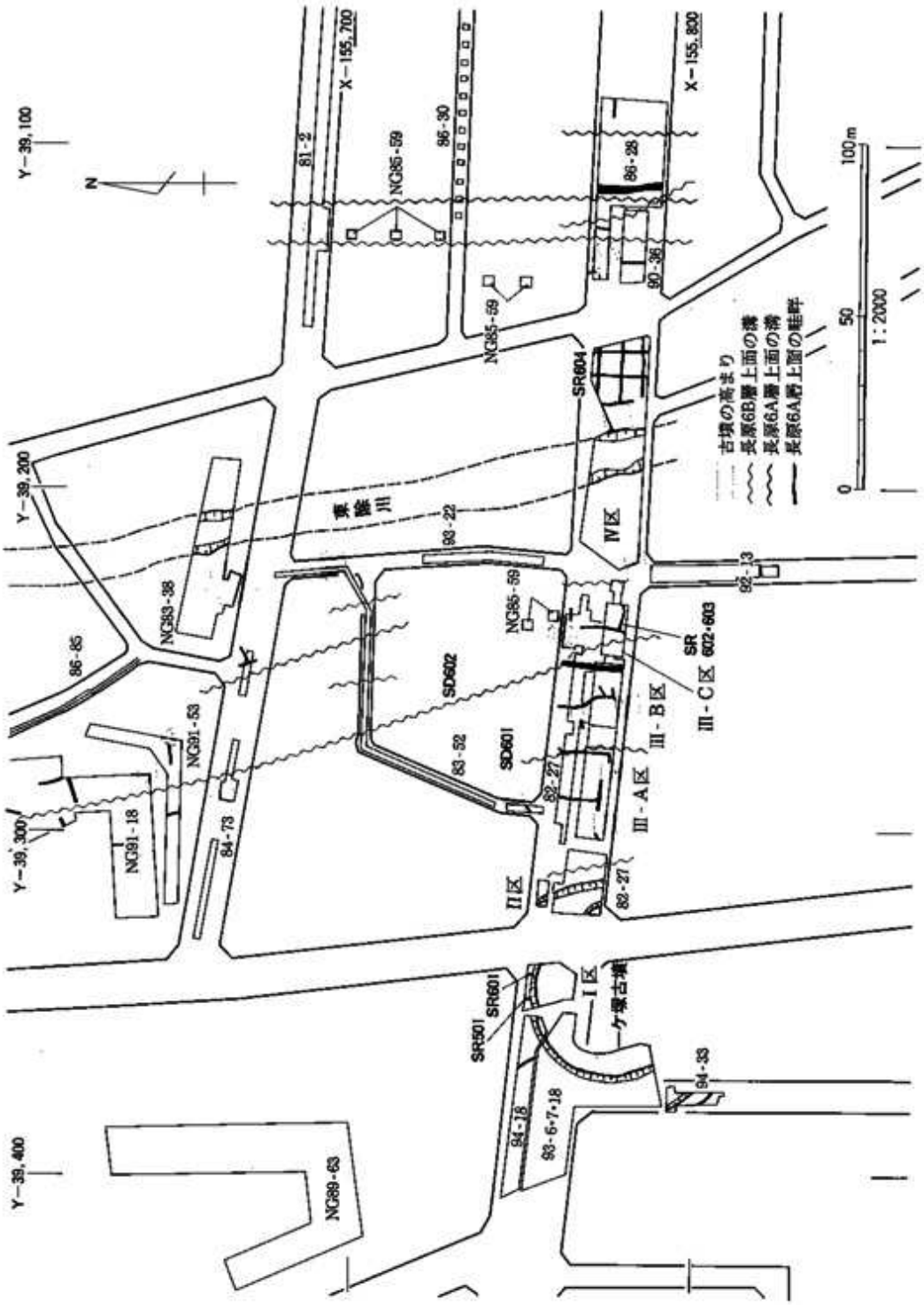


図53　長原遺跡西南・南地区飛鳥～奈良時代の遺構の配置

5)飛鳥～奈良時代の遺構と遺物

i)溝

SD601(図53・54)

Ⅲ－A区の東部に位置する南北方向の溝である。長原6B層上面で検出した。幅0.7m、深さ0.4mで、断面は方形である。灰オリーブ色細粒砂の埋土には多くの植物遺体が含まれる。溝は過去の調査で検出した水路につながっており、[大阪市文化財協会1990]によると両岸

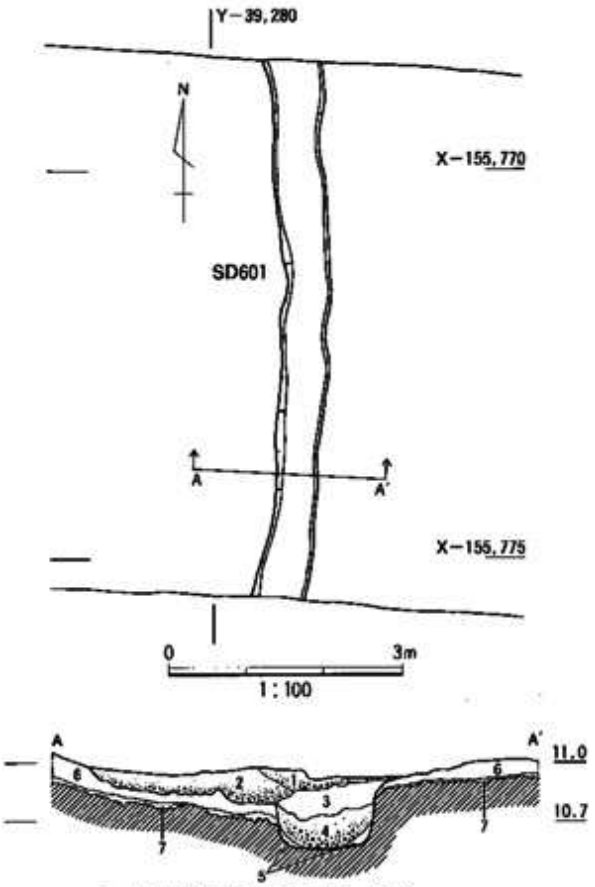


図54　Ⅲ－A区SD601

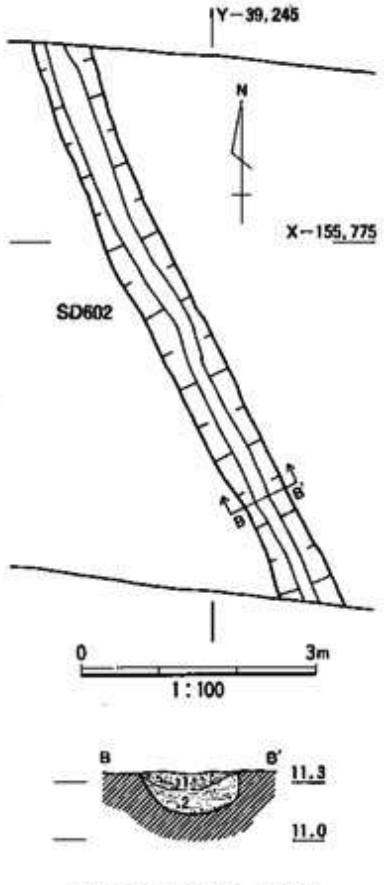


図55　Ⅲ－C区SD602

に土手状の盛土があることと、長原6Aii層で埋ったのち、さらに人為的に埋められた可能性があることが指摘されている。

SD602(図53・55、図版15)

Ⅲ－C区の西部に位置する、南東－北西方向の溝である。長原6B層上面で検出した。幅0.6m、深さ0.3mで、断面は浅いU字形である。これも過去の調査で検出した水路につながる[大阪市文化財協会1990]。埋土は長原6Aii層の水成層で、上層には粗粒砂が堆積している。溝の両肩には部分的に掘削の際の土を盛ったと思われる土手状の盛土がある。もともとは両岸に盛られていたようだが、長原6A層段階の水田の耕作によりほとんど残っていない。

ii)水田(図56)

当地域の水田遺構は過去の調査区と重複していたこともあり、ほとんど報告済みである[大阪市文化財協会1990]。ここでは新たに見つかったものについてのみ報告する。

SR601(図53・56・57、図版15)

Ⅰ区の一ケ塚古墳周濠内で行われた水田の耕作のための畦畔である。古墳の高まりから幅0.3mの

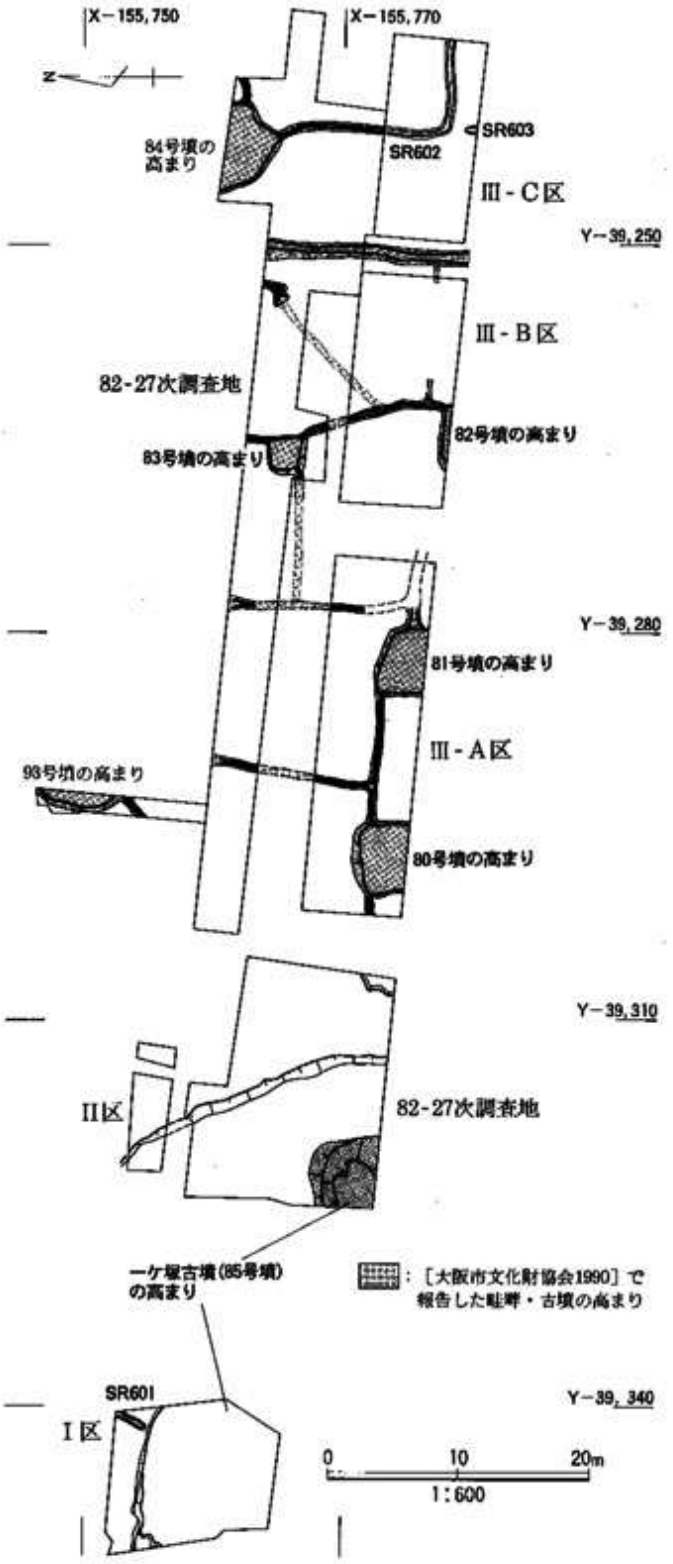


図56　Ⅰ～Ⅲ区周辺の長原6A層上面の水田

水口を挟んで南北方向に延びている。検出した全長は約３ｍで、幅0.4m、高さ0.2mである。検出面は長原6A層上面で、上部を水成層の長原5B層が覆うため、踏込みや水口の凹凸が良好に保存されていた。

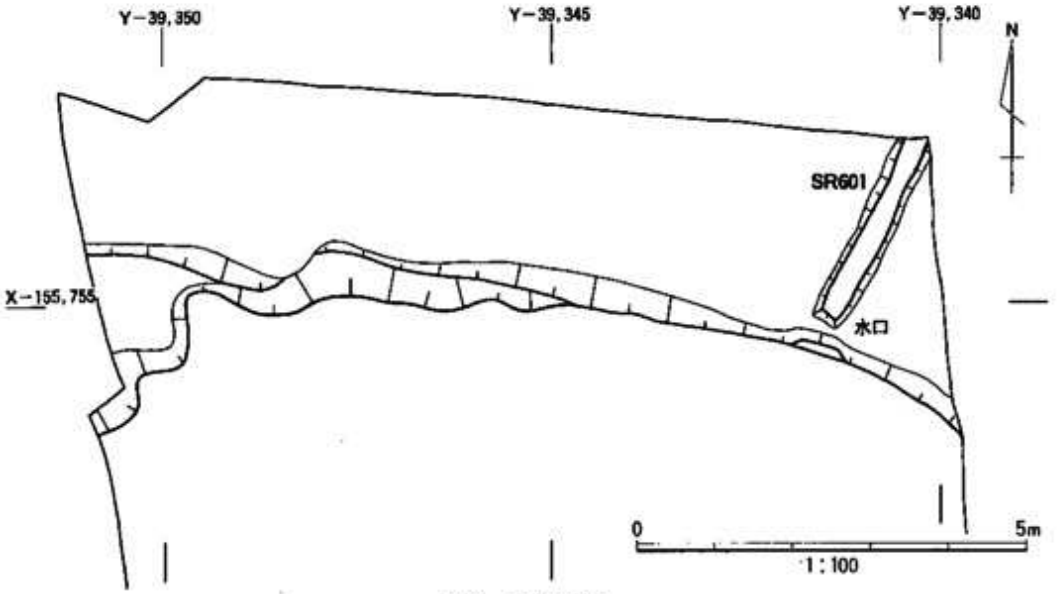


図57　Ⅰ区SR601

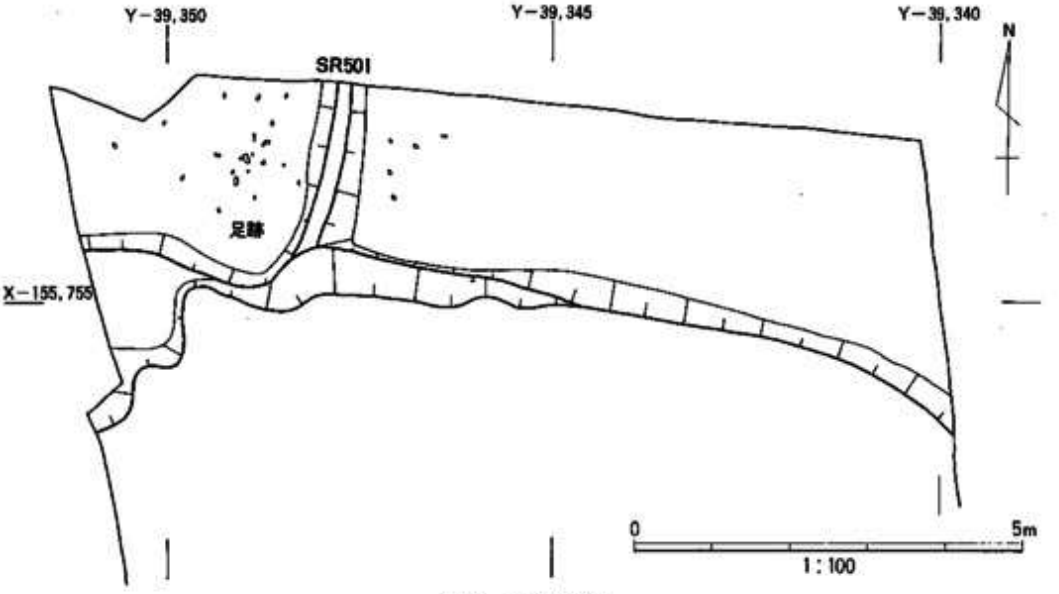


図58　Ⅰ区SR501

SR602・603(図53・56)

Ⅲ－C区の東部に位置し、長原6A層上面で検出した畦畔である。SR602は幅0.4m、高さ0.2mで、東西・南北の方位に沿ってL字状に曲っている。北方に延びた畦畔は長原84号墳の高まりの隅に取付いている。SR603は水口を挟んで南に延びている。幅0.4m、高さ0.2mである。

SR604(図53・59、図版16)

Ⅳ区の東部に位置し、長原6A層上面で検出した畦畔である。幅0.4m、高さ0.1mで、芯の部分には長原6Bi・ii層を盛っている。方位に沿って長方形に水田を囲んでいるが、西端

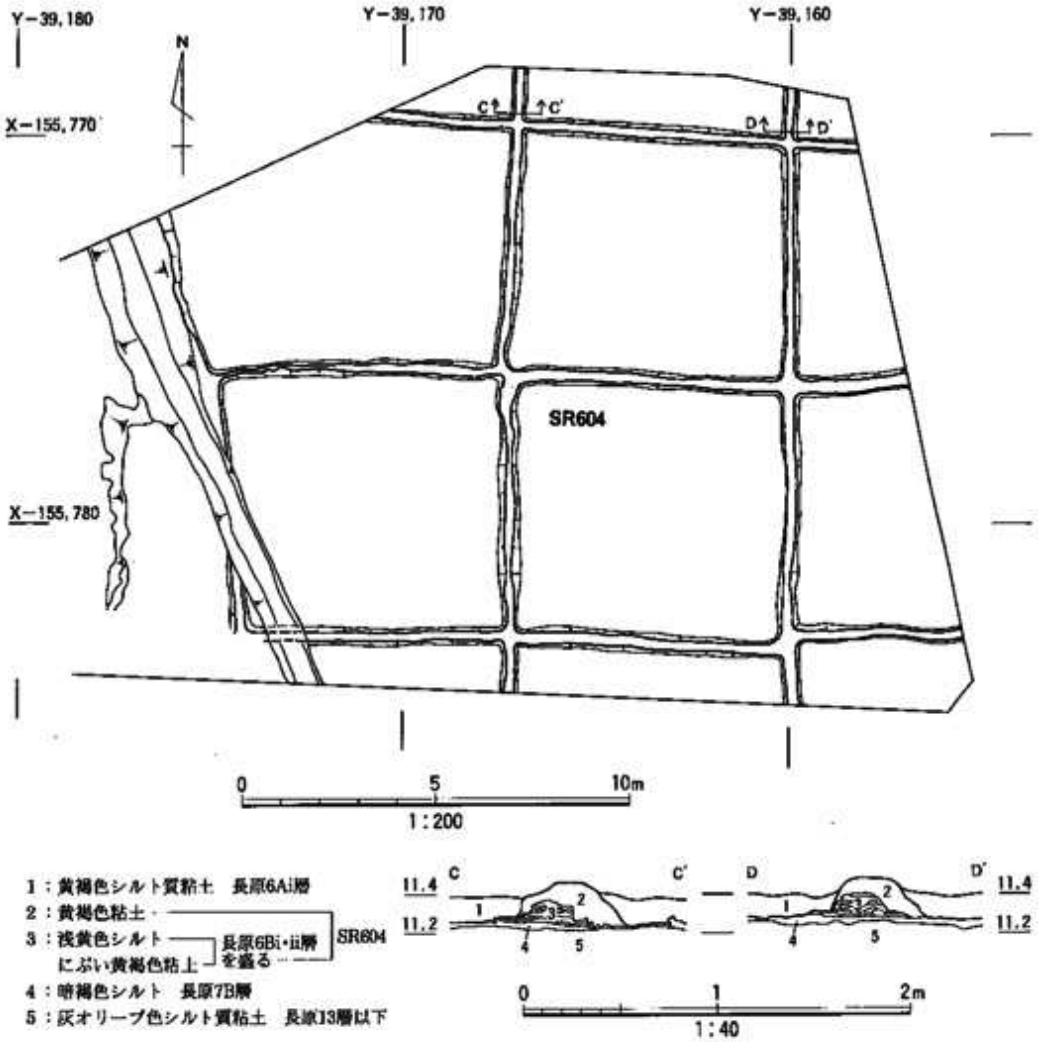


図59　Ⅳ区SR604

では長原193号墳の高まりを利用しているため、畦畔の方向はやや西に傾いている。水口はない。水田の作土は長原6A層であるが、古墳周溝上に当る場所では下位の7A層黒色粘土ブロックを多く含むために作土は黒ずんでいる。畦畔によって区画された水田は、一筆がおよそ6m×7m、42㎡である。

SR501(図53・58、図版15)

Ⅰ区の一ケ塚古墳の高まりから南北方向に取付く畦畔である。検出面は長原5B層上面である。上面を長原5A層が覆うため、踏込みが良好に保存されている。畦畔は幅0.6m、高さ0.2mで、横断面で見ると長原5B層と一連の極細粗砂のラミナが水平に堆積しているため、両側を削って造り出したものとわかる。ただし、作土の長原5B層に踏込み以外の乱れはなく、耕作した痕跡もない。つまり、長原5B層を運んだ洪水がおさまって畦畔を造ったが、さらにその直後に起きた洪水によって長原5A層の粗粒砂が運ばれて埋没したものと考えられる。

ⅲ)土壙

SK601(図60、図版16・43)

Ⅴ区の長原195号墳墳丘の東隅に位置する円形の土壙である。遺構検出面は長原4層基底面で195号墳直上であるが、8世紀初頭に相当する須恵

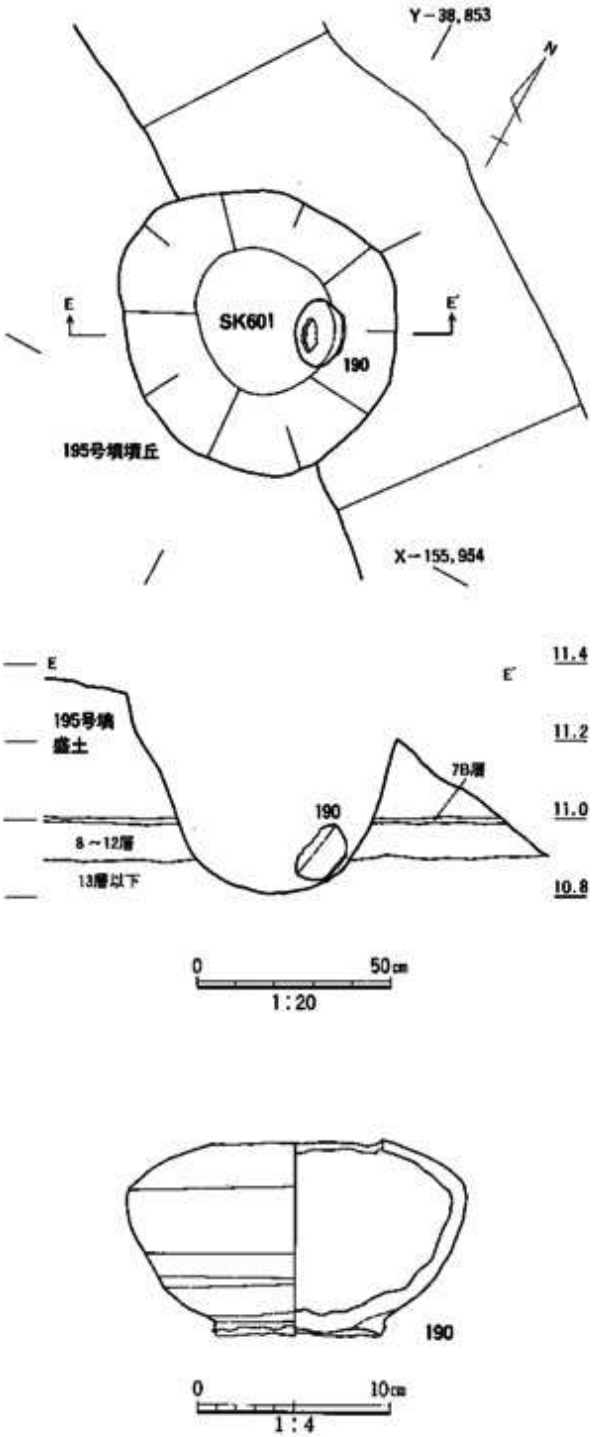


図60　Ⅴ区SK601と出土遺物

器190が出土したことから飛鳥～奈良時代の遺構と判断した。規模は直径0.7m、深さ0.5mで、断面はU字形である。底は195号墳の盛土を掘抜いて長原13層以下まで達している。

190は須恵器台付長頸壺である。肩部と内面底部に厚く自然釉がかかり、粘土塊のひっつきがある。釉は白色や暗緑色を呈する。口頸部と高台部は細かく均質的に欠けていることから故意に打欠かれたものと考えられる。蔵骨器として使用した可能性が考えられるが、蓋となる遺物は共伴せず、土壙の底ではなく北壁に接して斜めに置かれていたことから確実なことはわからない。

6)平安～鎌倉時代の遺構と遺物

i)溝

SD401(図61・62、図版18・43)

Ⅳ区西端に位置する南北方向の流路である。上面を東除川の洪水層で削られているため、掘込み面を明らかにすることはできなかったが、埋土中から13世紀ごろの瓦器小皿194・椀195が出土したことから鎌倉時代の流路と判断した。幅は現状で2.0m以上、深さは2.0mあり、地山を深く掘込んでいる。埋土は細～粗粒砂の水成層である。埋土の上層から出土した須恵器191は器表面がほとんど磨耗していないことから、近くから流されてきたものと考えられる。

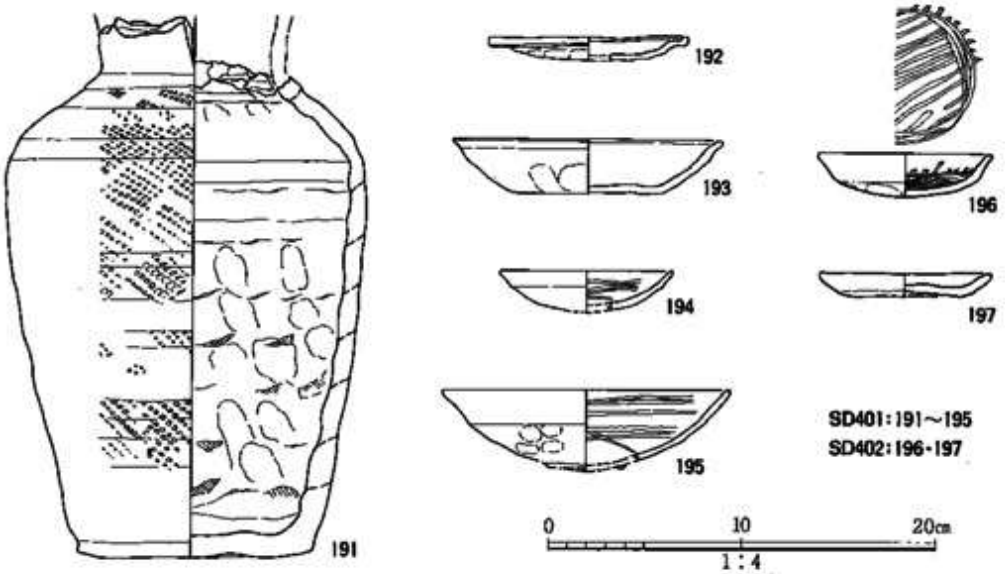


図61　Ⅳ区SD401・SD402出土の遺物

191は須恵器壺である。外面はタタキのあとユビナデを行う。内面はユビナデを施すが、粘土紐の継目が顕著に残る。10世紀末から11世紀初頭のものである。口縁部は故意に打ち欠かれており、内部には火葬人骨・炭および土師器192・193が納められていたことから、蔵骨器として使用されていることがわかった。192は端部がて字状の土師器小皿、193は土師器皿である。これらは191内の人骨や炭の上に割れた状態で入っていた。ともに10世紀末から11世紀初頭のものである。

蔵骨器内の火葬人骨(写真6)　火葬人骨は細片になっているものの、破片の遺存状態は良好で、埋没期間中の骨の割れを考慮すると本来はほぼ壺内を満たしていたと考えてよい。また、人骨の上には人為的に割られた土師器小皿・皿と須恵器壺の頸部があり、これらは蓋であった可能性が高く、これより下へは混入物が入ったとは思われない。したがって、この内容物を検討すれば、火葬された遺体から蔵骨器へ納骨する選択性などが判明するものと考えられた。そこで、蓋を外したあと、すべての内容物を1㎜目の篩で水洗選別を行った。この結果、人骨は約740g、炭化材が約5g検出された。そして、1㎝以上の大きさの人骨には保存処理を施し、部位

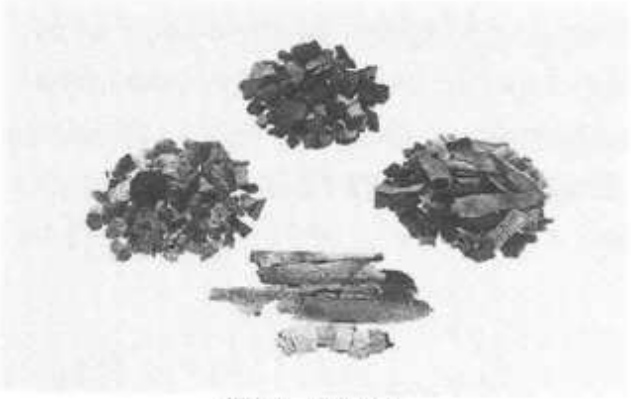


写真6　火葬人骨

表4　火葬骨片同定結果一覧

部位	左右	部分	部位	左右	部分	部位	左右	部分
腰椎	−	上関節突起	橈骨	不明	橈骨頭	大腿骨	左	体
腰椎	−	下関節突起	尺骨	左	骨間縁	大腿骨	左	膝下面
椎骨	−	椎体	舟状骨	右	手、完形	大腿骨	右	体
椎骨	−	椎体	豆状骨	左	完形	腓骨	左	前縁
肋骨	左	肋骨頭	第2中手骨	右	頭	腓骨	左	骨間縁
肋骨	不明	体	第4中手骨	左	底	腓骨	右	前縁
肋骨	不明	体	第1基節骨	右	手、頭～体	腓骨	不明	前縁
後頭骨	−	ラムダ縁	第2or4基節骨	不明	手、頭	肺骨	不明	体
側頭骨	右	鱗部	第2or4基節骨	不明	手、頭	楔状骨	不明	関節面
側頭骨	右	乳突部	第2or4基節骨	不明	手、底	立方骨	右	関節面
側頭骨	右	鼓体	第3基節骨	不明	手、頭	第2中足骨	左	底
頭頂骨	右	鱗縁	第5中節骨	不明	手、完形	第1基節骨	右	足、完形
頭頂骨	不明	鱗縁	第1末節骨	不明	手、少欠	第2基節骨	不明	足、頭
前頭骨	−	前頭鱗	第3末節骨	不明	手、完形	第2中節骨	不明	足、底
上腕骨	不明	上腕骨頭	坐骨	左	坐骨結節	第5中＋末節骨	不明	足、完形

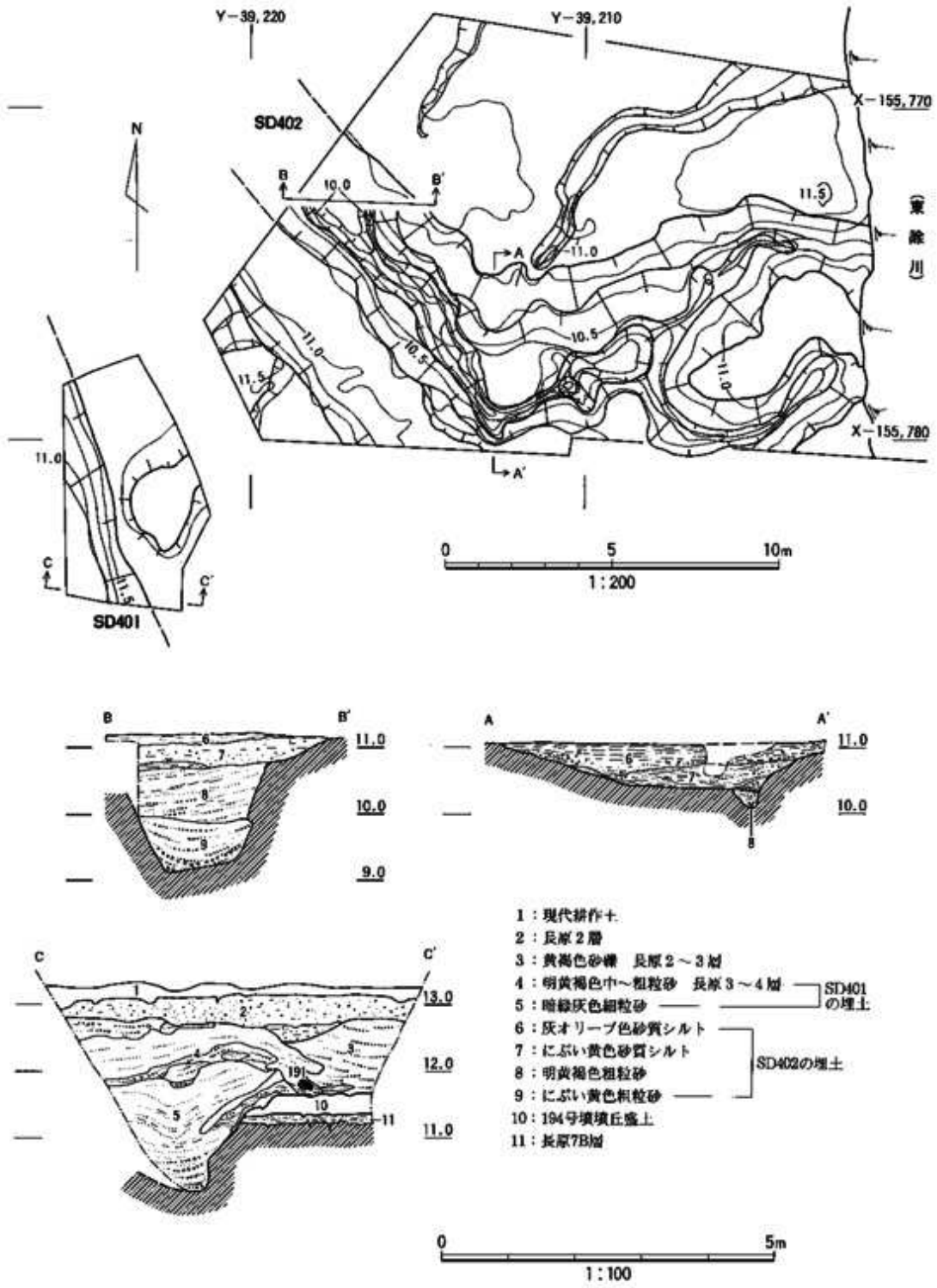


図62　Ⅳ区SD401・SD402

の同定をするため、可能な限り接合作業を行った。

同定の結果(註２)、表４に示す45点の部位が判明した。頭蓋では、脳頭蓋を構成する部位が多く、顔面頭蓋、特に顎骨や歯はまったく見られない。肋骨も少なく、現在蔵骨器にしばしば納められる軸椎の歯突起は入っていない。上肢骨では上腕骨などが部分的に認められた。もっとも大きなものと考えられるのが下肢の大腿骨で、左右の骨幹部分がさほど壊れずに納められていた。手(足)根骨・中手(足)骨・指骨も比較的多い。このような偏りは部位ごとの強度の違いだけでは説明できず、納骨に当ってのなんらかの選択性が現れていると推定できる。他資料との比較検討が今後の課題である。

また、眉弓の発達の程度や乳様突起の大きさから見て、性別は女性、ラムダ縫合の程度から見て、年齢は40才より若い成人の可能性がある。

SD402(図61・62、図版17・43)

Ⅳ区西部に位置し、東西方向に蛇行する溝である。上面を東除川によって削られているため確実な掘込み面を明らかにすることはできなかったが、瓦器皿196が出土したことから平安～鎌倉時代の溝と判断した。幅は２～７mで東部で二股に分かれている。深さは0.5～2.0mとまちまちで、最深部は長原15層以下と思われる砂礫層まで達している。埋土は下部は水成層のラミナ構造が顕著であるが、上部はラミナとともに粘土ブロックを多量に含んでいる。以上のように人為的に埋戻した痕跡が認められるが、幅や深さが一定でなく蛇行していることから、この溝が人工的に掘削されたものであるかは不明である。埋土のようすから西方のSD401と同一の溝の可能性があるが、調査区内では直接つながらないため確認できなかった。

196は瓦器小皿である。内面の暗文は平行線のあと、円を描く。外面に暗文はない。197は土師器小皿である。これらは12世紀後半のものと考えられる。

７)江戸時代の遺構と遺物

ｉ)東除川(ひがしよけ)(図63～66、図版18・43～45)

Ⅳ区で南北方向の河道を検出した。長原４層段階で検出した河道は２段になっており、上段は幅21.5m、深さ0.5mで、下段は幅12.0m、深さ1.3mである。最深部はTP+9.4mで、現地表より約3.5m下にある。埋土はすべてシルト～亜円礫の水成層で、強い水流によるラミナ構造が顕著である。これらの段の上位にはさらに厚い砂層が全面に分布していることから、大和川付替以前の長原２層段階には川幅は約60mほどであったと推定できる。

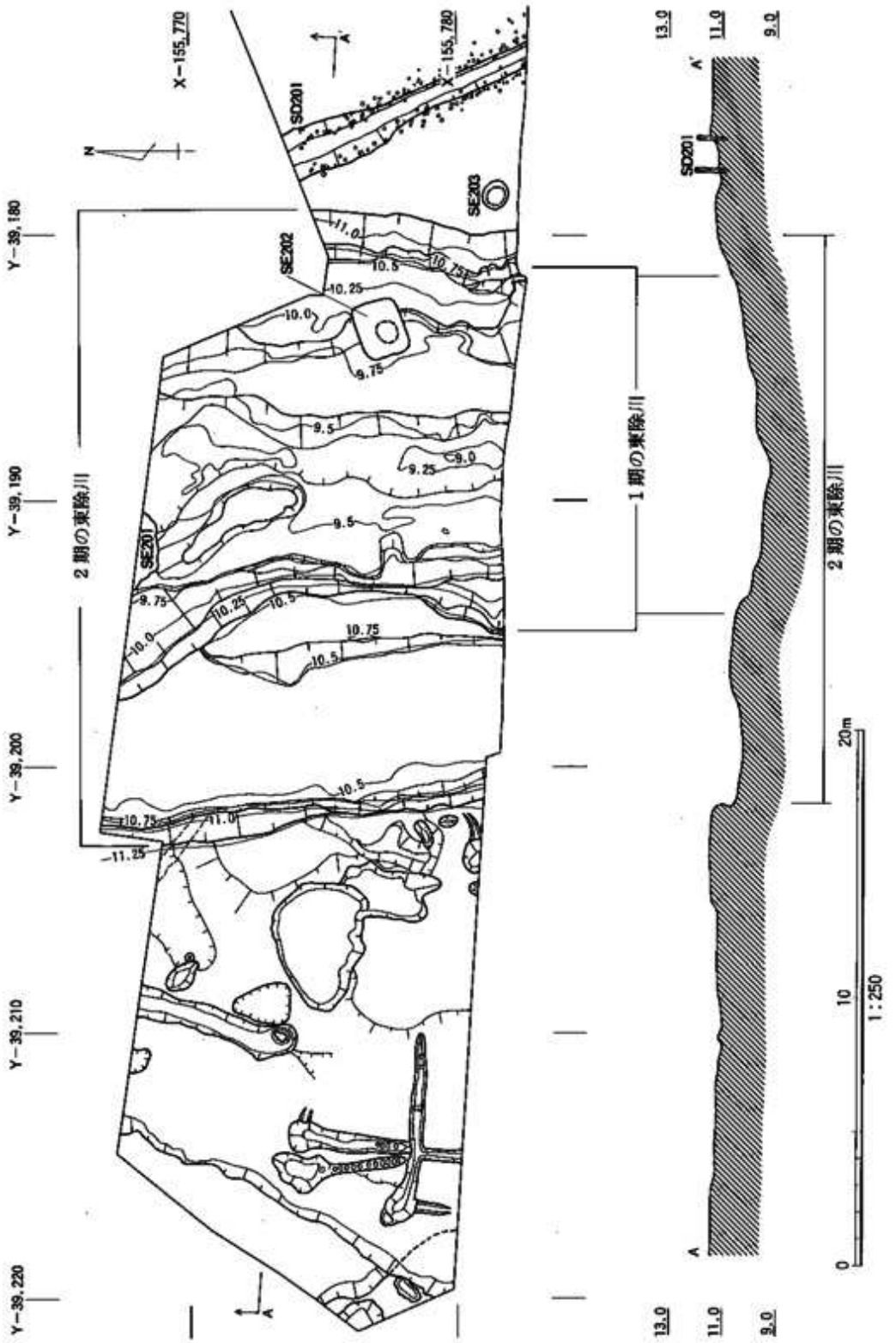

X−155,770
X−155,780
Y−39,180
Y−39,190
Y−39,200
Y−39,210
Y−39,220
N
SD201
SE202
SE203
SE201
2期の東除川
1期の東除川
2期の東除川
A
A'
13.0
11.0
9.0
11.0
10.5
10.75
10.25
10.0
9.75
9.5
9.25
9.0
10.75
10.5
10.0
9.75
10.25
10.5
10.5
10.75
11.0
11.25
20m
10
0
1:250

図63　Ⅳ区東除川

遺物はTP+11.0m以下の砂の中から出土した。198～229は土師器小皿である。198～212は口径9.0～10.0cm、器高1.2～1.7cm、器厚は0.3～0.5cmである。端部をて字状に屈曲させる。胎土中に大きな砂粒を含まないものは198・199・203・207・211で、切込み状の継目痕が残るものは206・211・212である。粘土紐の継目が残るものは198・202・207・210である。これらはいずれも11～12世紀のものである。213～219は端部のて字状の屈曲が弱く、伸びた感じがするものである。口径8.0～10.0cm、器高1.4～2.0cm、器厚は0.6cm前後でやや厚い。12世紀ごろのものである。220～229は端部をて字状に作らないものである。口径は8.8～10.0cm、器高1.4～2.7cm、器厚は0.5～0.7cmである。221・222は端部外面に2段のヨコナデを行い、220～225・228は1段のヨコナデを施す。226・227・229は外面底部に放射状に並ぶユビオサエがある。粘土の継目はなく、内面もなめらかであるため、内型を使って作ったものと考えられる。これらは13～14世紀のものである。

230～244は土師器皿である。調整や器形から、241・243は10世紀ごろ、230・232・239は11～12世紀ごろ、そのほかは13～14世紀ごろのものと考えられる。

245は白磁皿である。器厚は薄く、口縁部は外反する。246は青磁小鉢である。ともに14世紀ごろのものである。

247は土師器羽釜である。口縁部は丸く作り、5cm下に幅約3cmの鍔を付ける。15世紀ごろのものである。

248～254・257は瓦器椀である。248・249・251は器高・高台ともに低い。内面には見込みに太く粗い平行線状の暗文のあと、側面に円状の暗文を施す。外面に暗文はない。13世紀後半に相当する。250は器高が高い。内面の見込みには斜格子状の暗文を施す。外面に暗文はないがユビオサエが顕著である。13世紀前半のものである。252～254・257は12世紀前半から中ごろのものである。器高・高台ともに高く、内外面に暗文を施す。257は磨耗のため内面の暗文はわからない。

255・256は黒色土器椀である。255は内黒焼成である。外面には上部のみ、内面には側面のみに太い暗文を施す。外面の底部付近は削っている。口縁端部には1条の弱い凹線を巡らす。256は両黒焼成である。内外面に密に暗文を施す。これらはともに12世紀前半のものと考えられる。

258は土師器椀である。内外面に太い暗文を施す。10世紀ごろと考えられる。259は土師器ミニチュア甕である。てづくね成形で、粘土紐の接合痕と口縁部のユビオサエが顕著である。奈良時代後半のものである。260は土師器杯である。口縁端部には弱い凹線が巡る。

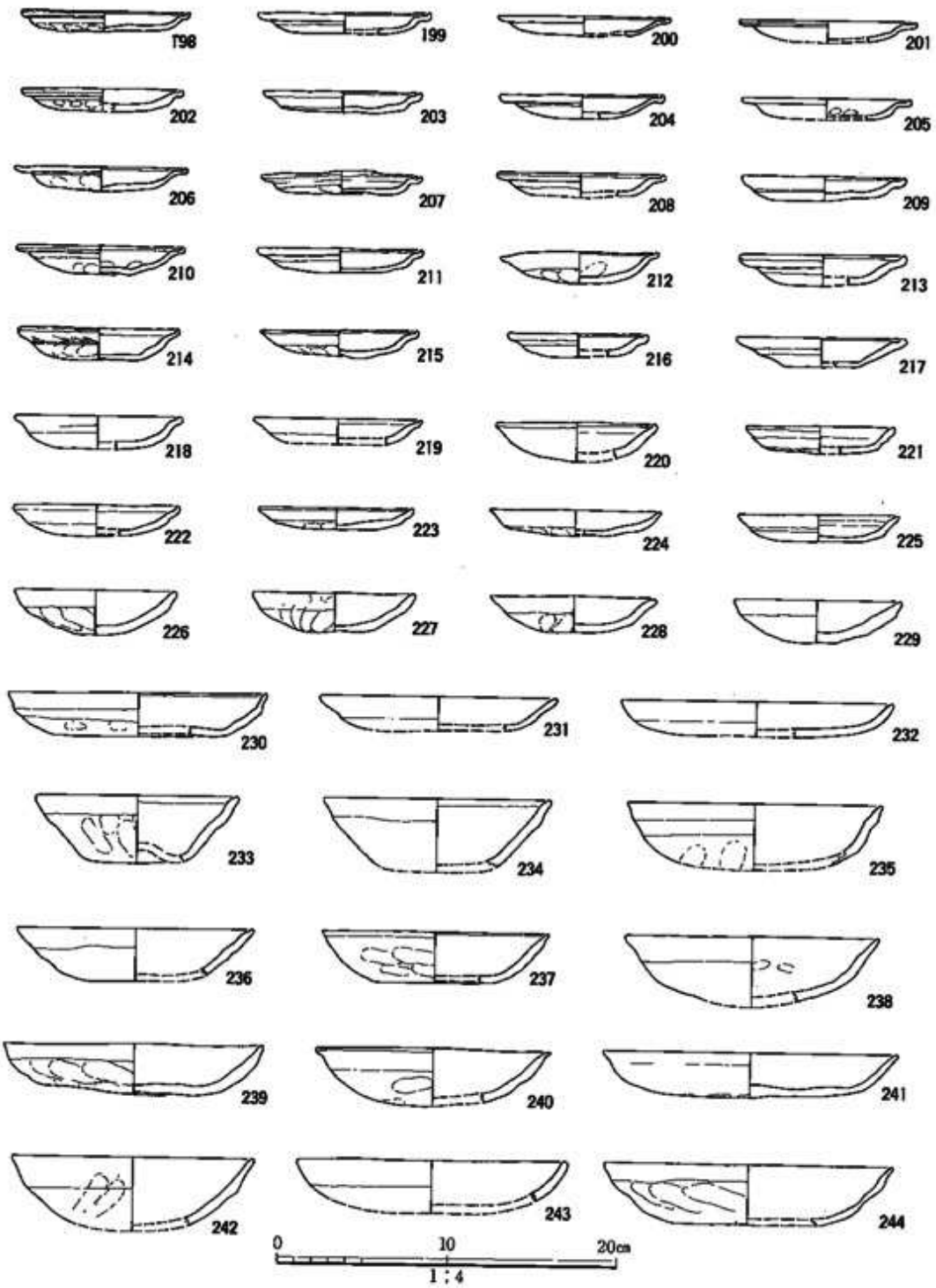


図64　東除川出土の遺物（土器）

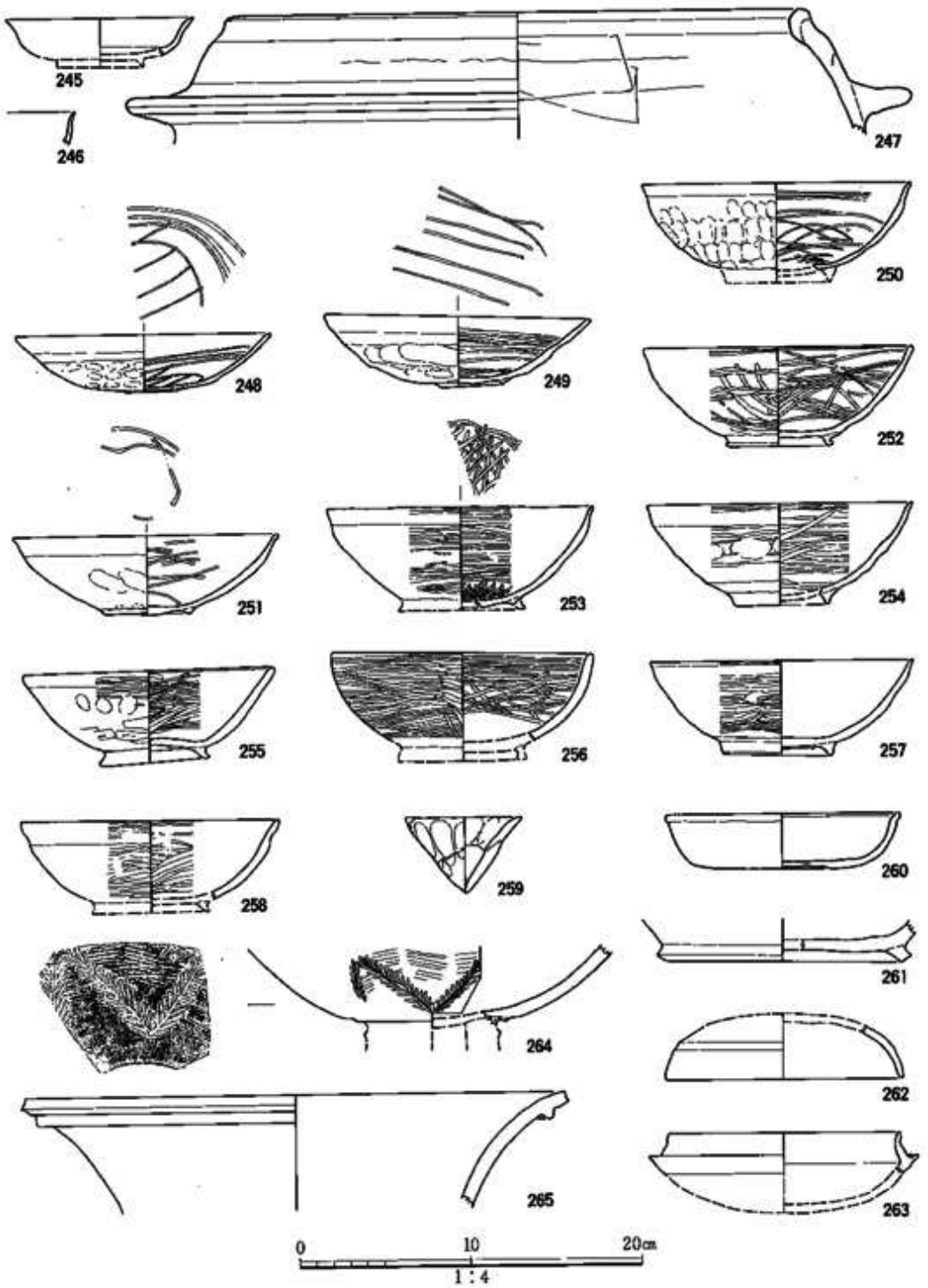


図65　東除川出土の遺物（土器）

暗文はない。平城宮Ⅲに相当し、奈良時代中ごろのものである。261は奈良時代の須恵器壺の底部、262・263はTK43型式の須恵器杯蓋・身である。264は須恵器器台の杯部である。外面には平行タタキのあとヨコナデし、表面が軟らかいうちに線刻の文様を施している。文様はまず器体を逆位に置いて、右から左方向に鋸歯状の線刻を施したあと向って左側の葉状の平行文を線刻し、そのあと右側の葉状の平行文を線刻している。平行文は上から下に施している。265は須恵器甕である。

266・267は朝顔形埴輪である。口頸部の内外面は横および斜め方向のハケによる調整を行う。肩部は外面にタテハケを、内面はユビナデを行う。267には頸部外面に2本の短い線刻がある。268は衣蓋形埴輪の蓋部である。黒斑がある。269・270は円筒埴輪である。269は内外面ともにナデている。タガは低く、断面は三角形である。270も調整は同様である。タガは低く、幅が広い。円筒埴輪は川西編年のⅤ期に相当する。

271は結晶片岩製の石庖丁の破片である。全体にローリングによる磨耗が著しく、製作に係わる研磨の状況は不明瞭である。刃部側はすべて失われ、石庖丁に認められる1対の穿

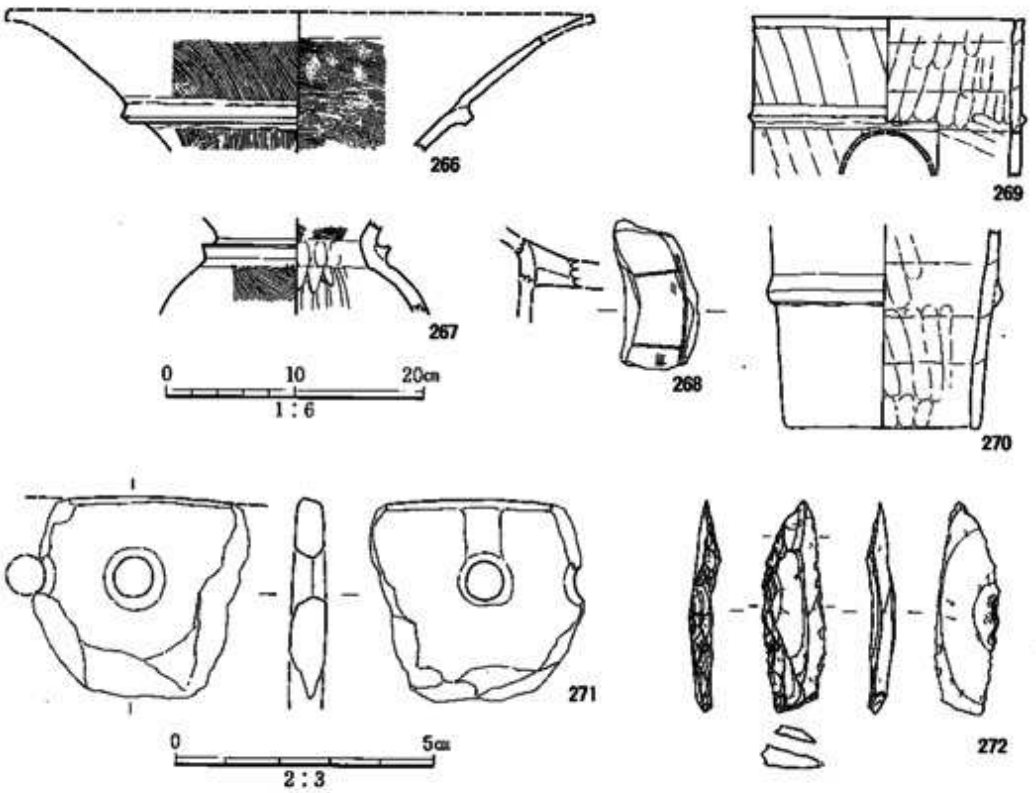


図66　東除川出土の遺物（埴輪・石器）

孔も、1個が破片中央にあり、もう1個は一部のみが残存している。小孔は表裏両面から穿孔され、外径1.04cm、内径0.78cmである。両者の心心の間隔は約2cmである。

272は有底剥片を素材とした国府型ナイフ形石器である。先端は折れている。全体にローリングを受けて磨耗している。背面には先行する有底剥片を採取した剥離面が見られるが、基部側にも同様の剥離面の一部が取込まれているため、素材剥片の剥離は並列剥離であったとも考えられる。細部調整はすべて主剥離面側から行われており、一側縁調整である。

ii)溝

SD201(図63・67、図版45)

Ⅳ区の東部で検出した、南東－北西方向の溝である。規模は幅1.5m、杭の上端からの深さは0.8cmである。東西両岸には直径約10cmの丸太杭を約140本も打設している。溝は東除川の砂層を切って造られていることから、護岸のために何重にも杭列を打設したものと考えられる。埋土は黒灰色のヘドロ状の砂質シルトである。

埋土中から角力とり形の土人形273が出土した。髷と顔面に墨を入れる。前後の型を合わせているが少しずれている。底部には串で刺したような穴が斜めに開けられている。18世紀ごろのものである[中川信作1986]。

iii)井戸

SE201～SE203(図63)

Ⅳ区の中央部で検出した、東除川の長原2層の砂礫層を掘込んだ井戸である。おそらく大和川付替のあとに造られた江戸時代の井戸と考えられる。SE201は掘形が円形で直径約3mと推定できる。SE202は掘形は1.7m×2.2mの長方形で、西寄りに瓦製の井戸側を直径0.8mになるように据えている。SE203は掘形は0.9mの円形で、掘形いっぱいに瓦製の井戸側を据えている。

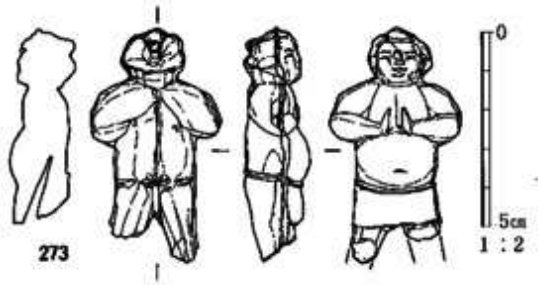


図67　Ⅳ区SD201出土の遺物

8)小結

i)古墳

長原遺跡西南・南地区からは、9基の古墳が見つかった。なかでも**長原195号墳**はこれまで古墳が存在することがわかっていなかった地域で見つかり(図20)、なおかつ墳丘の保存状態がきわめて良好であった。今後、周辺の調査が進み長原古墳群の分布範囲がさらに拡がれば、全国的に見ても長原遺跡が5～6世紀にかけての約150年間に小方墳が累々と築かれた特異な地域であるという位置づけがますます顕著となろう。今回見つかった古墳を築造年代の古い順に示すと、**一ケ塚古墳・長原196号墳**(5世紀初頭)→**長原83号墳**(5世紀中)→**長原82・194号墳**(5世紀後)→**長原80・193・195号墳**(5世紀後～末)となる。築造場所による年代の新旧は認められなかった。墳丘の形は造出しをもつ円墳の**一ケ塚古墳**を除いてすべて方墳であった。ただし、全体を検出できたものはなく、それぞれについて造出しの有無はわからない。

ii)東除川

東除川は宝永元(1704)年の大和川付替以前に大阪平野を南から北に向って流れていた人工の川である。河道は現在でも地籍図上に於いてたどることができる(図68)。今回はⅣ区で東西方向に河道を横断して調査したが、最終段階の川の東西岸は調査区の外にあり検出することはできなかった。しかし、川底を調査できたことによって多数の遺物が見つかり、川幅が時代を追って徐々に拡がっていったことがわかった。すなわち、1期の川幅は約12m、深さ約1.5mで、2期の川幅は約23m、深さ約2.5mとなり、最終段階の3期には川幅は60m以上であったと推定できる。これらの時期の大まかな年代は出土遺物から考えて1期が奈良時代以前、2期が平安時代から室町時代、3期が室町時代から大和川付替までとなる。**東除川**の開削年代については[木原克司1982]・[広瀬和雄1983]などいくつかの議論があるが、[趙哲済・京嶋覚・高井健司1992]では長原古墳群築造後、長原7A層形成直前の古墳時代後期(6世紀)後半のある時期と結論づけている。今回の調査でも仮に**193号墳**の周溝を含めた規模を一辺約15mとすると、もっとも狭い1期の川にも切られることがわかった(図69)。つまり**193号墳**は**東除川**より古いといえ、[趙哲済・京嶋覚・高井健司1992]の結論を裏付ける結果となった。

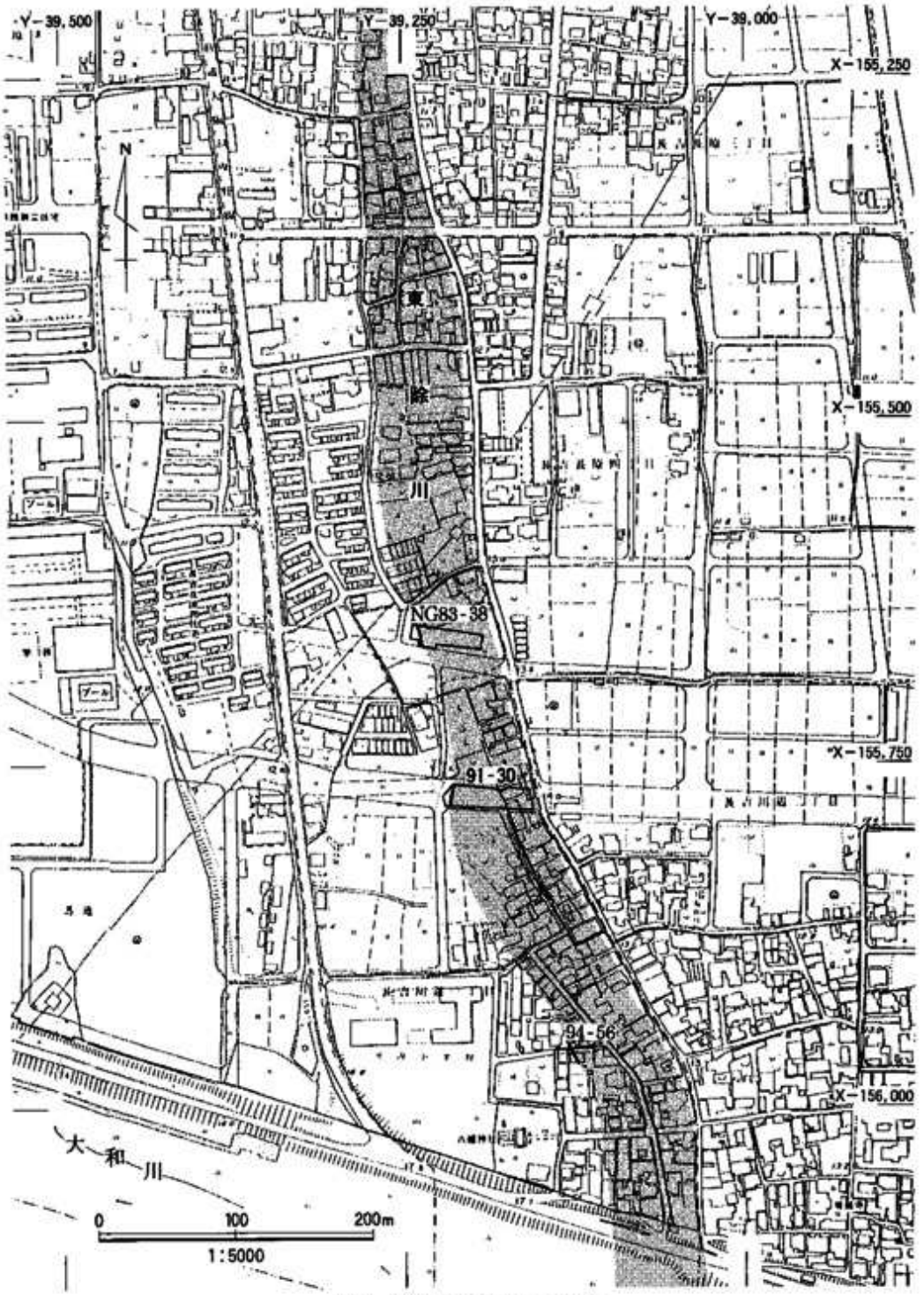


図68　江戸時代の東除川の河道

註

(1)母岩の分類は15倍率のルーペを用いて行い、肌理の粗密さ・流理構造の粗密さと明瞭さ・風化の特徴について観察した。

(2)板材の樹種および年代の分析は年輪年代測定法に基づいて奈良国立文化財研究所光谷拓実氏に行っていただいた。記して感謝する次第である。

(3)部位の同定は、大阪市立大学医学部第二解剖学教室の安部みき子先生に行っていただいた。時間的な制約があるなかでご協力いただいた。内容に不備がある場合には当協会および筆者にその責があることを明記しておきたい。

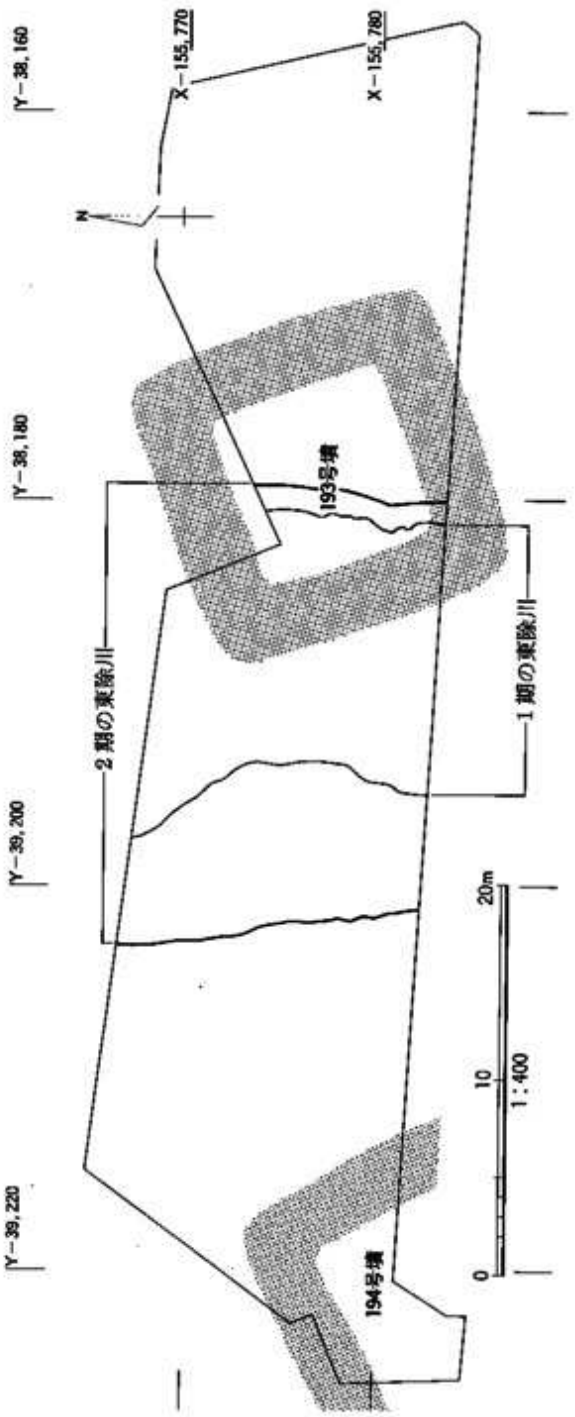


図69　東除川と長原193・194号墳

第3節　長原遺跡東南地区の調査

1)調査地の層序

i)はじめに

調査地は長原遺跡の南部基本層序[大阪市文化財協会1995]に対応する地区にある。地層はよく保存されており、場所によっては厚さ2.0mにわたって長原1層から14層まで良好に観察することができた。

ii)層序(図70～73、図版19・20)

沖積層上部層Ⅰ

長原0層：現代の客土層である。層厚は50～150cmである。

長原1層：黒褐色(2.5Y3／2)砂質シルトの現代の作土層で、層厚は10～50cmである。

長原2層：にぶい黄色(2.5Y6／4)中粒砂混り粘土質シルトの作土層で、層厚は10～20cmである。Ⅰ・Ⅱ区ではヒトおよびウシの足跡を、Ⅳ区の下面で南北方向の小溝を多数検出した。Ⅱ区では西部で層厚約2cmの水成層を間に挟んでいる。

長原3層：灰黄色(2.5Y6／2)砂質シルトの作土層で、層厚は約10cmである。瓦器・瓦質土器を含む。Ⅰ区では下面でヒトの足跡を検出した。

長原4層：にぶい黄色(2.5Y6／3)～黄褐色(2.5Y5／3)粘土質シルトの作土層で、層厚は30～50cmである。瓦器・土師器を含む。Ⅰ・Ⅱ区では4A・4Bii・4Biii層を確認した。4A層はにぶい黄色(2.5Y6／4)粗粒砂の水成層で、層厚は2～20cmである。Ⅳ区では4A・4Biii・4C層を確認した。4Biii層は上下2層に分かれ、上層は黄褐色(2.5Y5／4)細～粗粒砂の水成層である。4C層は暗黄灰色(2.5Y6／2)シルトの作土層である。層厚は約10cmで、下面に踏込みが多数見つかった。

長原6B層：黒褐色(10YR3／1)シルト質粘土の作土層で、層厚は約10cmである。おもにⅡ区で確認した。長原7A層を含めて耕作しているために、古墳時代の須恵器・土師器を比較的多く含む。

長原7A層：にぶい黄褐色(10YR4／3)～黒褐色(10YR3／1)粘土質シルトで、層厚は5～20cmである。Ⅰ区の西半部とⅣ区のSD902の凹みの中に分布する。Ⅰ区では下面でSD701を、Ⅳ区では下面でSD703を検出した。

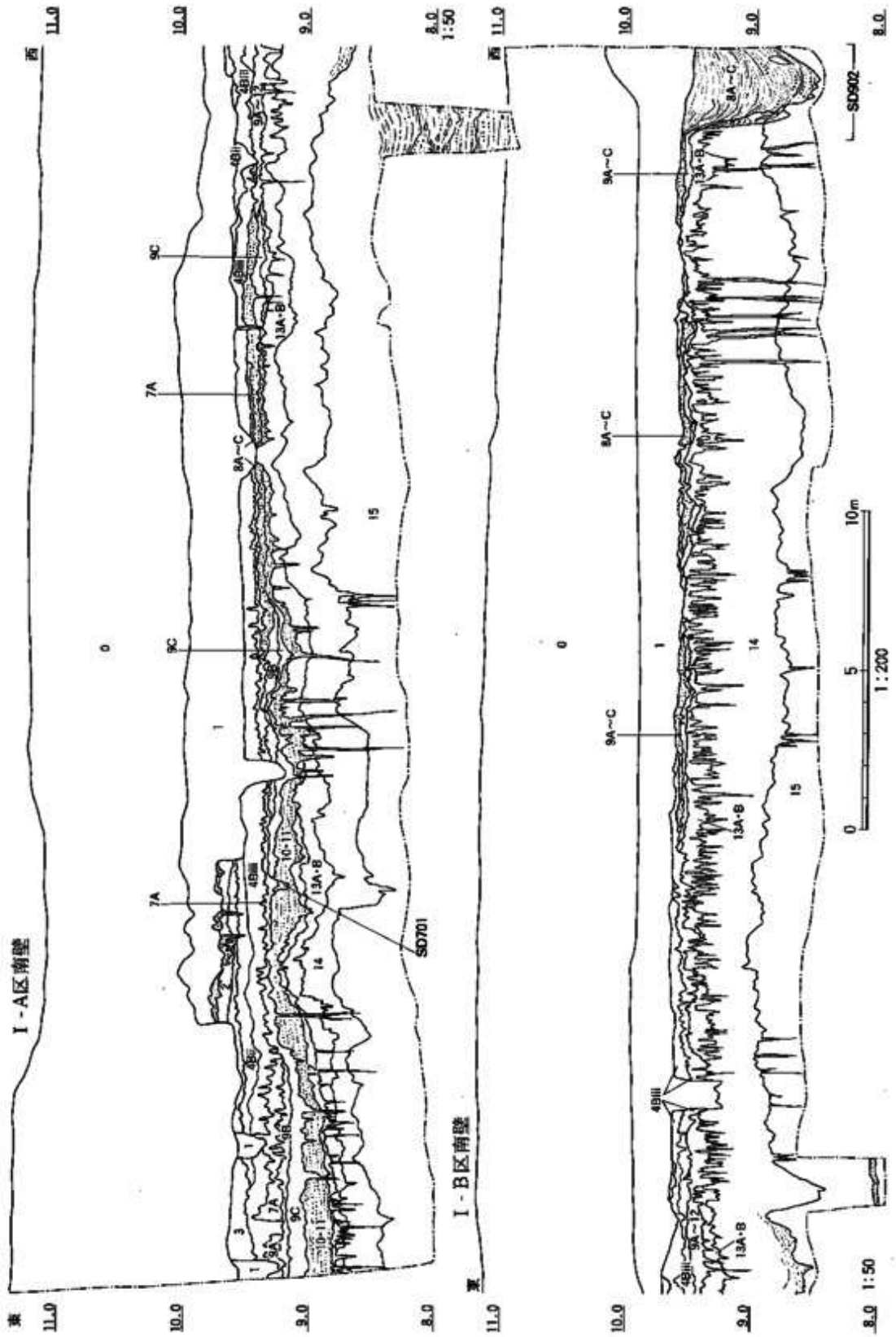


図70　I区地層断面

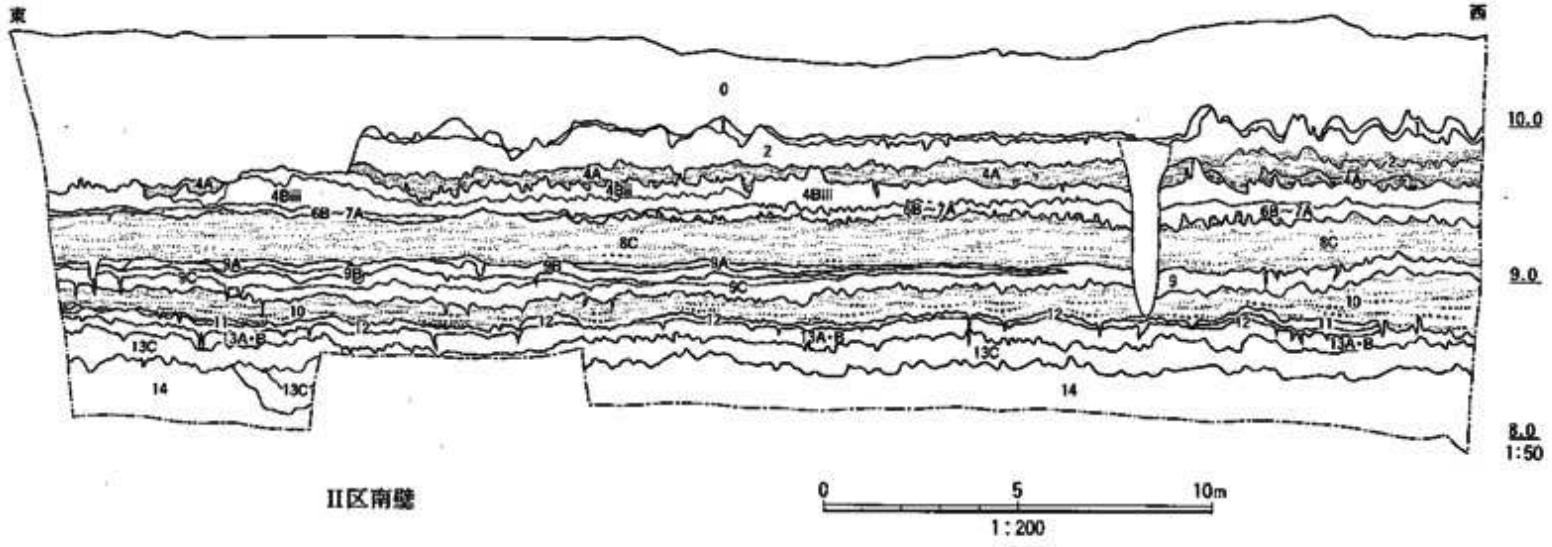
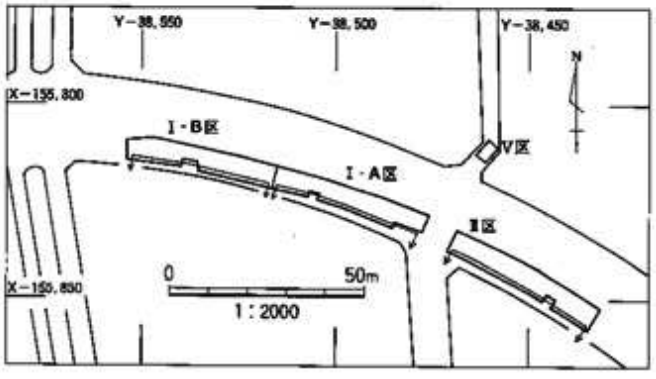

東
西
10.0
9.0
8.0
0
2
4A
4Bm
4BIII
6B－7A
8C
9A
9B
9C
10
12
13A・B
13C
13C1
14
II区南壁
0
5
10m
1：200

図71 II区地層断面


Y－38,550
Y－38,500
Y－38,450
X－155,800
X－150,850
N
I－B区
I－A区
V区
II区
0
50m
1：2000

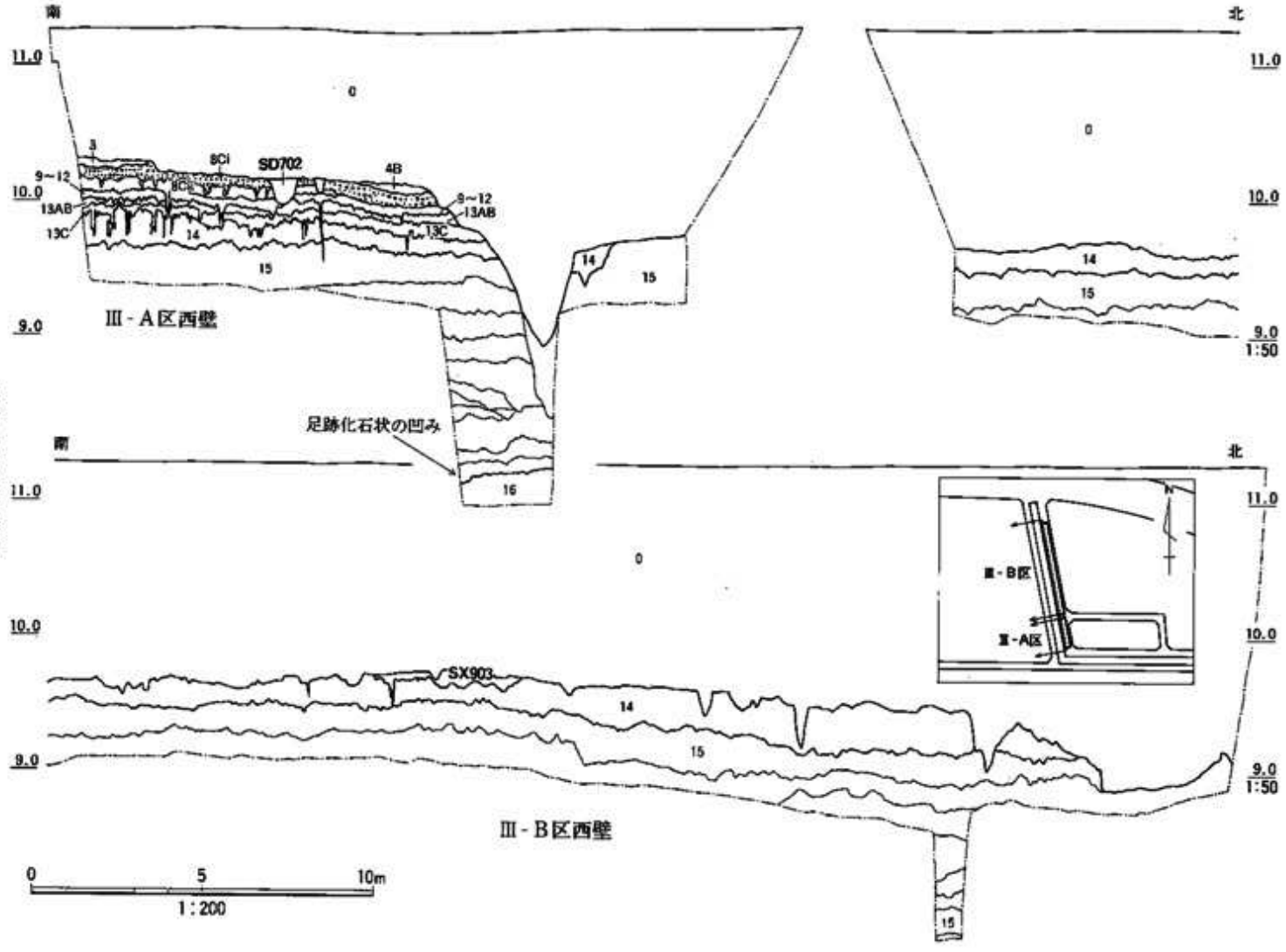

南
北
11.0
10.0
9.0
0
3
8Ci
SD702
4B
9~12
13AB
13C
14
15
16
Ⅲ-A区西壁
足跡化石状の凹み
Ⅲ-B区
Ⅲ-A区
SX903
Ⅲ-B区西壁
1:50
0
5
10m
1:200

図72 Ⅲ区地層断面

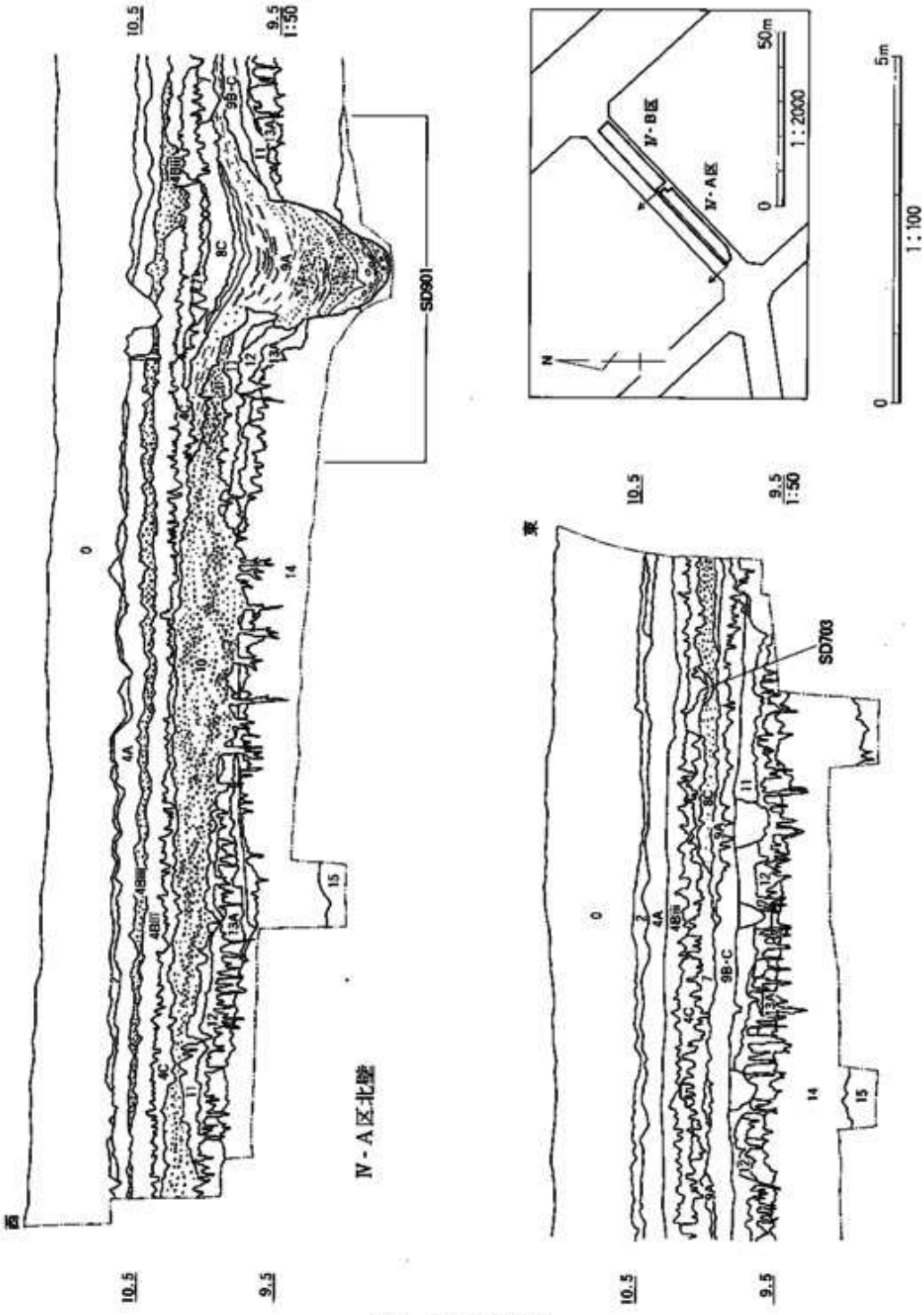


図73　Ⅳ区地層断面

沖積層上部層II

長原8C層：オリーブ褐色(2.5Y4／4)～褐灰色(10YR5／1)の水成層で、8Ci・8Cii層に分かれる。8Ci層は粗粒砂を主体とし、8Cii層はシルトを主体とする。層厚はそれぞれ5～20cmである。

長原9A層：黒褐色(10YR3／1)粘土質シルトで、層厚は約5cmである。ただし、Ⅳ区のSD902内には水成層として厚く堆積している。また、上面では小穴群を検出した。Ⅰ・Ⅱ区では12層および9B層との境界が不明瞭である。

長原9B層：褐色(7.5Y4／3)砂質シルト～粘土質シルトで、層厚は5～10cmである。Ⅰ区ではLC901を、Ⅳ区では上面でSD902を検出した。

長原9C層：黒褐色(10YR3／1)～褐色(7.5Y4／3)砂質シルトで、層厚は約20cmである。Ⅰ区では下面でLC902を検出した。

長原10層：暗灰黄色(2.5Y5／2)細～粗粒砂の水成層で、層厚は10～50cmである。Ⅰ区では11層との境界は明瞭でない。Ⅳ区では古川辺川から派生したと考えられる東西方向の流路内に堆積している。

長原11層：灰黄色(2.5Y6／2)シルトで、層厚は約10cmである。

沖積層中部層

長原12層：暗灰色(10YR4／1)粘土質シルト～シルトで、火山ガラスを少量含む。層厚は約5cmである。下面には長原14層まで達する乾痕が認められる。Ⅱ区から石鏃・有茎尖頭器が出土した。

長原13層：黄褐色(2.5Y5／3)砂質シルト～粘土で、火山ガラスを少量含む。層厚は約15cmである。Ⅰ区では中央部以東で浅い谷状地形をなしており、これを東に臨む位置からLC1301が見つかった。Ⅳ区では西端の高まった位置でLC1302が見つかった。

低位段丘構成層

長原14層：にぶい黄色(2.5Y6／4)粘土で、層厚は約30cmである。

長原15層：にぶい黄色(2.5Y6／4)粘土～礫で、層厚は約160cmである。

写真7　Ⅲ－A区足跡化石状の凹み

中位段丘構成層

長原16層：緑灰色(5G5／1)粘土である。上面で足跡化石状の凹み(写真７)を検出した。凹みは小型のもので直径８㎝、大型のもので直径40㎝ある。それぞれ偶蹄類の足跡、ナウマンゾウの足跡の可能性がある。

２)各層出土の遺物

長原２層出土遺物(図74)

282は黒色土器椀である。高台内に小さな突起がある。

長原３層出土遺物(図74、図版46)

275は瓦器椀である。高台は低く、断面は三角形である。内底面に粗い斜格子状暗文を施す。285は土師器小皿である。口縁はて字状で、器壁は約２㎜と薄い。297は須恵器蓋である。全面をていねいなヨコナデで仕上げる。つまみは細長く、片寄って付いている。306は土師器蓋である。つまみは低く、頂上部が凹んでいる。275は13世紀中ごろ、285は11世紀、297・306は９世紀後半のものである。すべて下位層からの混入である。

長原4B層出土遺物(図74、図版46)

276～279・281は瓦器椀である。276～278は内底面に斜格子状暗文を施す。279は３方向からの斜格子状暗文を施す。いずれも高台は断面が尖った三角形を呈する。280は瓦器小皿である。見込みには細い平行線状暗文を施すが、底が凸凹なためとぎれとぎれである。そのあと側面の暗文を行う。これらは12世紀中ごろ～後半のものである。

284・286～290は土師器小皿である。286・289は端部がて字状である。器壁は５㎜と厚い。284・287・290は端部に１段のヨコナデを施すが、288は２段のヨコナデを施す。291は土師器皿である。端部に１段のヨコナデを施す。292は土師器羽釜である。これらは12世紀から13世紀のものである。293は土師器甕である。口縁を外方につまみ出している。10世紀ごろのものである。283は黒色土器椀である。内黒焼成である。

294は須恵器壺の口縁部である。内面にオリーブ灰色を呈する自然釉が厚くかかる。295は須恵器壺の底部である。大きな高台が外方に向って張出す。296は須恵器平瓶の把手である。これらは９世紀中ごろのものである。300は須恵器杯蓋、305は須恵器甕である。300はTK43型式、305はON46型式に相当する。292～296・300・305は下位層からの混入である。

長原4C層出土遺物(図74)

274は灰釉陶器皿である。見込みには薄く灰釉がかかり、重ね焼き痕がある。高台はやや

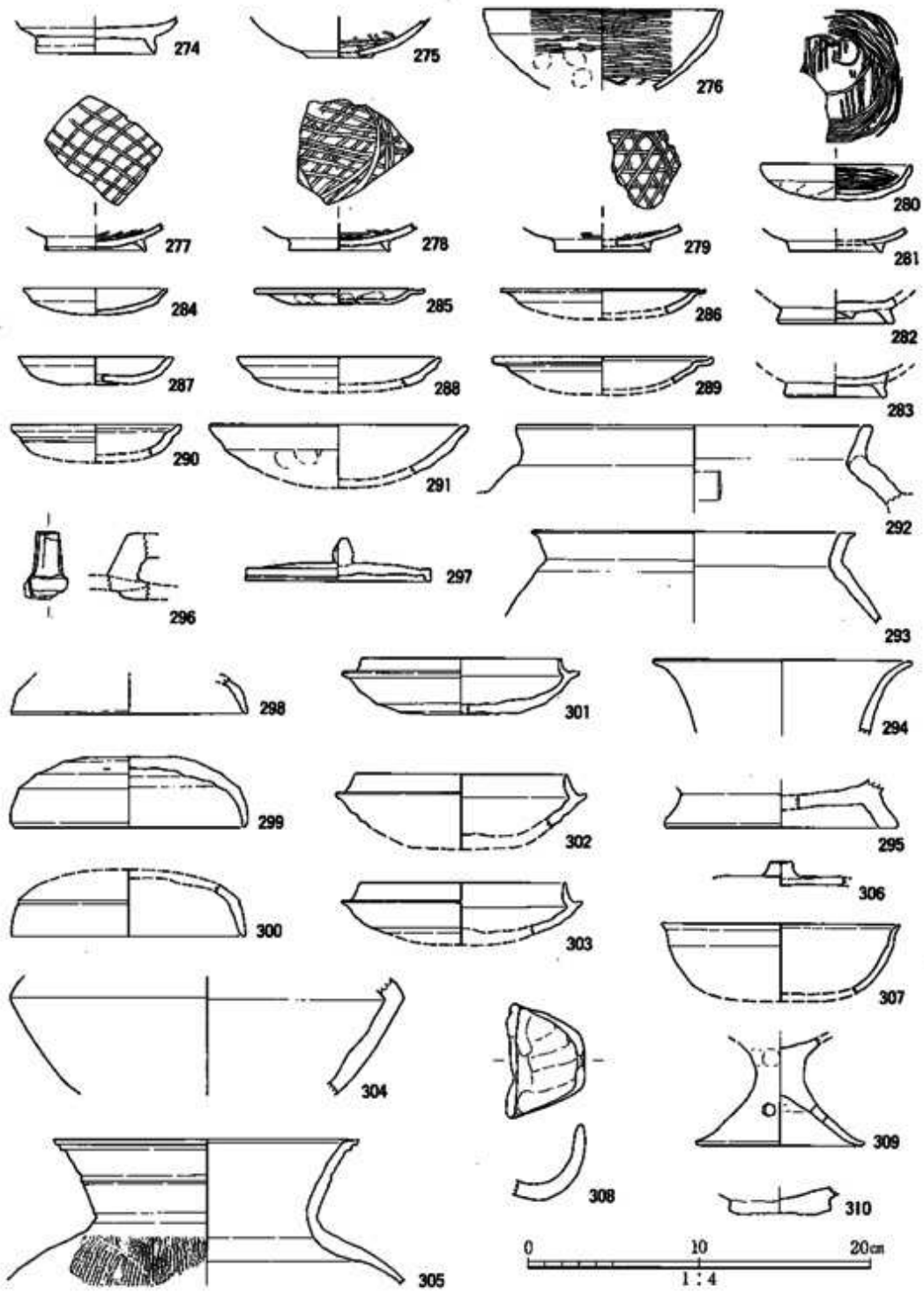


図74　各層出土の遺物（土器）

外反し、端部は尖っている。9世紀後半のものである。

長原6層出土遺物(図74、図版46)

298・299は須恵器杯蓋である。299は端部外面を面取りする。301～303は須恵器杯身である。かえりの端部は細く丸く仕上げており、受け部は水平に伸びる。これらはTK43～TK209型式に相当する。304は須恵器壺の肩部分である。307は土師器杯である。口縁端部は細くつまみ上げる。暗文はない。308は土師器の把手部分である。厚みは約0.8cmで、垂直に近く曲げられている。309は土師器高杯である。これらは7世紀前半のものである。

長原8A層出土遺物(図74)

310は弥生土器壺の底部である。2mm大の砂粒を多く含む。

長原8C層出土遺物(図75、図版47)

311は打縁と刃縁[清水和明1991]が認められるクサビの本体である。裁断面や折れ面によって分割された剥片の一部を利用している。全体の形状は逆三角形である。打縁は図の上端で、平坦な剥離面を繰返し敲打したために、打点が潰れた細かい剥離面が直線に並んでいる。刃縁は図の下端で打縁に並ぶ剥離面と逆方向の剥離面が本体の表裏面に形成されている。なお、出土層準は弥生時代中期前葉であるが、風化状況は縄文時代以前の石器遺物と共通するものである。324は平基無茎式石鏃である。作用部側縁と基部は直線的に作られる。平面形が二等辺三角形を呈することからE－1類に分類される。当類は長原9C～9A層からの出土例がある。やや大型の石鏃であるが、その割には薄手である。完形品であり、切っ先角は42°である。

表5　各層出土の遺物

地区	地層	遺物番号
Ⅰ区	長原3	285・297・306
	長原4B	276～279・286・292・294・295・300・305
	長原6	308
	長原8A	310
	長原9A～9C	312
	長原9C	329～332
	長原9～12	333～335
	長原12	313・318・321・322
	長原13	336・338
Ⅱ区	長原2	282
	長原4B	283・289～291・293
	長原6	298・299・301～303・307
	長原9A	327・328
	長原12	323・325
	長原13	337
	長原14	326
Ⅲ区	長原3	275
	長原4B	288
	長原4C	274
	長原6	304
	長原8C	324
	長原9A～9C	319
	長原9～12	316
Ⅳ区	長原4B	280・281・284・287・296
	長原6	309
	長原8C	311
	長原12	314・315・317・320

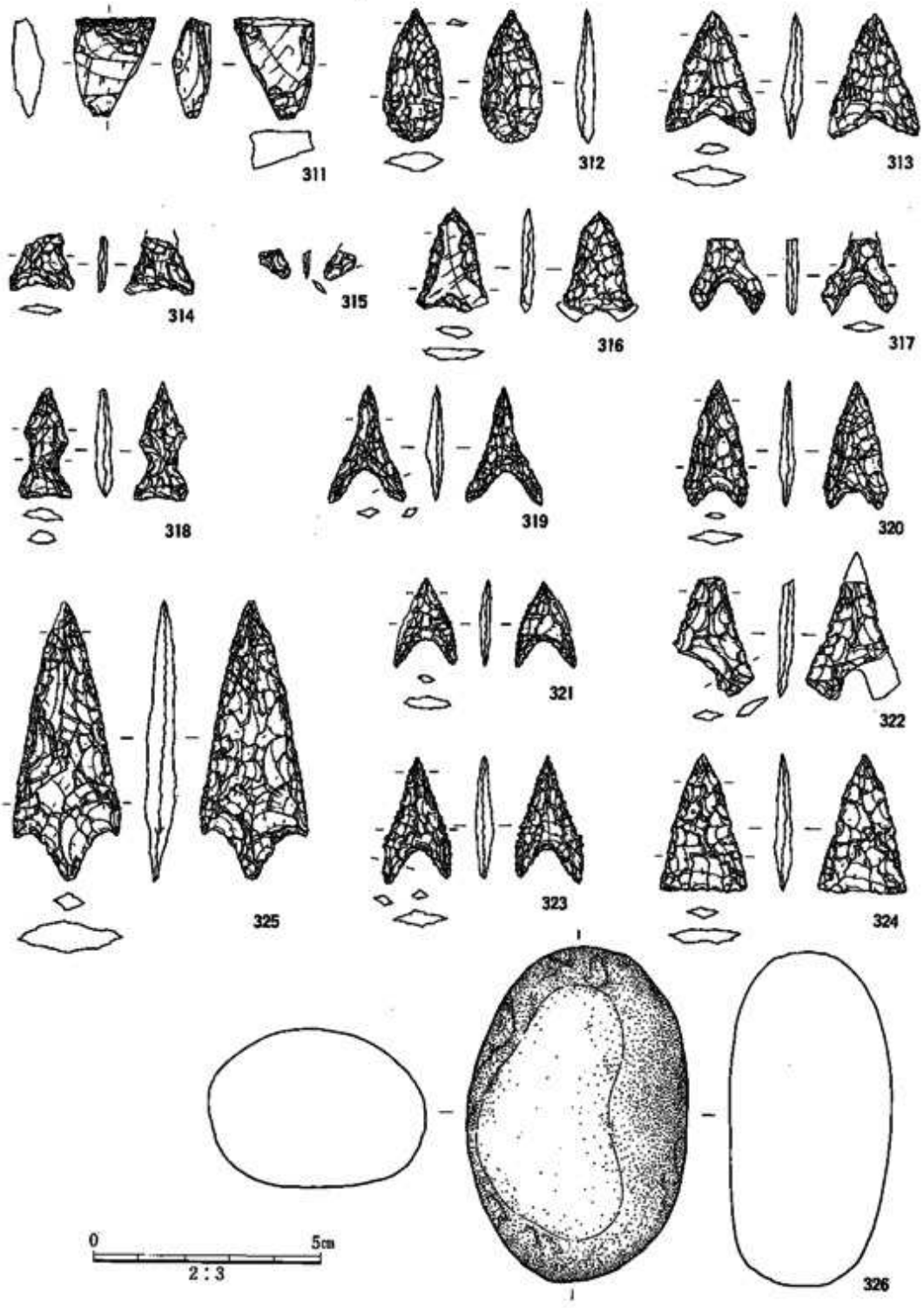


図75　各層出土の遺物（石器）

長原9A層出土遺物(図76、図版47)

327は板状に割れた結晶片岩の一部に研磨したと考えられる痕が残るものである。現状の縁辺はほとんど欠損しているが、図の下縁には数面の剥離面がある。それらの剥離面は石庖丁の刃部のような研磨による平坦面とは異なり、剥離面の凹凸に沿って全体が磨耗している。さらに、その上部の平坦に近い面も幅1.5cm程度を研磨しているが、こちらは表面の凸部のみが磨耗した状況である。328は原面打面の剥片である。右図上部中央には原面を打面としたバルブが認められるが、その右端から主剥離面が拡がっている。このバルブ部分は先行した加撃による潜在割れが主剥離面形成時に剥離したものと思われ、加撃は比較的大きな力で行われたものであろう。主剥離面の左側に位置する先行剥離面にも原面を打面としたと思われる潜在割れが取込まれている。また、背面の左側にも原面上打面と思われる大きな剥離面があり、この剥片が母岩や石核を分割するような作業の中で剥離されたことが考えられる。右図左上に位置する剥離面や、それを打面とした左図右上の剥離面などは石核の整形を意図したものかもしれない。なお、背面側の先端にある2面の小さな剥離面は人為的な加工の可能性がある。これらは弥生時代前期のものと考えられる。

長原9A～9C層出土遺物(図75・97、図版47)

312は凸基無茎式石鏃である。平面形が幅広の木葉形を呈することからG－1類に分類される。当類は長原9A～8B層からの出土例がある。完形で、基部は円基となる。切っ先角は55°である。319は凹基無茎式石鏃である。作用部側縁がS字状で逆刺先端が尖ることからD－1類に分類される。当類はこれまで長原12／13～9C層からの出土例があるが、基部の抉りが深く全体に細身であることから長原9C層のものより古い様相が見て取れる。切っ先角は42°である。

長原9C層出土遺物(図76)

329は打面側が剥離時の事故によって欠損したと思われる剥片である。調整剥片の可能性がある。330は点状打面の剥片である。背面左上の細長い剥離面は主剥離面と同時に形成されたものである。その右側にも主剥離面と同方向の剥離面がある。それらに切られた、背面中央と左側の剥離面は左図右側からの剥離によるもので、特に左側のものは平坦で、石核の大きな剥離面の一部が取込まれたものと考えられる。なお、剥片の先端は折れている。331は原面上打面の剥片であるが、打点付近は潰れている。なお、背面も同一打面・同一方向のポジティブな剥離面であり、石核は剥片素材であったと考えられる。332は打面から背面に原面が取込まれた礫の縁辺に当る剥片である。背面には主剥離面と同一打面・同一方

向の剥離面が見られる。剥片は主剥離面の打点部を垂直に通る方向に折れているが、折れの方向はこの剥片の形成とは無関係である。これらは縄文時代のものと考えられる。

長原9～12層出土遺物(図75・76・97、図版47)

316は凹基無茎式石鏃である。左右の逆刺部を欠くが、平面形が五角形を呈するものと推測される。このことからF類に分類される。当類は長原12A～9C層からの出土例がある。片面に先行剥離面を広範囲に残す。切っ先の先端の角度は77°であるが、作用部のそのほかの部分は30°である。333は先端に原面が取込まれた剥片である。主剥離面の打面側は横折れで欠損している。主剥離面の先端に原面を打面とする対向方向の小さな剥離面が見られるが、細部調整のような意図はうかがえず、この剥片の形成が両極打法によるものと考える方が妥当であろう。背面の剥離面も原面打面で、主剥離面とはほぼ90°加撃方向を変えたものである。フィッシャーが発達し、リングの状況は、剥離面の中央付近でいったん止まりかけた剥離の進行が、その先端の一部から再び始まるような複雑なものである。この剥離面の先端にやはり、対向方向の小さな剥離面が見られ、先行する剥片剥離も両極打法によるものであった可能性も考えられる。背面および主剥離面ともに大きな力で剥離面が形成されており、母岩を分割して板状剥片を生産する意図をうかがうことができる。なお、剥片は横折れを起しているが、その折れ面に背面を打面とする剥離面が形成されている。やや風化が進んだ剥離面であるものの、剥片形成時より後代のものであろう。334は点状打面の剥片で、背面には主剥離面と対向する方向の2面の剥離面が並列している。剥片の先端は調査時に欠損している。調整剥片であろう。335は両側縁と先端に原面が取込まれた剥片で、打面側は折れて欠損している。主剥離面の先端には原面上打面の剥離面が並び、また、背面側にも同打面の剥離面が見られる。これらの剥離が行われた時期は不明であるが、剥片の主剥離面側と背面側に剥離面が形成されるような同方向の加撃が、数次にわたって繰返された点でクサビ本体の可能性が考えられる。これらは縄文時代のものと考えられる。

長原12層出土遺物(図75・97・98、図版23・47・48)

313は凹基無茎式石鏃である。平面形は二等辺三角形を呈し、逆刺の先端が尖る。このことからB－1類に分類される。当類は長原12／13～12A層からの出土例がある。やや大型の石鏃で、基部の抉りは浅い。作用部側縁が鋸歯縁となる。切っ先角は50°である。314は凹基無茎式石鏃である。作用部先端を欠損するが、平面形が五角形を呈するものと推測される。このことからF類に分類される。当類は長原12A～9C層からの出土例がある。切っ先角は欠損のため不明である。315は凹基無茎式石鏃と思われるもので、一方の逆刺部の破

片である。317は凹基無茎式石鏃である。作用部先端を欠損するが、作用部側縁がS字状を呈し、逆刺先端が尖る。このことからD－1類に分類される。当類はこれまで長原12／13層～9C層からの出土例がある。基部の抉りが深く、全体に薄手であることから、長原9C層のものとは異なる。切っ先角は欠損のため不明である。318は平基無茎式石鏃である。平面形が五角形を呈することからF類に分類される。当類は長原12A層～9C層からの出土例がある。作用部両側縁の下方が大きく内湾する。大きさの割に厚みがある。切っ先角は47°である。320は凹基無茎式石鏃である。作用部側縁が外湾し、基部の抉りが浅い。このことか

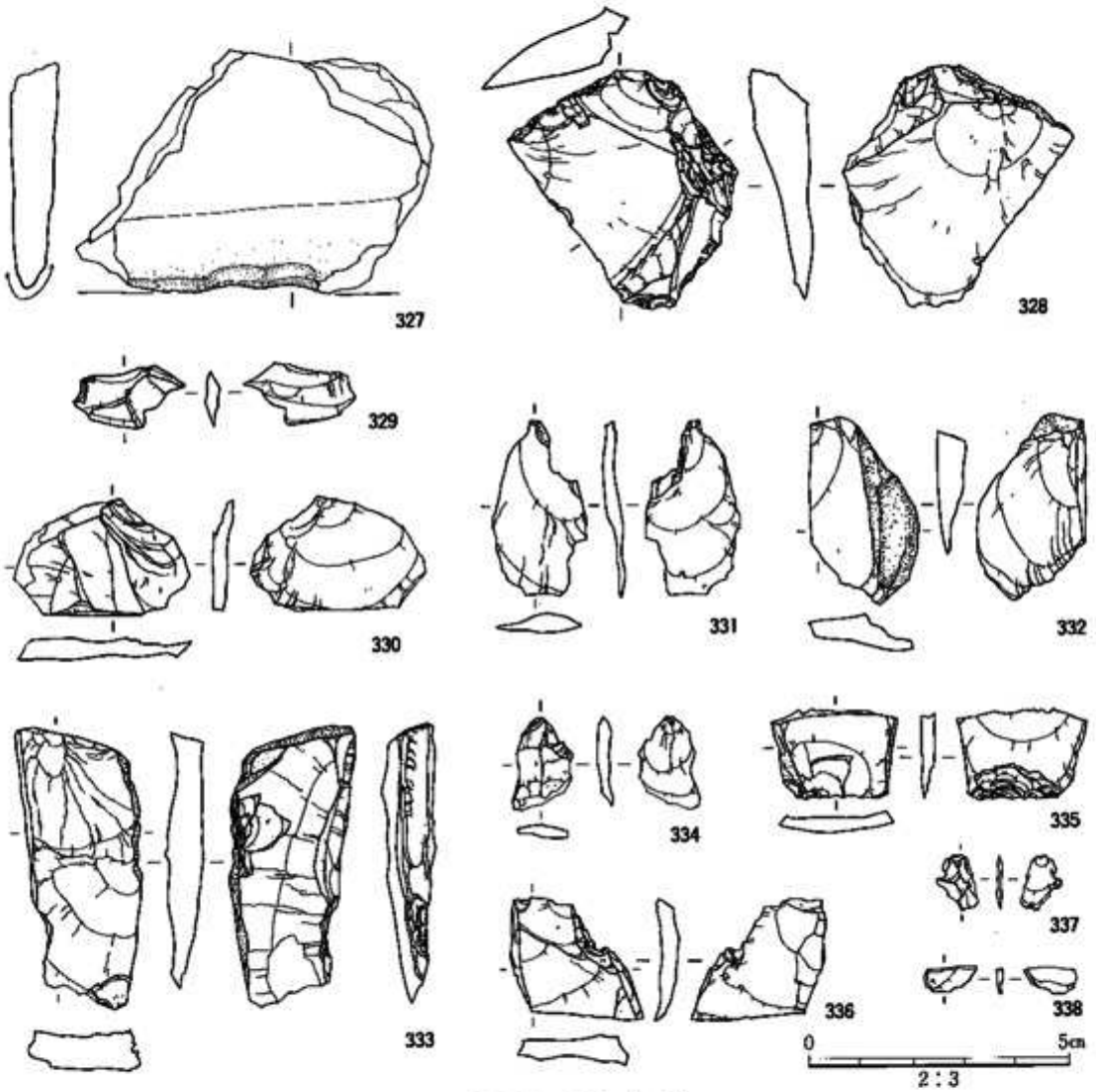


図76　各層出土の遺物（石器）

らC－2類に分類される。当類は長原12B・C層と長原9C層からの出土例がある。側縁の細部調整が長原9C層出土のものと比べ緻密であることから、長原12B・C層のものと思われる。切っ先角は40°である。321は凹基無茎式石鏃である。作用部側縁が外湾し、基部の抉りが深い。このことからC－1類に分類される。平面形態は縦長二等辺三角形というよりも正三角形に近い。また、作用部側縁は鋸歯縁となる。これと類似するものは、長原12／13層から出土している。切っ先角は60°である。322は凹基無茎式石鏃である。平面形は二等辺三角形を呈し、逆刺の先端を尖らせないでコ字状に作る。このことからB－2類に分類される。当類は長原12A層～9C層からの出土例がある。やや大型の石鏃で、基部の抉りは深い。作用部側縁が鋸歯縁となる。欠損する切っ先先端は使用時に折れた可能性がある。切っ先角は42°である。323は凹基無茎式石鏃である。作用部側縁が外湾し、基部の抉りが深い。このことからC－1類に分類される。平面形は縦長二等辺三角形に近い。また、作用部側縁は鋸歯縁となり、逆刺の先端は尖る。これと類似するものは、長原12／13層から出土している。体部の横断面形が比較的整った菱形となる。切っ先角は42°である。

325は有茎尖頭器である。尖端は細く尖るが、一部は新しく失われている。体部の側辺は直線的で下方は幅広である。茎部は細身で長く突出する。逆刺の抉りは深く末端は鋭い。調整は先端付近は両面とも右側は幅の狭い剥離、左は幅広の剥離でおおよその形が作られている。体部の剥離を見ると、左図の面では前段階の大きな剥離面が左側辺近くの剥離の奥に数個所残され、この面の占める面積はかなり広い。その後左側方から末端がステップとなる剥離が施されている。右図の面の調整は左図の面ほどではないが、幅広の剥離が不規則に並んでいる。また右図の面の茎部の調整は、左右ともに大きな剥離で行われ、左図の面では細かく幅の狭い剥離で逆刺を作り出している。側辺はかなり細かい剥離によって仕上げられているのが特徴的である。両面とも特に右側辺は幅0.2cm未満の剥離を連続的に加えることによって入念に調整され、この結果側面観は細かく屈曲している。この調整は茎部にも施されている。逆刺の末端は鋭いが、体部の調整のあとで逆刺を鋭くするために特に加えられた剥離は認められない[田島富慈美1993]。縄文時代草創期のものである。

長原13層出土遺物(図76・78・98、図版47)

336は剥離面打面の剥片である。主剥離面の打点付近から潜在割れによって縦割れを起している。背面の剥離面もほとんどが同方向の加撃によるものである。337は点状打面の小さな剥片である。背面は多方向からの剥離面で構成されている。調整剥片であろう。338は打点側が調査時に折れた剥片である。背面の剥離面は平坦な剥離面の一部である。

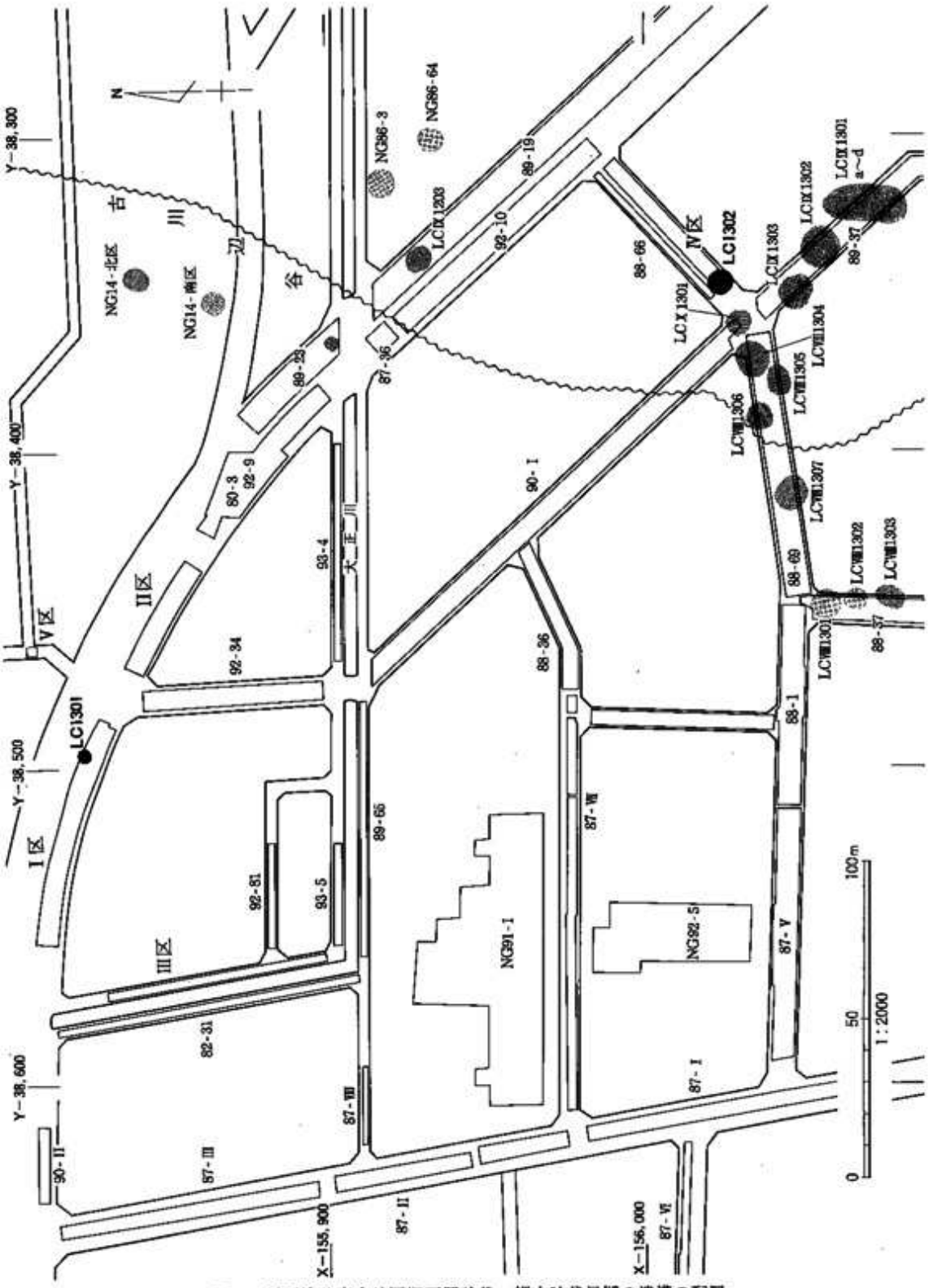


図77　長原遺跡東南地区旧石器時代～縄文時代早期の遺構の配置

長原14層出土遺物(図75・98、図版48)

326は砂岩製の叩き石である。礫の周辺部に敲打痕が顕著に見られる。なお、礫の表裏に研磨されたと思われる面があり、すり石として使用されたことも考えられる。旧石器時代のものと考えられる。

3)旧石器時代の遺構と遺物

i)石器集中部

LC1301(図77～79、図版21)

Ⅰ－A区の中央部、TP+9.2m前後の微高地状を呈する場所に位置する石器集中部である。遺物は東西約3.0m、南北約1.5mの範囲に分布し、出土位置がわかるもので合計22点、339～360のナイフ形石器・石核・剥片が出土した。これらは長原13A層上部の高低差約0.3mの範囲に含まれている。また、周辺の土壌を水篩選別したところ、190点の小剥片を捕集することができた。そのうち図示したのは10点、361～370である。接合資料は359・366の1組である。

これらの遺物は当地で旧石器時代に石器の製作が行われていたことを示している。しかし、その規模は全体の遺物量や分布のようすから見てさほど大きなものではなかったと思われる。ただし、あとにも述べるがLC1301はLC901と位置的に重なるため、339～370だけが純粋に旧石器時代の遺物とはいえない。またこの中にも上位の遺物が含まれている可能性があることを併記しておく。

遺物はすべてサヌカイト製である。以下は種類ごとに述べる。

ナイフ形石器(図80、図版48)

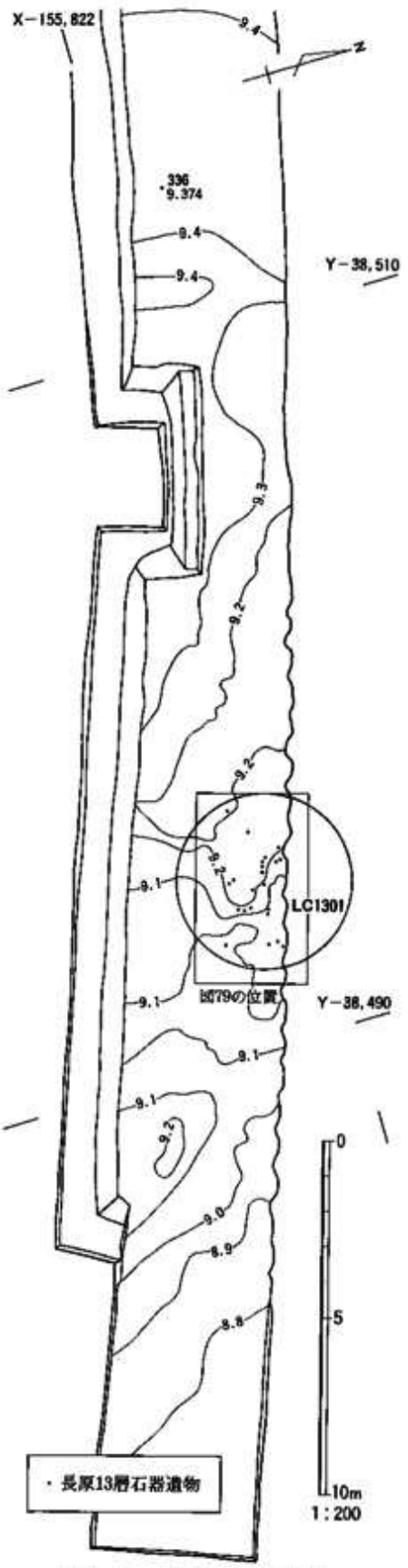


図78　Ⅰ－A区LC1301の位置

339は有底剥片を素材とした二側縁調整の切出し型ナイフ形石器である。刃部は薄く鋭い。刃部の平面形は図の上方に向って張出すものである。ナイフ形石器の両側縁には主剥離面から背面側に向けた細部調整が行われているものの、素材剥片の側縁の形状を顕著に整形するものではない。340は細部調整を施した剥片の一部で、全体の形態は不明であるが、長原13A層出土であることと、素材剥片の選択および細部調整の状況からナイフ形石器の一部と考えられる。素材剥片は有底剥片とみられ、右図の左側縁には、左図にある底面とみられる平坦な剥離面から加撃して、主剥離面側に向けて急角度に細部調整が施されている。図の上・下辺は細部調整時の事故による縦割れ面である。

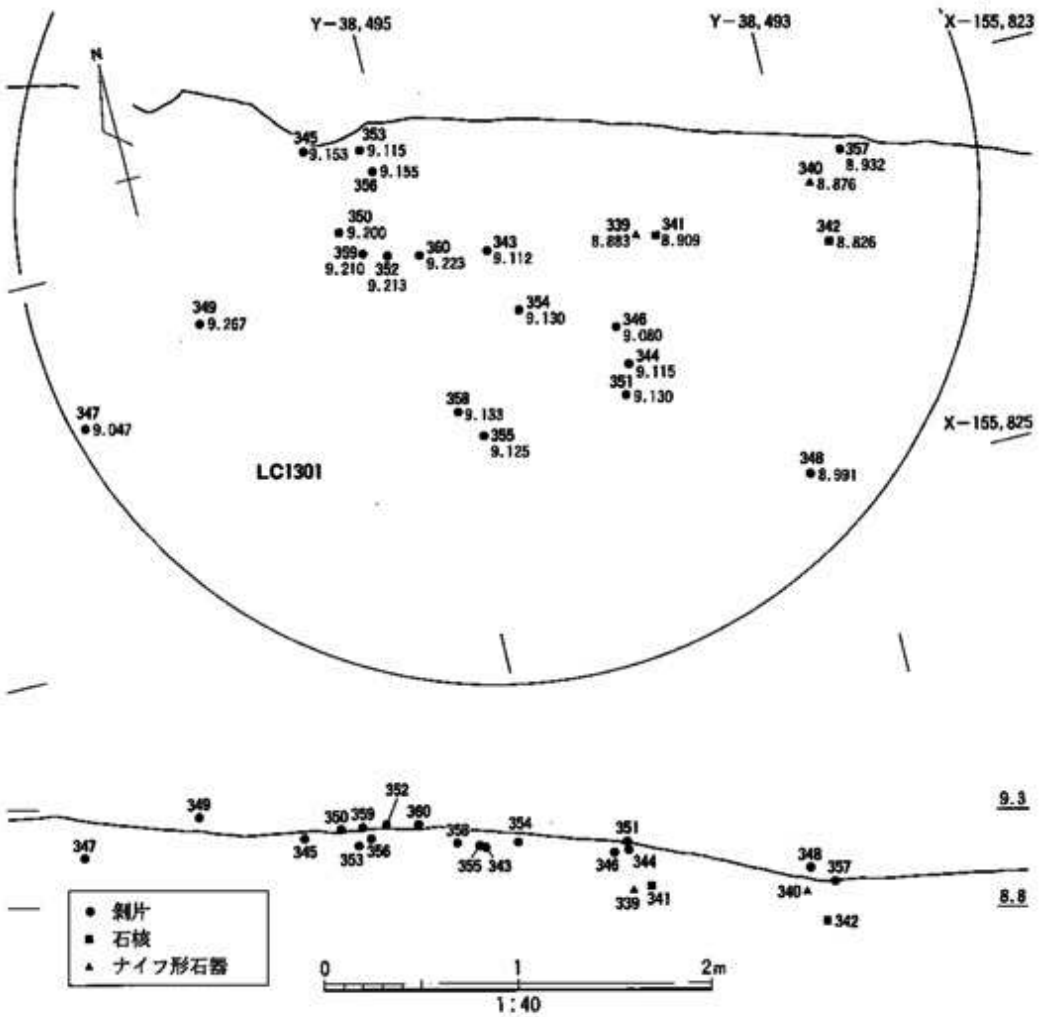


図79　LC1301の石器遺物出土状態（数字は遺物番号とTP値）

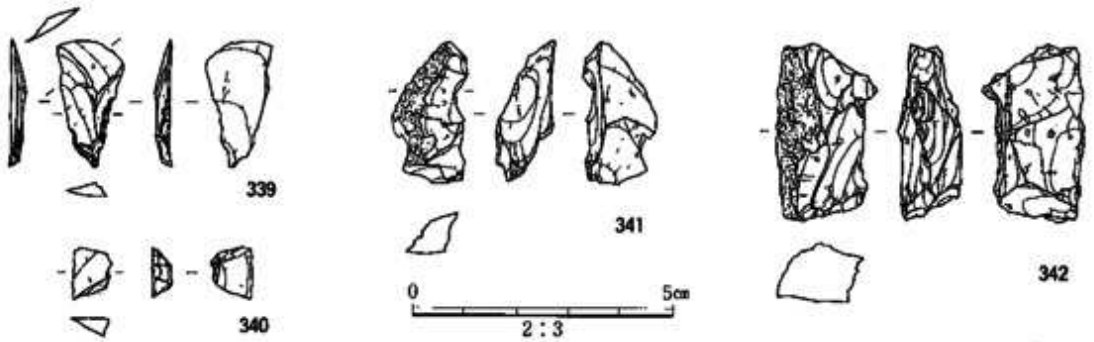


図80　LC1301のナイフ形石器・石核

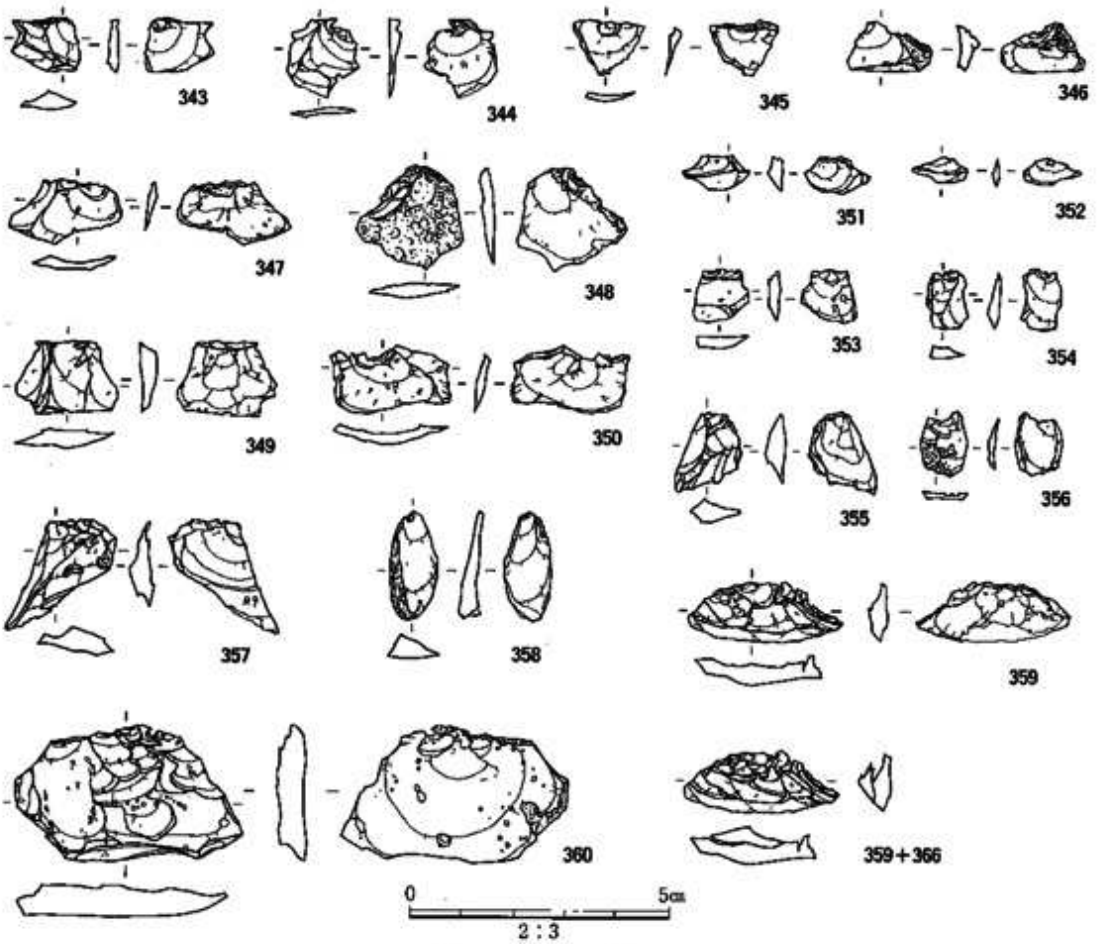


図81　LC1301の剥片

石核(図80、図版48)

341は分厚い剥片が素材となっている。作業面は素材となる剥片の側縁部に設定されている。背面左側縁には原面が残されている。この原面に接した平坦な剥離面は素材剥片に由来する面である。石核裏面の作業面には2つの剥離面が残されている。石核からは打面と作業面を転移させた状況は認められないが、先行の剥片剥離の段階で、打面転移が行われた可能性もある。作業面に残された剥離面から、取得された剥片は最大幅2～3㎝程度の剥片であったことがうかがえる。342は下端部を欠損する。板状の分厚い剥片を素材としており、その一端に剥片剥離作業面を設定している。対する他端は原面である。剥片剥離は打面と作業面を交互に入れ替えながら進行させているが、剥離された剥片は1～2㎝程度の小型のものと考えられる。背面側の原面に接する3面の剥離面のうち、上端側の1面以外はいずれも石核素材の剥片に関連するものである。主剥離面下半部の原面側から加撃されたネガティブな剥離面も同様のことがいえる。石核自体がかなり小型であることから、素材となった板状剥片を分割して石核の素材に用いている可能性がある。

接合資料(図81・82、図版49)

366と359は横形剥片どうしの接合資料である。359は主剥離面先端部を新欠のため欠損する。接合状態を観察すると、366と359の間に未検出の剥片が1点介在するが、これは366と同時に剥離された可能性が高い。359は剥離面打面で、基端から先端にかけての打面縁の正面観は山形を呈している。359は先端に石核底面の平坦な面を取込んでおり、打面縁の状態からも目的的な有底剥片であったとみられる。366は作業面の調整を行う目的で剥離されたものかもしれない。

剥片(図81・82、図版48・49)

343は原面上打面で背面にも同様の剥離が認められる。石核調整剥片とみられる。344は打面を剥離時に欠損している。背面右側縁側の剥離面も主剥離面と同時に形成されたものと思われる。石核調整剥片と考えられる。345は原面上打面であり背面にも主剥離面と同方向の剥離面が認められる。石核調整剥片とみられる。346は原面上打面で背面右側縁にも原面を残している。石核調整剥片と考えられる。347は原面上打面で背面側にも主剥離面と同方向の剥離面が複数みられる。石核調整剥片と考えられる。348は原面上打面で背面もほぼ全面が原面で覆われている。349は剥離面打面で、背面には主剥離面と同方向の2面の剥離面で構成される。主剥離面の先端はステップを起している。350は剥離面打面で、背面中央の剥離面は主剥離面と同じ打面から剥離されたものである。351は打面を剥離時に欠損して

いる。石核調整剥片とみられる。352は石核調整時に生じた屑片とみられる。353は背面左側縁を欠損する。点状打面で、背面基端部にも同じ打面からのごく浅い剥離が行われている。石核調整剥片とみられる。354は打面は剥離時に欠損している。背面右側縁に原面が残されている。石核調整剥片とみられる。355は剥離面打面で、背面には複数方向からの剥離面が複雑に切合っている。石核調整剥片とみられる。356は基端側と背面左側縁を欠損する。背面先端部の左側には原面が残されている。石核調整剥片と考えられる。357は剥離時の同時割れで背面側左側縁を欠損している。主剥離面側にも同時割れによるネガティブな剥離面が認められる。358は打面はほぼ線状となって残っており、表裏面の剥離面はともに同一の打点から剥離されたと見られる。クサビの剪断によって生じた剥片である可能性が高いが、先端側の状態が新欠によって不明である。背面左側縁に原面を残している。360は原面上打面で先端部を横折れのため欠損するが、これは主剥離面剥離の際の同時折れであった可能性がある。背面は主剥離面と同方向の複数の剥離面で構成されているが、いずれも薄く剥離されており、一連の剥離は石核調整に関わる剥離であったとみられる。なお、背面先端部の右側に見られる平坦な剥離面は石核素材に由来する剥離面であろう。剥片自体は厚みがあるが、背面の剥離面構成を考慮すると石核調整剥片である可能性がある。361は原面上打面で背面は平坦でネガティブな剥離面である。石核調整剥片とみられる。362は基端部と背面左側縁を欠損している。363は打面部と背面左側縁下半部を欠損している。石核調整剥片とみられる。364は打面は剥離時に欠損している。背面には複数方向からの剥離面で構成されている。石核調整剥片とみられる。365は打面は剥離時に欠損している。石核調整剥片とみられる。367は打面は剥離時に欠損している。石核調整剥片とみられる。368は先端を新欠のためにわずかに欠損する。原面上打面であり、主剥離面の基端部には打面から

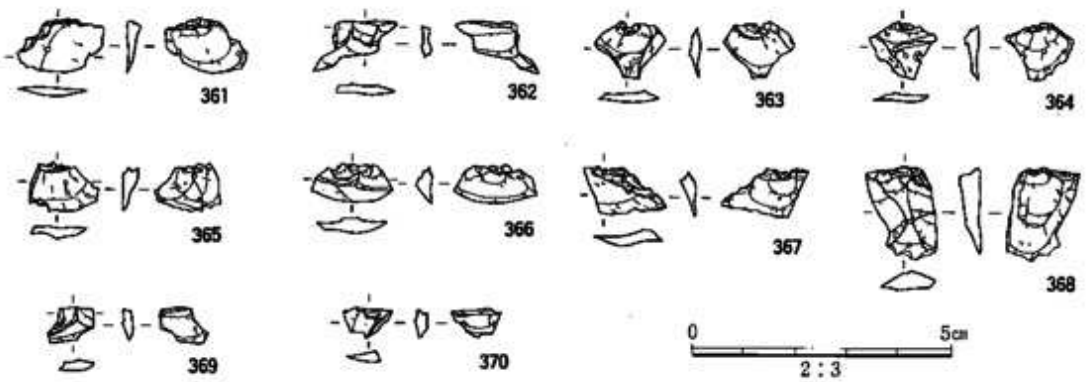


図82　LC1301の剥片

行われた微細な剥離が認められる。おそらく、剥離時に同時に形成されたものであろう。背面には主剥離と同方向の剥離面が複数見られる。369は基端部を欠損している。石核調整時に生じた屑片とみられる。370は基端部と背面右側縁を欠損している。石核調整時に生じた屑片とみられる。

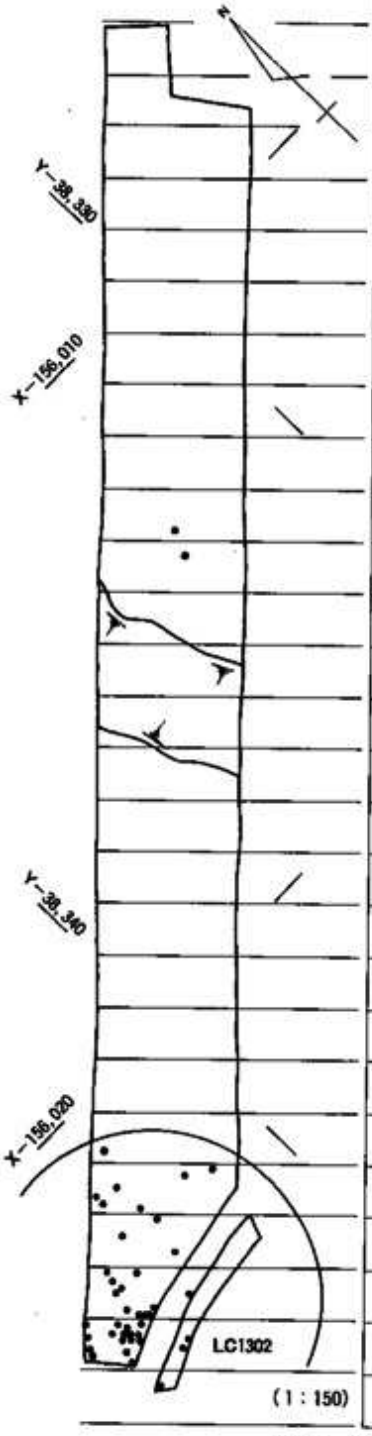
LC1302(図77・83・84、図版22)

Ⅳ－A区の西端、TP+9.8m前後の微高地状を呈する場所に位置する石器集中部である。周辺では古川辺谷(こかわなべ)を挟んで多くの石器集中部が見つかっている。石器遺物の出土層位は長原13層上部で、高低差0.4mの中に含まれる。検出した遺物はナイフ形石器・石核・剥片・石英など合計212点で、そのうち出土位置がわかるものは371～377・379～390・392～397・400～409・411～415・428の41点である。一方、周辺の長原13層を水篩選別して検出した剥片は169点である。図示したのは出土位置がわかるものすべてと、水篩選別で検出したもののうち378・391・398・399・410・416～427・429～437の26点である。接合資料は4組である。これらの遺物は当地で旧石器時代に石器の製作が行われていたことを示している。遺物は調査区の西端ほど多く分布していることから、集中部はさらに西方に拡がるようで、全体の直径は4.0～3.5mと推定できる。また、LC1302の周辺は旧石器時代の石器集中部が多く分布するところでもある(図77)。中でもLCⅧ1304・LCⅨ1303・LCⅩ1301とは今後接合関係を含めて遺物相互の検討が必要である。

遺物は石英1点を除いてすべてサヌカイト製である。以下は種類ごとに述べる。

ナイフ形石器(図85、図版22・50)

371は横形剥片を素材とする二側縁調整の切出し型ナイフ形石器である。素材剥片の主剥離面の先端右側の一部を刃部とする。刃部の背面側には平坦な剥離面が取込まれているが、その基部側に位置するやはり大きく平坦な剥離面を切っており、素材剥片は複合面からなる有底剥片であったかもしれない。細部調整はすべて背面から主剥離面側に向けて行われたもので、基部は素材剥片の縁辺を残している。372は横形剥片を素材とする二側縁調整の切出し型ナイフ形石器である。背面は主剥離面とほぼ同一方向と思われる1面の平坦な剥離面で構成され、底面である可能性も考えられる。素材剥片の主剥離面の先端右側の一部を刃部とするが、ナイフ形石器の先端は折れて欠失している。細部調整は素材の打面側については対向調整が認められ、もう一方は背面から主剥離面側に向けて行っている。また、ナイフ形石器の基部は折れている。素材剥片の選択や調整の状況などの点で、371と共通する要素が認められる。373は剥離面打面の剥片を素材とした二側縁調整の切出し型ナイフ形



区画番号	NG13層中位置図有	NG13層中水牌選別	計（g）	報告書遺物番号
27	0	0	0	
26	0	0	0	
25	0	1	1(0.01)	
24	0	1	1(0.01以下)	
23	0	0	0	
22	0	4	4(0.05)	419
21	0	0	0	
20	0	0	0	
19	0	0	0	
18	1	2	3(1.75)	石英
17	1	3	4(14.12)	384・420
16	0	2	2(0.35)	314
15	0	0	0	
14	0	0	0	
13	0	5	5(0.03)	
12	0	6	6(0.32)	433
11	0	5	5(0.08)	
10	0	4	4(0.87)	320
9	0	6	6(0.06)	416
8	0	1	1(0.01以下)	
7	0	0	0	
6	1	16	13(3.34)	397・437
5	6	18	24(29.76)	315・386・387・389・390・408・415・431
4	3	20	23(5.10)	396・401・411・421・436
3	11	29	40(59.00)	371・374・375・377・394・400・404・406・407・412・414・418・422・424・427・430
2	18	36	54(81.19)	372・373・376・378～383・388・391～393・395・402・403・405・409・410・413・417・425・426・428・434・435
1	1	17	18(11.82)	385・398・423・429

図83　Ⅳ－A区LC1302の位置と石器遺物の出土数

石器である。背面は多方向からの剥離面が複合し、素材剥片は有底剥片とはいえない。細部調整はすべて主剥離面から背面側に向けて行われているが、背面の右側は3回程度の加撃による粗い調整である。374は調整打面の横形の有底剥片を素材とし、その打面側の一部に細部調整が施されたもので、ナイフ形石器、またはその未製品と考えられるものである。底面はポジティブ面でフィッシャーが発達している。細部調整は左図の右側縁上半に素材剥片の主剥離面から背面側に向けて施されているが、ナイフ形石器として基部や先端が識別できる程度にはいたっていない。ただし、左図の左側縁に当る刃部の上半に認められる微細な剥離面は使用痕の可能性が考えられ、道具として使用されているとすればナイフ形石器というべきであろう。

接合資料1（図86、図版50・51）

375～378は石核どうしとそこから取られた剥片の接合資料である。最初の素材となった剥片は背面全体に原面をもつ厚さ1.3cmほどの板状剥片である。これはもとの大きな石核か

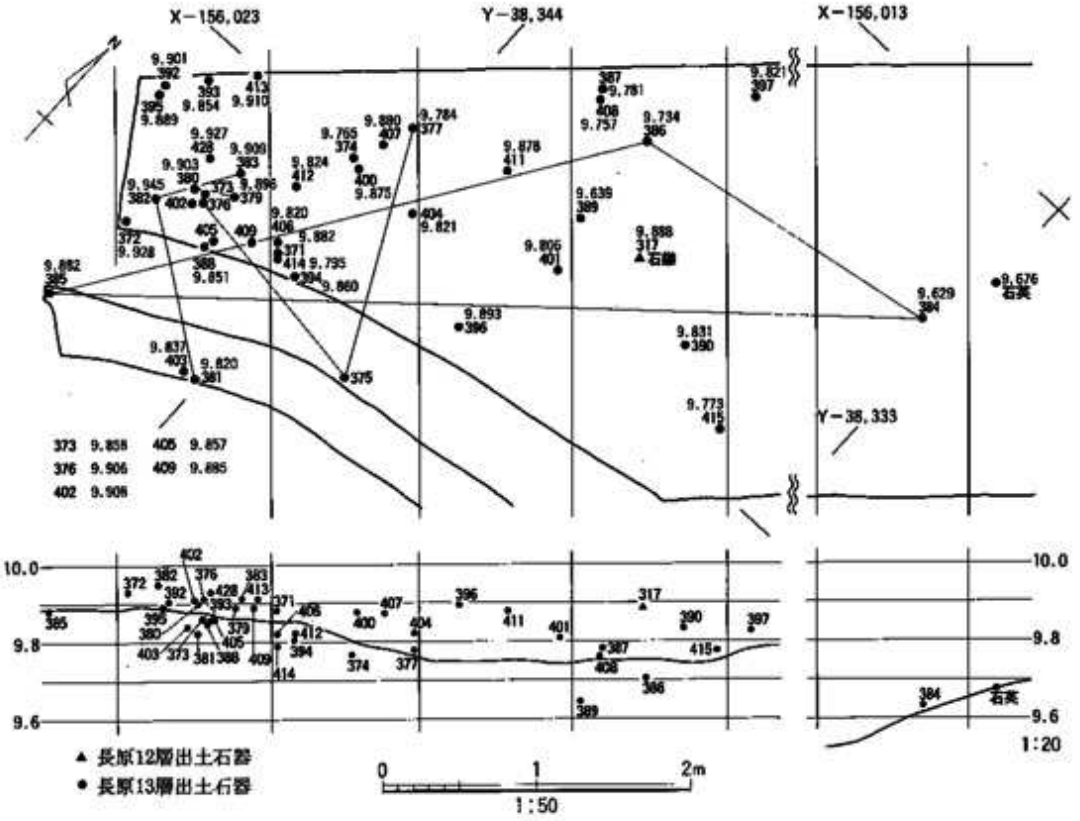


図84　LC1302の石器遺物出土状態（数字は遺物番号とTP値）

ら剥離した際に、打点から同時割れが生じて376＋378と375＋377の左右2つに分かれてしまったが、さらにそれぞれを石核として用いている。376はすべて原面を打面として図の左右から剥片を剥離している。原面側に打面を準備した形跡はない。得られた剥片のうち最大のものは長さ1.2cm、幅3.7cmの横形剥片で、最小のものは378のように長さ0.8cm、幅1.0cmほどの縦に長い剥片と考えられる。375＋377も主剥離面に向けて横形剥片を複数取っているが、右図の下縁で剥離された幅3.5cmの剥片だけは原面側に打面を準備している。また、次の剥片を取ろうとして付近を加撃した際に、原面の傷から割れが生じて375と377に分かれてしまい、後の加撃はない。

接合資料2（図87、図版50・52）

379・380は石核とそこから取られた剥片の接合資料である。379は原面打面で、厚さ1.2cmの板状剥片を用いた石核である。先端はヒンジ・フラクチャーを起している。もとの石核の面は主剥離面側から見て右縁と背面側に平坦なネガティブな面として残っている。剥片剥離はおもに右縁の縦長の平坦面を直接叩いて主剥離面に向けて行われている。何度も繰返し叩いていることが打痕からわかるが、剥離に必要な角度が叩こうとしている打面と、剥片を取ろうとしている石核の主剥離面との間に確保されていない。そのため取られた剥片は大きくても長さ1.6cm、幅1.8cmほどで、目的的剥片が得られたとは思えない。380は原面打面で石核の背面に向けて取られた剥片の一部である。石の傷によって剥離の際に複数枚に分かれ、主剥離面側にも剥離が拡がっている。

接合資料3（図88、図版51・52）

381～383は石核とそこから取れた剥片の接合資料である。石核の素材は、厚さ0.8cmほど

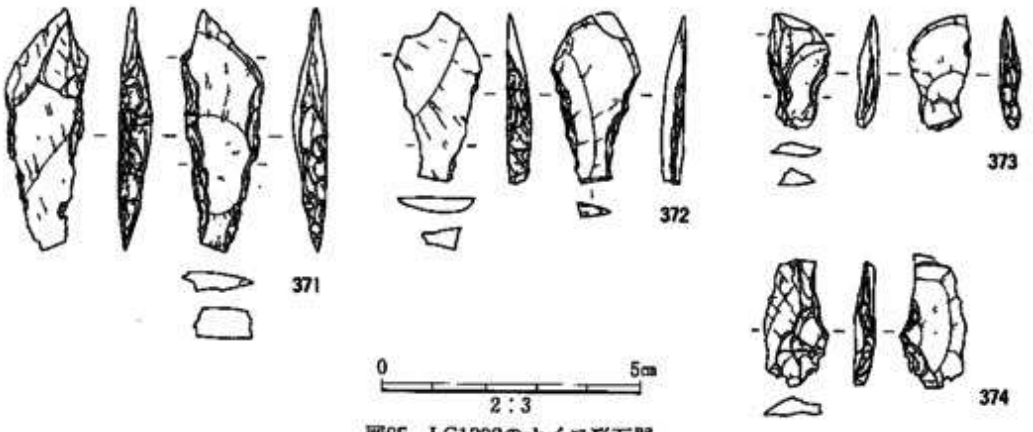


図85　LC1302のナイフ形石器

の板状剥片である。背面側には主剥離面と同方向の剥離面がある。打面は剥離時に欠損している。また剥離と同時に起った縦方向の割れによって剥片の半分は欠損している。この石核からの剥片剥離は左右の長側縁で行われている。これも縦に長い平坦な割れ面を打面として石核の主剥離面側に剥片を取ろうとしている。適正な打面を準備せず、無理な角度でしか加撃できないため、取れた剥片は先端にステップを起している。また、打点から同

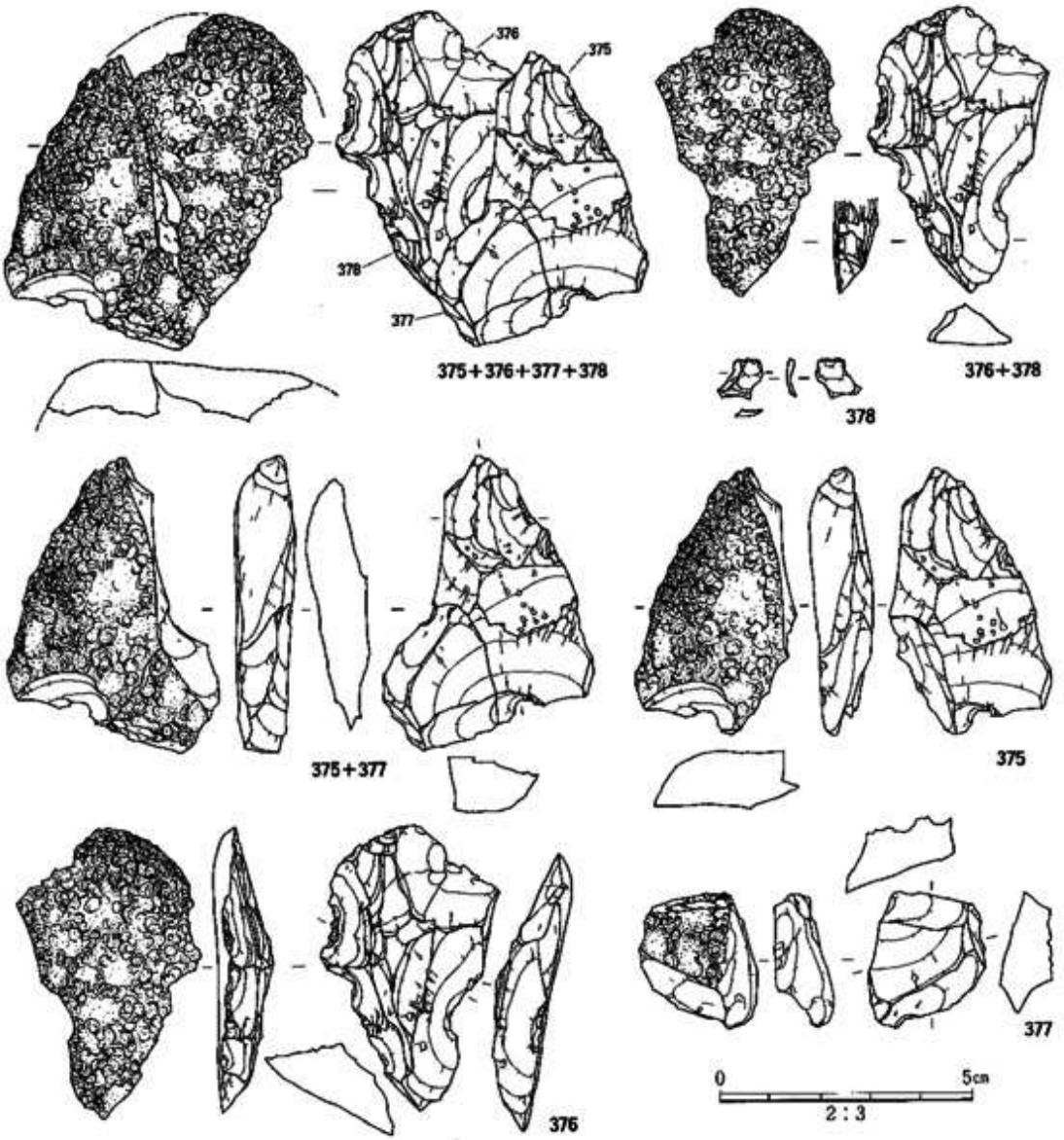


図86　LC1302の接合資料1

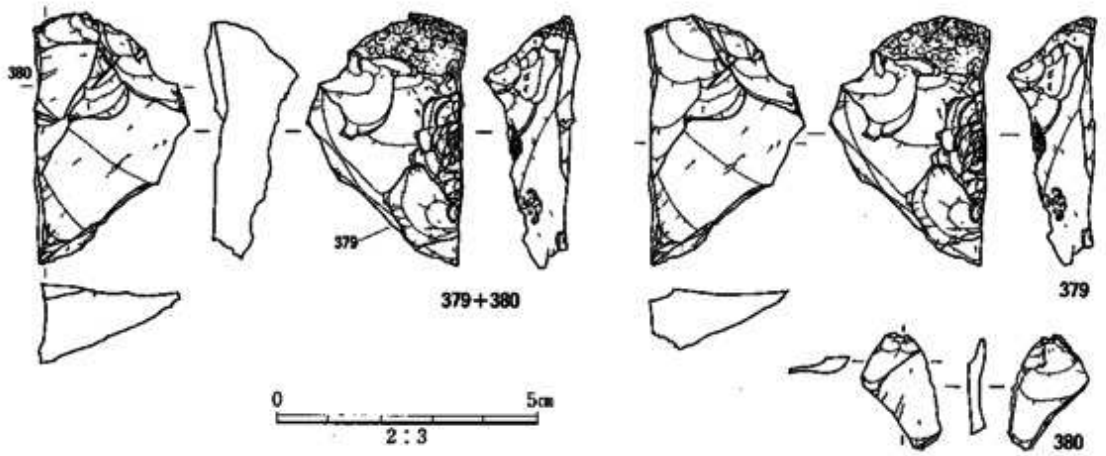


図87　LC1302の接合資料2

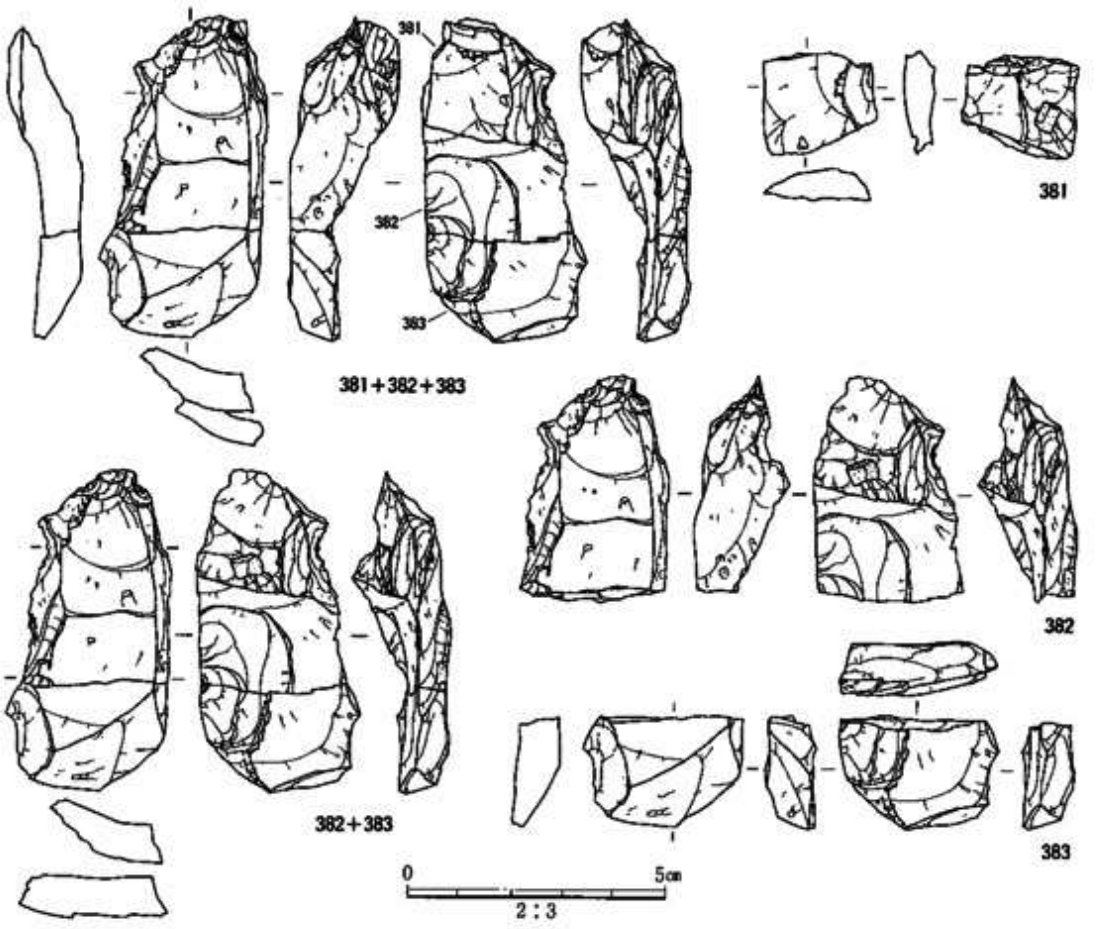


図88　LC1302の接合資料3

時割れが生じ、石核は382と383に分かれている。381は石核内に含まれていた異物の影響で事故的に剥離した破片である。

接合資料４（図89、図版51・52）

384～386は石核とそこから取られた剥片の接合資料である。石核の素材は、厚さ1.0cmほどの板状剥片である。背面には大きなポジティブな面が残る。打面は欠損しているため不明である。さらに剥離の際に同時に起った縦方向の割れによって剥片の半分を欠損している。剥片剥離はまず、板状の剥片384＋385＋386の右上縁を叩いて主剥離面側に長さ1.0cm、幅2.3cm、厚さ0.4cmの横形剥片を取っている。このとき、剥片内の傷が影響して上縁に割れが生じている。次に、打面を調整するためにこの割れ面を加撃して背面側に数枚の剥片を取っている。そうして取られたものの１つが386である。再び、何度か剥片剥離を試みているが、無理な角度の加撃のために縦方向の割れが生じ、石核は384と385に分かれている。さらに384については割れ面を打面として剥片を剥離している。取られた剥片は大きなもので長さ0.9cm、幅1.7cmほどであるが、これも垂直に近い角度での加撃のためステップを起

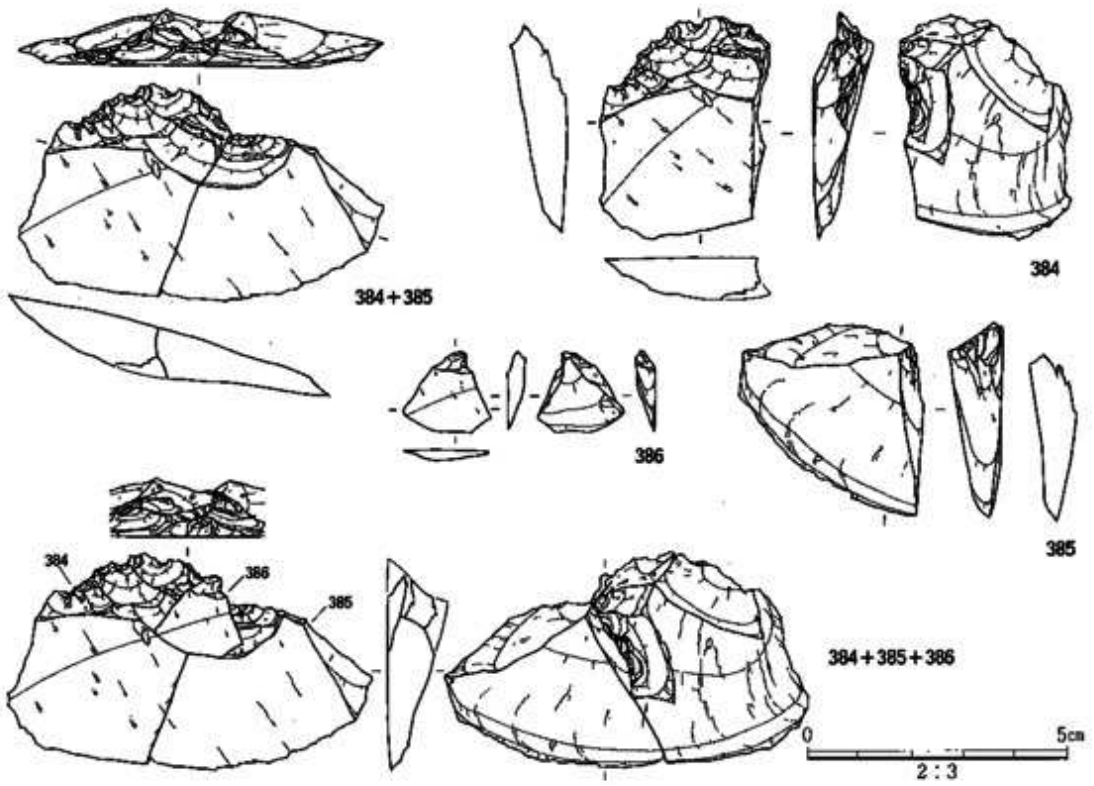


図89　LC1302の接合資料４

していることが剥離面からわかる。

石核(図90、図版52)

387は厚さ約1.0cmの板状剥片を素材とした石核である。右図右側縁には原面が残る。背面には主剥離面とは異なる方向の剥離面が複数枚ある。剥片剥離は主剥離面の先端を打面として何度も試みられているが、打面を準備せず、平坦な面を直接叩いているために最大でも長さ0.7cm、幅1.8cmの小さな剥片しか取れていない。右図右上には背面側を打面とした剥片が取られている。これは長さ1.0cm、幅1.9cmと小さく、側面に原面を取込んでおり、目的的な剥片とはいえない。

剥片(図91・92、図版52～54)

388は剥離面打面で背面は主剥離面とほぼ同方向の3面の剥離面で構成されている。主剥離面の先端の一部は折れている。389は剥離面打面で、剥離時の縦割れによって半分を欠損する。背面は主剥離面と同方向の剥離面と、それに切られる拡がりをもった剥離面とで構成される。390は原面打面であるが、打面は剥離時に欠損している。背面は主剥離面と直交する方向の剥離面で構成される。391は剥離面打面で、背面は主剥離面と同方向の剥離面と底面状の細長いポジティブな面とで構成される。有底の目的的剥片の可能性がある。392・393は剥離時に打面が欠損している。背面は複数方向からの剥離面で構成される。394は原面打面であるが、打面は剥離時に欠損している。背面は主剥離面と同方向の剥離面と原面とで構成される。395は原面打面であるが、打面は剥離時に欠損している。背面は主剥離面と同方向の剥離面と原面とで構成される。先端は折れている。396は剥離面打面で、背面には主剥離面と同方向の剥離面が複数枚ある。主剥離面の先端はヒンジ・フラクチャーを起している。流理構造に沿って風化が著しい。397は背面を打面として2次加

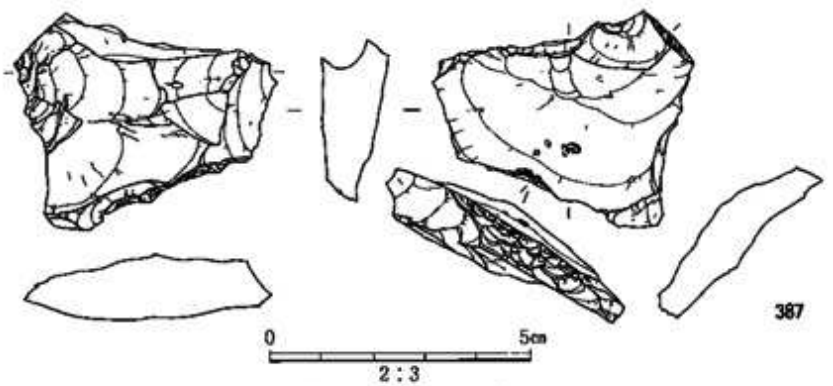


図90　LC1302の石核

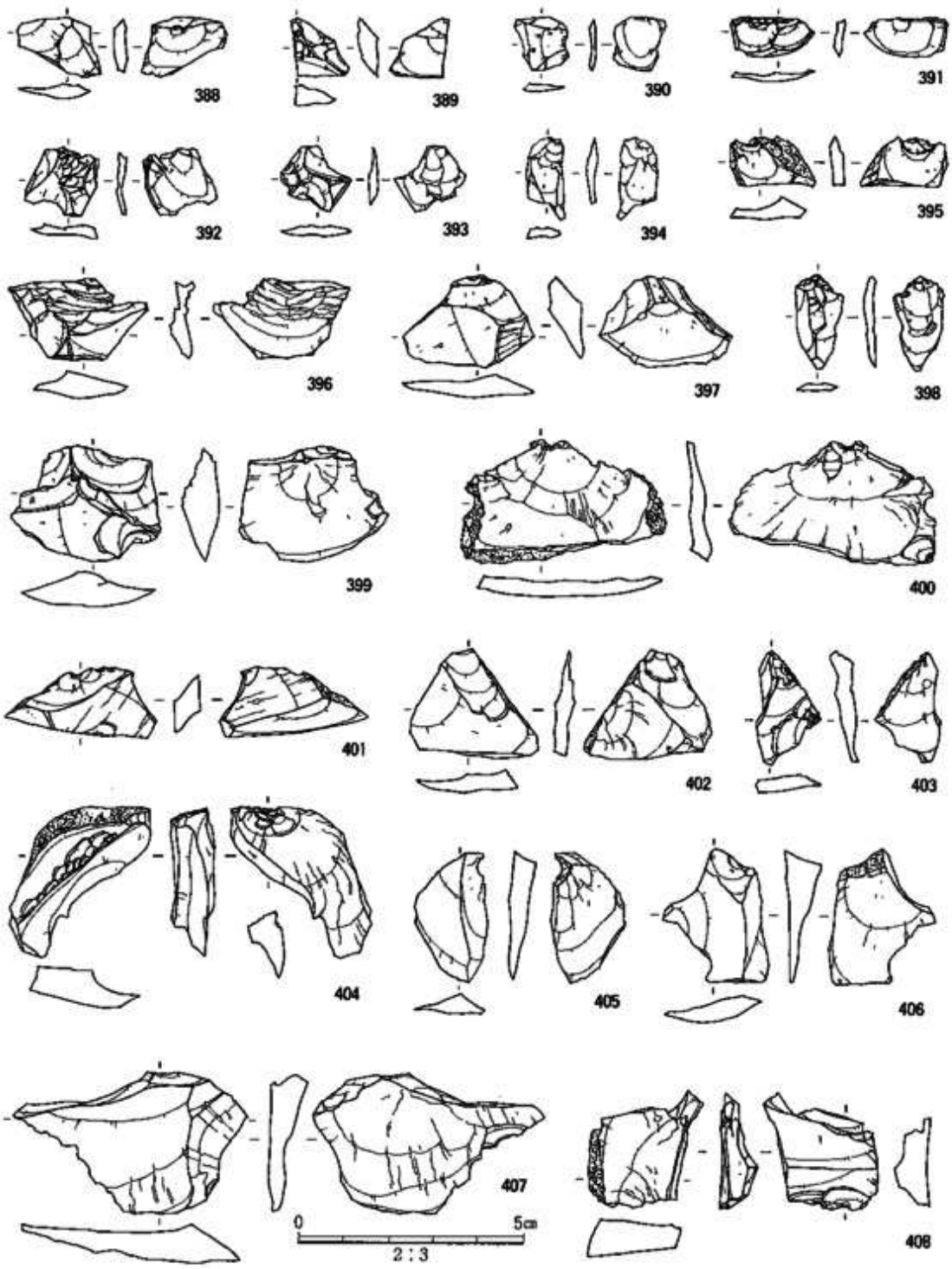


図91　LC1302の剥片・その他

工を加えられた剥片である。背面下部には大きな拡がりをもつポジティブな底面状の剥離面があることからナイフ形石器の未製品の可能性がある。398は剥離面打面で、背面には主剥離面と同方向の剥離面で構成される。399は剥離面打面で、背面は主剥離面と同方向の剥離面２枚と、底面状のポジティブな広い面とで構成される。400は剥離面打面であるが、打面は剥離時に欠損している。背面は主剥離面と同方向の剥離面１枚と原面からなる。401は線状の打面である。背面は主剥離面と同方向の剥離面と、ネガティブな広い面とで構成される。402は原面打面であるが、先行する加撃によってできた傷が影響して主剥離面には２枚の面が並ぶ。背面には大きなネガティブな面と、主剥離面と同時にできた縦長の剥離面がある。先端は折れている。403は原面打面である。剥離時の縦割れによって半分を欠損する。404は原面打面である。もとの石核は２縁に原面をもつものである。背面のネガティブな面に２次加工とみられる小さな剥離面が並んでいる。405は打面は剥離時に欠損する。背

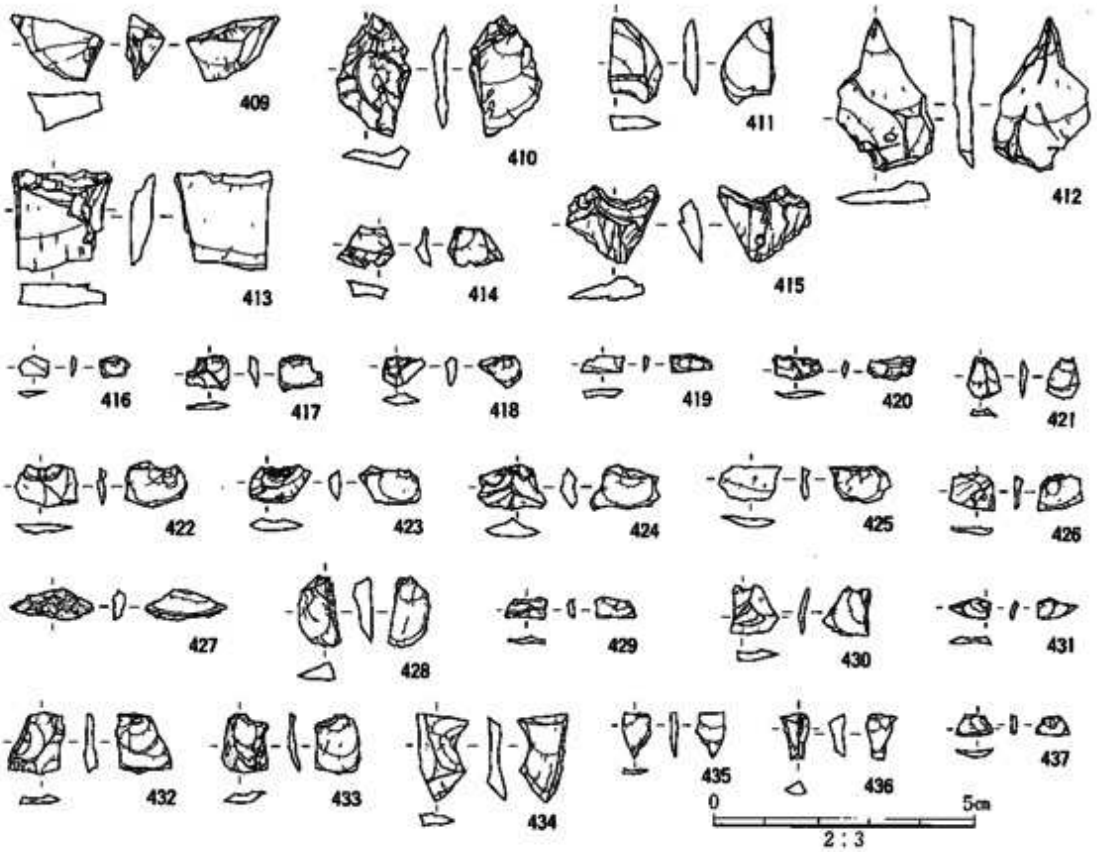


図92　LC1302の剥片

面には主剥離面と同方向の剥離面とポジティブな広い面がある。406は原面打面で、背面は複数方向の剥離面で構成される。先端は折れている。407は剥離時に基端部を欠損している。408は2縁が欠損しているため詳細は不明だが石核の可能性がある。右図下縁には約2枚の剥離面が並び、その上にはこの剥片の主剥離面とみられる細長い面がある。409は基端部と側縁を欠損する。410は剥離時に打面を欠損する。背面には石の傷に影響された不定形な剥離面がある。411は剥離時に打面および縦割れによって半分を欠損している。412は剥離時に複数の縦割れが生じ、剥片の左右と打面を欠損する。413は剥離時に打面を欠損する。左右は折れている。背面には主剥離面と同方向の剥離面と、それに切られる大きなネガティブな面がある。414は剥離時に打面を欠損する。左右は折れている。415は剥離時に打面を欠損する。剥離は石の流理構造に影響され、不定形である。

416・418～420・422・424・425・433・437は剥離面打面の剥片である。421・423・428・429・436は剥離時に打面が欠損している。417・426・427・432は原面打面である。430・431・434・435は剥離時に縦割れが生じたり打面が欠損するものである。これらは石核調整時に生じた屑片とみられる。

これらのうち同一母岩と考えられるのは①374～383・387～389・391～395・398・401～405・408～415・417・418・420・421・423～437、②371～373・384～386・397・399・406・416・419・422、③400・407の3種類である。371～373のナイフ形石器は母岩グループ②、374の未製品は母岩グループ①と考えられる。

LC1302内で行われた剥片剥離作業の特徴は、接合資料1～4および石核387を見る限り平坦な原面および割れ面をそのまま打面とし、垂直方向に加撃しているという点である。その結果、得られた剥片は長さ2.0cm、幅3.5cm以内の小さなもので、多くは先端がステップを起していたと推定される。これは今まで長原遺跡東南地区で検出した石器集中部では見られない剥片の取得方法である。

4)縄文時代晩期～弥生時代中期の遺構と遺物

i)自然流路・溝

西川辺川(にしかわなべ) NR901(図93・94、図版24)

Ⅱ区の東部に位置する。長原9A層上面で検出した自然流路である。調査区内では蛇行した南岸の一部分をかすめているのみで、北岸を含む大部分は調査区の外にある。Ⅱ区内での最大規模は幅2.0m、深さ1.0mである。埋土は長原8C層の粗粒砂を中心とする水成層で

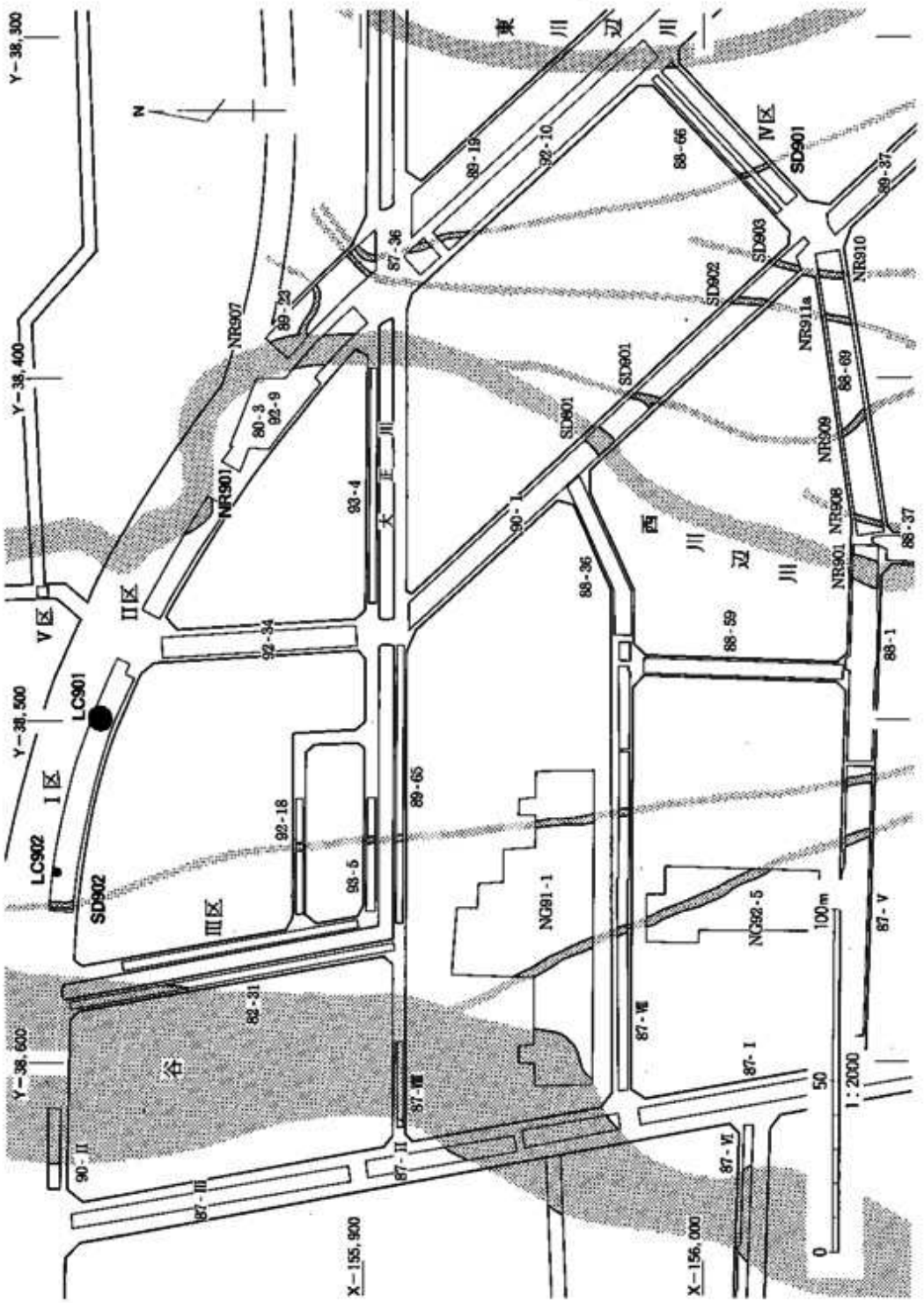


図93　長原遺跡東南地区縄文時代晩期～弥生時代中期の遺構の配置

ある。南岸は8C層の砂礫によって挟られているため、長原9A層以下が内部に垂れ込んでいる。埋土中からは長さ1.0m、直径0.2mの流木が見つかった。

この流路は過去の調査知見[大阪市文化財協会1995・1997a]から、両岸に堤状の盛土をもち、調査地区の南から北に向って蛇行しながら流れていたことがわかっている。特に、Ⅱ区のあたりでは3度大きく向きを変えながら流れており、規模は幅約10m、深さ約2mで、厚い長原8C層の水成層で埋没している。なお、流路は弥生時代前期～中期初頭にかけて機能していたと考えられる。

SD901(図93・95、図版25)

Ⅳ－A区に位置し、長原9A層下面で検出した流路である。規模は幅2.7m、深さ1.1mで、南から北に向って流れている。埋土は長原7・8C・9A層の水成層で、下層ほど砂が粗く、上層の長原7・8C層については長原9A層によって流路がほとんど埋ったのちのわずかな

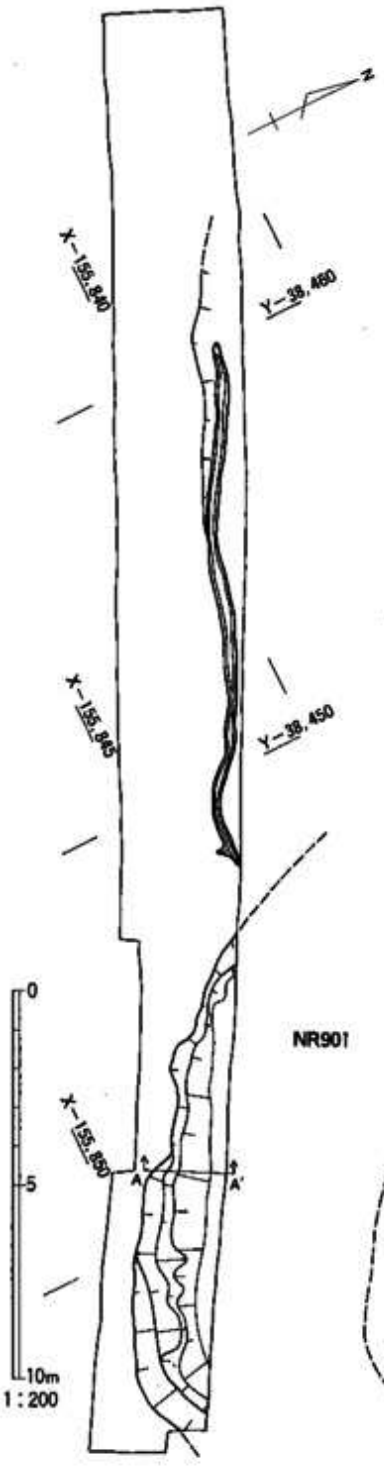


図94　Ⅱ区NR901

凹みにシルト～粘土が堆積している。長原9A層は厚さ1.5mの粘土～粗粒砂で、ラミナの間に植物遺体を多く含んでいる。

この流路は周辺の調査知見[大阪市文化財協会1997a]から、調査地区の南から北に向って流れていたことがわかっている。機能していたのは弥生時代前期～中期初頭である。

SD902(図93・96、図版25)

Ⅰ－B区の西端に位置し、長原9A層上面で検出した流路である。西岸は調査区外になるため、現状での規模は幅2.8m、深さ1.0mである。東岸には長原9A層以下が垂れ込んでいる。埋土は長原8A～C層の粗粒砂を中心とする水成層である。

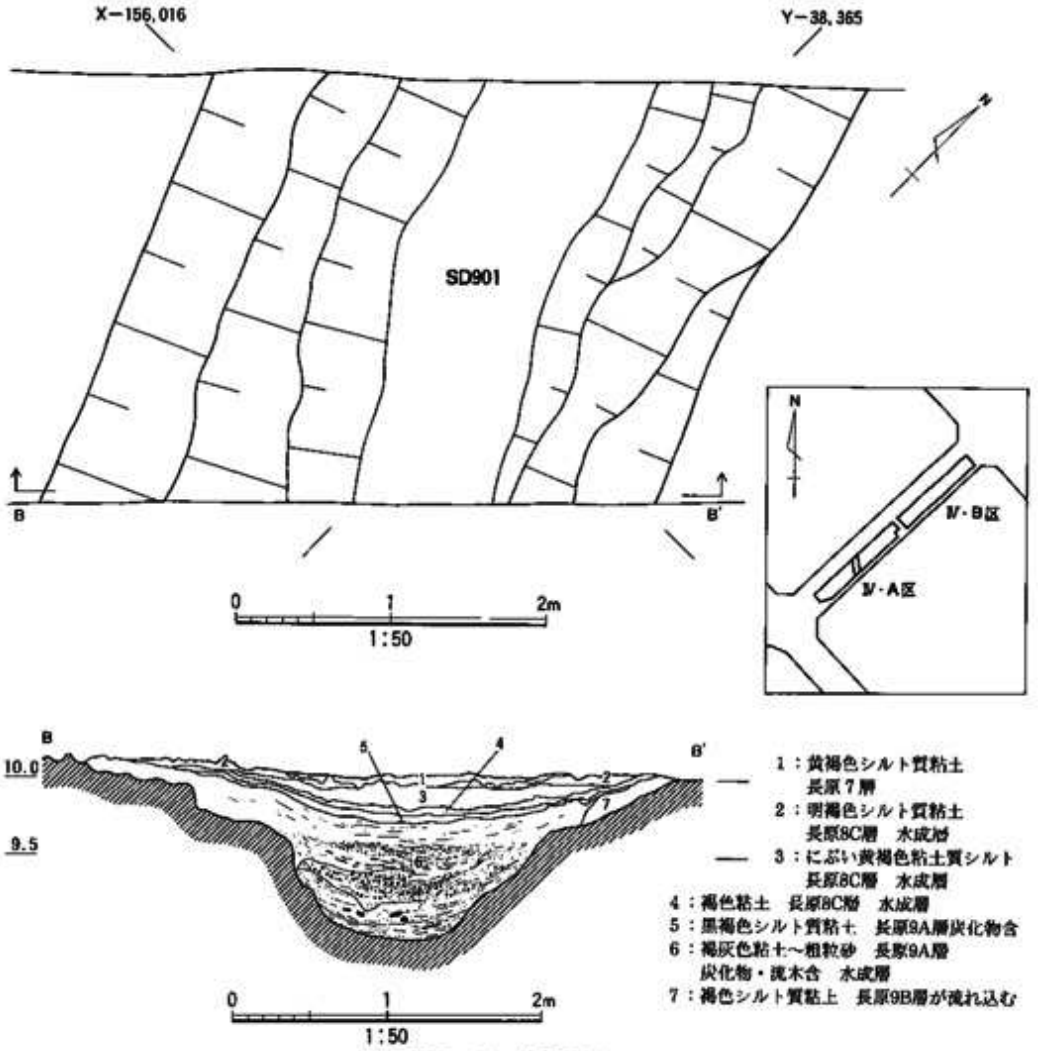
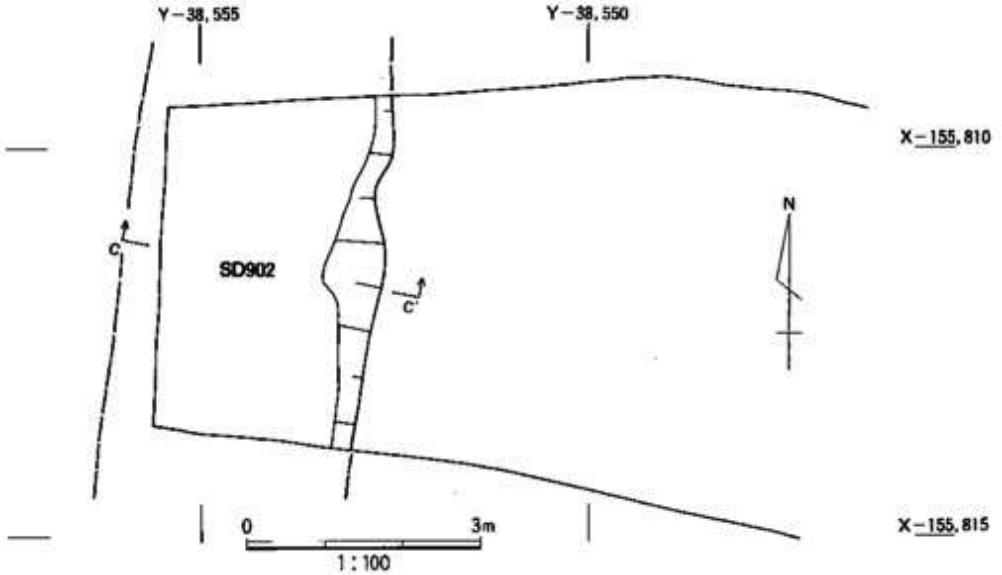
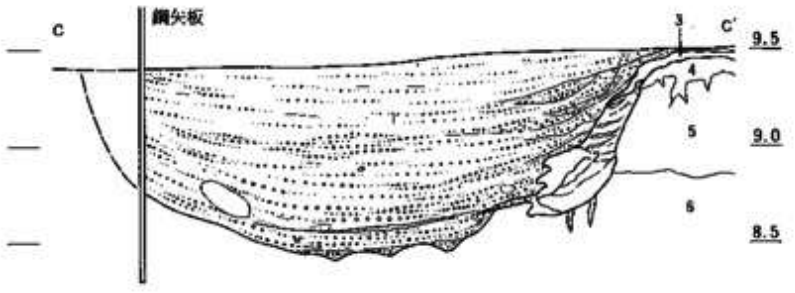


図95　Ⅳ－A区SD901

この溝は周辺の調査知見[大阪市文化財協会1997a]から、両岸に堤状の盛土があり調査地区の南から北に向ってまっすぐ流れていたことがわかっている。それによると幅2.5m、深さ1.5mで横断面は浅いU字形である。機能していたのは弥生時代前期～中期初頭の間と考えられる。





1：明オリーブ灰色粗粒砂～灰黄色細粒砂　長原8C層
2：灰色シルト質粘土～黄灰色シルト質粘土
　長原9A・14層が流れ込む
3：黄灰色シルト　長原9A層
4：灰黄色シルト　長原9C～13層風化帯
5：緑灰色粘土　長原14層
6：緑灰色粘土　長原15層

0　1m
1：40

図96　Ⅰ－B区SD902

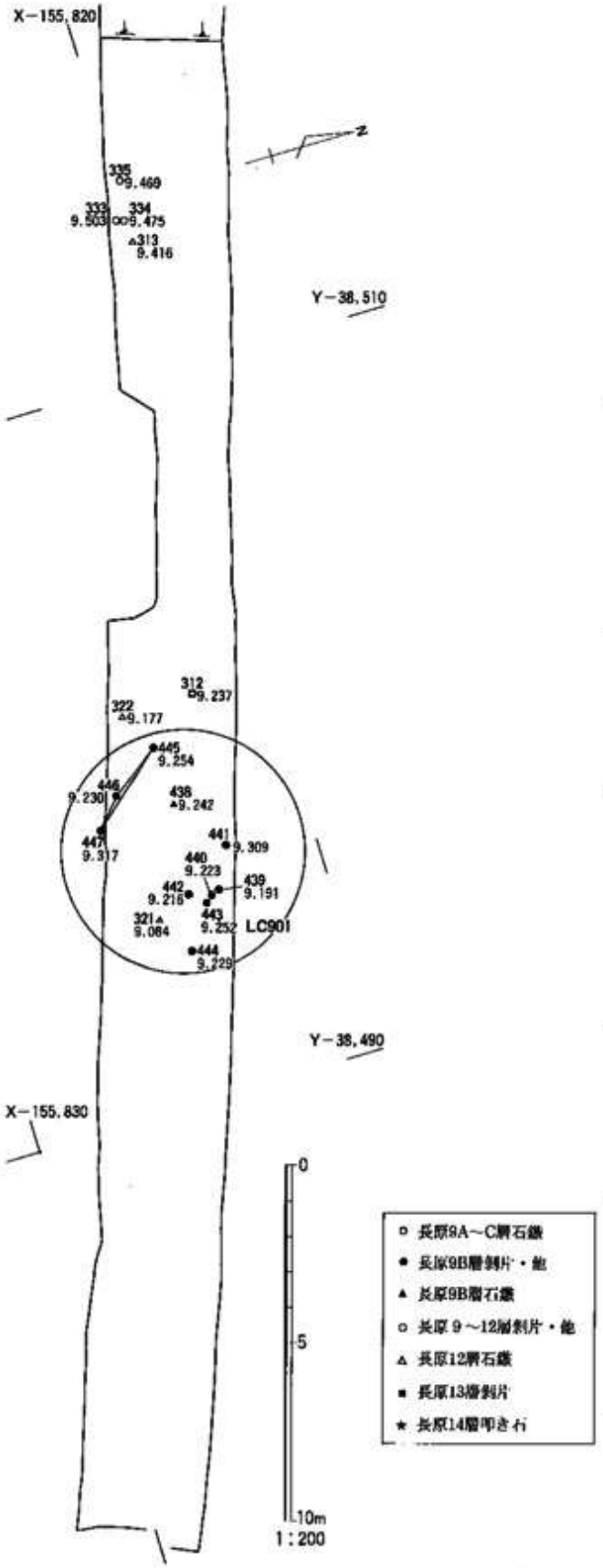


図97　Ⅰ－A区LC901と長原12層の遺物出土位置
（数字は遺物番号とTP値）

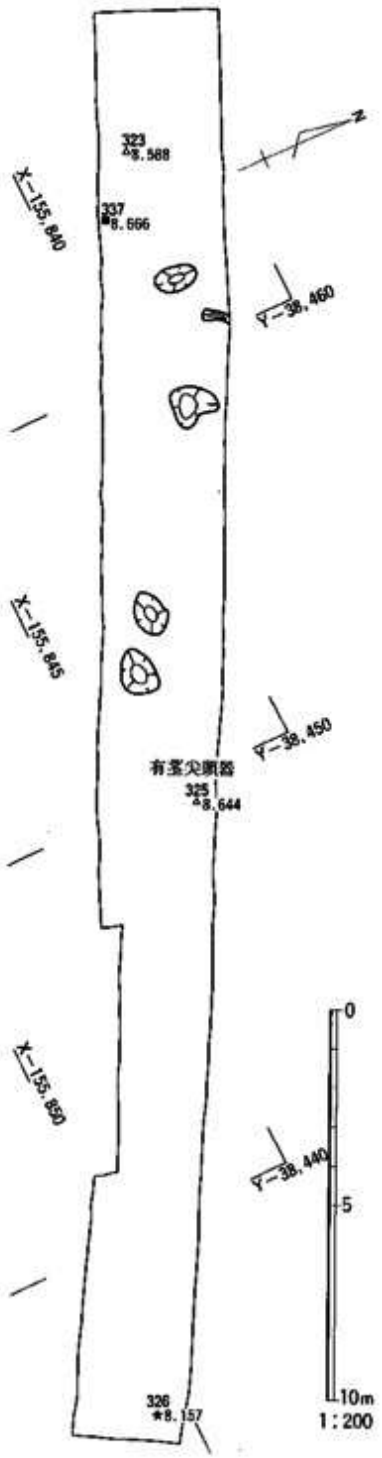


図98　Ⅱ区石器遺物の出土位置
（数字は遺物番号とTP値）

ii）石器集中部

LC901（図93・97）

Ⅰ区の東部に位置する、直径約7.0mの縄文時代晩期の石器集中部である。TP+9.2m前後の長原9B層から剥片10点と石鏃１点が出土した。

石材はすべてサヌカイトである。以下は種類別に述べる。

石鏃（図99、図版54）

438は凹基無茎式石鏃で、作用部側縁が外湾ぎみであり基部の抉りが浅い。このことからC－２類に分類される。当類は長原12B・C層または長原9C層からの出土例がある。しかし側縁の細部調整が長原12B・C層出土のものと比べ粗く、作用部側縁も整った曲線でないことから、長原9C層以降のものと思われる。

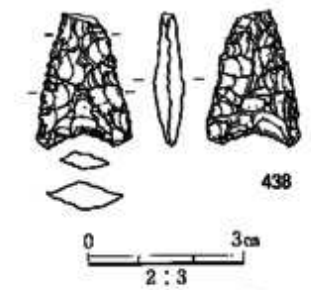


図99　LC901の石鏃

剥片（図100、図版54）

439は打面は剥離時に欠損している。表面にはネガティブな面

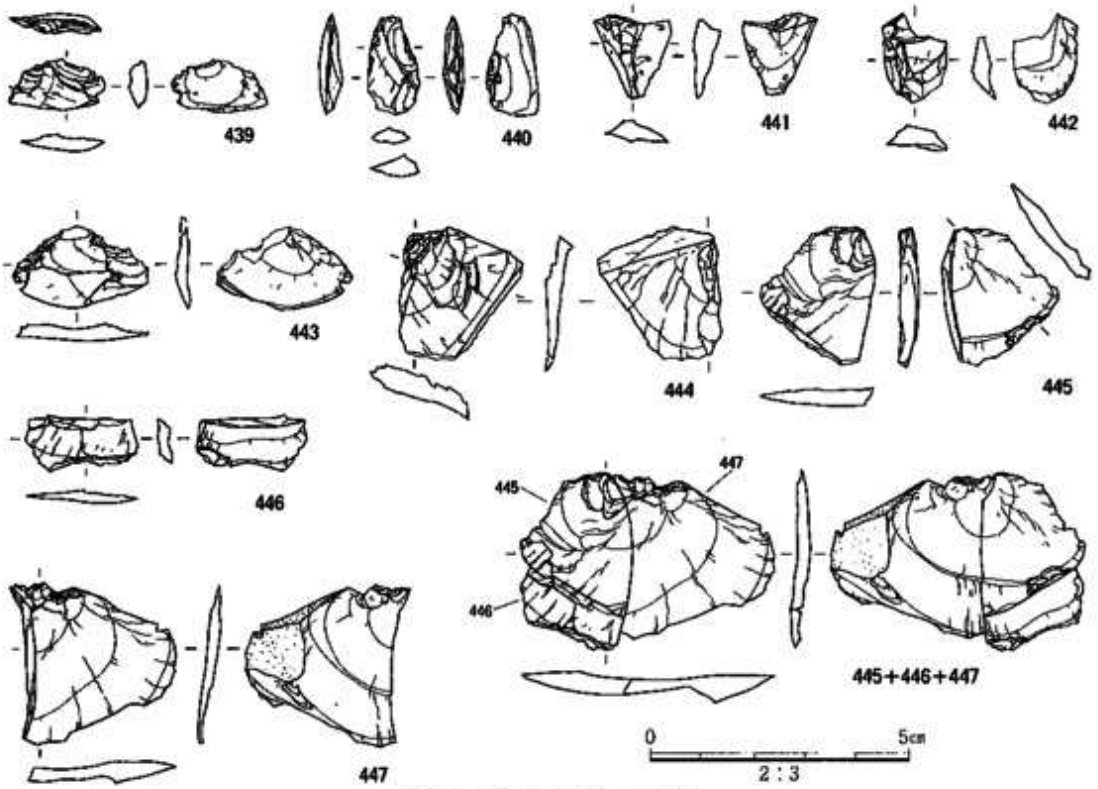


図100　LC901の剥片・その他

とみられる平坦な剥離面と、主剥離面と同じ打面から打撃された浅い剥離面が複数認められる。440は打面は表面側からの微細な剥離によって失われている。表面には基端側から剥離された3面の剥離面が認められるがいずれもごく浅い剥離である。表面先端部の平坦な剥離面は石核の素材に由来する剥離面と思われ、目的的な有底剥片の可能性がある。441は基端部を横折れのため欠損する。表面には主剥離面とほぼ直交する方向から先行剥離が行われている。石核調整剥片とみられる。442は基端部側と先端部側をそれぞれ新欠により失っている。表面側には複数方向からの剥離面が複雑に切合っている。石核調整剥片とみられる。443は打面形態は新欠のため不明である。表面左側縁には原面が残っている。表面側先端部には石核の素材に残された平坦な剥離面が取込まれており、他に主剥離面とほぼ同方向の2枚のネガティブな剥離面が認められる。形態上は横形の有底剥片であるが、表面側の先行剥離面がごく浅い剥離であることから石核調整剥片である可能性が高い。444は表面左側縁は縦折れ、先端部は新欠により欠損している。打面はネガティブな剥離面打面である。表面には主剥離面に先行するポジティブな剥離面と、表面打面部左側から加撃されたやや浅い剥離面が認められる。

接合資料(図100、図版54)

445～447は横形剥片である。剥片剥離時の縦割れ445＋447と横折れ445＋446の接合資料である。打面はほぼ線状となって残っているが、打点付近が剥離時に欠損している。表面の剥離面は主剥離面とほぼ同じ打点から剥離されたものと思われる。右図の左側縁に原面と、主剥離面より風化が古い平坦な剥離面が見られる。445の先端には使用痕と考えられる小さな剥離面が並んでいる。

LC902(図93・101、図版23・55)

Ⅰ－B区の西端に位置する浅い凹みから石器・縄文土器などが出土した。検出層準は長原9～11層の分層が困難な場所であったため明確にはできなかったが、遺物の観察から縄文時代晩期以前のものと判断した。凹みは幅約2.0m、深さ約0.1mである。平面形は不定形で、底面も凸凹している。埋土は灰白色シルト・灰黄色砂質シルトで、遺物のほとんどが底面直上から出土した。

出土位置のわかる遺物は縄文土器の細片2点、石棒1点、およびサヌカイト製の石鏃の脚部の破片1点、石鏃の未製品とみられる細部調整のある剥片が1点、クサビかと考えられる剥片が1点、微細な剥片が9点の合計12点である。また、周辺の土壌を水篩選別した結果、微細な剥片34点が見つかった。

石材は455を除いて、肌理が細かい・流理構造がない(観察されない)・微斑晶の風化による凹みがごく小さい、などの特徴をもつことから同一母岩であると考えられる。455は肌理と流理構造とはほかとよく似た特徴をもつが、微斑晶の風化による凹みが大きく多いことから、異なる母岩かと思われる。

これらの中で最大で平面形が三角形の459は表・裏面の中央に素材となった剥片の剥離面を残すが、3縁には表裏とも細部調整が施されている。表面左縁の細部調整は浅形の薄形魚鱗状であり、表面右縁は浅形の薄形魚鱗状(一部階段状)、表面下縁は深形の厚形階段状、裏面左縁は浅形～深形(一部侵形)の厚形～薄形魚鱗状、裏面右縁は深形の厚形魚鱗状、裏

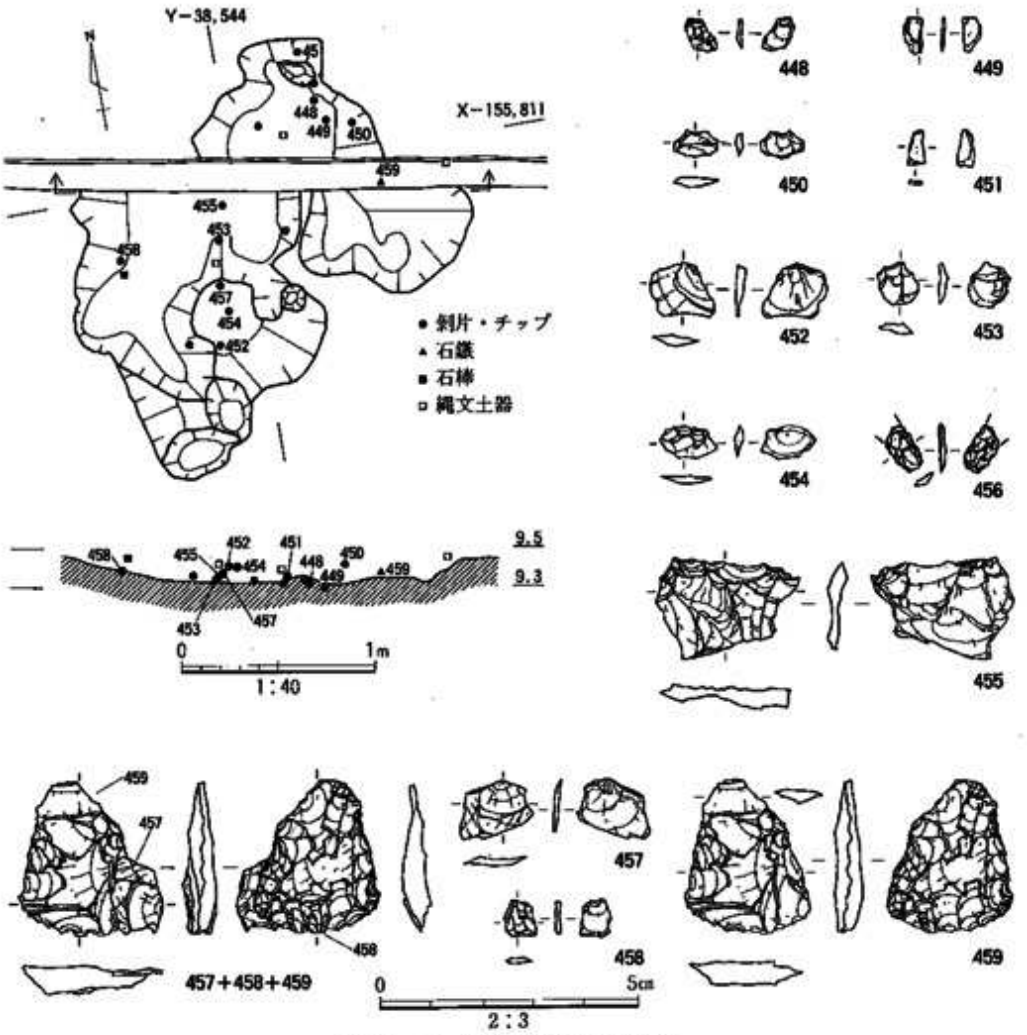


図101　Ⅰ－B区LC902と出土遺物

面上縁と下縁は深形の厚形細石刃状の細部調整であって、裏面側が相対的に細かな調整が行われている。

微細な剥片では、横形の457と452は丸みのある原面を打面とし、ともに表面に残された直線的で明瞭なフィッシャーが類似し、近接した位置から剥離されたものと推定される。横形の454の表面には裏面と同方向から微細な剥離痕がある。また横形の450の表面には比較的大きな剥離面を取込んでいる。一方、やや縦に長い448・449・451・453・458は表面の剥離面が裏面とよく似た方向から剥離されており、細石刃状に近い形態をもつ。打面は線状あるいは点状が目立つ。これらの剥片の中で457は459の表面右縁の階段状細部調整剥離面に、458は459の裏面下縁の細石刃状細部調整剥離面に接合する。以上の特徴から、ほぼ全面的に細部調整のある剥片459は剥片石器の製作を意図したものであり、微細な剥片はその整形剥片であると考えられる。459の形態と細部調整のようすからは、これが無茎式石鏃の未製品であると推測される。凹基無茎式石鏃の脚部の破片である456も石鏃製作に係わって残されたのかもしれない。

455の裏面は微斑晶の風化凹みを原因とする不規則な剥離面をもち、打面は表面基端の剥離面の同時割れによって欠損する。本来の打面の両縁には最終剥離に先行する複数の打痕があり、表裏両面に同時割れを起している。また、表面中央のフィッシャーの顕著な剥離面と対向方向からの右縁(左図左縁)の剥離面とは明瞭な稜がなく、同時割れの可能性がある。以上の観察から、455はクサビとして使用された剥片であると考えられる。

iii)小穴群(図102、図版24)

Ⅳ－B区の長原9A層上面で多数の小穴を検出した。1㎡あたり多いところで15個が分布している。平面形はほぼ円形で、直径は5～10cm、深さは2～10cmである。埋土は暗灰黄

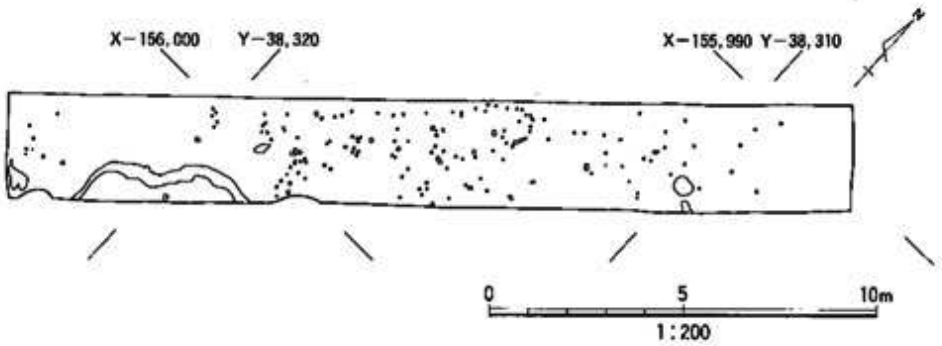


図102　Ⅳ－B区長原9A層上面の小穴群

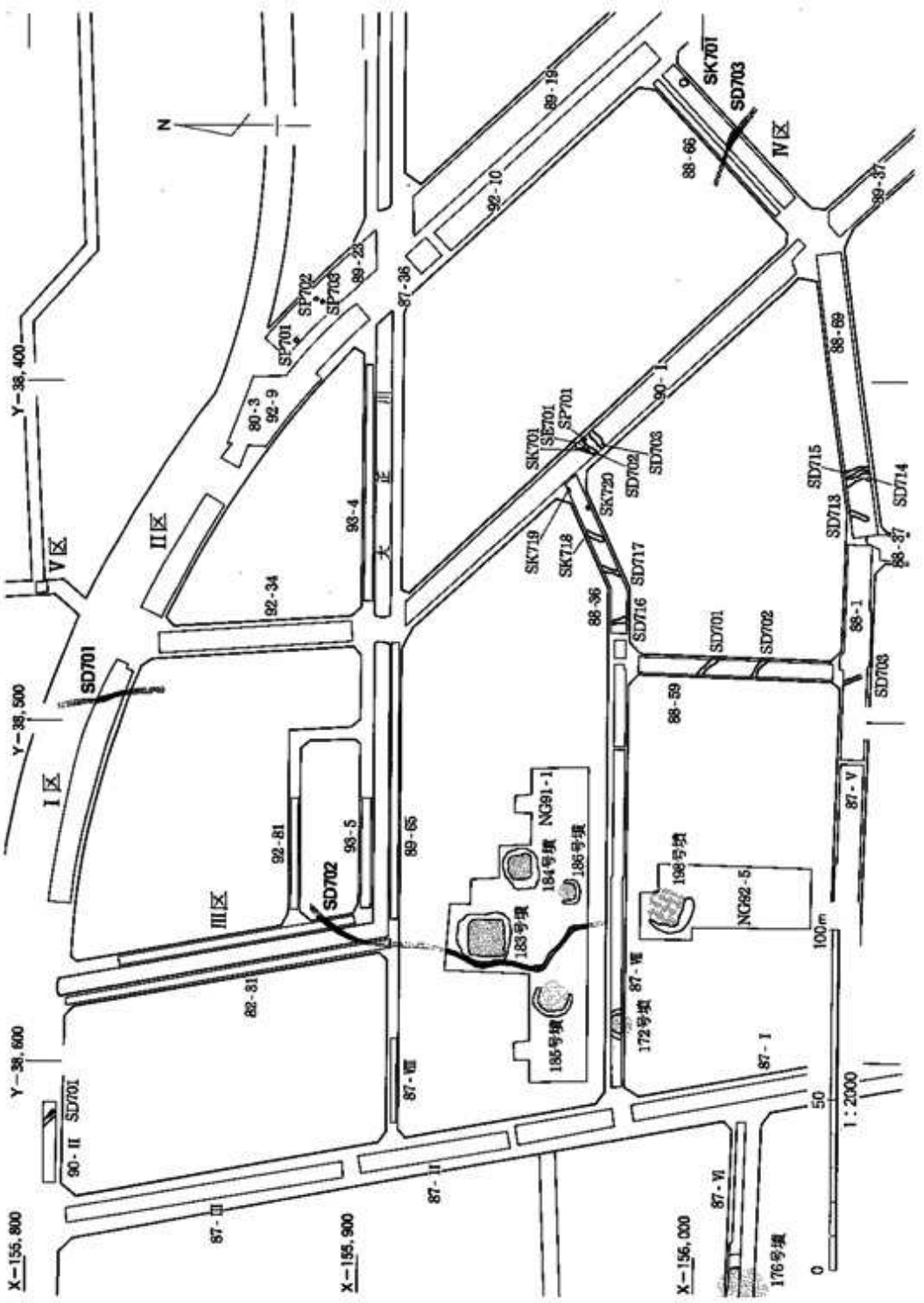


図103　長原遺跡東南地区古墳～飛鳥時代の遺構の配置

色(5／2)シルト質粘土～粘土である。深さや断面形がまちまちなことから、人為的に掘られた穴ではなく、植物の根の痕跡と考えられる。なお、Ⅳ－B区の長原9A層の上面は、東方に流れる東川辺川(ひがしかわなべ)に向って低くなっている。

5)古墳～飛鳥時代の遺構と遺物

i)溝

SD701(図103・104、図版26・55)

Ⅰ－A区の東部に位置し、長原7A層下面で検出した南北方向の溝である。幅0.6～0.8m、深さ0.3mで横断面は浅いU字形である。埋土は上下2層に分かれる。溝内および溝の周辺からほぼ完形の須恵器が出土した。460は杯蓋で、頂部外面に1条のヘラ記号がある。461は杯身で、底部が平坦で受け部が短く水平に突出する。これらはMT85型式に相当することから、溝は6世紀後半ごろに機能していたことがわかる。当地区以外で確認している古墳時代後期の水田に伴う用排水路と考えられる。

SD702(図103・105、図版27)

Ⅲ－A区に位置する南西－北東方向の溝である。検出面は長原4B層基底面であるが、埋土のようす・方向・規模がNG91－1次調査で見つかった古墳時代後期～飛鳥時代の溝[平田洋司1991]と似ていることから、それにつながる長原7層段階の6世紀後半～末ごろの溝

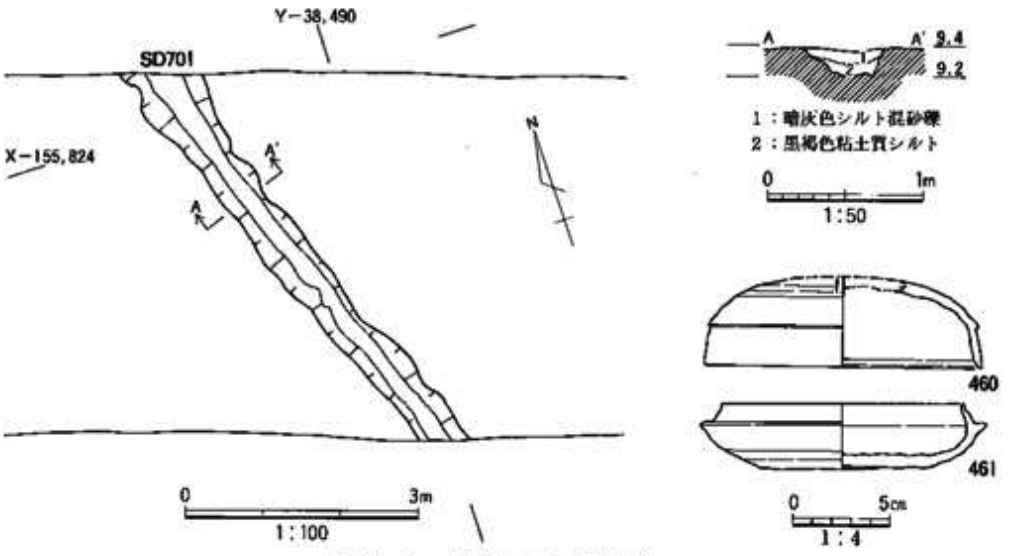


図104　Ⅰ－A区SD701と出土遺物

と考えられる。この溝は長原183号墳の西側の周溝の縁辺に沿って、墳丘を避けながら南北方向に流れており、総延長で約90mが確認できたことになる。幅約1.0m、深さ0.2mで横断面は浅いU字形である。底面は凸凹している。埋土のほとんどは水成層で、中から土師器の小片が出土した。なお、NG91－1次調査で見つかった溝からはTK43～TK209型式の須恵器が多数見つかっている。

SD703(図103・106、図版55)

Ⅳ－A区の東端に位置する南北方向の浅い溝である。検出面は長原8C層を掘込んだ長原7A層下面である。幅0.2～0.4m、深さ0.1m未満である。埋土は黄灰色(4／1)砂質シルトの水成層である。溝の底から弥生時代のサヌカイト製横形削器462が出土したが、これは下位層からの混入と考えられる。

462は横形削器である。大型で分厚い横形剥片を素材としており、剥片先端側を除いて原面を残している。主剥離面の先端部に剥片剥離軸に直交して刃部を作っている。刃部を形成する主剥離面の先端側から背面に向けて行われた連続する平坦な剥離面は、他の剥離面と比べて風化が若干新しい。同様のことは、表面左側縁側や素材剥片の表面打面側に見られる、原面から打撃された複数の剥離面についてもいえる。刃部の連続した剥離面は他と

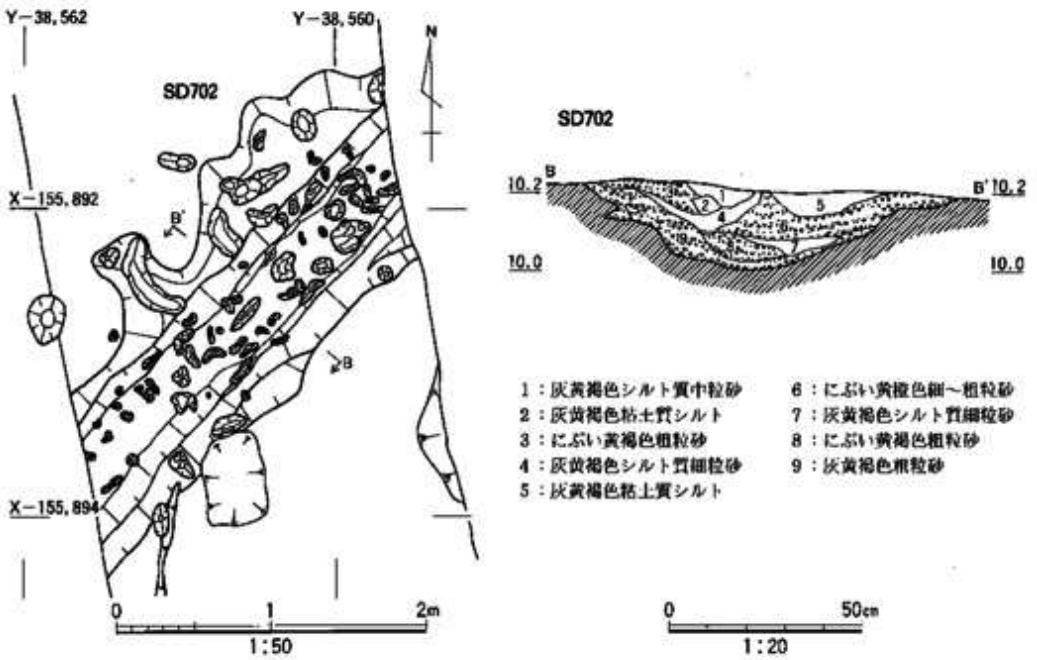


図105　Ⅲ－A区SD702

は風化が異なるものの、これらは人為的な細部調整剥離によって形成されたと考えられる。したがって、この石器は以前に剥離された剥片をそのまま加工して削器に転用した可能性がある。刃部中央付近の刃部角度は62.5°である。

ii)土壙

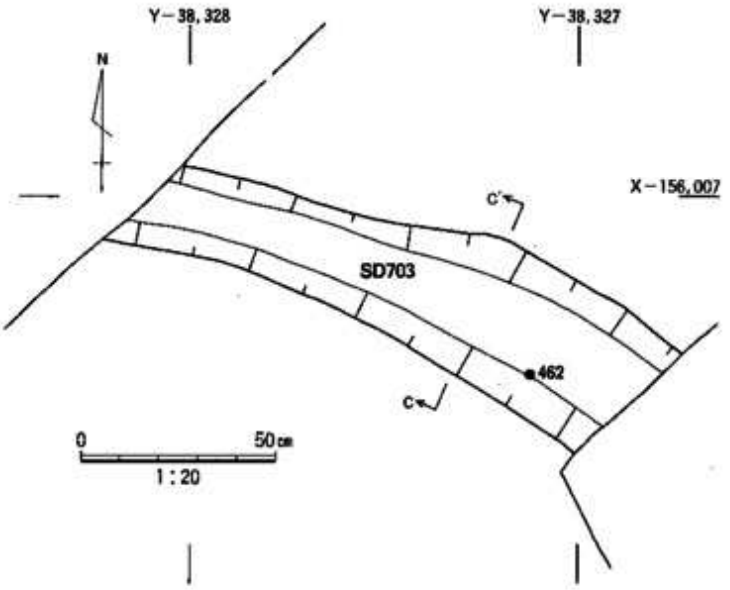
SK701(図103、図版26)

Ⅳ-B区の東端に位置し、長原7A層下面で検出した浅い土壙である。平面形はほぼ円形で、直径0.4m、深さ0.1mである。埋土は下位の長原8～9層の粘土ブロックで構成されており、人為的に埋戻されたことがわかる。

6)平安～鎌倉時代の遺構

i)水田(図107、図版27)

Ⅱ区の長原4Biii層上面で方位に沿った南北および東西方向の畦畔SR401～403と、南北方向の溝SD401を検出した。SR401・402は幅30～50cm、高さ20cmで、SR



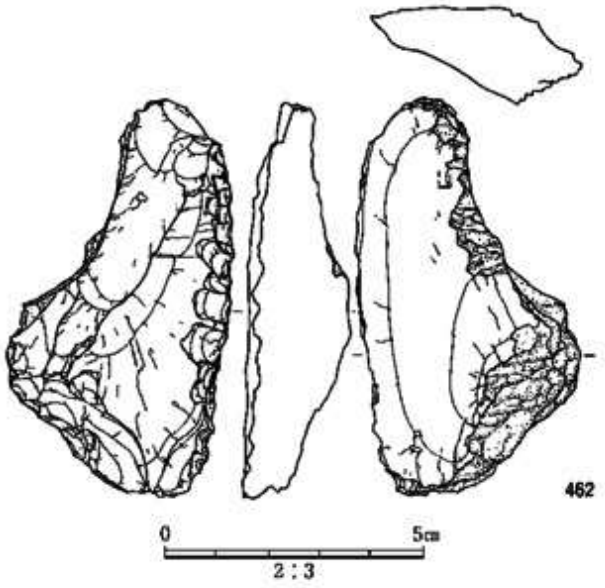


図106　Ⅳ-A区SD703と出土遺物

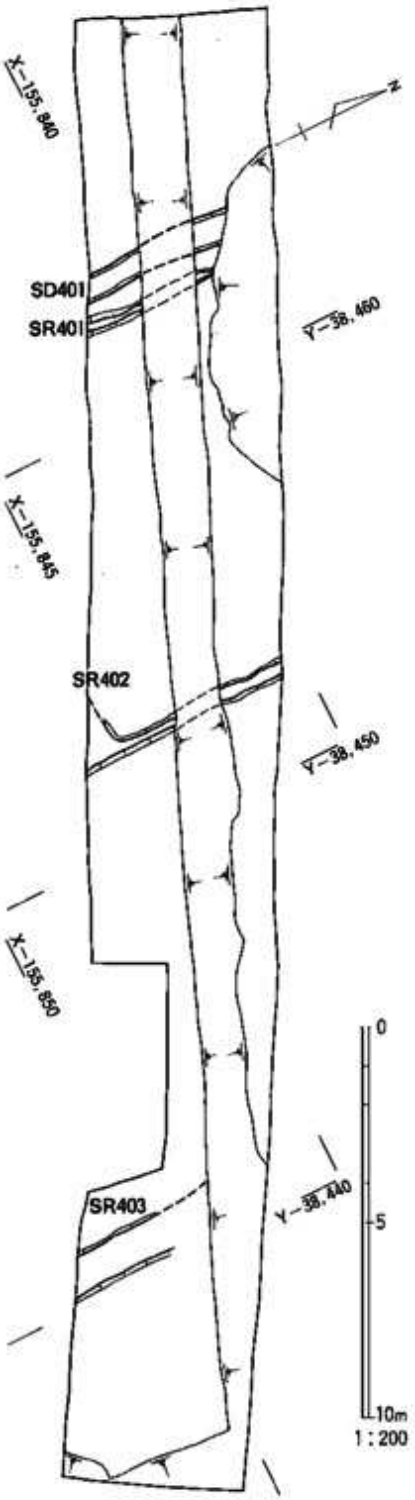


図107　Ⅱ区SD401・SR401～403

402は西方にも方位に沿って延びてゆくことがわかる。SR403は幅120cmの大きな畦畔であるが、上部を削られているため高さは5cmしか残っていない。SD401はSR401の西側に沿って掘削されている。幅50cm、深さ10cmで、底には掘削時の工具痕が顕著に見える。SR401とSR402の間は約10m、SR402とSR403の間は約12mである。

7)小結

当地区からは旧石器時代の石器集中部が2個所、縄文時代の石器集中部が2個所見つかった。このうちLC1301とLC901には留意しなければならない点がある。それは2つの集中部の位置が重なるということである(図108)。10,000年以上の間をおいて偶然に同じ場所で石割りが行われていたとは考えにくく、それぞれの遺物を再度分析する必要がある。LC1301は長原13層から見つかり、小型のナイフ形石器を含むことから後期旧石器時代の後半、ナイフ形石器文化後半期の石器群とみられる。LC901は石鏃を含むことや長原9層という出土層準から縄文時代晩期の石器群と判断できる。しかし接合資料の445+446+447以外は表面の風化が進んでいることから、下位のものがなんらかの作用で上位に移動した可能性がある。平面的に出土位置を見直してみると、接合資料以外の439～444はLC1301の範囲内におさまっていることがわかる。また、それらはLC1301に含まれる剥片とも差異がない。立面的に見ても両者は重なる部分が多い(図79・97)。つまり、LC901の遺物のうち大部分はもともとLC1301に含まれていた可能性が高いといえるのである。

LC1302については小型のナイフ形石器を含むことから、後期旧石器時代の後半、ナイフ形石器文化後半期の石器群と判断した。ナイフ形石器はいずれも切出し型ナイフ形石器である。素材となった剥片は2つが横形剥片であるが、底面をもつと明確にわかるものはない。また、接合資料1～4に代表される石核は、すべて平坦面を垂直に近い角度で加撃して剥片を取ろうとした意図がうかがえる。このような例は今まで調査した周辺の石器集中部では見られず、LC1302で行われた石割りの特徴といえる。残っている剥離面の観察から、結果的に得られた剥片は、いわゆる国府型ナイフ形石器を作るための底面をもつ素材にはならなかったようである。1つの石器集中部内で行われた特徴的な剥片剥離の方法と、そこに含まれるナイフ形石器が不定形な剥片から作られた小型の切出し型ナイフ形石器のみであるという事実は、両者に技術的なつながりがあるということを示唆していよう。

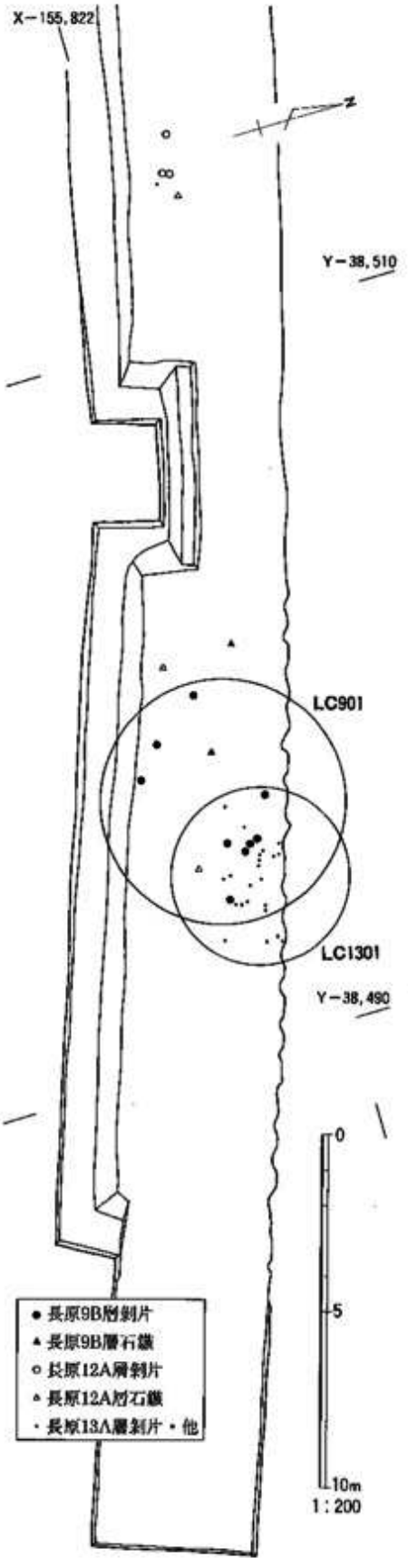


図108　Ⅰ－A区の石器遺物出土位置

第Ⅲ章　遺物の検討

鞆形埴輪の検討

本書では一ケ塚古墳周濠内から出土した鞆形埴輪を報告した。ここではそれが鞆形埴輪全体の変遷の中でどのように位置づけられるのか、ほかの資料も加えて検討してみたい。ただし、埴輪に形象された鞆は単体のものと武人埴輪に付けられたものとがあるが、ここであつかうのは単体で作られた鞆形埴輪のみである。

1）鞆の形態と使用方法

まず、埴輪の祖形である鞆について、現存する実物によって形態と使用方法を明らかにしておきたい。

鞆とは弓を射離したときに弦がはね返るため、弓をもつ方の腕をその衝撃から保護するために手首の内側に装着する古代の武具である。実物は正倉院宝物に15口[奈良国立博物館1986]、伊勢神宮神宝に29口[橿原考古学研究所附属博物館1985]納められている。正倉院の鞆(図109)は「二枚の薄い皮を巴型に縫い合わせ、内部に獣毛または藁を詰め、表面に黒漆を塗る。一端に牛皮で舌状の手を、他の端に洗革の紐を縫い付けてこれで手首に結んだ」[奈良国立博物館1992]もので、巴形の胴の大きさは長さ約12cm、最大幅約７cm、最大厚は約５cmである。伊勢神宮神宝の鞆は「熊皮の表の毛を内側にして、中に藁を詰めて縫いこみ、外面を黒漆塗にして銀蒔絵の文様が両面に描いてある」[神宮徴古館農業館1993]もので、胴の大きさは長さ約12cm、最大幅約７cm、最大厚約６cmである。

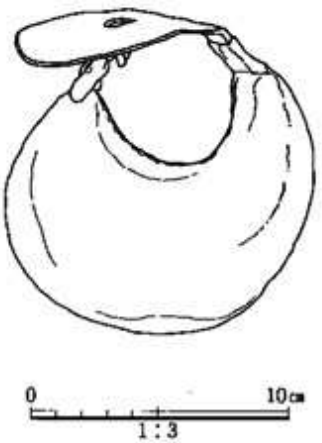


図109　正倉院宝物の鞆
（[奈良国立博物館1992] よりトレース）

正倉院の鞆が奈良時代のものであることに異

論を挟む余地はない。また、伊勢神宮の鞆も式年遷宮とともに代々作り替えられてはいるものの、古い要素を伝えているといえよう。すると、奈良時代の鞆はクッションとなる胴と手首に結びつけるための舌と紐からなっていたことがわかる。胴は表皮に馬・牛・鹿・熊などの革を用い、２枚を袋状に縫い合わせて内部に獣毛や藁を詰めている。舌は胴の一端に縫い付けられた幅の広い革帯で、中央に紐を通すための孔が１つ開いている。紐は胴のもう一方の端に縫い付けられた細長い紐あるいは革である。全体の大きさについては左右の長さ12cmほどが標準的であったと考えられる。

２)一ケ塚古墳周濠出土の鞆形埴輪(図110－⑩)

形態の概要は本文で述べたが、再び詳細に観察して実物と比較したい。

まず、これは単体で作られた埴輪である。円筒形の台の最上部に鍔を貼付け、その上に鞆形をのせている。鞆形の胴は中空で底がない。つまり円筒形の台の上端から鞆形の胴を連続させて作っている。台は直径11.2cm、高さ14.2cmで、向い合う位置に直径5.0cmのスカシ孔がある。鍔は幅4.0cmで外周の直径は20.0cmである。これ自身はほぼ完形であるが、台が低く、鍔はそれに比べて大きく作られていることから、別の円筒形の台に載せて墳丘上に置かれていたとも考えられる。鞆形は胴と舌からなり、結ばれた状態を表現している。紐は表現されていない。胴は長さ24.4cm、最大幅12.0cm、厚さ13.0cmである。革の縫目を表す線刻などの文様はないが、本来紐が付く方の上端に２条の凹線を施している。舌は長さ20.0cm、幅22.0cm、厚さ1.0cmで、羽子板状に大きく作られている。上面には凹線による二重ないし三重の縁取りがあり、中央には凹線による二重円を施し、その中央に直径0.6cmの孔を２個開けている。この二重円の直下に胴の一端がつながっている。胴と舌の間は胴の端を上下に扁平にした上で、その先に羽子板状の舌を海老の尾鰭のように接合している。

これを現存する鞆と比較すると、胴のふくらみや舌の大きさなど、全体の形は正倉院にあるような鞆を形象しているといえる。しかし、大きさは実物の２倍ほどであり、舌の形とその中央に開けられた孔が２個である点が異なっている。これらは古墳時代の鞆の形態を具体的に示す重要な特徴である。

３)鞆形埴輪の類例と変遷(図110)

現在までに知られている単体の鞆形埴輪は約30例である。しかし、全体の形状が明らかなものは少ないため、形状や年代がある程度わかるものについて検討する。

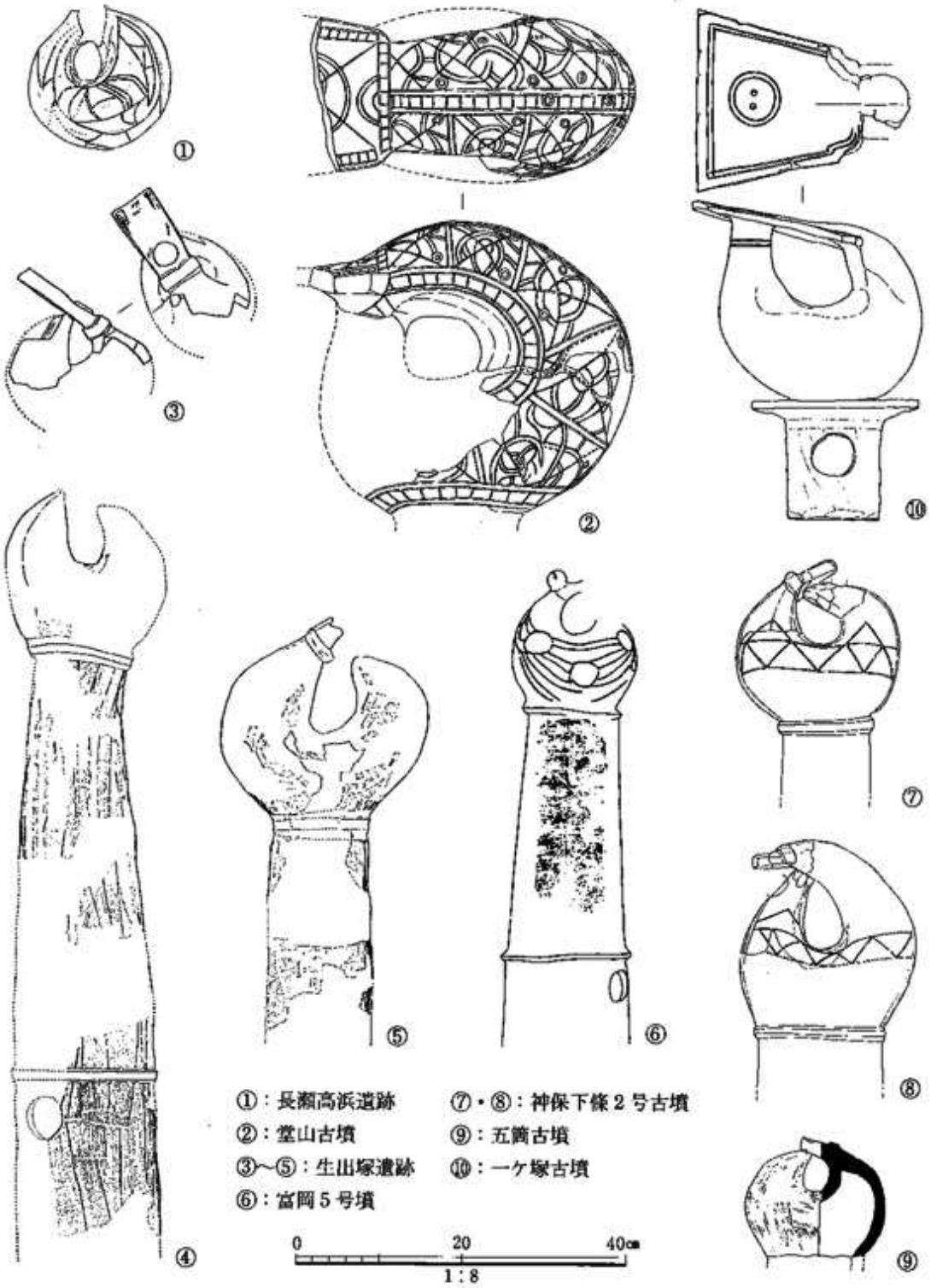


図110　各地出土の朝形埴輪

静岡県堂山古墳　［静岡県教育委員会1995］

5世紀中ごろに造られた全長約110mの前方後円墳である。鞆形埴輪②は前方部墳頂の平坦面の後円部側から出土した。全体高は35.3cmで、台は欠損しているが円筒形で直径約15cmと推定できる。胴と舌にはすき間なく梯子状文と直弧文などが線刻によって施されている。舌は板状で、先端を欠損するが胴の先端と結ばれた状態を表現している。

鳥取県長瀬高浜遺跡　［鳥取県教育文化財団1982］

5世紀中ごろの埴輪樹立地から見つかったものである。鞆形埴輪①は粘土紐を丸く輪にして作り、片面にのみ線刻による文様を施す。もう片面は平らで文様はない。台が付かないことから直接地面に置かれたか、別作りの台に置かれたと推定されている。舌は欠損しているが、胴の先端と結ばれていた状態を表現していたと推定できる。

京都府鴨谷東1号墳　［和田晴吾ほか1987］

5世紀に造られた直径約48mの円墳である。鞆形埴輪⑪は墳頂部から出土した。全体高は約27cmで、円筒形の台が付く。台には低いタガが巡るが、鞆形との境にタガはない。鞆形は上部を粘土紐の輪積で作った球体を扁平に押しつぶして、上部の両面に直径約5cmの

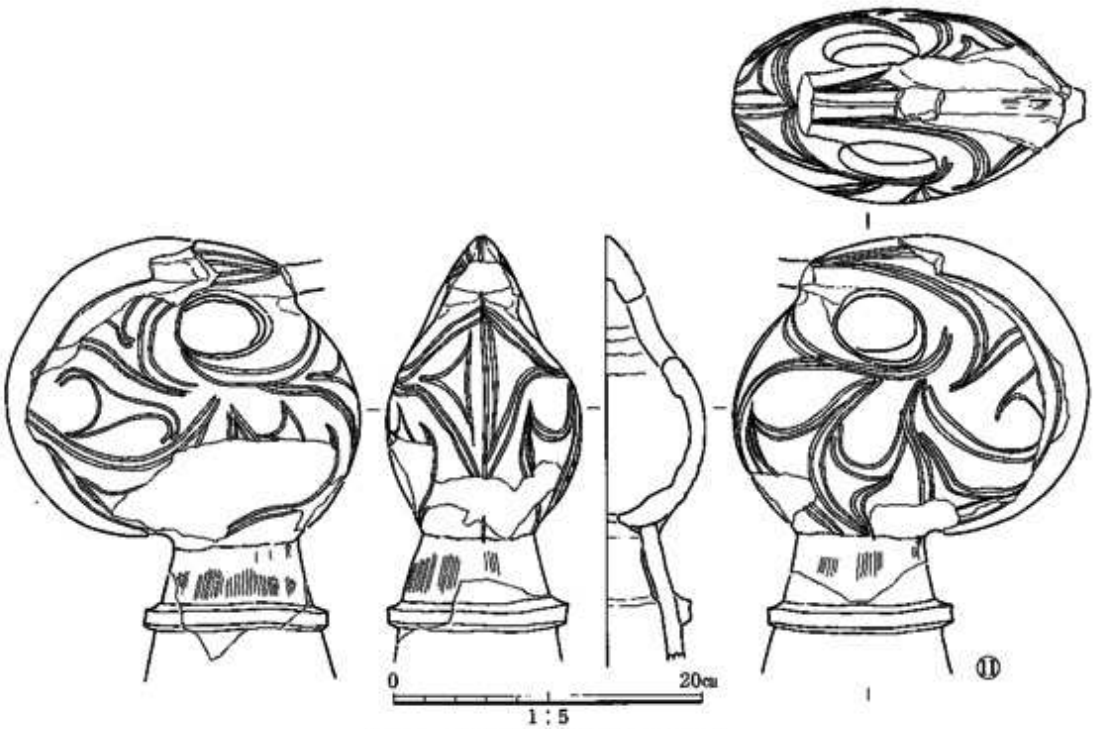


図111　鴨谷東1号墳出土の鞆形埴輪

スカシ状の穴を開けて腕を通す部分を表現している。したがって穴から鞆形の内部を見ることができる。鞆形の底には直径約1.8cmの小穴が開いているが、これは焼成前に開けられたものである。鞆形と台との関係は、粘土の継目などの観察から、別に鞆形を作ってから台の上に載せて、粘土を充填しながら接合していることがわかる。ただし、線刻は接合後に施している。鞆形は舌を欠損しているが、胴の先端と結ばれた状態を表現している。舌の反対側の背面には、幅1.5cmほどの割れ面でも剥離面でもない平滑な面が帯状に認められる。また、それに沿って両側に割れ面があることから、革の綴じ合わせ部分は薄い板状の粘土を両側から合わせて、横断面が人字状になるように突出部を作って表現していたと考えられる。胴表面の線刻は基本的には二重線で施され、腕を通す部分をとりまくものと、そこから派生して円弧を描くもの、また三角形を描くものなどさまざまである。舌は根元しか残っておらず、幅は約4cm、厚さ約2cmである。黒斑がある。

群馬県恵下古墳　[梅沢重昭1981]

6世紀前半に造られた直径27mの円墳である。鞆形埴輪は墳丘の周囲から出土した。全体高は約20cmで、低い円筒形の台が付いている。胴には線刻による三角形や円形の文様を施し、背面には突帯を貼付けて革の綴じ合わせを表現している。舌の先端は欠損しているが、胴の先端と結ばれた状態を表現している。

埼玉県生出塚遺跡埴輪窯　[鴻巣市市史編さん調査会1989]

6世紀初頭の埴輪窯から3個体が出土した。そのうちの④・⑤は全体高93～50cmで、高い円筒形の台が付く。台と鞆形との境は明瞭でない。胴は無文で舌とは離れている。③は台を欠損するが舌がほぼ完存している。舌は板状で長く張出し、胴の先端と結ばれた状態を表現している。

群馬県富岡5号墳　[外山和夫1972]

6世紀中ごろに造られた直径約30mの円墳である。鞆形埴輪⑥は墳頂部から出土した。全体高は58.0cmで、高い円筒形の台が付く。台と鞆形との境は明瞭でない。胴には円形と三日月形の線刻を施し、舌との境に鈴を表現する。胴と舌が結ばれた状態を表現していたかどうかは不明である。

群馬県神保下條2号古墳　[群馬県埋蔵文化財調査事業団1992]

6世紀後半に造られた直径約10mの円墳である。鞆形埴輪は墳頂部から同型のものが4個体出土した。⑦・⑧は全体高は約30cmで、円筒形の台の上に鞆形を付けている。台と鞆形との境は明瞭でない。胴には片面だけに鋸歯文を線刻し、背面には突帯を付けて革の綴

じ合わせを表現している。舌は欠損するが短い板状に復元されており、胴の先端と結ばれた状態を表現している。

栃木県五箇古墳　［佐野市文化財保護審議委員会1961］

6世紀後半に造られた直径約22mの円墳である。鞆形埴輪⑨は墳丘から出土した。全体高は約10cmで、台は欠損しているが直径約9cmの円筒が付くと推定できる。胴・舌ともに文様はない。舌は短く表現され、胴の先端と結ばれた状態を表現している。

以上のほかにも4世紀末とされる三重県石山古墳の例[京都大学文学部博物館1993]があるが、全体の形状が明らかでなく、確実に鞆形埴輪かどうかわかっていない。これを最古の例としても、鞆形埴輪はほかの形象埴輪と同様に4世紀末ごろに現れ、分布の中心は近畿地方であったといえる。また初期のものは[高橋克壽1992]がいうように胴と舌が閉じており、直弧文などの線刻を施すものが多い傾向にある。それが次第に簡略化され、6世紀中ごろ以降は無文になり、胴と舌が離れた形も作られるようである。また、分布範囲も関東地方に移り、群馬県や栃木県下で圧倒的に多く見られるようになるのである。

4）一ケ塚古墳例の位置づけ

一ケ塚古墳は円筒埴輪の型式によって5世紀初頭に築造されたと考えられることから、出土した鞆形埴輪は全国的に見てもごく初期のものといえる。これとほかの5世紀代の例を比較すると、胴の線刻は必ずしもすべての鞆形埴輪に施されていたわけではないことがわかる。これに対して共通している点は、鞆形と台との境がはっきりしていることであろう。6世紀以降のものは鞆形と台との境が曖昧で不明瞭なものが多いが、5世紀代のものは制作方法からも外見的にも台の上に鞆を載せているという形状が認められるのである。

鞆を使うということは手首の保護だけでなく、弦打ちと同様に音を立てることも重要な目的であったといわれている。鞆の神秘性を重視していたことは、数ある器財埴輪の中で、唯一鞆だけが実物より大きく作られていることからもわかるであろう。一ケ塚古墳の鞆形埴輪はその嚆矢である。

（松本）

本稿を執筆するに当って立命館大学和田晴吾氏・加悦町古墳公園加悦町教育委員会専門員佐藤晃一氏から多大な御教示ならびに鳴谷東1号墳出土の鞆形埴輪の実測について便宜をはかっていただいた。末筆ながら厚くお礼申しあげます。

別　　表

口径・底径は復元値、器高は現存値を示す
数値の単位はcm

別表1　遺物一覧（陶磁器・土器・埴輪など）

番号	地区	区	層位・遺構	種類	器形	口径	器高	底径	備考
1	瓜破遺跡東南地区	I	長原6層	須恵器	杯蓋	10.0	2.2	－	ヘラ記号・飛鳥III
2	瓜破遺跡東南地区	I	長原6層	須恵器	杯蓋	10.8	1.9	－	飛鳥III
3	瓜破遺跡東南地区	I	長原6層	須恵器	杯身	10.0	3.5	－	飛鳥III
6	瓜破遺跡東南地区	I	SD601	須恵器	甑	－	7.4	－	飛鳥II
7	瓜破遺跡東南地区	I	SD601	須恵器	杯身	10.4	4.0	－	飛鳥III
8	瓜破遺跡東南地区	I	SD601	須恵器	杯身	9.6	2.9	－	飛鳥II
9	瓜破遺跡東南地区	II	SK601	須恵器	平瓶	－	3.5	－	飛鳥III～IV
10	瓜破遺跡東南地区	II	SK601	須恵器	甕	14.8	3.6	－	飛鳥III～IV
11	瓜破遺跡東南地区	III	SK602	土師器	甕	19.9	9.0	－	平城宮V
12	瓜破遺跡東南地区	III	SK602	土師器	甕	21.0	9.8	－	平城宮V
13	瓜破遺跡東南地区	III	SK602	土師器	甕	21.0	20.4	－	平城宮V
14	瓜破遺跡東南地区	III	SK602	土師器	高杯	18.1	11.3	－	平城宮V
15	瓜破遺跡東南地区	III	SK602	須恵器	広口壺	19.2	9.3	－	平城宮V
16	瓜破遺跡東南地区	III	SK602	須恵器	壺	－	14.9	16.7	平城宮V
17	長原遺跡西南・南地区	III	長原2層	唐津焼	小皿	11.0	2.7	－	
18	長原遺跡西南・南地区	II	長原3層	瓦器	小皿	8.0	0.95	－	
19	長原遺跡西南・南地区	II	長原3層	瓦器	小皿	8.0	1.35	－	
20	長原遺跡西南・南地区	II	長原4層	土師器	皿	12.3	2.6	－	
21	長原遺跡西南・南地区	III	長原5層	土師器	杯	15.2	3.2	－	
22	長原遺跡西南・南地区	III	長原5層	土師器	杯	12.8	3.2	－	
23	長原遺跡西南・南地区	III	長原5層	土師器	杯	13.4	3.0	－	平城宮I
24	長原遺跡西南・南地区	III	長原5層	土師器	杯	17.0	3.0	－	
25	長原遺跡西南・南地区	III	長原5層	土師器	小壺	7.6	3.5	－	
26	長原遺跡西南・南地区	III	長原5層	土師器	甕	15.8	5.8	－	
27	長原遺跡西南・南地区	III	長原4層	土師器	鉢	26.6	15.8	－	
28	長原遺跡西南・南地区	III	長原5層	土師器	甕	18.0	14.6	－	平城宮VI
29	長原遺跡西南・南地区	III	長原6B層	須恵器	杯身	12.8	3.0	－	TK209型式
30	長原遺跡西南・南地区	II	長原6A層	須恵器	杯身	13.6	3.35	－	TK43型式
31	長原遺跡西南・南地区	III	長原6B層	須恵器	杯身	10.6	4.4	－	TK47型式
32	長原遺跡西南・南地区	III	長原4層	須恵器	器台(筒部)	－	4.8	－	
33	長原遺跡西南・南地区	III	長原6A層	須恵器	壺	－	－	－	縄席文
34	長原遺跡西南・南地区	III	長原4層	須恵器	器台(杯部)	－	－	－	
35	長原遺跡西南・南地区	III	長原6A層	須恵器	把手付椀	－	3.2	6.1	内面に当て具痕
36	長原遺跡西南・南地区	III	長原6A層	埴輪	円筒	－	8.0	－	
37	長原遺跡西南・南地区	III	長原6A層	埴輪	家形	－	－	－	
69	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原7A層	ヒノキ板	建築部材	－	－	－	加工痕
70	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原6A・6B層	埴輪	円筒	41.2	25.0	－	
71	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原6B層	埴輪	円筒	－	14.7	－	
72	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原7A層	埴輪	円筒	－	50.0	27.7	黒斑
73	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原7A層	埴輪	円筒	－	32.1	－	黒斑
74	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原6A・6B層	埴輪	円筒	－	13.2	34.6	
75	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原6A・7A層	埴輪	円筒	－	46.2	25.0	
76	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原6A層	埴輪	円筒	48.4	24.9	－	線刻
77	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原6A層	埴輪	円筒	49.4	25.5	－	黒斑
78	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原6A層	埴輪	円筒	30.6	8.9	－	
79	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原6A層	埴輪	円筒	－	14.5	－	
80	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原6A層	埴輪	円筒	24.0	10.0	－	
81	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原7A層	埴輪	円筒	－	11.4	20.6	黒斑

番号	地　区	区	層位・遺構	種類	器形	口径	器高	底径	備考
82	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原6A層	埴輪	朝顔形	54.0	14.1	—	赤色顔料
83	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原6A層	埴輪	朝顔形	—	3.8	—	赤色顔料
84	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原6A層	埴輪	朝顔形	—	8.0	—	
85	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原6A層	埴輪	朝顔形	—	3.8	—	
86	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原6A層	埴輪	朝顔形	—	3.8	—	
87	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原5A層	埴輪	朝顔形	—	5.6	—	
88	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原6A層	埴輪	朝顔形	—	8.5	—	赤色顔料
89	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原6A層	埴輪	衣蓋形蓋	—	52.8	39.3	赤色顔料・黒斑・線刻
90	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原6A層	埴輪	衣蓋形蓋	—	19.6	29.6	
91	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原6A層	埴輪	衣蓋形蓋	—	14.6	31.0	黒斑
92	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原6A層	埴輪	衣蓋形蓋	—	21.4	—	
93	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原6A層	埴輪	衣蓋形立飾	—	—	—	赤色顔料・線刻
94	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原5A層	埴輪	衣蓋形立飾	—	—	—	赤色顔料・線刻
95	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原6層	埴輪	衣蓋形立飾	—	—	—	線刻
96	長原遺跡西南・南地区	I	長原3層	埴輪	衣蓋形立飾	—	—	—	線刻
97	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原7A層	埴輪	衣蓋形立飾	—	—	—	線刻
98	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原5A層	埴輪	衣蓋形立飾	—	—	—	赤色顔料・線刻
99	長原遺跡西南・南地区	I	長原4層	埴輪	衣蓋形立飾	—	—	—	線刻
100	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原5A層	埴輪	衣蓋形立飾	—	—	—	線刻
101	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原5A層	埴輪	衣蓋形立飾	—	—	—	線刻
102	長原遺跡西南・南地区	I	長原3層	埴輪	衣蓋形立飾	—	—	—	線刻
103	長原遺跡西南・南地区	I	長原4層	埴輪	盾形	—	—	—	線刻
104	長原遺跡西南・南地区	I	長原3層	埴輪	盾形	—	—	—	線刻
105	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原5A層	埴輪	盾形	—	—	—	線刻
106	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原5A層	埴輪	盾形	—	—	—	線刻
107	長原遺跡西南・南地区	I	長原3層	埴輪	盾形	—	—	—	線刻
108	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原6層	埴輪	盾形	—	—	—	線刻
109	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原5A層	埴輪	盾形	—	—	—	赤色顔料・線刻
110	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原5B層	埴輪	盾形	—	—	—	線刻
111	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原5A層	埴輪	盾形	—	—	—	線刻
112	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原6層	埴輪	盾形	—	—	—	線刻
113	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原5A・5B層	埴輪	不明形象	—	—	—	線刻
114	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原5A層	埴輪	盾形	—	—	—	赤色顔料・線刻
115	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原5A層	埴輪	盾形	—	—	—	線刻
116	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原6層	埴輪	不明形象	—	—	—	線刻
117	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原6層	埴輪	不明形象	—	—	—	線刻
118	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原6層	埴輪	不明形象	—	—	—	線刻
119	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原6層	埴輪	不明形象	—	—	—	線刻
120	長原遺跡西南・南地区	I	長原4層	埴輪	不明形象	—	—	—	線刻
121	長原遺跡西南・南地区	II	196号墳周溝内長原6層	埴輪	鞆形	—	38.3	—	線刻
122	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原5A層	埴輪	草摺形	—	—	—	線刻
123	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原5A層	埴輪	草摺形	—	—	—	線刻
124	長原遺跡西南・南地区	I	長原3層	埴輪	草摺形	—	—	—	線刻
125	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原5B層	埴輪	草摺形	—	14.0	—	幅20.4cm、奥行10.1cm・線刻
126	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原5B層	埴輪	短甲形	—	—	—	線刻
127	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原5A層	埴輪	家形	—	—	—	線刻・切妻建物
128	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原5A・5B層	埴輪	家形	—	—	—	線刻
129	長原遺跡西南・南地区	I	長原3層	埴輪	家形	—	—	—	平地式建物
130	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原5B層	埴輪	家形	—	—	—	平地式建物

番号	地区	区	層位・遺構	種類	器形	口径	器高	底径	備考
131	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原7A層	埴輪	鶏形	—	22.0	—	幅6.2cm、奥行19.7cm・線刻
132	長原遺跡西南・南地区	I	一ケ塚周濠内長原5B層	埴輪	獣足形	—	12.8	—	直径4.3～5.0cm
133	長原遺跡西南・南地区	II	196号墳周溝内長原6層	埴輪	円筒	28.0	31.5	—	線刻・黒斑・川西編年II期
134	長原遺跡西南・南地区	II	196号墳周溝内長原6層	埴輪	円筒	28.6	29.7	—	川西編年II期
135	長原遺跡西南・南地区	II	196号墳周溝内長原6層	埴輪	円筒	29.2	45.9	18.0	黒斑・川西編年II期
136	長原遺跡西南・南地区	II	196号墳周溝内長原6層	埴輪	円筒	29.8	13.8	—	線刻・川西編年II期
137	長原遺跡西南・南地区	II	196号墳周溝内長原6層	埴輪	朝顔形	—	11.8	—	川西編年II期
138	長原遺跡西南・南地区	II	196号墳周溝内長原6層	埴輪	朝顔形	—	14.4	—	川西編年II期
139	長原遺跡西南・南地区	II	196号墳周溝内長原6層	埴輪	壺形	39.0	45.7	14.0	黒斑・川西編年II期
140	長原遺跡西南・南地区	IIIA	80号墳周溝内長原6B層	須恵器	杯蓋	13.0	4.6	—	TK23～TK47型式
141	長原遺跡西南・南地区	IIIA	80号墳周溝内長原6B層	須恵器	杯身	13.5	4.5	—	TK23～TK47型式
142	長原遺跡西南・南地区	IIIA	80号墳周溝内長原6B層	須恵器	壺	13.0	2.8	—	TK23～TK47型式
143	長原遺跡西南・南地区	IIIA	81号墳周溝内長原6B層	須恵器	杯身	—	2.8	—	TK209型式
144	長原遺跡西南・南地区	IIIA	80号墳周溝	土師器	高杯	12.2	5.5	—	
145	長原遺跡西南・南地区	IIIA	81号墳周溝	土師器	高杯	14.2	11.6	10.2	
146	長原遺跡西南・南地区	IIIA	80号墳周溝内長原6B層	須恵器	甕	22.4	9.2	—	TK216～TK208型式
147	長原遺跡西南・南地区	IIIA	80号墳周溝内長原6B層	埴輪	円筒	—	6.6	—	
148	長原遺跡西南・南地区	IIIB	82号墳周溝内長原6B層	須恵器	杯身	12.6	3.5	—	TK208型式
149	長原遺跡西南・南地区	IIIB	83号墳周溝	須恵器	盤	—	1.6	—	TK216型式
150	長原遺跡西南・南地区	IV	194号墳墳丘上長原6A層	須恵器	有蓋高杯	10.1	8.4	9.0	TK23型式
151	長原遺跡西南・南地区	IV	194号墳墳丘上長原6A層	土師器	鉢	13.8	5.3	—	
152	長原遺跡西南・南地区	IV	194号墳墳丘周辺長原6A層	埴輪	円筒	—	10.0	—	川西編年V期
153	長原遺跡西南・南地区	IV	193号墳周溝	須恵器	小型短頸壺	6.0	4.3	—	TK23～TK47型式
154	長原遺跡西南・南地区	IV	193号墳周溝	須恵器	甕	—	4.9	—	TK23～TK47型式
155	長原遺跡西南・南地区	IV	193号墳周溝	須恵器	杯蓋	12.0	4.1	—	TK23～TK47型式
156	長原遺跡西南・南地区	IV	193号墳周溝	須恵器	杯身	10.4	5.0	—	TK23～TK47型式
157	長原遺跡西南・南地区	IV	193号墳周溝	須恵器	杯身	11.0	4.2	—	TK23～TK47型式
158	長原遺跡西南・南地区	IV	193号墳周溝内長原6B層	土師器	甕	17.0	6.0	—	
159	長原遺跡西南・南地区	IV	193号墳周溝	須恵器	甕	—	11.0	—	TK23～TK47型式
160	長原遺跡西南・南地区	IV	193号墳周溝	埴輪	円筒	23.1	6.6	—	
161	長原遺跡西南・南地区	IV	193号墳周溝	埴輪	円筒	29.2	9.0	—	
162	長原遺跡西南・南地区	IV	193号墳周溝	埴輪	円筒	21.2	10.4	—	
163	長原遺跡西南・南地区	IV	193号墳周溝	埴輪	円筒	23.2	34.5	—	
164	長原遺跡西南・南地区	IV	193号墳周溝	埴輪	円筒	24.8	32.0	—	黒斑・川西編年V期
165	長原遺跡西南・南地区	IV	193号墳周溝	埴輪	円筒	22.8	21.9	—	黒斑・川西編年V期
166	長原遺跡西南・南地区	IV	193号墳周溝	埴輪	円筒	—	14.3	15.8	川西編年V期
167	長原遺跡西南・南地区	IV	193号墳周溝	埴輪	円筒	23.6	20.2	—	黒斑・川西編年V期
168	長原遺跡西南・南地区	IV	193号墳周溝	埴輪	円筒	—	8.5	15.8	川西編年V期
169	長原遺跡西南・南地区	IV	193号墳周溝	埴輪	円筒	24.8	42.8	14.4	黒斑・川西編年V期
170	長原遺跡西南・南地区	IV	193号墳周溝	埴輪	円筒	22.5	15.8	—	黒斑・川西編年V期
171	長原遺跡西南・南地区	IV	193号墳周溝	埴輪	円筒	—	14.8	—	黒斑・川西編年V期
172	長原遺跡西南・南地区	IV	193号墳周溝	埴輪	円筒	22.8	21.0	—	
173	長原遺跡西南・南地区	IV	193号墳周溝	埴輪	円筒	—	14.6	—	
174	長原遺跡西南・南地区	IV	193号墳周溝	埴輪	円筒	—	12.0	—	
175	長原遺跡西南・南地区	IV	193号墳周溝	埴輪	円筒	—	6.5	—	
176	長原遺跡西南・南地区	IV	193号墳周溝	埴輪	円筒	—	13.0	—	須恵質
177	長原遺跡西南・南地区	IV	193号墳周溝	埴輪	朝顔形	40.9	—	—	赤色顔料・川西編年V期
178	長原遺跡西南・南地区	IV	193号墳周溝	埴輪	朝顔形	41.8	10.9	—	須恵質・川西編年V期
179	長原遺跡西南・南地区	V	195号墳墳丘周辺長原6A層	須恵器	杯蓋	11.9	3.8	—	TK47型式

番号	地区	区	層位・遺構	種類	器形	口径	器高	底径	備考
180	長原遺跡西南・南地区	V	195号墳墳丘周辺長原6A層	須恵器	無蓋高杯	10.6	4.1	—	TK47型式
181	長原遺跡西南・南地区	V	195号墳墳丘周辺長原6A層	須恵器	有蓋高杯	9.0	8.3	—	TK47型式
182	長原遺跡西南・南地区	V	195号墳墳丘周辺長原6A層	埴輪	巫女形頭	—	—	—	
183	長原遺跡西南・南地区	V	195号墳墳丘周辺長原6A層	埴輪	巫女形胴	—	17.8	—	線刻
184	長原遺跡西南・南地区	V	195号墳墳丘周辺長原6A層	埴輪	巫女形腕	—	—	—	
185	長原遺跡西南・南地区	V	195号墳墳丘周辺長原6A層	埴輪	巫女形腕	—	—	—	
186	長原遺跡西南・南地区	V	195号墳墳丘周辺長原6A層	埴輪	巫女形腕	—	—	—	
187	長原遺跡西南・南地区	V	195号墳墳丘周辺長原6A層	埴輪	円筒	25.6	—	16.2	
188	長原遺跡西南・南地区	V	195号墳墳丘周辺長原6A層	埴輪	円筒	—	—	16.4	川西編年V期
189	長原遺跡西南・南地区	IV	SD701	埴輪	朝顔形	—	6.4	—	
190	長原遺跡西南・南地区	V	SK601	須恵器	台付長頸壺	—	10.2	—	口頸・高台打欠
191	長原遺跡西南・南地区	IV	SD401	須恵器	壺(蔵骨器)	—	28.0	12.2	口縁打欠・192、193、人骨含
192	長原遺跡西南・南地区	IV	SD401	土師器	小皿	10.2	1.3	—	191内・て字状
193	長原遺跡西南・南地区	IV	SD401	土師器	皿	14.0	2.8	—	191内
194	長原遺跡西南・南地区	IV	SD401	瓦器	小皿	8.8	2.1	—	
195	長原遺跡西南・南地区	IV	SD401	瓦器	椀	14.8	3.7	—	
196	長原遺跡西南・南地区	IV	SD402	瓦器	小皿	8.6	2.2	—	
197	長原遺跡西南・南地区	IV	SD402	土師器	小皿	9.0	1.2	—	
198	長原遺跡西南・南地区	IV	東除川	土師器	小皿	10.0	1.3	—	て字状
199	長原遺跡西南・南地区	IV	東除川	土師器	小皿	10.2	1.2	—	て字状
200	長原遺跡西南・南地区	IV	東除川	土師器	小皿	10.0	1.1	—	て字状
201	長原遺跡西南・南地区	IV	東除川	土師器	小皿	10.2	1.2	—	て字状
202	長原遺跡西南・南地区	IV	東除川	土師器	小皿	9.4	1.3	—	て字状
203	長原遺跡西南・南地区	IV	東除川	土師器	小皿	9.2	1.2	—	て字状
204	長原遺跡西南・南地区	IV	東除川	土師器	小皿	9.4	1.4	—	て字状
205	長原遺跡西南・南地区	IV	東除川	土師器	小皿	10.0	1.2	—	て字状
206	長原遺跡西南・南地区	IV	東除川	土師器	小皿	10.2	1.5	—	て字状
207	長原遺跡西南・南地区	IV	東除川	土師器	小皿	9.3	1.4	—	て字状
208	長原遺跡西南・南地区	IV	東除川	土師器	小皿	9.6	1.3	—	て字状
209	長原遺跡西南・南地区	IV	東除川	土師器	小皿	9.7	1.5	—	て字状
210	長原遺跡西南・南地区	IV	東除川	土師器	小皿	10.0	1.7	—	て字状
211	長原遺跡西南・南地区	IV	東除川	土師器	小皿	9.6	1.4	—	て字状
212	長原遺跡西南・南地区	IV	東除川	土師器	小皿	9.2	1.9	—	て字状
213	長原遺跡西南・南地区	IV	東除川	土師器	小皿	9.4	1.8	—	て字状
214	長原遺跡西南・南地区	IV	東除川	土師器	小皿	9.1	1.9	—	て字状
215	長原遺跡西南・南地区	IV	東除川	土師器	小皿	9.4	1.6	—	て字状
216	長原遺跡西南・南地区	IV	東除川	土師器	小皿	8.4	1.4	—	て字状
217	長原遺跡西南・南地区	IV	東除川	土師器	小皿	9.6	1.8	—	て字状
218	長原遺跡西南・南地区	IV	東除川	土師器	小皿	9.6	2.0	—	て字状
219	長原遺跡西南・南地区	IV	東除川	土師器	小皿	10.0	1.5	—	て字状
220	長原遺跡西南・南地区	IV	東除川	土師器	小皿	9.1	2.0	—	
221	長原遺跡西南・南地区	IV	東除川	土師器	小皿	8.6	1.6	—	
222	長原遺跡西南・南地区	IV	東除川	土師器	小皿	9.6	1.7	—	
223	長原遺跡西南・南地区	IV	東除川	土師器	小皿	9.0	1.3	—	
224	長原遺跡西南・南地区	IV	東除川	土師器	小皿	10.2	1.5	—	
225	長原遺跡西南・南地区	IV	東除川	土師器	小皿	9.6	1.6	—	
226	長原遺跡西南・南地区	IV	東除川	土師器	小皿	9.6	2.6	—	
227	長原遺跡西南・南地区	IV	東除川	土師器	小皿	9.6	2.3	—	
228	長原遺跡西南・南地区	IV	東除川	土師器	小皿	9.7	2.2	—	

番号	地区	区	層位・遺構	種類	器形	口径	器高	底径	備考
229	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	土師器	小皿	9.8	2.5	－	
230	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	土師器	皿	15.0	2.4	－	
231	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	土師器	皿	13.6	2.0	－	
232	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	土師器	皿	16.0	2.0	－	
233	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	土師器	皿	12.0	3.9	－	
234	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	土師器	皿	13.4	4.3	－	
235	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	土師器	皿	14.9	3.6	－	
236	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	土師器	皿	14.0	2.8	－	
237	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	土師器	皿	13.4	3.0	－	
238	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	土師器	皿	14.8	3.8	－	
239	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	土師器	皿	15.2	3.0	－	
240	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	土師器	皿	13.7	3.0	－	
241	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	土師器	皿	17.4	2.6	－	
242	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	土師器	皿	14.4	4.0	－	
243	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	土師器	皿	16.0	2.3	－	
244	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	土師器	皿	17.0	3.5	－	
245	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	白磁	皿	11.0	2.3	－	
246	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	青磁	小鉢	－	2.0	－	
247	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	土師器	羽釜	32.7	7.4	－	
248	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	瓦器	椀	15.0	3.4	－	
249	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	瓦器	椀	15.4	4.4	－	
250	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	瓦器	椀	15.6	5.2	－	
251	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	瓦器	椀	15.4	4.6	－	
252	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	瓦器	椀	15.7	5.8	－	
253	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	瓦器	椀	15.4	5.9	－	
254	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	瓦器	椀	15.5	5.9	－	
255	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	黒色土器	椀	14.7	5.7	5.8	
256	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	黒色土器	椀	15.2	5.1	－	
257	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	瓦器	椀	15.4	5.6	6.3	
258	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	土師器	椀	15.2	4.6	－	
259	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	土師器	ミニチュア甕	6.8	4.4	－	
260	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	土師器	杯	13.6	3.2	－	平城宮Ⅲ
261	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	須恵器	壺	－	2.4	13.8	
262	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	須恵器	杯蓋	13.7	3.1	－	TK43型式
263	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	須恵器	杯身	13.5	2.4	－	TK43型式
264	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	須恵器	器台(杯部)	－	4.6	－	線刻
265	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	須恵器	甕	32.0	6.8	－	
266	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	埴輪	朝顔形	－	9.0	－	
267	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	埴輪	朝顔形	－	7.4	－	線刻
268	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	埴輪	衣蓋形蓋	－	－	－	黒斑
269	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	埴輪	円筒	21.0	12.4	－	川西編年Ⅴ期
270	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	埴輪	円筒	－	15.7	15.0	川西編年Ⅴ期
273	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	SD201	土人形	角力とり形	－	6.0	－	頭部墨彩・幅3.4cm、厚1.5cm
274	長原遺跡東南地区	Ⅲ	長原4C層	灰釉陶器	皿	－	2.1	7.0	重焼痕
275	長原遺跡東南地区	Ⅲ	長原3層	瓦器	椀	－	2.4	3.8	
276	長原遺跡東南地区	Ⅰ	長原4B層	瓦器	椀	14.0	4.7	－	
277	長原遺跡東南地区	Ⅰ	長原4B層	瓦器	椀	－	1.6	5.8	
278	長原遺跡東南地区	Ⅰ	長原4B層	瓦器	椀	－	1.6	5.9	
279	長原遺跡東南地区	Ⅰ	長原4B層	瓦器	椀	－	1.6	5.6	

番号	地　区	区	層位・遺構	種類	器形	口径	器高	底径	備考
280	長原遺跡東南地区	Ⅳ	長原4B層	瓦器	小皿	8.8	2.1	－	
281	長原遺跡東南地区	Ⅳ	長原4B層	瓦器	椀	－	1.3	5.4	
282	長原遺跡東南地区	Ⅱ	長原2層	黒色土器	椀	－	1.6	6.6	二重高台
283	長原遺跡東南地区	Ⅱ	長原4B層	黒色土器	椀	－	1.5	6.0	
284	長原遺跡東南地区	Ⅳ	長原4B層	土師器	小皿	8.4	1.5	－	
285	長原遺跡東南地区	Ⅰ	長原3層	土師器	小皿	10.0	0.9	－	て字状
286	長原遺跡東南地区	Ⅰ	長原4B層	土師器	小皿	11.9	1.4	－	て字状
287	長原遺跡東南地区	Ⅳ	長原4B層	土師器	小皿	9.0	1.6	－	
288	長原遺跡東南地区	Ⅲ	長原4B層	土師器	小皿	11.9	1.7	－	
289	長原遺跡東南地区	Ⅱ	長原4B層	土師器	小皿	13.0	1.5	－	て字状
290	長原遺跡東南地区	Ⅱ	長原4B層	土師器	小皿	10.0	1.8	－	
291	長原遺跡東南地区	Ⅱ	長原4B層	土師器	皿	15.2	2.9	－	
292	長原遺跡東南地区	Ⅰ	長原4B層	土師器	羽釜	20.8	4.7	－	
293	長原遺跡東南地区	Ⅱ	長原4B層	土師器	甕	19.0	5.0	－	
294	長原遺跡東南地区	Ⅰ	長原4B層	須恵器	甕	15.0	4.3	－	口頸部のみ
295	長原遺跡東南地区	Ⅰ	長原4B層	須恵器	壺	－	2.8	13.5	
296	長原遺跡東南地区	Ⅳ	長原4B層	須恵器	平瓶	－	－	－	把手のみ
297	長原遺跡東南地区	Ⅰ	長原3層	須恵器	蓋	11.0	2.6	－	
298	長原遺跡東南地区	Ⅱ	長原6層	須恵器	杯蓋	13.8	2.2	－	TK43～TK209型式
299	長原遺跡東南地区	Ⅱ	長原6層	須恵器	杯蓋	13.6	4.1	－	TK43～TK209型式
300	長原遺跡東南地区	Ⅰ	長原4B層	須恵器	杯蓋	13.7	3.1	－	TK43型式
301	長原遺跡東南地区	Ⅱ	長原6層	須恵器	杯身	11.6	3.3	－	TK43～TK209型式
302	長原遺跡東南地区	Ⅱ	長原6層	須恵器	杯身	12.4	3.2	－	TK43～TK209型式
303	長原遺跡東南地区	Ⅱ	長原6層	須恵器	杯身	12.0	3.1	－	TK43～TK209型式
304	長原遺跡東南地区	Ⅲ	長原6層	須恵器	壺	－	6.9	－	
305	長原遺跡東南地区	Ⅰ	長原4B層	須恵器	甕	17.9	8.3	－	ON46型式
306	長原遺跡東南地区	Ⅰ	長原3層	土師器	甕	－	1.4	－	
307	長原遺跡東南地区	Ⅱ	長原6層	土師器	杯	14.0	4.2	－	
308	長原遺跡東南地区	Ⅰ	長原6層	土師器	把手	－	－	－	
309	長原遺跡東南地区	Ⅳ	長原6層	土師器	高杯	－	6.3	10.0	
310	長原遺跡東南地区	Ⅰ	長原8A層	弥生土器	壺	－	1.6	6.0	
460	長原遺跡東南地区	Ⅰ	SD701	須恵器	杯蓋	14.4	4.5	－	ヘラ記号・MT85型式
461	長原遺跡東南地区	Ⅰ	SD701	須恵器	杯身	12.6	3.3	－	MT85型式

別表2　遺物一覧（石器遺物）　（　）は欠損品を示す・数値の単位はcm

番号	地　区	区	層位・遺構	種類	器形	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	石器登録番号
4	瓜破遺跡東南地区	Ⅰ	長原4層	ｻﾇｶｲﾄ	凹基無茎式石鏃	(3.02)	(1.54)	0.34	2.69		91AD2
5	瓜破遺跡東南地区	Ⅰ	長原0層	ｻﾇｶｲﾄ	石核	6.32	11.29	2.14	171.36		91AD1
38	長原遺跡西南・南地区	ⅢB	長原6B層	ｻﾇｶｲﾄ	凸基無茎式石鏃	(2.45)	1.12	0.38	0.85		91AC82
39	長原遺跡西南・南地区	ⅢA	長原6B層	ｻﾇｶｲﾄ	凹基無茎式石鏃	1.29	1.20	0.29	0.34		91AC69
40	長原遺跡西南・南地区	ⅢA	長原6B層	ｻﾇｶｲﾄ	凹基無茎式石鏃	1.55	1.45	0.34	0.38		91AC61
41	長原遺跡西南・南地区	ⅢB	長原12層	ｻﾇｶｲﾄ	凹基無茎式石鏃	(1.92)	(1.58)	0.28	0.53		91AC80
42	長原遺跡西南・南地区	ⅢA	80号墳盛土	ｻﾇｶｲﾄ	凹基無茎式石鏃	2.60	(1.45)	0.35	0.72		91AC93+101
43	長原遺跡西南・南地区	ⅢB	長原6B層	ｻﾇｶｲﾄ	石匙	3.85	(4.13)	0.78	9.54		91AC81

別表2　遺物一覧（石器遺物）　（　）は欠損品を示す・数値の単位はcm

番号	地区	区	層位・遺構	種類	器形	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	石器登録番号
44	長原遺跡西南・南地区	ⅢA	長原6B層	サヌカイト	剥片	6.25	3.58	1.01	26.40		91AC67
45	長原遺跡西南・南地区	ⅢB	長原6B層	サヌカイト	ナイフ形石器	(5.18)	1.54	1.00	6.86		91AC68
46	長原遺跡西南・南地区	ⅢB	長原6B層	サヌカイト	石核	5.01	3.69	2.27	33.85		91AP79
47	長原遺跡西南・南地区	Ⅰ	長原3層	サヌカイト	石核	4.79	3.81	1.71	27.43		91AP26
48	長原遺跡西南・南地区	Ⅰ	長原2層	サヌカイト	剥片	2.15	3.04	0.50	2.73		91AP46
49	長原遺跡西南・南地区	Ⅰ	長原4層	サヌカイト	剥片	3.18	2.43	0.51	3.72		91AP31
50	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	長原13層	サヌカイト	剥片	1.73	1.70	0.20	0.62		91AL21
51	長原遺跡西南・南地区	Ⅰ	長原4層	サヌカイト	剥片	1.28	2.39	0.47	1.32		91AP47
52	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	長原13層	サヌカイト	剥片	8.49	5.23	3.32	78.03		91AL142
53	長原遺跡西南・南地区	Ⅰ	長原13層	サヌカイト	剥片	2.81	1.91	0.32	1.77		91AP104
54	長原遺跡西南・南地区	Ⅰ	長原13層	サヌカイト	剥片	1.87	3.04	1.63	2.46		91AP108
55	長原遺跡西南・南地区	Ⅰ	長原13層	サヌカイト	剥片	(2.32)	2.32	0.33	2.04		91AP119
56	長原遺跡西南・南地区	Ⅰ	長原13層	サヌカイト	剥片	(2.03)	1.61	0.31	6.63		91AP99
57	長原遺跡西南・南地区	Ⅰ	長原13層	サヌカイト	剥片	2.68	2.80	0.55	3.03		91AP103
58	長原遺跡西南・南地区	Ⅰ	長原13層	サヌカイト	剥片	0.98	2.22	0.31	0.67		91AP117
59	長原遺跡西南・南地区	Ⅰ	SK1301	サヌカイト	剥片	2.39	1.64	0.54	1.34		91AP124
60	長原遺跡西南・南地区	Ⅰ	長原13層	サヌカイト	剥片	2.95	1.81	0.82	3.81		91AP129
61	長原遺跡西南・南地区	Ⅰ	長原13層	サヌカイト	剥片	2.25	2.69	0.57	3.34		91AP100
62	長原遺跡西南・南地区	Ⅰ	長原13層	サヌカイト	剥片	1.08	2.02	0.18	0.39		91AP24
63	長原遺跡西南・南地区	Ⅰ	SK1301	サヌカイト	剥片	0.76	0.34	0.08	0.01		91AP121
64	長原遺跡西南・南地区	Ⅰ	長原13層	サヌカイト	剥片	5.90	7.54	1.63	45.00	使用痕	91AP107
65	長原遺跡西南・南地区	Ⅰ	長原13層	サヌカイト	剥片	5.83	1.82	0.82	7.32		91AP105
66	長原遺跡西南・南地区	Ⅰ	長原13層	サヌカイト	剥片	3.95	2.28	0.88	5.37		91AP102
67	長原遺跡西南・南地区	Ⅰ	長原13層	赤色チャート	剥片	3.39	4.45	0.82	10.75		91AP106
68	長原遺跡西南・南地区	Ⅰ	長原13層	サヌカイト	剥片	1.54	2.93	1.09	5.63	図版32のみ	91AP101
271	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	結晶片岩	石庖丁	(3.89)	(4.18)	(0.76)	19.83		91AL25
272	長原遺跡西南・南地区	Ⅳ	東除川	サヌカイト	ナイフ形石器	(4.03)	1.21	0.53	2.38	国府形	91AL137
311	長原遺跡東南地区	Ⅳ	長原8C層	サヌカイト	クサビ	2.18	1.74	0.83	3.05		91AE43
312	長原遺跡東南地区	Ⅰ	長原9A～9C層	サヌカイト	凸基無茎式石鏃	2.93	1.36	0.41	1.51		91AI111
313	長原遺跡東南地区	Ⅰ	長原12層	サヌカイト	凹基無茎式石鏃	2.70	2.01	0.45	1.45		91AI94
314	長原遺跡東南地区	Ⅳ	長原12層	サヌカイト	凹基無茎式石鏃	(1.23)	(1.42)	0.19	0.34	水簸選別	91AE94
315	長原遺跡東南地区	Ⅳ	長原12層	サヌカイト	凹基無茎式石鏃	(0.65)	(0.68)	(0.18)	0.06	水簸選別	91AE106
316	長原遺跡東南地区	Ⅲ	長原9～12層	サヌカイト	凹基無茎式石鏃	(1.54)	(1.66)	0.23	0.45		91AT42
317	長原遺跡東南地区	Ⅳ	長原12層	サヌカイト	凹基無茎式石鏃	(1.54)	1.66	0.23	0.45		91AE51
318	長原遺跡東南地区	Ⅰ	長原12層	サヌカイト	平基無茎式石鏃	2.43	1.19	0.39	0.80		91AI44
319	長原遺跡東南地区	Ⅲ	長原9A～9C層	サヌカイト	凹基無茎式石鏃	2.62	1.72	0.37	0.60		91AT38
320	長原遺跡東南地区	Ⅳ	長原12層	サヌカイト	凹基無茎式石鏃	2.78	1.44	0.33	0.87	水簸選別	91AE93
321	長原遺跡東南地区	Ⅰ	長原12層	サヌカイト	凹基無茎式石鏃	1.99	1.37	0.25	0.42		91AI123
322	長原遺跡東南地区	Ⅰ	長原12層	サヌカイト	凹基無茎式石鏃	(2.61)	(1.80)	0.31	1.02		91AI159
323	長原遺跡東南地区	Ⅱ	長原12層	サヌカイト	凹基無茎式石鏃	2.84	1.49	0.39	0.99		91AJ39
324	長原遺跡東南地区	Ⅲ	長原8C層	サヌカイト	平基無茎式石鏃	3.05	1.92	0.36	1.40		91AT32
325	長原遺跡東南地区	Ⅱ	長原12層	サヌカイト	有茎尖頭器	6.18	2.39	0.67	7.39		91AJ37
326	長原遺跡東南地区	Ⅱ	長原14層	砂岩	叩き石	7.35	4.95	3.55	184.65		91AJ40
327	長原遺跡東南地区	Ⅱ	長原9A層	結晶片岩	剥片	6.93	4.75	0.95	36.95	研磨痕	91AJ36
328	長原遺跡東南地区	Ⅱ	長原9A層	サヌカイト	剥片	4.70	4.46	1.17	17.55		91AJ35
329	長原遺跡東南地区	Ⅰ	長原9C層	サヌカイト	剥片	(1.17)	2.14	0.32	0.54		91AI34
330	長原遺跡東南地区	Ⅰ	長原9C層	サヌカイト	剥片	2.21	3.40	0.41	3.59		91AI35
331	長原遺跡東南地区	Ⅰ	長原9C層	サヌカイト	剥片	3.36	1.87	0.41	1.54		91AI34

番号	地　区	区	層位・遺構	種　類	器　形	長さ	幅	厚さ	重さ	備　考	石器登録番号
332	長原遺跡東南地区	I	長原9C層	サヌカイト	剥片	3.60	(2.11)	0.65	4.60		91AI33
333	長原遺跡東南地区	I	長原9～12層	サヌカイト	剥片	(2.42)	5.43	1.05	14.02		91AI154
334	長原遺跡東南地区	I	長原9～12層	サヌカイト	剥片	(1.71)	1.45	0.30	0.56		91AI153
335	長原遺跡東南地区	I	長原9～12層	サヌカイト	クサビ？	(1.72)	2.52	0.30	1.87		91AI152
336	長原遺跡東南地区	I	長原13層	サヌカイト	剥片	2.37	(2.47)	0.60	3.18		91AI155
337	長原遺跡東南地区	II	長原13層	サヌカイト	剥片	1.04	0.70	0.08	0.07		91AI38
338	長原遺跡東南地区	I	長原13層	サヌカイト	剥片	(0.46)	1.02	0.15	0.08		91AI36
339	長原遺跡東南地区	I	LC1301	サヌカイト	ナイフ形石器	2.45	1.27	0.31	0.58	切出し型	91AI144
340	長原遺跡東南地区	I	LC1301	サヌカイト	ナイフ形石器	(0.99)	0.74	0.33	0.23		91AI146
341	長原遺跡東南地区	I	LC1301	サヌカイト	石核	1.69	2.80	0.93	3.47		91AI145
342	長原遺跡東南地区	I	LC1301	サヌカイト	石核	2.14	3.41	1.18	8.47		91AI140
343	長原遺跡東南地区	I	LC1301	サヌカイト	剥片	1.01	1.29	0.33	0.42		91AI133
344	長原遺跡東南地区	I	LC1301	サヌカイト	剥片	1.46	1.41	0.23	0.32		91AI126
345	長原遺跡東南地区	I	LC1301	サヌカイト	剥片	1.01	1.32	0.25	0.19		91AI137
346	長原遺跡東南地区	I	LC1301	サヌカイト	剥片	0.95	1.62	0.43	0.47		91AI125
347	長原遺跡東南地区	I	LC1301	サヌカイト	剥片	1.21	2.20	0.26	0.39		91AI129
348	長原遺跡東南地区	I	LC1301	サヌカイト	剥片	1.99	2.05	0.30	0.92		91AI139
349	長原遺跡東南地区	I	LC1301	サヌカイト	剥片	1.45	1.95	0.35	0.87		91AI128
350	長原遺跡東南地区	I	LC1301	サヌカイト	剥片	1.19	2.30	0.34	0.63		91AI136
351	長原遺跡東南地区	I	LC1301	サヌカイト	剥片	0.66	1.29	0.29	0.19		91AI127
352	長原遺跡東南地区	I	LC1301	サヌカイト	剥片	0.47	1.08	0.11	0.03		91AI134
353	長原遺跡東南地区	I	LC1301	サヌカイト	剥片	1.01	1.08	0.24	0.28		91AI142
354	長原遺跡東南地区	I	LC1301	サヌカイト	剥片	1.17	0.80	0.30	0.24		91AI130
355	長原遺跡東南地区	I	LC1301	サヌカイト	剥片	1.55	1.22	0.45	0.58		91AI124
356	長原遺跡東南地区	I	LC1301	サヌカイト	剥片	1.12	0.95	0.19	0.18		91AI138
357	長原遺跡東南地区	I	LC1301	サヌカイト	剥片	2.08	1.89	0.61	1.57		91AI141
358	長原遺跡東南地区	I	LC1301	サヌカイト	剥片	2.05	0.91	0.50	0.84		91AI131
359	長原遺跡東南地区	I	LC1301	サヌカイト	剥片	1.15	3.03	0.69	1.52	366と接合	91AI135
360	長原遺跡東南地区	I	LC1301	サヌカイト	剥片	2.56	4.28	0.62	8.60		91AI132
361	長原遺跡東南地区	I	LC1301	サヌカイト	剥片	1.03	1.62	0.24	0.29	水篩選別	91AI172
362	長原遺跡東南地区	I	LC1301	サヌカイト	剥片	1.04	1.52	0.23	0.23	水篩選別	91AI171
363	長原遺跡東南地区	I	LC1301	サヌカイト	剥片	1.09	1.34	0.21	0.29	水篩選別	91AI177
364	長原遺跡東南地区	I	LC1301	サヌカイト	剥片	1.04	1.30	0.21	0.22	水篩選別	91AI180
365	長原遺跡東南地区	I	LC1301	サヌカイト	剥片	0.92	1.25	0.32	0.26	水篩選別	91AI176
366	長原遺跡東南地区	I	LC1301	サヌカイト	剥片	0.78	1.56	0.33	0.27	359と接合	91AI178
367	長原遺跡東南地区	I	LC1301	サヌカイト	剥片	0.97	1.52	0.28	0.28		91AI174
368	長原遺跡東南地区	I	LC1301	サヌカイト	剥片	1.84	1.17	0.49	0.92		91AI173
369	長原遺跡東南地区	I	LC1301	サヌカイト	剥片	0.70	0.91	0.20	0.13		91AI175
370	長原遺跡東南地区	I	LC1301	サヌカイト	剥片	0.61	1.00	0.25	0.13		91AI179
371	長原遺跡東南地区	IV	LC1302	サヌカイト	ナイフ形石器	4.68	1.54	5.80	4.11	切出し型	91AE61
372	長原遺跡東南地区	IV	LC1302	サヌカイト	ナイフ形石器	3.25	1.72	0.38	2.05	切出し型	91AE46
373	長原遺跡東南地区	IV	LC1302	サヌカイト	ナイフ形石器	2.26	1.23	0.38	0.89	切出し型	91AE79
374	長原遺跡東南地区	IV	LC1302	サヌカイト	ナイフ形石器？	2.42	1.28	0.48	0.97		91AE84
375	長原遺跡東南地区	IV	LC1302	サヌカイト	石核	5.31	3.22	1.21	18.73		91AE33
376	長原遺跡東南地区	IV	LC1302	サヌカイト	石核	5.69	3.61	1.16	17.54	接合資料1	91AE53
377	長原遺跡東南地区	IV	LC1302	サヌカイト	石核	2.74	2.32	1.16	6.49	378は水篩選別	91AE75
378	長原遺跡東南地区	IV	LC1302	サヌカイト	剥片	0.82	0.95	0.17	0.07		91AE120
379	長原遺跡東南地区	IV	LC1302	サヌカイト	石核	4.82	3.09	1.62	17.57	接合資料2	91AE57
380	長原遺跡東南地区	IV	LC1302	サヌカイト	剥片	2.24	1.27	0.29	0.88		91AE55

番号	地区	区	層位・遺構	種類	器形	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	石器登録番号
381	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	1.98	2.25	0.60	2.89		91AE89
382	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	石核	4.36	2.92	1.90	17.64	接合資料3	91AE47
383	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	石核	3.12	2.20	1.02	7.33		91AE56
384	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	石核	4.32	3.30	1.13	14.09		91AE64
385	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	石核	3.71	3.53	1.02	11.03	接合資料4	91AE87
386	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	1.55	1.70	0.38	0.57		91AE78
387	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	石核	4.20	5.09	1.34	23.04		91AE76
388	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	1.21	1.92	0.31	0.63		91AE81
389	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	1.37	1.19	0.47	0.50		91AE86
390	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	1.21	1.21	0.18	0.26		91AE73
391	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	0.85	1.82	0.21	0.35	水簸選別	91AE98
392	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	1.53	1.60	0.31	0.58		91AE67
393	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	1.45	1.61	0.21	0.39		91AE70
394	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	1.82	0.89	0.27	0.35		91AE74
395	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	1.08	1.90	0.59	1.03		91AE66
396	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	1.79	3.07	0.64	1.98		91AE54
397	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	2.09	2.94	0.73	3.12	2次加工	91AE63
398	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	2.08	1.10	0.24	0.47	水簸選別	91AE90
399	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	2.53	3.39	0.82	5.39	側溝内	91AE45
400	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	2.68	4.63	0.42	5.27		91AE59
401	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	0.79	3.33	0.95	2.25		91AE72
402	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	2.46	2.86	0.45	3.29		91AE52
403	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	2.50	1.49	0.65	1.61		91AE88
404	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	3.42	3.18	0.92	6.21	2次加工	91AE71
405	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	2.92	1.66	0.46	1.64		91AE62
406	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	2.97	2.34	0.82	3.13		91AE82
407	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	3.12	5.14	0.85	10.28		91AE58
408	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	石核？	2.55	2.53	0.82	4.48		91AE80
409	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	1.14	1.85	0.68	0.96		91AE60
410	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	2.34	1.38	0.40	1.03	水簸選別	91AE100
411	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	1.61	1.00	0.25	0.42		91AE50
412	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	2.95	1.81	0.47	2.20		91AE69
413	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	1.94	1.92	0.45	2.01		91AE49
414	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	0.78	1.10	0.31	0.16		91AE85
415	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	1.52	1.85	0.44	0.77		91AE68
416	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	0.37	0.62	0.12	0.02	水簸選別	91AE112
417	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	0.61	0.68	0.13	0.06	水簸選別	91AE97
418	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	0.62	0.82	0.22	0.08	水簸選別	91AE101
419	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	0.31	0.83	0.14	0.03	水簸選別	91AE96
420	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	0.39	0.96	0.10	0.03	水簸選別	91AE95
421	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	0.78	0.61	0.12	0.07	水簸選別	91AE105
422	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	0.86	1.21	0.14	0.13	水簸選別	91AE111
423	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	0.71	1.20	0.24	0.17	水簸選別	91AE90
424	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	0.84	1.28	0.43	0.28	水簸選別	91AE111
425	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	0.68	1.17	0.17	0.13	水簸選別	91AE108
426	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	0.68	0.89	0.19	0.07	水簸選別	91AE109
427	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	0.55	1.57	0.24	0.22	水簸選別	91AE102
428	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	1.36	0.76	0.38	0.34		91AE48
429	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	0.42	0.81	0.11	0.03	水簸選別	91AE91

番号	地　区	区	層位・遺構	種　類	器　形	長さ	幅	厚さ	重さ	備　考	石器登録番号
430	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	0.94	0.92	0.17	0.12	水篩選別	91AE110
431	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	0.40	0.79	0.15	0.12	水篩選別	91AE117
432	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	1.16	1.05	0.27	0.34	水篩選別	91AE90
433	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	1.12	0.88	0.18	0.23	水篩選別	91AE92
434	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	1.75	0.97	0.32	0.49	水篩選別	91AE107
435	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	0.82	0.65	0.10	0.05	水篩選別	91AE99
436	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	0.83	0.53	0.31	0.10	水篩選別	91AE104
437	長原遺跡東南地区	Ⅳ	LC1302	サヌカイト	剥片	0.36	0.67	0.11	0.03	水篩選別	91AE114
438	長原遺跡東南地区	Ⅰ	LC901	サヌカイト	凹基無茎式石鏃	(2.62)	1.82	0.58	2.14		91AI104
439	長原遺跡東南地区	Ⅰ	LC901	サヌカイト	剥片	0.99	1.88	0.38	0.56		91AI120
440	長原遺跡東南地区	Ⅰ	LC901	サヌカイト	剥片	0.99	1.88	0.38	0.64		91AI121
441	長原遺跡東南地区	Ⅰ	LC901	サヌカイト	剥片	1.59	1.49	0.54	0.76		91AI114
442	長原遺跡東南地区	Ⅰ	LC901	サヌカイト	剥片	(1.72)	(1.27)	(0.40)	0.69		91AI106
443	長原遺跡東南地区	Ⅰ	LC901	サヌカイト	剥片	(1.57)	2.63	0.37	1.39		91AI107
444	長原遺跡東南地区	Ⅰ	LC901	サヌカイト	剥片	2.55	2.39	0.72	3.34		91AI108
445	長原遺跡東南地区	Ⅰ	LC901	サヌカイト	剥片	2.66	2.27	0.38	2.36	接合資料 445に使用痕	91AI105
446	長原遺跡東南地区	Ⅰ	LC901	サヌカイト	剥片	1.10	2.19	0.30	0.68		91AI160
447	長原遺跡東南地区	Ⅰ	LC901	サヌカイト	剥片	3.20	3.11	0.51	3.65		91AI122
448	長原遺跡東南地区	Ⅰ	LC902	サヌカイト	剥片	0.73	0.55	0.10	0.03		91AI17
449	長原遺跡東南地区	Ⅰ	LC902	サヌカイト	剥片	0.66	(0.39)	0.08	0.01		91AI18
450	長原遺跡東南地区	Ⅰ	LC902	サヌカイト	剥片	(0.48)	0.84	0.13	0.04		91AI19
451	長原遺跡東南地区	Ⅰ	LC902	サヌカイト	剥片	0.63	(0.34)	0.08	0.01		91AI15
452	長原遺跡東南地区	Ⅰ	LC902	サヌカイト	剥片	1.03	1.31	0.15	0.19		91AI29
453	長原遺跡東南地区	Ⅰ	LC902	サヌカイト	剥片	0.84	0.78	0.18	0.08		91AI25
454	長原遺跡東南地区	Ⅰ	LC902	サヌカイト	剥片	0.63	1.05	0.11	0.06		91AI28
455	長原遺跡東南地区	Ⅰ	LC902	サヌカイト	クサビ	1.89	2.74	0.41	1.70		91AI23
456	長原遺跡東南地区	Ⅰ	LC902	サヌカイト	凹基無茎式石鏃	(0.96)	(0.51)	(0.17)	0.09	水篩選別	91AI191
457	長原遺跡東南地区	Ⅰ	LC902	サヌカイト	剥片	1.13	1.44	0.19	0.23		91AI27
458	長原遺跡東南地区	Ⅰ	LC902	サヌカイト	剥片	(0.70)	0.60	0.11	0.05	接合資料	91AI32
459	長原遺跡東南地区	Ⅰ	LC902	サヌカイト	石鏃未製品	3.00	2.43	0.53	3.93		91AI42
462	長原遺跡東南地区	Ⅳ	SD703	サヌカイト	横形削器	4.29	7.74	1.79	48.98		91AE38

別表3　古墳一覧

古墳名	地　区	区	墳　形	規　模	埴　輪	土　器	時　期
80号墳	長原遺跡南地区	Ⅲ	方墳	8.5m×　?		須恵器・土師器	5世紀後半～末
81号墳	長原遺跡南地区	Ⅲ	方墳	7.0m×　?		須恵器・土師器	5世紀後半～末
82号墳	長原遺跡南地区	Ⅲ	方墳	9.5m×　?		須恵器	5世紀後半
83号墳	長原遺跡南地区	Ⅲ	方墳	6.0m×6.0m		須恵器	5世紀中
85号墳 (一ケ塚古墳)	長原遺跡西南地区 長原遺跡南地区	Ⅰ Ⅱ	造出をもつ 円墳	直径46.5m	円筒・朝顔・衣蓋・盾 靫・草摺・短甲・家・鶏		5世紀初頭
193号墳	長原遺跡南地区	Ⅳ	方墳	?	円筒・朝顔	須恵器	5世紀末
194号墳	長原遺跡南地区	Ⅳ	方墳	?	円筒	須恵器・土師器	5世紀中～後半
195号墳	長原遺跡南地区	Ⅴ	方墳	?　×8.5m	円筒・巫女	須恵器	5世紀末

引 用・参 考 文 献

相川龍雄1928、「佐波郡殖蓮村恵下の古墳」：『上毛及上毛人』133　上毛郷土史研究会

石神怡1988、「先史時代の大阪」：『新修大阪市史』第1巻

梅沢重昭1981、「105　恵下古墳」：『群馬県史』資料編3

大阪市文化財協会1990、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ

1992a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ

1992b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅳ

1993a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅴ

1993b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅵ

1994、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅶ

1995、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ

1997a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅸ

1997b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅹ

橿原考古学研究所附属博物館1985、『伊勢神宝と考古学』

木原克司1982、「長原遺跡の水田址をめぐる諸問題」：『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ

京嶋覚・久保和士1993、「長原一ケ塚古墳の調査」：大阪市文化財協会編『葦火』46号

京都大学文学部博物館1993、『紫金山古墳と石山古墳』

群馬県埋蔵文化財調査事業団1992、『神保下條遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第137集

鴻巣市市史編さん調査会1989、「生出塚遺跡」：『鴻巣市史』資料編1

佐野市文化財保護審議委員会1961、『佐野市五箇古墳』

静岡県磐田市教育委員会1995、『遠江堂山古墳』

清水和明1991、「石器遺物」：『長原遺跡発掘調査報告』Ⅳ

神宮徴古館農業館1993、『第六十一回神宮式年遷宮記念　御神宝特別展』

菅榮太郎1995、「石鏃資料の型式および製作技法の編年的検討」：『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ

高橋克壽1992、「器財埴輪」：『古墳時代の研究』9　雄山閣出版

田島富慈美1992、「狩人のワザ」：大阪市文化財協会編『葦火』36号

田島富慈美1992、「長原遺跡の蔵骨器」：大阪市文化財協会編『葦火』37号

田島富慈美1993、「有舌尖頭器における剥離面の検討－大阪市内の出土例から－」：『旧石器考古学』47　旧石器文化談話会

趙哲済1995、「長原遺跡の標準層序」：『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ

趙哲済・京嶋覚・高井健司1992、「旧東除川の開削年代について」：『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ

鳥取県教育文化財団1982、『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書』Ⅳ（埴輪編）

外山和夫1972、『富岡5号古墳』群馬県立博物館研究報告

中川信作1986、「大坂城下出土の土人形とミニチュア製品」：大阪市文化財協会編『葦火』5号

奈良国立博物館1986、『昭和六十一年正倉院展』
奈良国立博物館1992、『平成四年正倉院展』
平田洋司1991、「4基の古墳と長原古墳群」：大阪市文化財協会編『葦火』33号
広瀬和雄1983、「古代の開発」：『考古学研究』第30巻第2号　考古学研究会
松本百合子1992、「一ケ塚古墳出土の鞆形埴輪」：大阪市文化財協会編『葦火』41号
南秀雄1987、「瓜破遺跡で発見された7世紀の建物群」：大阪市文化財協会編『葦火』8号
山崎武ほか1981、『生出塚遺跡』鴻巣市遺跡調査会報告書第2集
山中一郎1995、「用語解説」：羽曳野市遺跡調査会・京都大学文学部考古学研究会編『旧石器人のアトリエ』
和田晴吾ほか1987、『鳴谷東1号墳第1次発掘調査概報』立命館大学文学部学芸員課程研究報告第1冊

あ と が き

考古学を取り巻く環境は日々変化し続けている。発掘調査件数の増大は「考古学研究者」の増加をもたらし、報告書や論文が以前とは比較にならないほど大量生産されている。多種多様に発信されたあふれんばかりの情報は、時として現実の生活を見失わせてしまいがちである。

考古学とは人間が係ったすべての〈こと〉を対象とする学問である。自身が現実に背を向けて成り立つものではない。そうならぬよう、今一度足元を見据え、かつ視野を広く持ち続けるよう心がけたい。考古学が「研究者」の自己満足とならぬよう強い自戒の念を込めて本書を上梓する。

（永島暉臣慎）

索　引

索引は遺構・遺物に関する用語と、地名・遺跡名などの固有名詞とに分割して収録した。

〈遺構・遺物〉

M　MT85型式　123
O　ON46型式　88
T　TK23型式　53
TK23～TK47型式　49,56
TK43型式　19,77,88
TK43～TK209型式　90,124
TK47型式　19,59
TK208型式　51
TK209型式　19,51
TK216型式　52
TK216～TK208型式　49
あ　朝顔形埴輪　37,45,58,59,62,77
足跡化石　88
飛鳥Ⅱ　9
飛鳥Ⅲ　9,10
飛鳥Ⅲ～Ⅳ　10
当て具痕　19,56
暗文　11,19,49,72,74,77,88,90
い　家形埴輪　19,43
石匙　20
石庖丁　77,92
板材　33,34,81
板状剥片　15,93,100,104,105,106,108,109
一側縁調整　78
井戸　3,78
う　内黒焼成　74,88
え　円筒埴輪　19,30,33,34,37,44,45,49,53,58,59,61,77,134
円墳　79,132,133,134
お　凹基無茎式石鏃　8,11,20,22,49,92,93,94,95,118,121
か　灰釉陶器　88
瓦器　7,12,17,69,72,74,82,88
カキメ　53
重ね焼き痕　56,88
火山ガラス　15,87
瓦質土器　12,82
火葬人骨　70
窯　10,11,19,49,51,56,77,88
唐津焼　15
川西編年Ⅱ期　44,45
川西編年Ⅴ期　53,59,77
官衙的建物群　3,11
き　器台　17,77
衣蓋形埴輪　37,77
鋸歯縁　22,23,93,95
偏歯文　43,133
切出し型ナイフ形石器　98,102,127
切妻建物　43
く　杭　78
偶蹄類　44,88
草摺形埴輪　33,42
クサビ　90,93,101,119,121
け　形象埴輪　44,134
畦畔　12,65,67,68,125,126
結晶片岩　77,92
こ　国府型ナイフ形石器　78,127
小型短頸壺　56
黒色土器　74,88
黒斑　37,39,45,77,133
小皿　15,17,69,70,72,74,88

小壺 19
小鉢 74
さ 縄石刃 121
細部調整剥離 121, 125
砂岩 97
槍 3
サヌカイト 8, 19, 23, 24, 26, 97, 102, 118, 119, 124
皿 17, 70, 72, 74, 88
し 磁器 7, 8, 12
自然面打面 26
自然釉 69, 88
自然流路 112
周溝 15, 42, 45, 47, 49, 51, 52, 53, 58, 59, 68, 79, 124
周濠 4, 26, 30, 33, 34, 42, 45, 47
主剥離面 15, 19, 22, 26, 78, 92, 93, 95, 98, 100, 101, 102, 104, 105, 106, 108, 109, 111, 112, 119, 124
小穴群 87, 121
縄席文 19
焼土層 23
縄文土器 119
植物遺体 64, 115
す 水田 5, 7, 12, 30, 33, 45, 49, 53, 59, 65, 67, 68, 123, 125
水路 64, 65, 123
須恵器 7, 9, 10, 11, 17, 19, 49, 51, 52, 53, 56, 59, 61, 68, 69, 70, 77, 82, 88, 90, 123, 124
スカシ孔 19, 34, 37, 39, 45, 52, 58, 59, 130
ステップ 95, 100, 106, 108, 112
角力とり形土人形 78
すり石 97
せ 青磁 74
石英 102
赤色顔料 37, 39, 41, 59
石鏃 11, 19, 20, 87, 90, 93, 95, 118, 119, 121, 126
石棒 119
石核 8, 15, 17, 22, 92, 97, 100, 101, 102, 104, 105, 106, 108, 109, 111, 112, 119, 127
石核調整剥片 100, 101, 119
石器集中部 97, 102, 112, 118, 126, 127
接合資料 26, 97, 100, 102, 104, 105, 108, 112, 119, 126, 127
線刻 37, 39, 41, 42, 43, 45, 59, 77, 130, 132, 133, 134
前方後円墳 132
そ 蔵骨器 69, 70, 72
た 対向調整 22, 102
台付長頸壺 69
タガ 19, 34, 37, 45, 47, 53, 58, 59, 62, 77, 132
高杯 11, 49, 51, 90
タタキ 56, 70, 77
叩き石 97
盾形埴輪 39
タテハケ 34, 37, 39, 45, 53, 56, 58, 59, 62, 77
短甲形埴輪 43
ち チャート 24, 26
地山 7, 49, 69
中位段丘構成層 88
沖積層 7, 12, 15, 82, 87
調整剥片 92, 93, 95
直弧文 132, 134

つ ツイン・パルプ 22
杯 19,74,90
杯蓋 9,49,56,59,77,88,90,123
杯身 9,10,19,49,51,56,77,90,123
造出し 4,26,30,43,47,79
壺 11,19,49,70,77,88,90
壺形埴輪 37,45
て 低位段丘構成層 87
てづくね成形 74
鉄刀 52
点状打面 26,92,93,95,101
と 陶器 7,8,12
土壙 10,23,59,68,69,125
凸基無茎式石鏃 19,92
把手 88,90
把手付椀 19
朝形埴輪 41,45,47,129,130,132,133,134
な ナイフ形石器 22,78,97,98,102,104,111,112,126,127
ナウマンゾウ 88
に 二側縁調整 22,98,102
鶏形埴輪 43
ね 年輪年代測定法 34,81
は 羽釜 74,88
白磁 74
剥片 8,15,19,22,23,26,90,92,93,95,97,98,100,101,102,104,105,106,108,109,111,112,118,119,120,121,125,126,127
剥片剥離 8,22,93,100,105,106,108,109,112,119,124,127
剥離面打面 15,19,26,95,100,101,102,109,111,112,119
土師器 7,10,11,12,17,19,49,51,53,56,70,72,74,82,88,90,124
波状文 49,56
鳳 9,56
鉢 17,53
破風板 43
盤 52
ひ 広口壺 11
ヒンジ・フラクチャー 22,105,109
ふ 蓋 69,70,88
墳丘 4,5,15,17,19,26,30,33,44,45,49,51,53,58,59,68,79,124,130,133,134
へ 平基無茎式石鏃 90,94
平城宮Ⅰ 19
平城宮Ⅲ 77
平城宮Ⅴ 11
平城宮Ⅵ 19
平瓶 10,88
ヘラ記号 9,123
ヘラ切り 9
ほ 方墳 49,51,52,53,59,79
掘立柱建物 3
ま 埋葬施設 49,52,53,59
み 巫女形埴輪 59,61
溝 7,9,45,47,61,64,65,69,72,78,82,112,116,123,124,125
水口 66,67,68
ミニチュア甕 74
む 無蓋高杯 59
無茎式石鏃 121
も 目的的剥片 17,105,109

	木葉形	19, 92
	木棺直葬	52
	盛土	7, 15, 22, 23, 26, 30, 49, 53, 59, 65, 69, 114, 116
や	弥生土器	90
ゆ	有蓋高杯	19, 53, 59
	有茎尖頭器	87, 95
	有底剥片	22, 78, 98, 100, 102, 104, 119
	ユビオサエ	11, 17, 19, 34, 37, 74
よ	横大路火山灰	15
	横形削器	124
	横形剥片	26, 100, 102, 105, 108, 119, 121, 124, 127
	ヨコナデ	17, 19, 34, 37, 45, 53, 58, 74, 77, 88
	ヨコハケ	34, 37, 39, 45, 58, 59, 62
ら	ラミナ	15, 68, 72, 115
り	流理構造	26, 81, 109, 112, 120
	流路	53, 69, 87, 114, 115
	両極打法	93
	両黒焼成	74
わ	椀	69, 74, 88

〈地名・遺跡名など〉

い	石山古墳	134
	伊勢神宮	129, 130
	一ケ塚古墳（長原85号墳）	3, 4, 5, 12, 15, 17, 19, 23, 24, 26, 30, 34, 37, 42, 44, 45, 47, 65, 68, 79, 129, 130, 134
う	瓜破台地	7
え	恵下古墳	133
お	生出塚遺跡	133
こ	古川辺川	87
	古川辺谷	102
	五箇古墳	134
し	鳴谷東1号墳	132, 134
	正倉院	129, 130
	神保下條2号古墳	133
た	大正川	6
と	堂山古墳	132
	富岡5号墳	133
な	長瀬高浜遺跡	132
	長原80号墳	15, 22, 49, 79
	長原81号墳	15, 49, 51
	長原82号墳	15, 51, 79
	長原83号墳	51, 53, 79
	長原84号墳	67
	長原183号墳	124
	長原193号墳	15, 22, 53, 59, 68, 79
	長原194号墳	15, 53, 79
	長原195号墳	59, 61, 68, 69, 79
	長原196号墳	15, 42, 45, 47, 79
	長吉野山遺跡	4
に	西川辺川	112
ひ	東川辺川	123
	東除川	4, 12, 53, 61, 69, 72, 78, 79
や	大和川	3, 4, 72, 78, 79

Archaeological Reports
of
Nagahara and Uriwari Sites in Osaka, Japan

Volume XI

A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Nagayoshi-Uriwari Area in 1991

November 1997

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text

SD : Ditch
SE : Well
SK : Pit
SP : Pit or Posthole
SR : Paddy field
LC : Lithic concentration
NR : Natural stream

CONTENTS

Preface
Explanatory notes

Chapter I Excavation of Nagahara and Uriwari Sites 1
S.1 The outline of excavations in 1991 1
1) Excavations 1
2) Procedure of publishing this report 2
S.2 Outline and progress of research work 3
1) South-eastern sector of the Uriwari Site 3
2) South-western sector and Southern sector of the Nagahara Site 3
3) South-eastern sector of the Nagahara Site 5

Chapter II Results of research 7
S.1 South-eastern sector of the Uriwari Site 7
1) Stratigraphy at the Research area 7
i) Introduction 7
ii) Stratigraphy 7
2) Finds from each stratum 8
3) Features and finds from the Asuka to the Nara Periods 9
i) Ditch 9
ii) Pits 10
4) Conclusion 11
S.2 South-western sector and Southern sector of the Nagahara Site 12
1) Stratigraphy at the Research area 12
i) Introduction 12
ii) Stratigraphy 12
2) Finds from each stratum 15
3) Features and finds of the Late Palaeolithic Period 23
i) Pit and Lithic remains 23
4) Features and finds of the Kofun(Tumulus) Period 26
i) Kofuns 26
ii) Ditch 61
5) Features and finds from the Asuka to the Nara Periods 64
i) Ditches 64
ii) Paddy fields 65
iii) Pit 68
6) Features and finds from the Heian to the Kamakura Periods 69
i) Ditches 69

7) Features and finds of the Edo Period 72
i) The Higashiyoke River 72
ii) Ditch 78
iii) Wells 78
8) Conclusion 79
i) Kofuns 79
ii) The Higashiyoke River 79
S.3 South-eastern sector of the Nagahara Site 82
1) Stratigraphy at the Research area 82
i) Introduction 82
ii) Stratigraphy 82
2) Finds from each stratum 88
3) Features and finds of the Late Palaeolithic Period 97
i) Lithic concentrations 97
4) Features and finds from the Final Jomon to the Middle Yayoi Periods .. 112
i) Natural Stream and Ditches 112
ii) Lithic concentrations 118
iii) Small pit cluster 121
5) Features and finds from the Kofun to the Asuka Periods 123
i) Ditches 123
ii) Pit 125
6) Features from the Heian to the Kamakura Periods 125
i) Paddy fields 125
7) Conclusion 126

Chapter III Investigation of artefacts 129
Investigation of *tomo*-shaped *haniwa* 129

Tables 135

References and Bibliography 146

Postscript and Index

English Summary

Reference Card

ENGLISH SUMMARY

Introduction: development and excavation

This report details the achievements of the excavations carried out at the Nagahara and Uriwari sites, situated in the south-eastern part of Osaka city, Osaka prefecture, Japan, in the fiscal year of 1991 (beginning April 1st).

The Nagayoshi-Uriwari area, in which the Nagahara and adjoining Uriwari sites are situated, is one of the few remaining locations within Osaka city in which farmland can still be found. Improvements in the main road and subway service from the City to this area has been followed by rapid residential growth. As a result of this growth, there has been an increasing demand for water and sewerage services. The Nagahara and Uriwari sites lie within the land being rezoned to accommodate the development of these services.

Though emergency research prior to the rezoning project has been conducted since 1981, many other excavations at these sites have been carried out, almost continuously, over the last twenty years, prior to public or private development in the area. In particular, at the Nagahara site, four hundred excavations have been carried out so far and the total excavated area amounts to 165,000 square metres, covering 4.5% of the whole site. This large accumulation of fieldwork has clarified that both the Nagahara and Uriwari sites are large complex sites following a slope down to a plain, in which discoveries belonging to between the Upper Palaeolithic and the Early Modern eras, have yielded wide ranging information about settlements and cemeteries in each period.

The strata representing each period at the sites is well preserved, and research has been carried out on each layer, though all excavation areas were characteristically long and thin as they lie beneath land designated for roads. The strata have been identified according to the stratigraphical standard of the Nagahara site.

This excavation report is the eleventh volume in the series and covers fourteen excavations. The total excavated area extend 3,427 m2. The dates of discoveries fall between the Upper Palaeolithic and the medieval periods (spanning the 12th to 16th C. AD). The results of research are summarized as follows:

Discoveries at the Uriwari site

Excavation was carried out in the vicinity of structures associated with 7th century officiators, however, few features associated with that period were found. Nara Period pits were uncovered.

Discoveries at the Nagahara site

Two lithic concentrations, indicating the remains of an Upper Palaeolithic lithic

workshop, were found. These included refitted cores, flakes and Bitruncated Flake. The refitted material indicates a technique in which flakes were removed by striking a flat surface of cores at a right angle. This technique has never before been encountered at lithic workshops in Nagahara.

From the Late to the final Jomon Periods, a stone arrowhead workshop was uncovered. A tanged point was removed from the incipient Jomon strata.

From the early to middle Yayoi Periods, an irrigation ditch leading to paddy fields, and other ditches were found. From the Kofun Period nine burial mounds were found. The largest amongst these is the Ichigazuka Kofun; which features a round mound tomb with a small square projection. The others are a small square mounds. Many *haniwa*, including a rare arm guard *haniwa*, were unearthed from the Ichigazuka Kofun. The dendrochronological date of timber from the moat indicates 343 A.D..

From the Asuka to the Nara Periods paddy fields and ditches were found. Though features from during and after the Heian Period were not found, a human bone, burial jar was uncovered from a natural stream. Remnants of the Higashiyoke River were also uncovered. The River once ran South-North, along the centre of the Nagahara Site, prior to the shifting of the Yamato River in 1704. It clearly dates to after the Kofun Period, as it cut through the Nagahara Tomb cluster.

Further Reading

Pearson, R. J., G. L. Barnes and K. L. Hutterer (eds),

1986 Windows on the Japanese Past; Studies in Archaeology and Prehistory. Center for Japanese Studies, University of Michigan, Ann Arbor.

Tsuboi K., (ed.)

1987 Recent Archaeological Discoveries in Japan. UNESCO, Paris and Centre for East Asian Studies, Tokyo.

1992 Archaeological study of Japan. Acta Asiatica 63. The Institute of Eastern Culture.

The Osaka City Cultural Properties Association

1989-97 Archaeological Reports of Nagahara and Uriwari sites Vol. I-X, Osaka. (With English summaries except for Vols. I-III)

The Osaka City Cultural Properties Association

1978-92 Archaeological Reports of Nagahara site Vol. I-V, Osaka. (In Japanese)

報告書抄録

ふりがな	ながはら・うりわりいせきはっくつちょうさほうこく11
書名	長原・瓜破遺跡発掘調査報告XI
副書名	1991年度大阪市長吉瓜破地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	松本百合子・絹川一徳・清水和明・櫻井久之・趙哲済・小田木富慈美・久保和士・岡村勝行・永島暉臣慎
編集機関	財団法人　大阪市文化財協会
所在地	〒540　大阪府大阪市中央区法円坂1−1−35　TEL.06−943−6833
発行年月日	西暦　1997年11月19日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ながはらいせき 長原遺跡	おおさかしひらのく 大阪市平野区 ながよしながはら 長吉長原3丁目 〜 ながよしかわなべ 長吉川辺3丁目	27126	−	34° 36′ 00″	135° 34′ 40″	1991.4.22 〜 1992.3.31	3,067㎡	土地区画整理事業(長吉瓜破地区)施行に伴う調査
うりわりいせき 瓜破遺跡	おおさかしひらのく 大阪市平野区 ながよしながはら 長吉長原3丁目 〜 ながよしかわなべ 長吉川辺3丁目	27126	−	34° 35′ 45″	135° 33′ 55″	1991.4.22 〜 1991.7.9	360㎡	土地区画整理事業(長吉瓜破地区)施行に伴う調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
長原遺跡	集落 田畑 墓 その他	旧石器時代	石器集中部	ナイフ形石器・石核・剥片
		縄文時代	石器集中部	有茎尖頭器 石鏃・剥片
		弥生時代前期〜中期	溝	
		古墳時代	古墳 溝	須恵器・埴輪・板材 須恵器
		飛鳥〜奈良時代	畦畔 土壙	 須恵器
		平安〜鎌倉時代	溝 畦畔	蔵骨器・瓦器・土師器
		古墳〜江戸時代	東除川	土師器・瓦器・須恵器・黒色土器・埴輪・石器
		江戸時代	溝 井戸	土人形 瓦製井戸側
瓜破遺跡	集落	飛鳥〜奈良時代	溝 土壙	須恵器 須恵器

図　　版

図版一　瓜破遺跡東南地区　地層断面と遺構

Ⅱ区　西壁地層断面

Ⅰ区　地山上面の遺構（西から）

Ⅱ区　地山上面の遺構（北から）

図版二　長原遺跡西南・南地区　地層断面

Ⅰ区　東壁地層断面

Ⅱ区　北壁地層断面

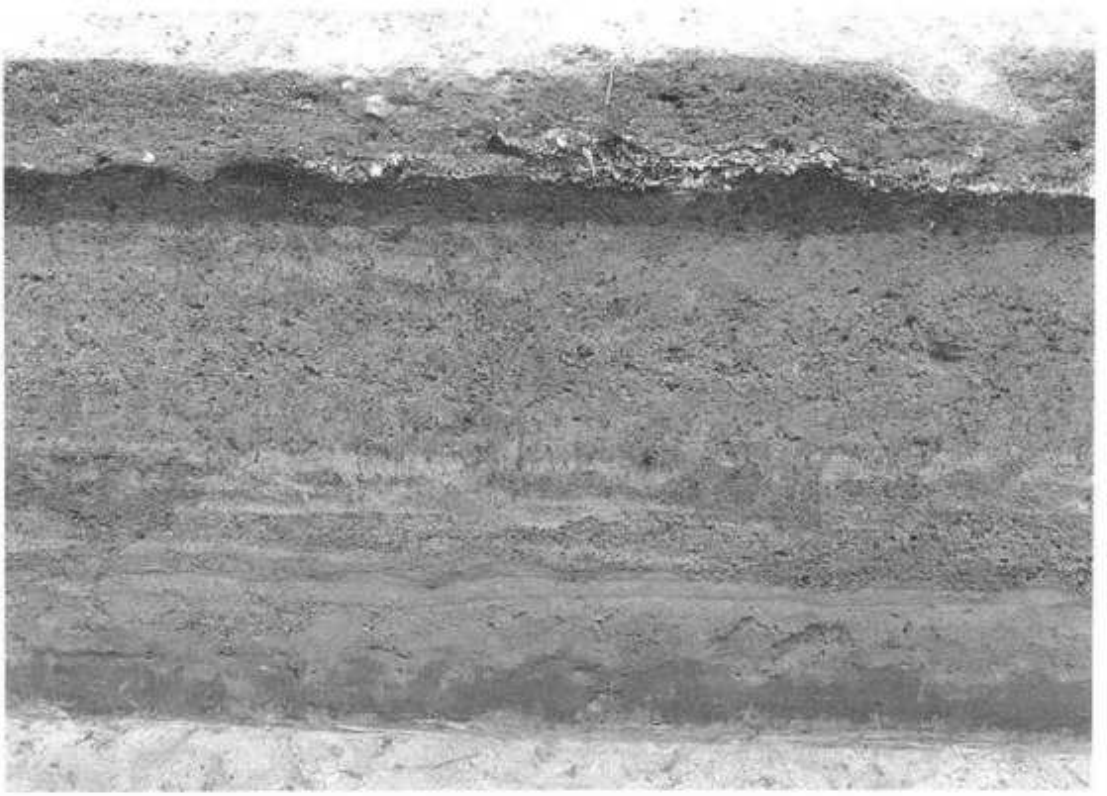
Ⅲ－Ｂ区　北壁地層断面

Ⅳ区　東西地層断面（東半）

Ⅳ区　東西地層断面（西半）

図版四　長原遺跡西南・南地区　地層断面

V区　西壁地層断面（北半）

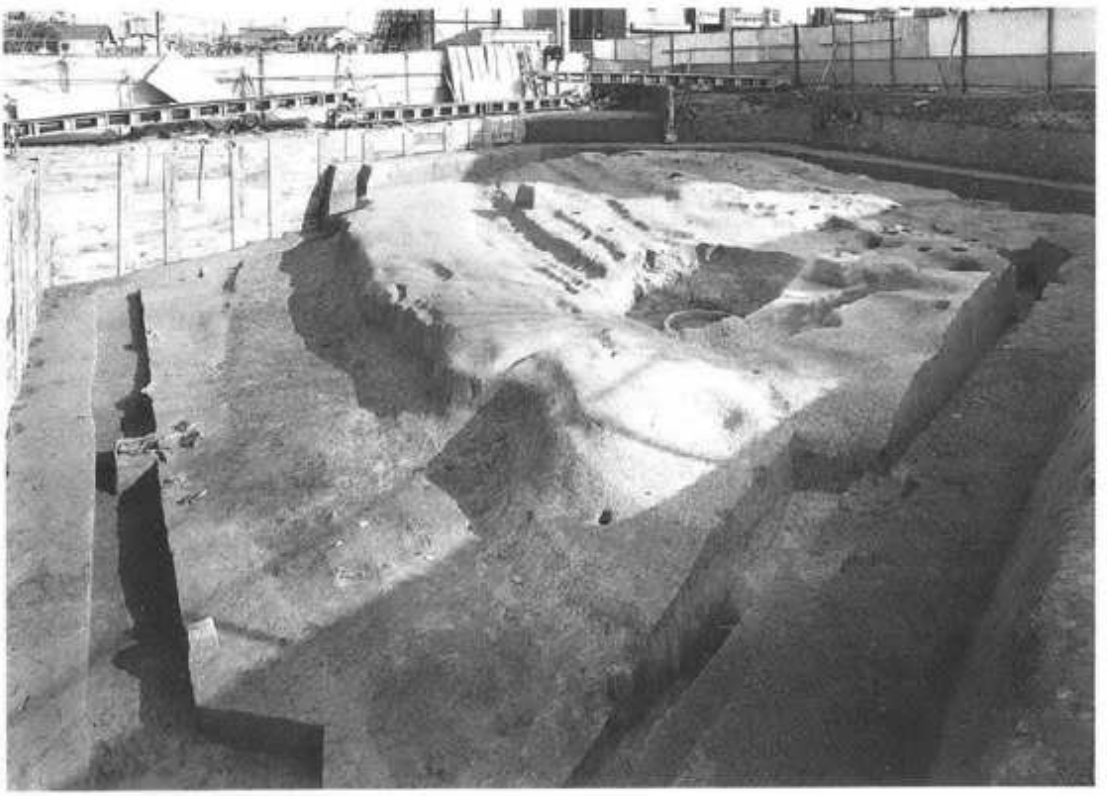


VI区　西壁地層断面

Ⅰ区　SK1301と遺物出土状況

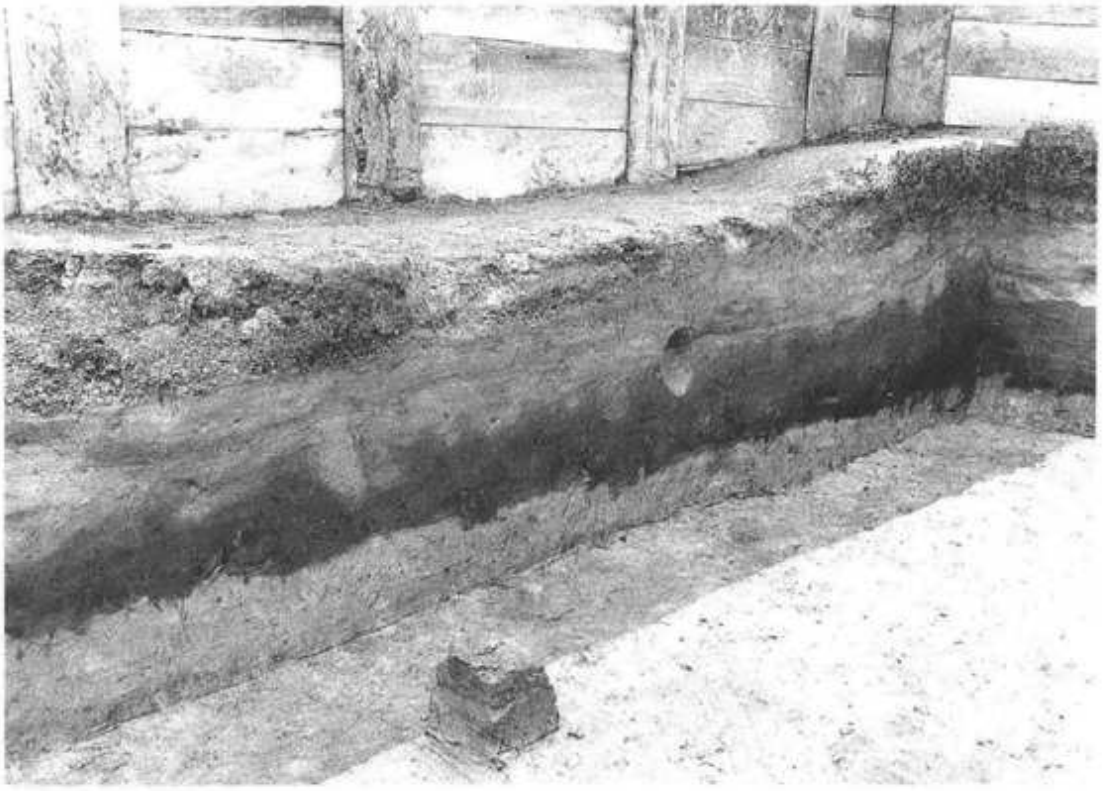
Ⅰ区　一ケ塚古墳盛土以下の地層断面

Ⅰ区　一ケ塚古墳調査地全景（北から）



Ⅰ区　一ケ塚古墳調査地全景（北西から）

Ⅰ区　一ケ塚古墳周濠内の板材（69）・円筒埴輪（73）出土状態



Ⅰ区　一ケ塚古墳周濠内の埋土堆積状態（北壁）

図版八　長原遺跡西南・南地区　古墳時代の遺構

Ⅰ区　周濠内の遺物出土状態（西から）

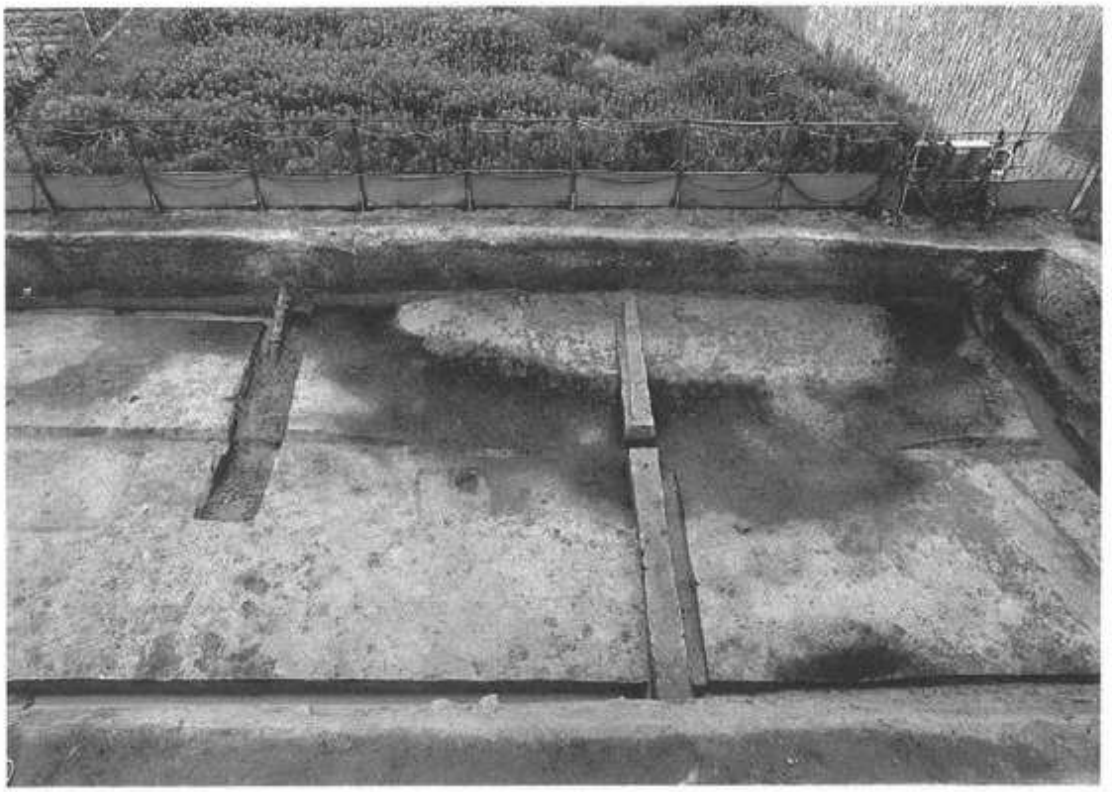
Ⅱ区　長原196号墳と一ケ塚古墳周濠（西から）

Ⅱ区　長原196号墳（東から）

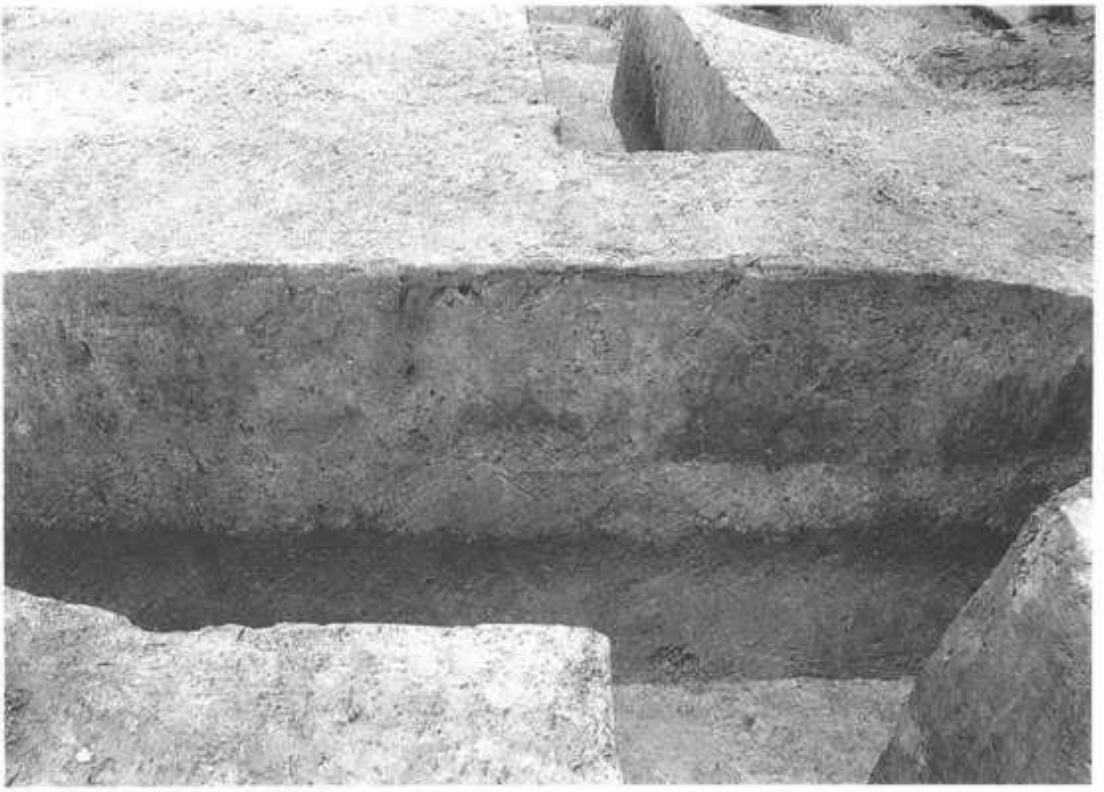
図版九　長原遺跡西南・南地区　古墳時代の遺構

Ⅲ－A区　長原80・81号墳（東から）

Ⅲ－A区　長原80号墳（北から）

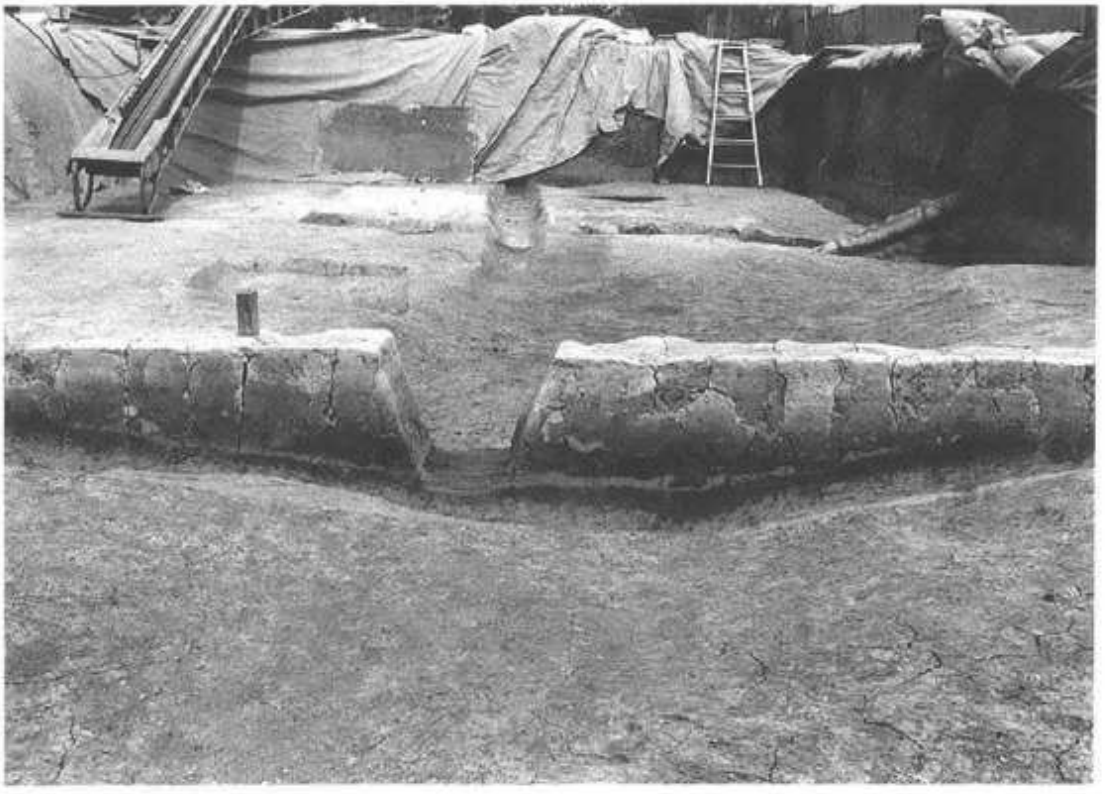


Ⅲ－Ｂ区　長原82号墳と長原83号墳周溝



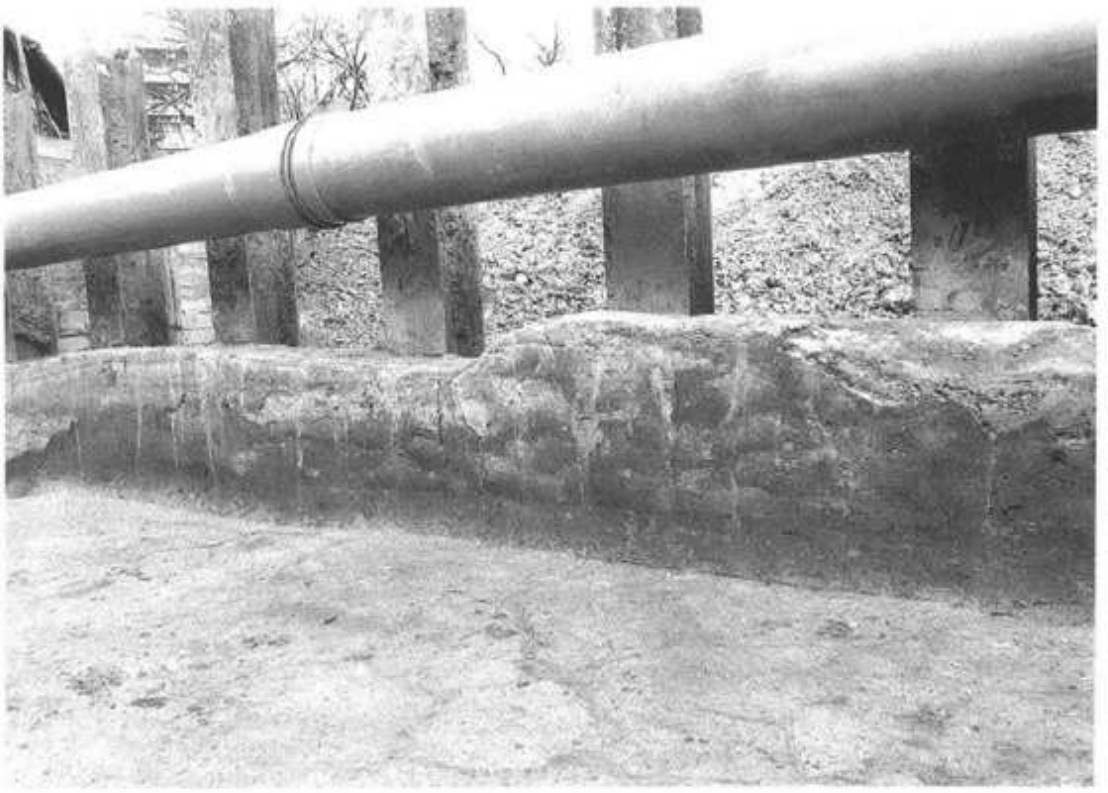
Ⅲ－Ａ区　長原81号墳の墳丘南北断面（東から）

Ⅲ－Ａ区　長原80号墳の北周溝南北断面（西から）



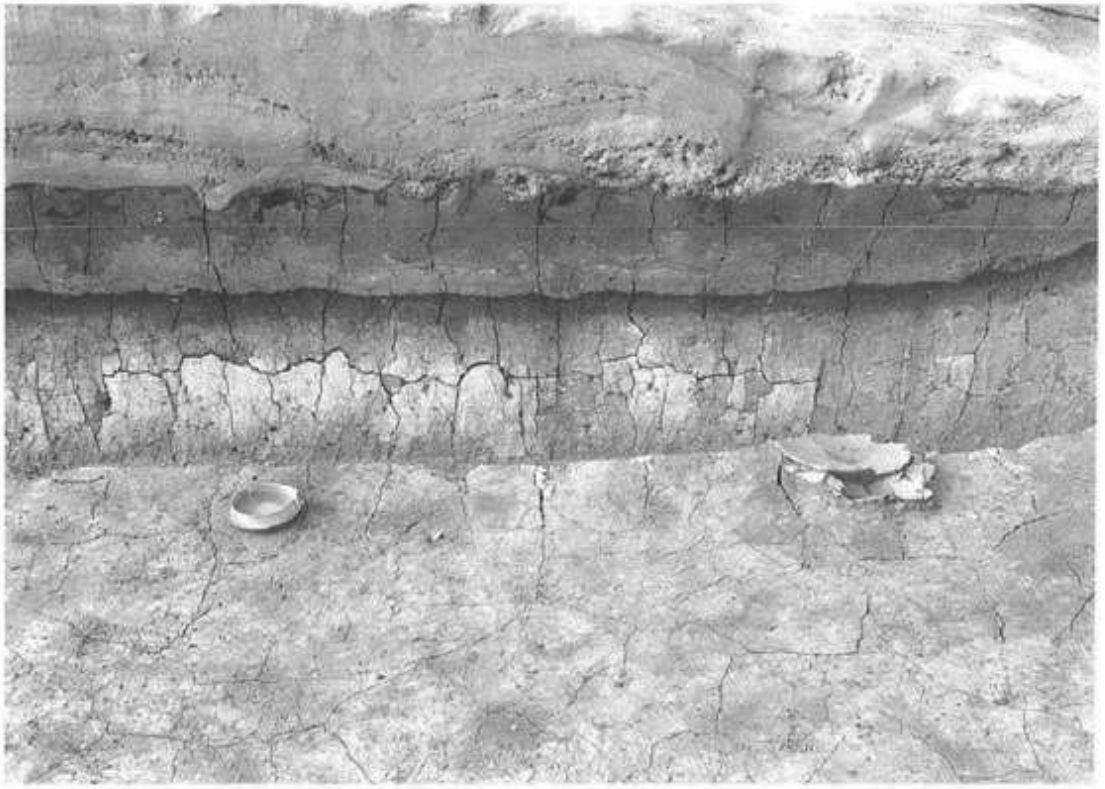
Ⅲ－Ａ区　長原82号墳の北周溝南北断面（西から）

Ⅳ区　長原194号墳（北から）



Ⅳ区　長原194号墳の墳丘南北断面（西から）

Ⅳ区　長原193号墳（東から）



Ⅳ区　長原193号墳の東周溝東西断面（南から）

V区　長原195号墳（南から）

V区　長原195号墳の墳丘南北断面（東から）

V区　長原195号墳（北東から）

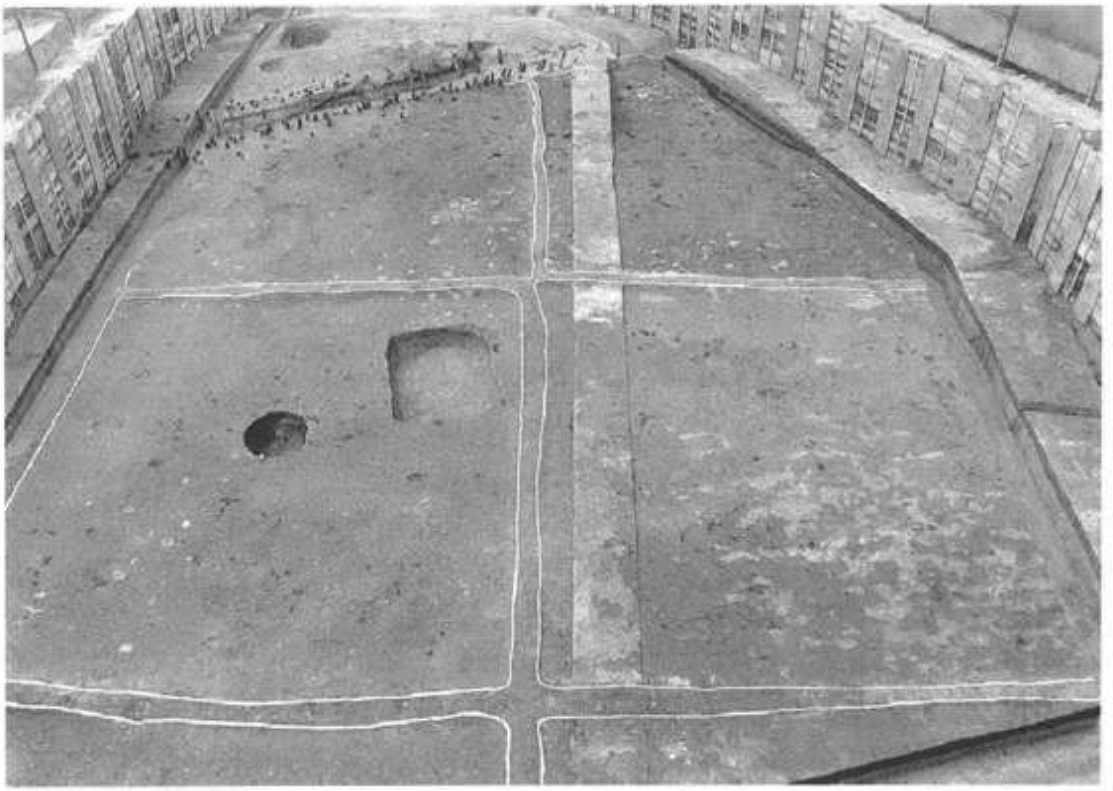
Ⅲ－C区　SD602（西から）

Ⅲ－C区　SD602断面

Ⅰ区　SR601（西から）

Ⅰ区　SR501（西から）

図版一六　長原遺跡西南・南地区　飛鳥～奈良時代の遺構



Ⅳ区　SR604（東から）

Ⅴ区　SK601（北から）

Ⅳ区　SD402（西から）

Ⅳ区　SD402の東西断面（東から）

Ⅳ区　SD401の東西断面（北から）

Ⅳ区　東除川中心部（北西から）

図版一九　長原遺跡東南地区　地層断面

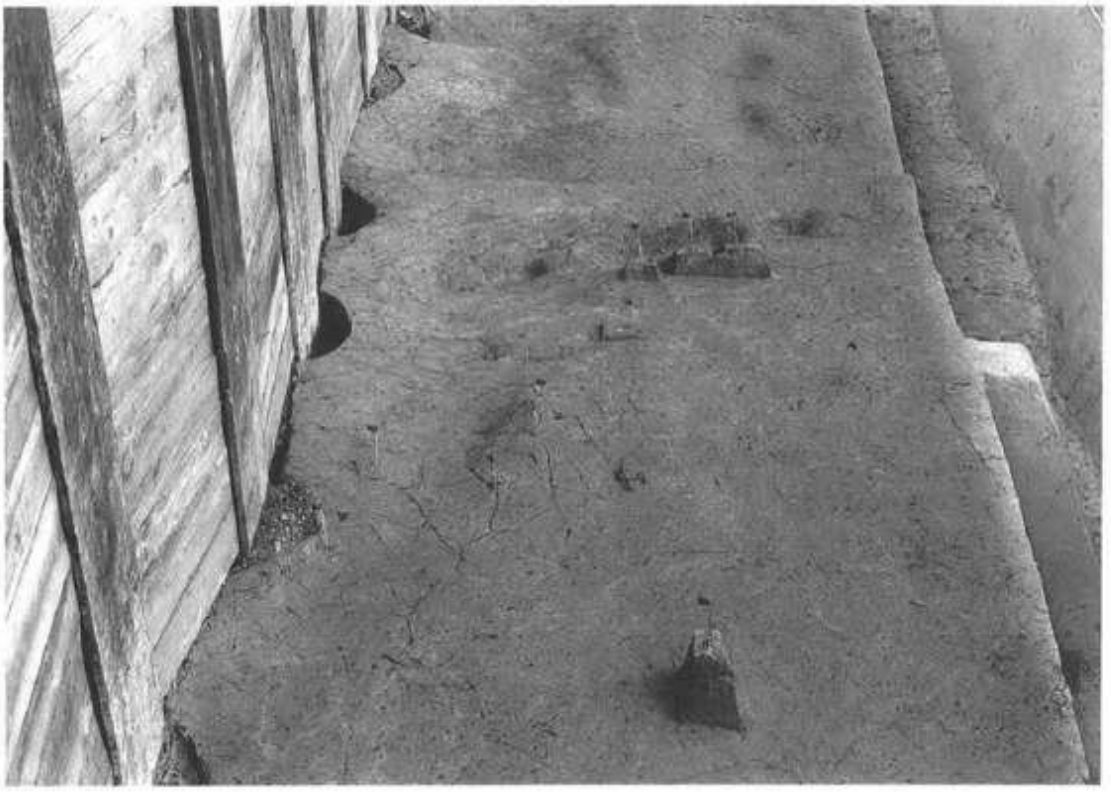
Ⅰ－A区　南壁地層断面

Ⅱ区　南壁地層断面

図版二〇　長原遺跡東南地区　地層断面

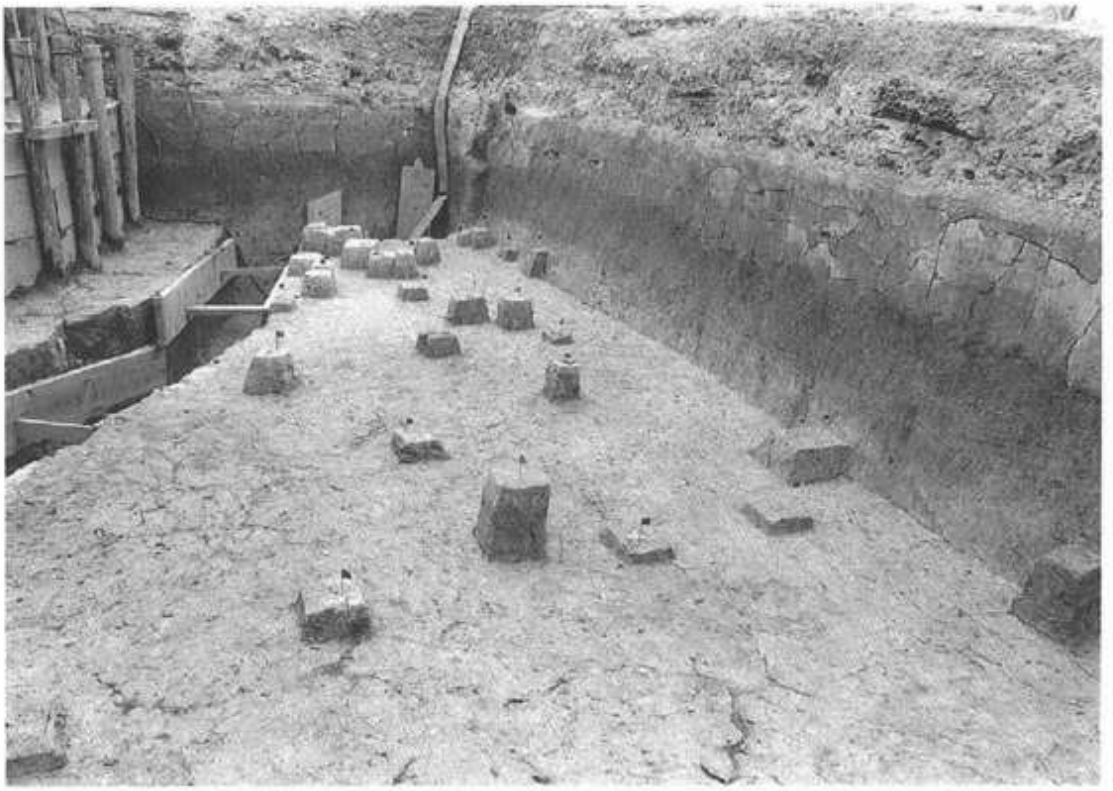
Ⅲ－A区　西壁地層断面

Ⅳ－A区　北壁地層断面



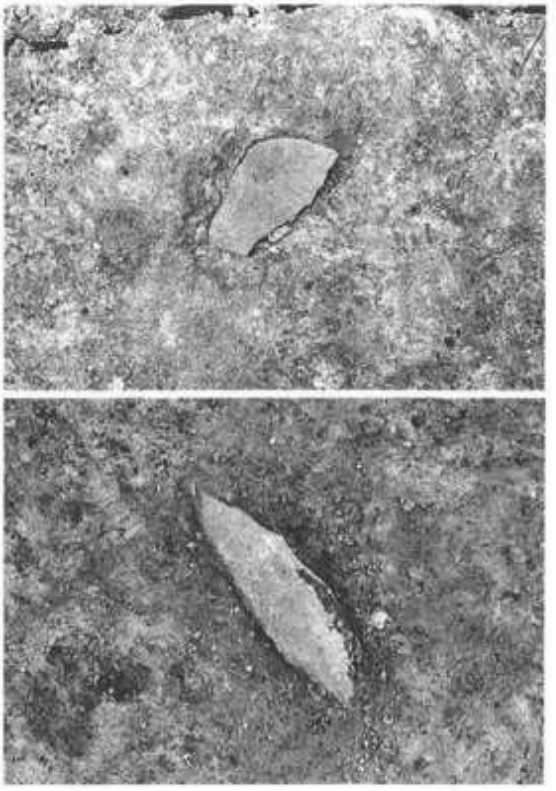
Ⅰ－A区　LC1301（西から）

LC1301付近の地層断面



Ⅳ－A区　LC1302（東から）

LC1302　旧石器（376・380・402）出土状態



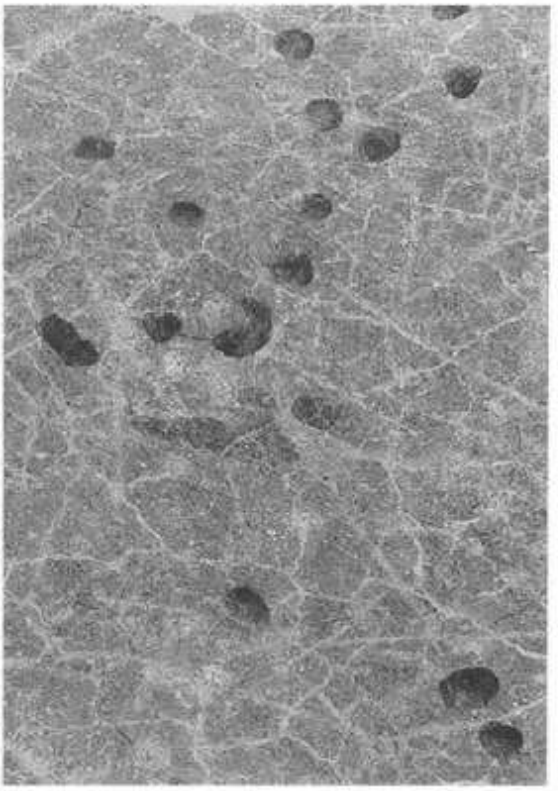
LC1302　旧石器（上：373・下：371）出土状態

Ⅱ区　有茎尖頭器（325）出土状態

Ⅰ－B区　LC902（東から）

図版二四　長原遺跡東南地区　弥生時代の遺構

Ⅱ区　NR901（東から）

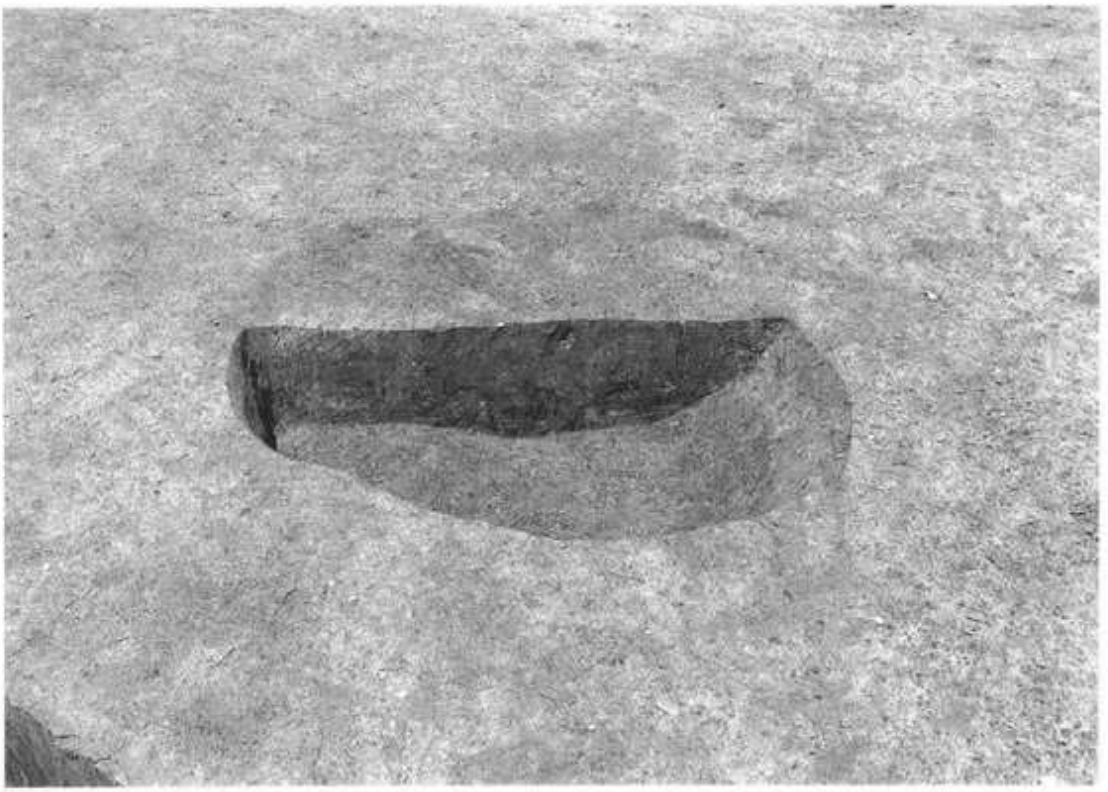


Ⅳ－B区　長原9A層上面の小穴群

Ⅱ区　NR901の南北断面

Ⅳ－A区　SD901（南から）

Ⅰ－B区　SD902の東西断面（北から）



Ⅳ－B区　SK701（東から）

Ⅰ－A区　SD701（西から）

Ⅲ－A区　SD702（東から）

Ⅱ区　長原4Biii層上面の遺構（西から）

図版二八　瓜破遺跡東南地区　各層と遺構出土の遺物

1

2

3

9

10

長原6層（1～3）　SK601（9・10）

5

4

5

4

長原0層（5）　長原4層（4）

6

14

7

12

8

11

15

13

16

SD601（6～8）　SK602（11～16）

図版三〇　長原遺跡西南・南地区　各層出土の遺物

17

35

21

25

32

22

23

26

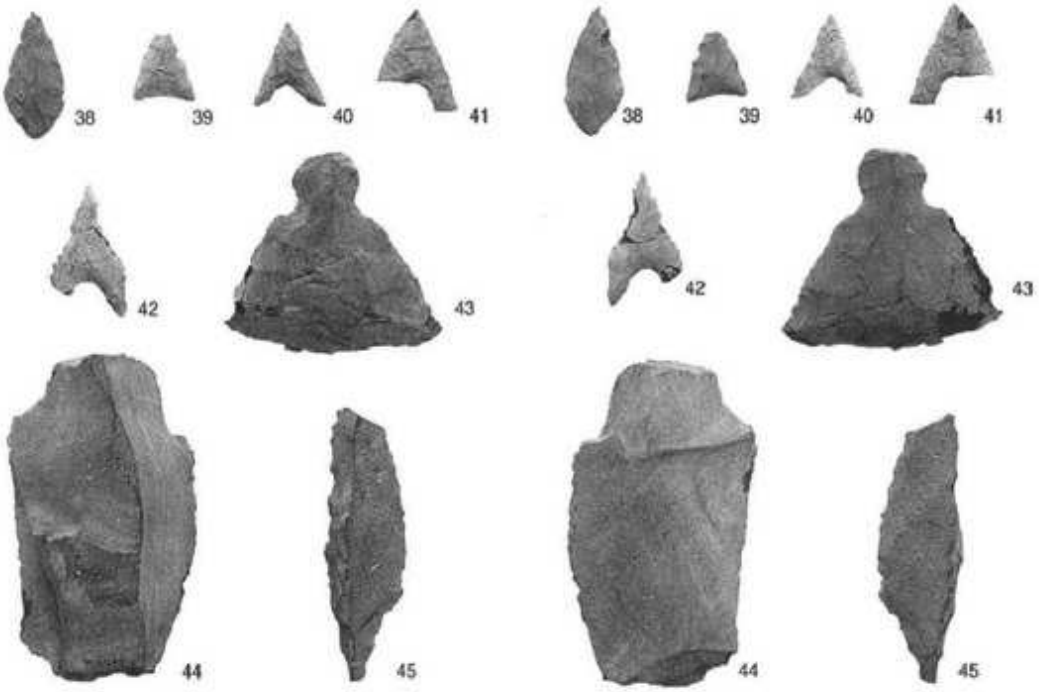
24

31

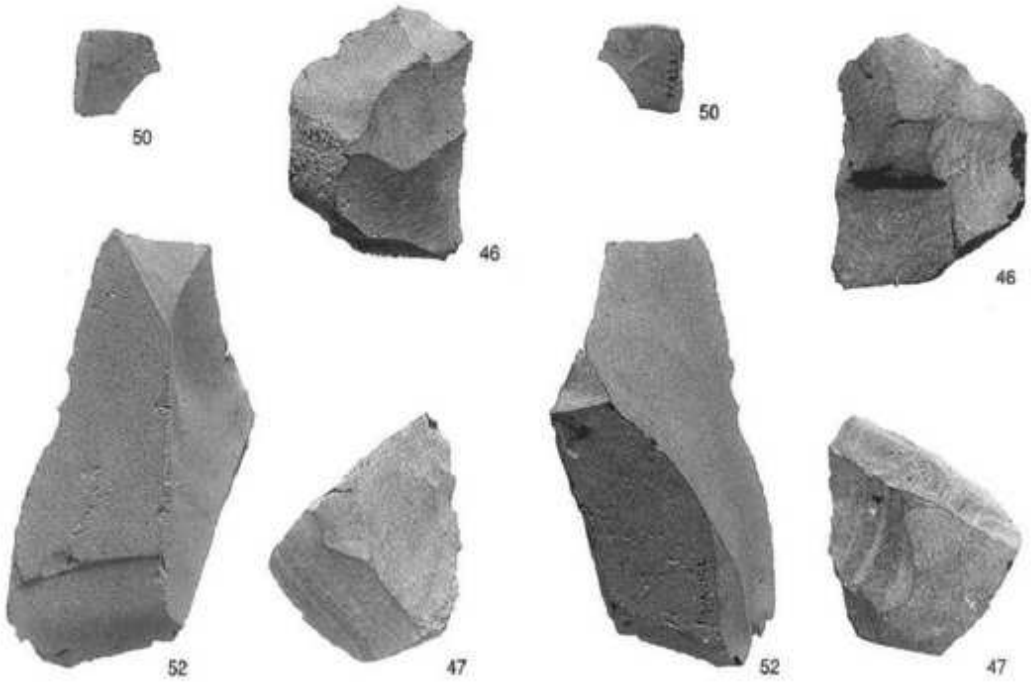
27

長原2層（17）　長原4層（27・32）　長原5層（21～26）　長原6A層（35）　長原6B層（31）

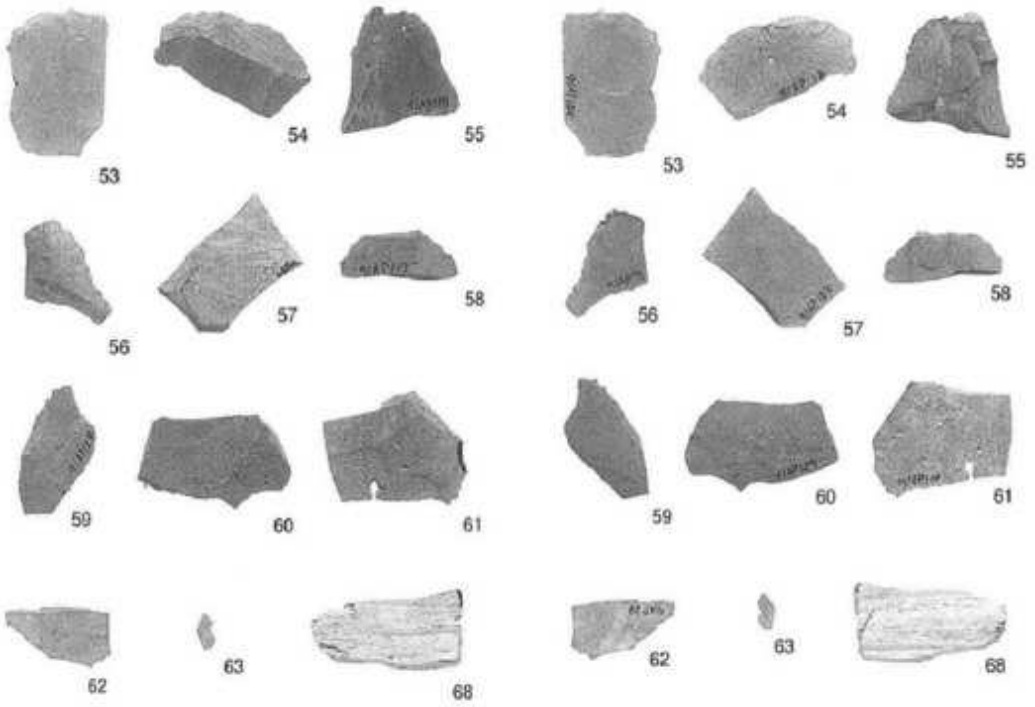
図版三一　長原遺跡西南・南地区　各層出土の遺物



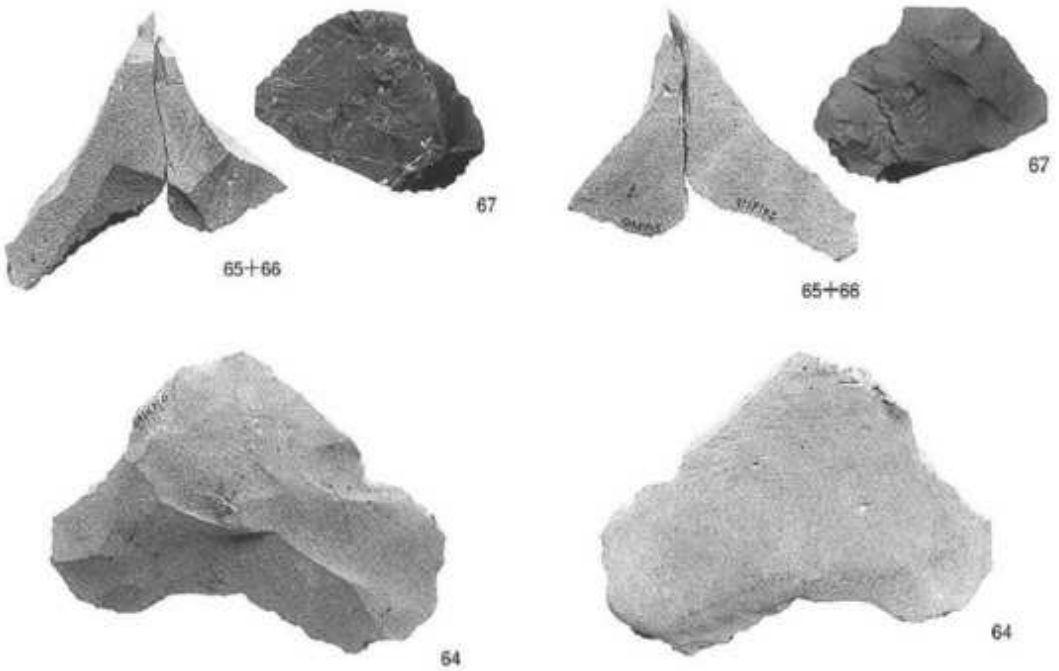
長原6B層（38～40・43～45）　長原12層（41）　長原80号墳盛土（42）



長原3層（47）　長原6B層（46）　長原13層（50・52）



剥片：長原13層（53～63・68）



使用痕がある剥片：長原13層（64）　剥片・接合資料：長原13層（65～67）

77

74

73

70

72

75

円筒埴輪（70・72～75・77）

図版三四　長原遺跡西南・南地区　一ケ塚古墳周濠内出土の遺物

76

82

88

76

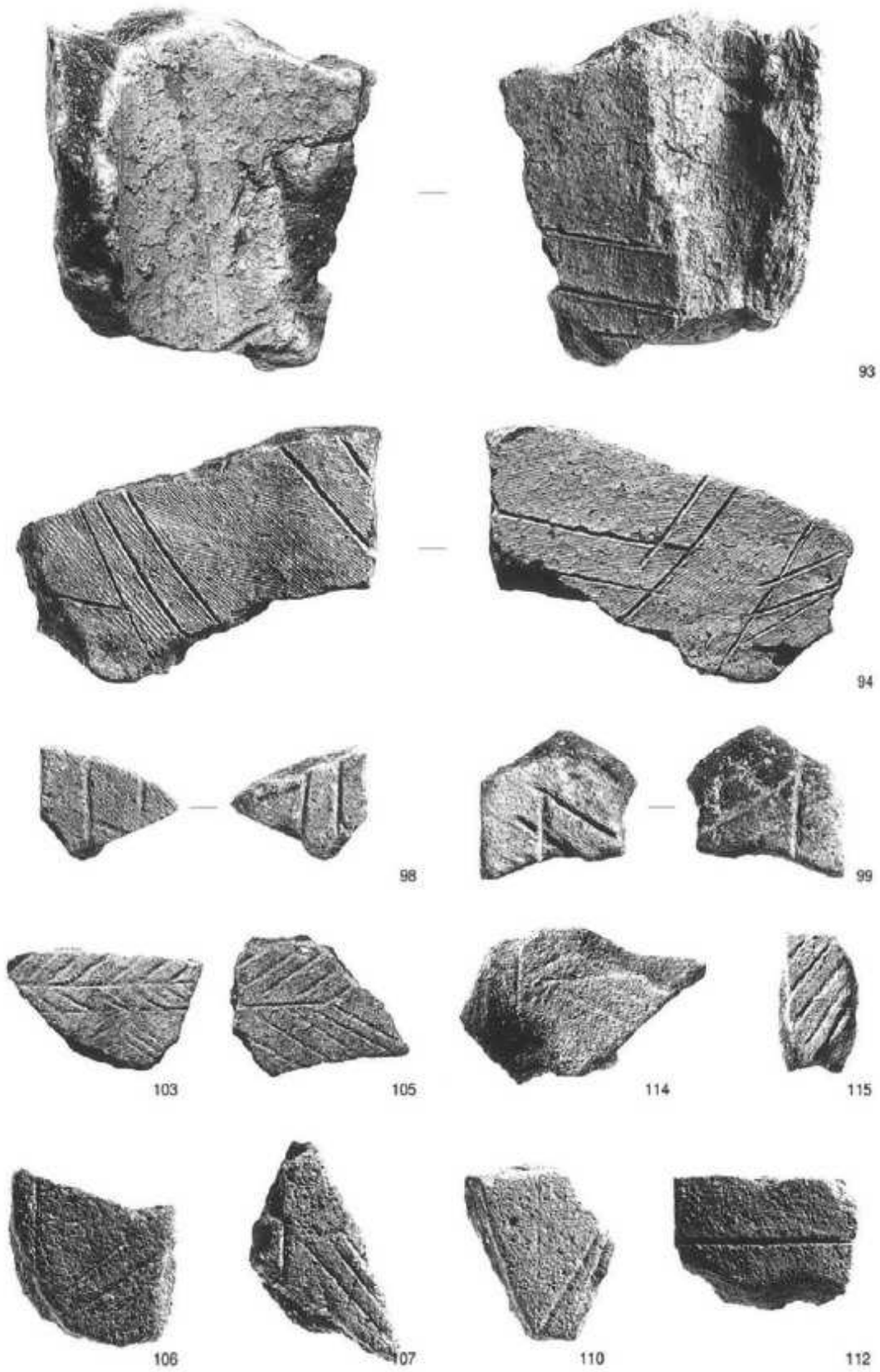
84

91

90

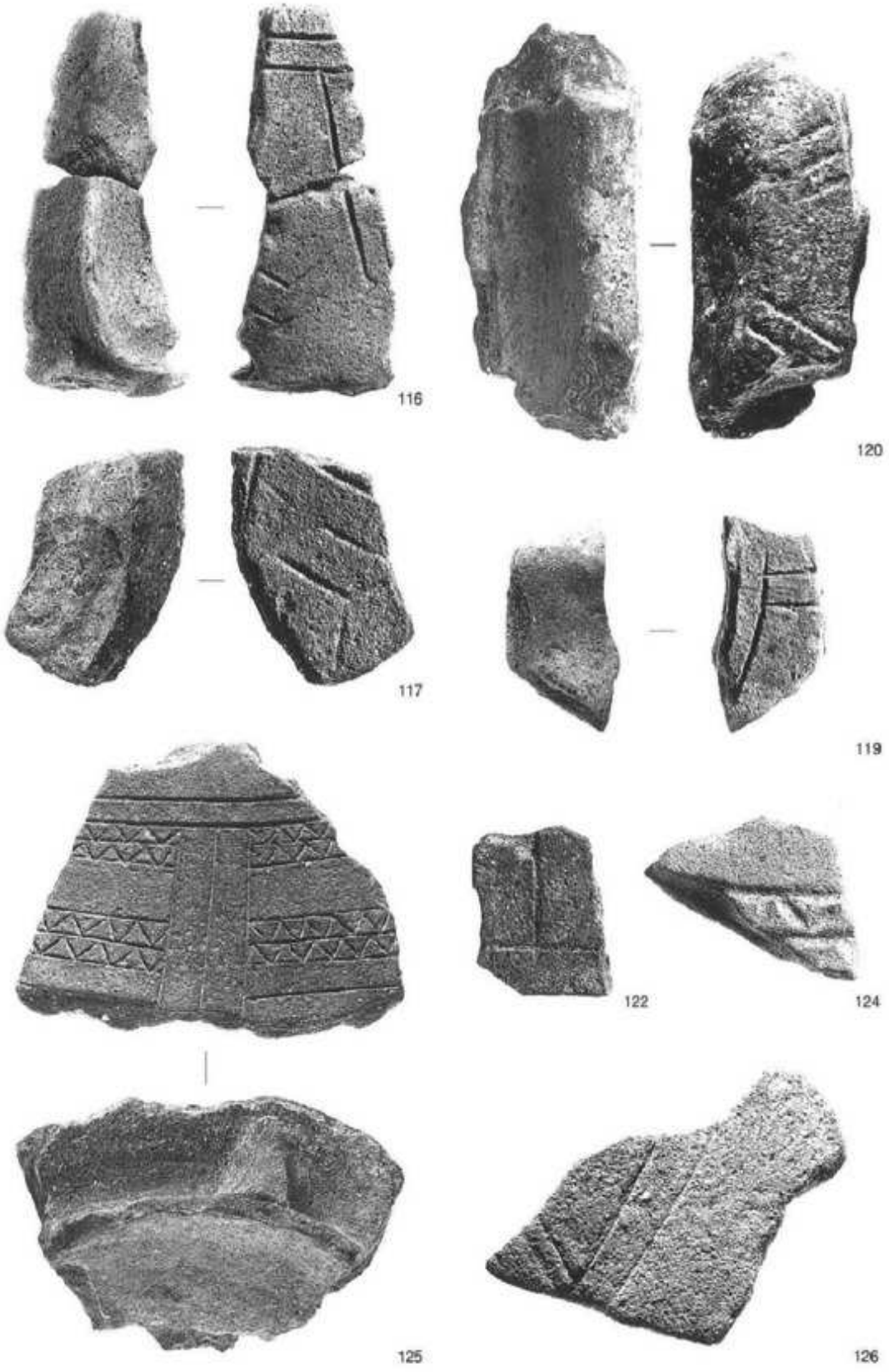
89

円筒埴輪（76）　朝顔形埴輪（82・84・88）　衣蓋形埴輪（89～91）



衣蓋形埴輪（93・94・98・99）　盾形埴輪（103・105～107・110・112・114・115）

図版三六　長原遺跡西南・南地区　一ケ塚古墳周濠内出土の遺物



不明形象埴輪（116・117・119・120）　草摺形埴輪（122・124・125）
短甲形埴輪（126）

69

121

131

132

加工痕がある板材（69）　鞆形埴輪（121）　鶏形埴輪（131）　偶蹄類の形象埴輪（132）